広大科研
17
14510586
0130511304

ドイツ女性作家の歴史からみた
アンナ・ルイーザ・カルシュの位置

（課題番号　14510586）

平成 14 年度～平成 16 年度科学研究費補助金（基盤研究 (C)(2)）研究成果報告書

広島大学図書
0130511304

2005（平成 17）年 6 月

佐　藤　正　樹
（広島大学総合科学部教授）

ドイツ女性作家の歴史からみた
アンナ・ルイーザ・カルシュの位置

（課題番号　14510586）

平成 14 年度～平成 16 年度科学研究費補助金（基盤研究 (C)(2)）研究成果報告書

広島大学図書
0130511304

2005（平成 17）年 6 月

佐　藤　正　樹

（広島大学総合科学部教授）

研究組織

研究代表者： 佐 藤 正 樹（広島大学総合科学部教授）

交付決定額（配分額）

（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成14年度	700	0	700
平成15年度	500	0	500
平成16年度	600	0	600
総　計	1800	0	1800

ドイツ女性作家の歴史からみたアンナ・ルイーザ・カルシュの位置

― 目　　次 ―

序 …… 1

第一章　カルシュ時代 …… 4

小氷河期 ／ 飢餓とペスト ／ シュレージエン ／世俗化 ／ 理性 ／ 公民 ／ 三身分 ／初期近代国家と公民の愛国心 ／ ドイツ語の変化 ／ 識字率の向上 ／書籍市場

第二章　生い立ちの記 …… 12

人生の頂点より ／ 『精選詩集』 ／ 自伝書簡 ／ 自伝詩 ／ 散文のカルシュ伝 ／ 生涯の三期 ／ 記述の力点 ／ 貧乏と無教育 ／ 天才と自負 ／ 教育の五つの側面

第三章　牛追いの少年 …… 22

牧童との出会い ／ 神話化

第四章　女の役割 …… 25

女の役割 ／ 18世紀の婚姻論 ／ 忍耐 ／ 主婦 ／ 夫婦の義務 ／ 質のいい女 ／ 家庭化から国家化への引き上げ ／ 女たちの不満 ／ 女の使命 ／ 義務教育 ／ バーデンの学校制度再編 ／ 実科学校 ／ 日曜学校 ／ 女子教育 ／ 啓蒙団体 ／ ドイツ啓蒙主義の個性

第五章　天才と自然と教育と …… 39

天才の自覚 ／ 天才と教育 ／ 啓蒙主義から天才讃美へ ／ ズルツァーの文藝理論 ／ シュトルム・ウント・ドラング ／ 感情 ／ 醜い容貌

第六章　フリードリヒの詩人と矜恃 *Ist Sie die Poetin ?* …… 50

人生の秋 ／ 大王との会見 ／ 詩人としての矜恃 ／ 要約 ／ 最晩年

付録1　資料篇 …… 59

1. アンナ・ルイーザ・カルシシュの自伝書簡 ／ 2. 自伝詩 ／ 3. 容貌 ／ 4. 詩人アンナ・ルイーザ・カルシシュ、旧姓デュルバハ伝草稿 ／ 5. ザームエル・バウア『ドイツの女性作家』 ／ 6. フォン・クレンケ「詩人アンナ・ルイーザ・カルシシン、旧姓デュルバハ伝記草稿」 ／ 7. プロイセン一般就学義務制度導入に関する勅令（1717年） ／ 8. バルトロメーウス・バハー『少女の友』（1807年） ／ 9. ヨーアヒム・ハインリヒ・カンペ『父から娘への助言』（1789年） ／ 10. 十八世紀の婚姻論と女の役割 ／ 11. カルシュ『精選詩集』序文（ズルツァー執筆） ／ 12. ズルツァー『文藝の一般理論』 ／ 13. ゲーテ『シェイクスピアの日に』 ／ 14. 神――天才――自然 ／ 15. カルシュからグライムに宛てた手紙 ／ 16. フリードリヒの詩人として ／ 17. 矜恃 ／ 18. 国王からの年金支払 ／ 19. 娘との確執、遺言 ／ 20. 終焉 ／ 21. 批評

付録 2　アンナ・ルイーザ・カルシュ年譜 122

付録 3　Gedichte von Karschin (chronologisch geordnet) 130

付録 4　Gedichtüberschriften und -anfänge 138

付録 4　Literaturverzeichnis (Auswahl) 155

序

アンナ・ルイーザ・カルシュ Anna Louisa Karsch (1722-1791) は一つの奇蹟である。

啓蒙のプログラムであったはずの教育の恩恵に浴することもなく、子守と牛追いに明け暮れる貧窮の境涯から身を起し、幼妻となるもやがて離婚。再婚した酒乱の夫から解放されるや、その詩才を見出されて新興都市ベルリンへ出る。詩はたちまち評判となり、ついには貴族や文壇の大物と対等にわたりあう。人妻の身でありながら詩人グライムに恋をし、フリードリヒ大王を謁見して年金を約束させ、ついに、18 世紀全体をつうじて一冊の書物としては最高の売上高を記録する『精選詩集 *Auserlesene Gedichte*』(1763 年) を刊行する。

才能さえあれば、身分の高下をとわず社会で立派に身を立てていける、その前提として、「理性」を鍛え、自分の意思で進むべき道を選択する、だからこそその選択に責任をもつこともできる、これが「成年」に達するということである——そういう人間の夢が現実のものとなりはじめたのが 18 世紀という時代であった。

とはいえ、女性であり、庶民であり、ふつうなら文盲のグループに属していたはずの人が詩集を出版し、今をときめくスター国王と直接話をして、年金を約束させるというのは、いわば女三世代を一人で生き抜いたとでも言うほかない奇蹟である。

この論文は、ドイツ女性史におけるカルシュの位置を確認することを目的に書かれたものであるが、カルシュと同時代の証言とをひもときながら、狭義の文学研究を突破する試みでもある。

ところで、カルシュ研究には、そのいわば手前に大きな問題が横たわっている。それは信頼できるカルシュのテクストがいまだに出版されていないことである。

カルシュが生前発表した大きな詩集としては、上述の『精選詩集』一冊があるにすぎない。その収入は 2000 ターラーに達した。もう一冊、カルシュが亡くなったあと娘カロリーネが編集した『カルシュ詩集』がある。寡作というべきかもしれないが、長いあいだカルシュは忘れられた作家とはいわないまでも、少なくともまったく論じられることがなかった作家であった。事実、カルシュの信頼できるテクストの出版は長いあいだ放置されていたと言っても過言ではない。これは、一つにはカルシュのいわる「文学的価値」の問題もあろうが、そのドイツ語の綴りには誤りも多く、コンマやピリオドの使い方も知らない、感嘆符や疑問符も書けなかったので、手稿そのものの研究がひじょうに遅れたという事情もあったと思われる。

たとえば 1933 年に出版されたエリーザベト・ハウスマン編集の »*Die Karschin*«[1] を見てみよう。「フリードリヒ大王の民衆詩人」と「手紙に見る生涯」という二つの副題をもつこ

---

1) *Die Karschin. Friedrichs des Großen Volksdichterin. Ein Leben in Briefen.* Eingeleitet u. hg. v. Elisabeth Hausmann. Frankfurt a. M. 1933.

の編著は、カルシュとその周辺の人々の手紙を集成し、これをおおよそ年代順に並べて、編者エリーザベト・ハウスマンの注記とともに、これらをたどればカルシュの伝記全体がわかるようにと配慮されたものである。総じて良心的な試みだとはいえ、しかしこの本を読む者は、やがて、いかにテクストに問題があるかということに気づくであろう。多くの手紙が改竄されている。ことによると好意的改変というべきかもしれないが、それにしても、カルシュもカルシュ以外の人の手紙もこのままでは信用できないのである。

ハウスマンのテクストでは、また、引用されている書簡に宛名の欠けているものが少なくない。前後関係から宛名が明白だというケースもあるが、かなりのパーセンテージでそれさえ不明であるため、実際にカルシュの書いた手紙がどうか、受けとった人物の返信がどうかということがきわめて不明瞭なのである。要するにこの本自体を研究の土台にすることができないという問題がある。

ヘリベルト・メンツェル編の詩集 »*Das Lied der Karschin*« (1938 年刊) はハウスマン版の後を受けつぐテクストである[2]。ひじょうに興味深いまえがきをもち、カルシュの詩をよく集めているが、おそるべきことには詩のタイトルすら恣意的に変更されている。さらに、たとえば20連からなる詩の冒頭5連と末尾5連がカットされ、なかほどだけが採ってある。あるいは、通りのいいように中間の幾連かが抜かれて「整理」されたテクストさえあって、これも研究底本とはなりえない。

1987 年に刊行された »*Anna Louisa Karschin, Gedichte und Lebenszeugnisse*« (Hg. v. Alfred Anger) は画期的なテクストを提供するものであった[3]。これまでの信頼できないテクストとは異なり、小型ながらきわめて良心的な編集によって研究者を助けたのである。しかしこの版本ですらかなり手が入れられ、綴りは現代風に変えられ、コンマは多く補われ、とくに書簡のテクストには問題が多いことが明らかになった。

こうしたきわめて不完全なカルシュ・テクスト、カルシュ研究の不安な土台を払拭したのが、カルシュとグライムとの往復書簡を集めた大部な二巻本、»*Mein Bruder in Apoll*« である[4]。編者ネルテマンによれば、この往復書簡集にはつごう 427 通の手紙が収められているが、これは現在まで確認されている二人の往復書簡のうちの三分の一に過ぎない。が、この版本によってはじめてわれわれは「カルシュの綴り」を目のあたりにしたのである。

他方、カルシュのドイツ語の問題もカルシュ研究にとって大きな壁となっている。第一に、カルシュのテクストそのものがドイツの東の果て、現在ポーランド領となっている地方の、しかも 18 世紀のドイツ語で書かれている。周知のように、ドイツ語史にとって 18

---

[2] *Das Lied der Karschin. Die Gedichte der Anna Luise Karschin mit einem Bericht ihres Lebens.* Hg. v. Herybert Menzel. Hamburg 1938.

[3] Anna Louisa Karschin, *Gedichte und Lebenszeugnisse.* Hg. v. Alfred Anger [Universal-Bibliothek Nr. 8374]. Stuttgart 1987.

[4] *„Mein Bruder in Apoll". Briefwechsel zwischen Anna Louisa Karsch und Johann Wilhelm Ludwig Gleim.* Hg. v. Regina Nörtemann. Bd. I: *Briefwechsel 1761-1768,* hg. v. R. Nörtemann; Bd. II: *Briefwechsel 1769-1791,* hg. v. Ute Pott. Mit einem Nachwort v. R. Nörtemann. Göttingen 1996.

世紀はまれにみる激変の時代であった。また、カルシュには Frühneuhochdeutsch（初期新高ドイツ語）の語彙ないし語意の影響も認められるのである。

以上、この論文の目的とカルシュ・テクストの問題について、その概略を述べた。この研究は科学研究費補助金の交付を得てかなったものだが、筆者が学部長になるなど大学運営にけっして軽いとはいえない責務を負うこととなったため、ひじょうに難渋した。研究の成果は講義などをつうじて学生に開かれているべきであるとの考えから、遅々として進まぬ研究とはいえ、その乏しい成果をわずかながらでも講義し、さらにそれをまとめて論文とする手順を踏んだ。しかしそのような作業がいささかなりとも進捗したのは、講義の記録を丹念にまとめては筆者に報告してくれた佐々木れい氏のご尽力のおかげである。佐々木氏はわたしの大学、大学院における教え子の一人であるが、その勤勉と学識ゆえに、筆者のもっとも信頼する学生である。その支援が得られなければこの研究は道半ばにして放棄されたであろう。ここに衷心より御礼申し上げたい。

第一章　カルシュ時代

カルシュが生まれ育った時代はヨーロッパ史でも、稀有な転回点、過渡期の一つであった。

小氷河期　長いあいだヨーロッパは「小氷河期 Kleine Eiszeit」と呼ばれる、人類史上最悪の気候を経験した。

小氷河期はその頂点だけでも 1560 年から 1700 年ごろまでのかなり長い期間にわたる。むろん年によって変動があり、かなり暖かい時期もあった。しかし当時の平均気温は、今日より少なくとも摂氏 1.5 度ぐらいは低かったといわれる。これは、播種から収穫までの期間がほぼ一カ月少ないことを意味する。一本の麦につく麦粒も何粒と数えられるほどであった。アルプス氷河も発達した。

ドイツ最大の湖、ボーデン湖は、20 世紀 100 年間で冬場に完全凍結したのは一回だけだが、1600 年代だけでも 6 回完全凍結している。エルベ川も完全に凍結して、かなり遠くまで川の上を歩いて行ける、といった状態であった。

飢餓とペスト　人々は当然空腹をかかえることとなった。飢餓の時代には病気にたいする抵抗力も弱くなり、幾度となく流行したペストの猛威はそれだけ恐ろしい影響を及ぼし、ヨーロッパ人の人生観、世界観を変えたほどであった。

カルシュ時代の直前、1679 年から 80 年にかけてドイツでもペストが最後の大流行をみせた。ヨーロッパ全体では 1665 年の「ロンドンの大疫」と呼ばれるイングランドを襲ったペスト大流行を無視することはできない。ロンドンの大学生であったアイザック・ニュートンも避難し、ふるさとに帰って、庭で一個のりんごが木から落ちるのを目撃したと伝えられる。むろん宗教戦争に代表されるかずかずの戦争もヨーロッパの人々を多数殺害した。戦争、流行病、寒さ、飢え、そういった尋常ならざる災厄が一気にヨーロッパ人を襲ったということができる。

シュレージエン　カルシュはシュレージエンに生れた。現在はそのほとんどがポーランド領であるが、当時はいわゆるドイツ領、ドイツ語圏であった。

シュレージエンには、依然として三十年戦争の傷跡がなまなましく残っていた。もともと寒村地帯で、牧畜と農業がおもな産業であった。ひじょうに寒く、土地も痩せているうえに、三十年戦争で徹底的に荒廃した。そこへペストが何度も追い討ちをかける。さらに、ドイツでペストが大流行した 1679 年、80 年ごろは、いわゆるトルコ戦役の時代であり、オスマントルコがシュレージエンから、さらにヨーロッパの中心部まで侵入してくる。東方からひたひたと忍び寄るトルコの脅威をヨーロッパが迎え撃つことになる。シュレージエンはトルコ戦役の影響をひじょうにに強く受けたところであった。掠奪はトルコ人ばかり

がするのではない。ドイツ兵さえ掠奪に手を染め、この地方はますます荒廃していく。理髪師兼外科医としてプロイセン軍に加わったヨーハン・ディーツはこう書いている。

> さらに行軍は続き、ポーランドを通過したが、このあたりの百姓はみんな逃げてしまっていた。村に残っていたのは、まあ口のきけないやつとか、目の見えないの、でなければ婆さんだけだった。地面に大きな穴を掘り、中に藁を敷いて、そこに自分の財産を埋めるか、ほかの場所に隠すかしていた。われわれはそういう財産をいくつか見つけた。なかにたくさんの食糧もあった。見つけた家畜は殺して食べた。このときにはもう窮乏が始まっていたのである。
>
> しかしいくつかの村では、さらに悲惨な状態にある人々に出会った。部屋には窓はなく、代りに牛の膀胱が張ってあった。部屋のなかにはパン焼き窯もあった。雌牛と子牛、豚と犬、主人と妻がみんな入り乱れて寝ていた。部屋は煙が充満しているので、まっすぐ立って歩けなかった。火酒と、憚リナガラ虱はふんだんにあった。火酒は目盛りグラス［目盛りがついたシリンダー状のドイツの古い杯］で飲んだ。百姓は腹いっぱい飲むと、パン焼き窯のなかへ這って入った。要スルニ、ここの連中は家畜のように暮らしていた。[1]

むろんカルシュの生れた時代は気候も好転していたが、荒廃から立ち直るのは容易なことではなかったはずである。小氷河期にともなうさまざまな苦難や戦争からようやく立ち直り、ヨーロッパがふたたび高度成長の温暖な時代に向かいはじめたときに、カルシュは生れたのである。

世俗化　18 世紀はいわゆる啓蒙主義の時代であり、啓蒙運動に不可分な側面として世俗化の滲透という問題がある。中世はいうに及ばず、近世を経て、カルシュが生れる前の 1600 年代にいたるまで、ヨーロッパ人の行動様式——朝起きてから夜寝るまで、生れてから死ぬまで、すべての立居振舞や価値観——は、究極で神を基準に決められていた。たとえば、生れれば教会で洗礼を施してもらい、教会で結婚式と葬式を挙げてもらう。日曜日ごとに教会に行って聖職者の説教を聴く。世俗の活動、金儲けにさえ、宗教的価値が引き合いに出されるのがふつうであった。たとえば同職組合も守護聖人をもっていた。それぞれの職種に応じてふさわしい聖人を選ぶのである。たとえば運搬業者（全ドイツ・トラック組合）であれば聖クリストフォルスを守護聖人にする。聖クリストフォルスは激流をものともせず、幼子イエス・キリストを肩にのせて向こう岸まで無事に運んだからである。

---

[1] *Meister Johann Dietz des Großen Kurfürsten Feldscher und Königlicher Hofbarbier.* Nach der alten Handschrift in der Königlichen Bibliothek zu Berlin zum ersten Male in Druck gegeben von Ernst Consentius. Ebenhausen bei München 1915. E・コンゼンツィウス編『大選帝侯軍医にして王室理髪師ヨーハン・ディーツ親方自伝』佐藤訳、白水社、2001 年、48–49 ページによる。1686 年ごろのシュレージエンの風景である。

一事が万事、神や聖人などに頼りすがって無事にこの世を生きていこうとする。生れてから死ぬまで、朝起きてから寝るまで、すべての行為が神の御心にかなうようにするのが、キリスト教徒たる者の第一の務めであった。

ところで、いいものを着たい、おいしいものを食べたい、立派な家に住みたい、贅沢もしたい、そういう欲望を実現するためには金儲けをするほかはない。しかし蓄財行為がはたして神の御心にかなうことかどうかは、かなり微妙な問題である。キリスト教の清貧の思想を実践しているかぎり、いつまでも貧乏で、空腹でいなければならない。病気でもしたらひとたまりもない。だからやはり金は儲けたい。が、蓄財とキリスト教の教え、神の御心、聖書に書いてあることとのあいだに、どう折り合いをつけるかというと、それはむつかしい。価値のよりどころを神にばかり求めてもいられない。世界はどんどん複雑になり、豊かになっていく。1700年代に入って世界も変わってくる。気候も暖かくなってきて、農作物も十分にとれるようになる。だれしもおいしいものが食べられるようになる。このころ、1700 年代に入ると、はじめてヨーロッパで海水浴が行われるようになる。それまで海水浴の風俗というものは知られていなかった。海は戦うべき相手であったからである。冷たく、荒波が寄せ、いつなんどき飲み込まれないともかぎらない。現にヨーロッパの地図は巨大な大津波、大潮のために何度も変わっている。

そういう戦うべき相手だった水がぬるみ、夏の水遊びも悪くはないと思う。こういう事実がヨーロッパ人を変えていく。価値のよりどころもまた神から世俗へと移っていくのである。かつては辛かったけれども、遊んでもいいのではないか。娯楽もいいのではないかと思うようになる。

この価値のよりどころの変化が世俗化の第一歩である。むろんこの過程が1700年代に入って突然始まったわけではない。長い時間をかけて、ゆっくりと滲透していったのである。が、すくなくとも1700年代に入ると、それは如実に現れる。

理性　では、神が価値のよりどころであったかつての時代とは異なり、18 世紀に入って、神に代わる新しい価値のよりどころとなったものの一つが「理性」であった。人間には理性というものがある。それが新しい価値のよりどころになる。カントによれば、Verstand をもたない人はいない。それに気づいていないだけのことである。理性を鍛えていない。だから奴隷的身分に甘んじている。そうではない、人間は自立できる。おのが運命を自分で切り拓き、それを推進し、展開し、上昇することができるのだ。人から何か言われてそのとおりに唯々諾々とこなすのは奴隷の境涯である。人間は家畜ではない。なんとなれば、理性がある、理性こそは人間の自立性の根拠となるのだ。万人よ理性を開発せよ。おのが理性を鍛えよ。それも、先生について、その指導の下に理性を鍛えてもらいながら、だんだんと一人前の人間になっていくのではなく、自分でやってみよ。自学自習をして、おのが理性を鍛えて自立せよ。自分の運命のことは自分で考えよ。

名高いカントの啓蒙の定義を読んでみよう。

啓蒙とは、人間が自分自身に責めのある未成年状態から脱却することである。未成年状態とは、他人の導きがないと自分の悟性を使用することができないことをいう。この無能力状態は、その原因が悟性の欠落にあるのではなく、他人の導きなしに悟性を使用する決意と勇気が欠落しているところにあるとすれば、自分自身に責めがある。賢者タルニ憚ルコト勿レ［ホラーティウス『書翰』Ⅰ、2、40］。汝自身の悟性を使用する勇気をもちたまえ。これがすなわち啓蒙の標語である。

［……］

しかしこの啓蒙を達成するのに必要とされるのは、ほかならぬ自由である。しかも、およそ自由の名で呼ばれるもののうち無害なることこのうえない自由、すなわち、あらゆることがらにおいてみずからの理性を公的に使用する自由である。ところが四方八方から「論議するな」と叫ぶ声が聞える。士官は「論議するな、教練に精を出せ」、財政顧問官は「論議するな、金を払え」、聖職者は「論議するな、信ずるがよい」と言う。（世界の君主のなかでただ一人だけ［プロイセン国王フリードリヒ二世］は「気の済むまで、気の済むことを論議せよ、だが服従せよ」と言う。）ということになると、どこまで行っても自由は制限されていることになる。とはいえ、啓蒙に有害な制限とはどのようなものだろうか。どのような制限なら啓蒙を妨げることなく促進するだろうか。――わたしの答えはこうだ。みずからの理性を公的に使用することはいついかなるときにも自由でなければならない。また、人々のあいだに啓蒙を成就しうるものは、そのような使用法以外にない。これにたいして理性の私的な使用はかなり窮屈に制限されていい場合も多く、制限されたからといって、それで啓蒙の進歩がとりわけて妨害されるわけではない。ここで自分自身の理性を公的に使用するというのは、学者として、読者世界にいる全読者の前でみずからの理性を使用することを指している。私的な使用というのは、自分にゆだねられた市民としての地位、すなわち公職にあって理性の使用を許される場合の使用法を指している。［……］

［……］

では、現在わたしたちは啓蒙された時代に生きているかと問われれば、否、しかしおそらく啓蒙の時代ではあろう、と答えられよう。現在の状況はまさにそうであるが、人類を全体から眺めてみると、宗教上のことがらにおいて、他人の導きがなくても、自分自身の悟性を着実かつ適切に使用しうるか、あるいはその見込みがあるか、ということになると、まだまだその域には達していない。しかし、現在ではその段階へ達するために自分自身を自由に改造していける分野が開け、万人の啓蒙、つまり、みずからに責めのある未成年状態からの脱却を妨げるものも徐々に少なくなりつつあることは、やはりはっきりとした徴候として現れている。この点からみれば、この時代は啓蒙の時代、すなわちフリードリヒの世紀というべきである。［……］ [2)]

---

2) Kant, Erhard, Hamann, Herder, Lessing, Mendelssohn, Riem, Schiller, Wieland: *Was ist Aufklärung? Thesen und Definitionen*. Hg. v. Ehrhard Bahr [Universal-Bibliothek Nr. 9714]. Stuttgart 1974. S. 9, 11 u.

古くは12世紀に同様の叫びが起こった。都市が生まれ、両親とは違う職業に就く可能性が出てきたときに、自分の生きかたにたいする反省が生れた。18 世紀の幕が開くと、世はまさに啓蒙の時代となった。カントによれば、啓蒙の時代であって啓蒙された時代にはなりきっていない。今まさに啓蒙運動、啓蒙の手続の途中なのである。人間が一人前の人間になるために必要な事業を今展開している、これが18世紀という時代であった[3)]。

神から理性への移行は世俗化の滲透の一つのあかしであった。

公民　世俗化の滲透という観点から第二に指摘しておかねばならないのは、身分とその使命の問題である。だれしも身分制度下では、国王や皇帝やローマ教皇以外は大なり小なり臣民である。他方、18 世紀になると、「公民」「市民」という新しい概念がいっせいに使われるようになる。フランス革命にはまだ一世紀近く待たねばならない。真の市民の時代、市民が自分たちで政府を建設し、自分たちの力によって憲法をはじめとする諸法令を制定し、国家・社会、あるいは都市・村落を運営していく。このような市民の時代が来るにはややまだ早いが、しかしもうその予感はあった。

むろんこの予感は、おそらく16世紀くらいにはあったであろう。しかし、もう一つの公民という考え方は18世紀になって広く使われるようになった。公民は市民よりも少し広い概念で、国家の一員だという考え方である。この、国家の一員だという考え方と、身分制度下における臣民という考え方には大きな相違点がある。臣民には直属の上司がいる。将軍や国王がそれに当る。直属の上司に奉仕するのが臣民であった。他方、公民という考え方はそうではなく、国家の繁栄のため、公共の福祉のために努力するというものである。ブルボン王朝を繁栄させるために働いているのではなく、フランスという国家のために働いている。フランスという国が豊かになるために働いている。こういう考え方である。

公共の福祉がきちんと成り立つためには世界が平和でなければならない。歴史上おそらく最初に「平和」「恒久平和」が真剣に論じられ、さまざまな本が出たのがこの時代であるのも偶然ではない。このような平和論を戦わせるとき、公民の思想——万民が豊かで、無理をしなくてすみ、自由平等で、互いに傷つけ合わず、国家が繁栄していくにはどうしたらいいかということ——について真剣に考えた。そういう時代であった。だから、臣民から公民の思想へ、そして百年近く待つと、ついに市民の時代、市民の思想へという流れがはっきりと見えてくるのである。

三身分　ところで、市民といい公民といっても、依然として「身分 Stand」は存在した。ところで、かつて各身分にはそれぞれの使命があてがわれていた。中世、近世においては三つの身分に使命があった。これは中世に確立された考え方で、のちに、さらに市民がこ

15.

3) 啓蒙の手続としてもっとも重要なものの一つが学校教育である。一般義務教育制度はプロイセンを嚆矢とするが、カルシュはその恩恵にあずからなかった。教育制度については後述する。

こに加わって四身分になるが、長いあいだ身分を大きく三つに分けるという考え方があった[4]。

第一身分は聖職者、第二身分は貴族、第三身分は農民である。商人や職人はさしあたり大きな勢力とはなっていなかった。ちなみに当時のヨーロッパは人口の 7 割が農民であった。聖職者の使命は「教育」だといわれた。神に仕える身であるがゆえに、神とは何か、神に仕えるとはどういうことか、神にもとづく人間の生き方とはどういうものかということについて教育する「教育的身分」である。聖職者はある種の「真理」を独占的に管理した。もちろん神学、教会の教えにもとづく教育であるという点では世俗の問題ではない。第二身分の貴族は「防衛」を使命とした。戦争があったときに臣民を守る。町を守る。国を守る。それが仕事だった。そして第三身分の農民は、食糧生産、つまり扶養を使命とする「扶養的身分」である。

この「教育的身分」「防衛的身分」「扶養的身分」がヨーロッパの根幹をなしていた。生れもった身分には使命があったから、農家に生まれた息子は、いわば自動的に扶養身分に編成されていく。国王の子どもは自動的に防衛的身分に属する。しかもこれは聖職者階級を頂点とする神聖な秩序であった。

ところが、少し先取りして言えば、18 世紀以降、理性を開発すると一人一人が一人前の人間になる、個人として確立されると考えられた。「個人としての責任」の時代へと移っていくのである。もちろん責任のとり方は千差万別である。家族のために責任をとる。国家のために責任をとる。恋人のために責任をとる。が、それは神聖な秩序によっていわば超越的に授けられた「使命」とは異なる、自分で責任をもって選択した運命である。

理性を開発し自立した人間になれば、おのれの運命は自分でつかむものだ。自分で自覚して商人になった、兵隊に入った。ならば、その責任を果たす。これがまた公民としても有益なのだ、と。つまり個々の身分にあらかじめ与えられた神的な使命から「個人の責任」の時代へ、個人たる自分の手でつかみ取った運命にたいして責任をもつ時代へと変わっていく。むろん個人としての責任という場合には、はすでに神の価値ではなく、別の価値がここには含意されている。

世俗化の滲透という側面からヨーロッパを見たとき、ここに述べたような三つの現象が見られることに注意を喚起しておきたい。

初期近代国家と公民の愛国心　カルシュの生きた時代の特徴として、第一に、小氷河

---

4) 三身分の区別を提案したのはランのアダルベロ（10 世紀後半－11 世紀初頭）である。しかし、ジャック・ルゴフが指摘するように、12 世紀に誕生したヨーロッパの都市では、早くから分業が必要とされたので、職人や、職人の一種として知識人というものが現れた。また、一口に農民といっても同時に職人でもあり、貴族は専守防衛に努めたわけではなく、領主、裁判官、行政官を兼務した。聖職者、とくに修道士にいたっては、「しばしば同時にこれらすべてを兼ねていた。精神労働は彼らの活動の一部」にすぎなかったのである（ジャック・ルゴフ『中世の知識人――アベラールからエラスムスへ――』柏木英彦・三上朝造訳、岩波書店、1977 年、8 ページ以下を参照せよ）。ここでは三身分という概念が実態を正確に表しているかどうかではなく、それぞれの身分に、いわば天与のごとく固有な「使命」が組みあわせられていたということを問題にしている。

期から暖かい気候への変化ということを述べた。つぎに、世俗化が滲透していく時代に彼女は生まれたのだということを指摘した。

第三には、初期近代国家の始まりの時代であったことを忘れてはならない。王朝の時代から啓蒙専制君主の時代へ、その典型はプロイセンのフリードリヒ大王やオーストリアのマリーア・テレージア、また、マリーア・テレージアの後継たるヨーゼフ二世の時代へ、という一大転換期だという意味である。

王朝は継続することが肝要である。たとえば、ロシアのロマノフ王朝ならば代々ロマノフ王朝出身の者が国王になり、女帝になる。国王の意識はというと、臣民がいて国家がある、しかしロシアという国のために働いているというよりは、むしろロマノフ王朝の繁栄のために汗を流しているのである。結果的に国家は経営されるが、王朝が存続し繁栄していくこと、一つの家門が存続して立派に経営され、繁栄していくことがなによりも大事であった。しかしフリードリヒ大王の日課を見れば明らかだが、何といっても国家のために働いたのであって、王朝のために働いたのではなかった。

あえて言えば、おのが家門など滅亡してもかまわない。プロイセンという国家が存続すればいい。これが近代国家である。

この初期近代国家が立派に経営されるためには、公民の働きが重要である。公民という、国家に奉仕しうる有能な人材を育てることは、したがって近代国家建設の成否を決定する重要課題だということができる。ただし有能な公民でなければならない。それは国家の繁栄にとって有能だという意味であるから、公民の有能な働きを支える精神として「愛国心」が養われなければならない。これが教育の大事なテーマになっていく。祖国に対する愛、国家に対する愛。公民と国家とを結ぶ精神的な支えとしての愛国心、これさえ神という価値から離れている。これもまた世俗化の一つのかたち、新しい愛情のかたちである。

ドイツ語の変化　第四は、カルシュ時代がドイツ語の大きく変化する時代に当たっていたことである。初期新高ドイツ語が新高ドイツ語へと脱皮する時代である。カルシュの語彙には初期新高ドイツ語時代の語義をそのまま引き継いでいる事例が散見される。いや、カルシュに限らず18世紀はドイツ語史の一大画期をなしているのである。これもまたバロックから啓蒙期への推移を示す現象の一つである。

識字率の向上　第五は識字率の向上である。字が読め、文章が読める、つまり読書能力が滲透するのは18世紀以降である。それまでは文盲といわれる人たちがひじょうに多かった。中世から近世にかけてであれば、たとい王侯貴族でもきちんと文章の読める人はごく限られていた。王侯貴族は聖職者を側近として雇い、書簡を書かせ、読ませたのがふつうである。聖職者は教育的身分であるから、読み書きは必須のリテラシーである。将来聖職者になるのであれば、ラテン語も含め、子どものころから徹底して教育される。

ところで、思考や知識を文字化することは今ではあたりまえになっている。しかし人類史の圧倒的大部分は口承の時代であった。たしかに近世までは文字に頼る習慣はあまりなく、口頭による伝達が大事だった。そのため手紙などは、国王には書けない。それを聖職

者に書かせ、使者に持たせる。使者は他国の王に書簡を差し出す。しかしもらった国王もそれが読めないので、そこに聖職者がいれば、読ませる。とはいえ、使者が用向きを口頭で伝えることに変わりはない。にもかかわらず手紙をもたせるのは、やって来た使者が本物であることを証明するためなのである。身分証明書の代わりである。

しかし18世紀に完全に文字の時代となる。もちろん文字の時代に入るためにはいくつかの条件が必要である。印刷技術はすでに考案されていた。大切なことは、ラテン語の時代が終わってドイツ語やフランス語の時代が来た、ということである。万民がふだんから喋っている自分たちのことばで書物が書かれるということである。

この時代、18 世紀に入ってからの出版物から明らかなように、それは圧倒的にドイツ語の時代であった。それまでは圧倒的にラテン語の時代であったが、これは学者や教養人でなければ読めなかった。庶民にも読めるドイツ語で本が書かれるようになった時代、これが18世紀である。ジャンルも変わった。かつては神学や哲学の本、あるいは地理学の本が圧倒的に多かったが、18 世紀に入って売上を伸ばしたのは小説である。絵空事、うそ、虚構が書いてある。フィクションがドイツ語で綴られている。

書籍市場　そして、これにともなって書籍市場がしだいに形成されていく[5]。18 世紀に入った当初は、本はたいてい物々交換であった。見本市があり、自分とこの出版社で作った新刊本を展示する。他社でも新刊書を出している。そこで、持参した書籍とほぼ同価値をもつと思われる本とを交換した。

このような書籍市場が確立すると本屋が生れる。貧しい人はそこで立ち読みをした。ひょっとすると立ち読みの風俗が生れるのもこの時代であるかもしれない。立派な図書館よりなお立派な本屋があり、そこへいって立ち読みをする。毎日通ってくる。やがてそこで売っている本を全部読破して偉くなった者もいる。もちろん書籍市場が確立するためには交通網が整備されねばならない。が、くりかえし不満がしたためられているモーツァルトの書簡に明らかなように、広範囲にわたる道路整備はまだ先のことであった。

ただし著作権という概念はまだ存在せず、いわゆる「海賊版」の横行は著述家たちを悩ませた。海賊版の禁止、原作者の権利の保護という問題が真剣に議論されたのはこの時代がさいしょである。

カルシュが生きた時代の特色のなかから、とくにカルシュとも深い関係のあるものを列挙するなら、およそ以上のようになる。

---

5) エンゲルハルト・ヴァイグル『啓蒙の都市周遊』三島憲一・宮田敦子訳、岩波書店、1997 年、11-24 ページを参照せよ。

第二章　生い立ちの記

人生の頂点より　1763 年、カルシュは生涯の頂点を迎える。このことはカルシュ自身がそう認めているだけでなく、詩人としての名誉を重くみるならば、いわば客観的な事実がそれを裏づける。この年の 7 月 26 日ごろ、カルシュはポツダムに到着し、フリードリヒ二世との面会の機会をねらっていた。若いころからあこがれ崇敬してきた大王に会うなどということは、もとより夢のまた夢であったが、ベルリンに住むようになってからは積極的に働きかけ、貴族の後押しも功を奏し、8 月 11 日、ついにサンスーシ宮、鏡の間で謁見がかなう。このときの様子は本人のズルツァー宛書簡にややくわしく報告されているが、このことについては後述する。大王は無名な女詩人に会い、いくらか質問し、あげくのはてには見映えのせぬ中年詩人に年金を下賜すると約束した。約束は果されなかったが、カルシュの名誉心は大いにみたされたのであった。

『精選詩集』　そして 10 月末、ついに『精選詩集』が出版される。冒頭におかれる予定であったズルツァーの序文はなかなかできあがらず、しかも予想を裏切ってひじょうに短いものになった。七年戦争で用紙の調達もままならず、出版そのものが予定よりも遅れた。しかしすでに述べたとおり、一冊の書物としては 18 世紀全体をつうじて最高の売上高を記録する名誉をカルシュは手にしたのである。ただ、それまで書かれた詩を「精選」して一冊がなったとばかりはいえず、1761 年の秋口に詩集の出版企画が具体化しはじめると、カルシュの創作熱は俄然高まり、とくに 1761 - 62 年は一気呵成に作品数が増える。証拠はないが、「精選」するだけでは「詩集」の体をなさず、急遽、短期間にその欠を埋める作業が必要だったのではないかと推測される。

とはいえ、にわかな乱作を邪推するべきではない。そのような疑いは、当時の作品群の質の高さによって払拭されるであろう。総じてカルシュの作品のうち傑作と評すべきものの多くは、ある種の高揚感に覆われていたこの時期に書かれたのである。ちなみにヘルダーは娘クレンケの編集になる『カルシュ詩集』を評し、「カルシンの最上の歌は 1761 年、1762 年に書かれたものであり、もしかするとさらに 1768 年までをも含めていいかもしれない」と述べているが、驚くべき炯眼とはいえないであろうか[1]。

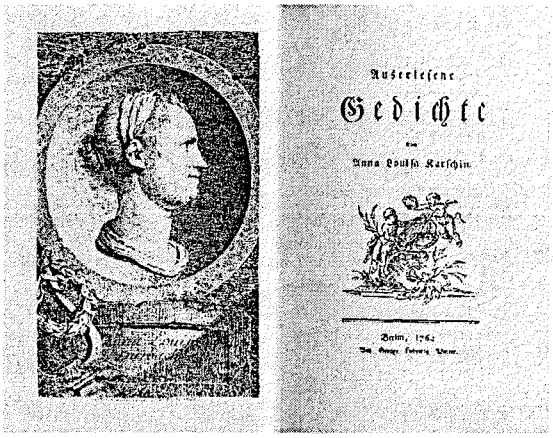
いずれにしてもこの年は、生活の糧を得るという点からも、名誉と栄光にあずかるとい

---

1) *Gedichte von Anna Louisa Karschin, geb. Dürbach.* Nach der Dichterin Tode nebst ihrem Lebenslauf hg. v. ihrer Tochter C. L. von Klenke, geb. Karschin. Berlin. Zweite Aufl., mit dem Bildniß der Dichterin. 1797. Aus den »*Nachrichten von gelehrten Sachen, hg. v. der Akademie nützlicher Wissenschaften zu Erfurt*« 1797, Stück 25. Zit. nach: *Herder's Werke.* Nach den besten Quellen revidirte Ausg. 17. Theil: *Gesammelte Abhandlungen, Aufsätze, Beurtheilungen u. Vorreden aus der Weimarer Zeit.* Hg. u. mit Anm. begleitet v. Heinrich Düntzer. Berlin o. J. [1876] S. 606.（付録 1 資料篇 20-3）。

う点からも、カルシュ生涯の頂点というにふさわしい。

自伝書簡　1761年、ベルリンに到着すると、あっというまに多くの作家、文人、哲学者との交際がはじまり、5月には、結果として厖大な数の手紙を残すこととなるグライムとの文通がはじまる。グライム、ズルツァーらがカルシュ詩集の編纂を思い立つ。哲学者ヨーハン・ゲーオルク・ズルツァー（1720-79年）が詩集に序文を寄せることになるが、そのためにズルツァーはカルシュに生い立ちの記を書いてくれと依頼する。この求めに応じて書かれたのが、長大な自伝書簡四通である[2]。



»Auserlesene Gedichte von Anna Louisa Karschin«
Erstausgabe Berlin 1764 (recte 1763).

書簡の日付（1762年9月1日付、9月3日付、9月8日付、第四書簡は日付なし）は受けとったズルツァーが付記したものであり、信用できない。実際には、最初の三通が1761年秋に、四通目は1762年9月初旬にしたためられたと推定されている。ベルリン入りを境に、カルシュの生活はにわかにあわただしくなる。

第四書簡の末尾近く、カルシュはつぎのように誇らしげに書いている。

> わたしの幸福は高いいただきを目指して登っていきます。制約のない自由を享受し、食事が司令官の食卓に供せられ、もはや生活苦など無縁になったからです。息子[3]は寛大なコトヴィッツ氏が育ててくださいますし、娘[4]のことはベルリンの友人たちが面倒をみてくれています。女王さまも、王子さまと王女さまも、わたしのことばに耳を傾けてくださいます。友人たちは変らぬ誠実さを示してくれます。医師の助けもいりません。どの歌、どの本、どの散歩道を選ぶかは、全部わたしが決めます。[……] わたしの人生は幸福であることをやめないでしょう [……]。[5]

頂点以後　カルシュは生涯の頂点の手前にあって、ここから自分の生活史を見下ろすがごとくに回顧する。もちろんカルシュの人生にはまだ続きがある。頂点からの下り坂は1791年の終焉まで、まだ30年近くも続くのである。結論を先取りすれば、この下り坂の

---

2) 巻末にその全訳を掲載する（付録1 資料篇1）。

3) 前夫ヒルゼコルンとのあいだに生れた息子クリスティアン。1749年の離婚後に生れた。この「才能のない」息子は1763年にベルリンへ出てから、生涯、母に養ってもらった。最後は教会用務員、助教師となった。

4) カロリーネ・ルイーゼ、1750年6月21日、フラウシュタット生れ。カルシュの最初の子。カロリーネもその子どもたちも生涯カルシュに養われ、母の家政を切り盛りした。

5) *„Mein Bruder in Apoll". Briefwechsel zwischen Anna Louisa Karsch und Johann Wilhelm Ludwig Gleim.* Hg. v. Regina Nörtemann. Bd. I: *Briefwechsel 1761-1768,* hg. v. R. Nörtemann. Göttingen 1996. S. 362 f.（付録1 資料篇1-4）

30年間には『小品集 *Kleinigkeiten*』(1765年)、『新詩集 *Neue Gedichte*』(1772年) といった控え目な収穫はあるものの、また、1775 年には数日間ベルリンに滞在したゲーテとのあいだに手紙のやりとりはあったけれども、娘カロリーネが寄宿学校から母のもとに戻されて以来、この娘との確執に悩まされる日々となった。カルシュは娘が20歳以上も年長の叔父エルンスト・ヴィルヘルム・ヘンペルの子を宿したことに苦しんだ。おそらくは自身の体験がそうさせたのであろう、彼女は娘をヘンペルと強引に結婚させる (1770 年)。しかし1781年11月、カロリーネは三男を出産した直後に離婚すると、翌82年3月にはブレーメン出身の貴族カルル・フリードリヒ・フォン・クレンケと再婚する。カロリーネ夫妻はこの間ずっと母カルシュと同居し、扶養されつづけたのである。娘は母の離婚を非難し、自分を寄宿学校に隔離したことを恨みつづける。さらには、創作に手を染め、自分のあこがれと恋の対象である詩人グライムと手紙のやりとりをはじめた娘に、母は激しく嫉妬する。

人生の頂点、1763年はまた、「七年戦争」がフベルトゥスブルク条約をもって終結した年でもある。カルシュの頂点はプロイセンの栄光の頂点であり、啓蒙主義の勝利の瞬間でもあった。しかし下り坂にさしかかるのと歩調を合せるように、大王もまたその栄光とは裏腹に、老いに苦しみ、疲労の極にあって、古典に慰めを見出していた。王は「さながらロバのごとく髪は灰色になり、毎日歯が一本ずつ抜け、通風のためいささか足が言うことをききません」[6] と告白している。

この下り坂の晩年については後述する機会があるであろうが、いずれにしても四通の自伝書簡は人生のほぼ頂点に立って、自身の生い立ちを回顧するものである。

自伝詩　ところでカルシュは、もっともまとまった四通の自伝書簡のほかにも、生活史をたびたび回顧している。それは、あるときは人生の断片を描き、あるときは半生を概観する詩であり、またあるときは、短いながらも人生を回顧する散文も残している。

「今は亡き伯父、彼女の子ども時代の導き手に」(1761年) [7] は、6歳のアンナを、わずか一年あまりにすぎなかったが引き取ってくれ、彼女に読み書きを教え、ラテン語の手ほどきさえしてくれた祖母の兄マルティーン・フェトケの霊にささげるオマージュである。大伯父との短い出会いをなつかしく回顧し、感謝をささげるだけでなく、今や「だれもがあなたの姪の歌を口ずさんで」いることを報告し、牛追いの暮しではなく、サロンでの交際がかなったことを誇りをもって語り、大伯父の霊よ安らかなれと結んでいる。

「捕えられたヒバリに」(1761年10月5日) [8] には、かつて本を貸してくれた同じ牛追いの少年のおもかげが刻まれている。

大伯父の家からふたたび自宅に返され、再婚した母が産んだ弟の子守と牛追いの生活に明け暮れていたころ、本に慰めを見出し、自分をダヴィデのごとき将軍に見立てて遊んだ

---

[6] *Briefe Friedrichs des Großen.* In deutscher Übersetzung. Hg. v. Max Hein, deutsch v. Friedrich von Oppeln-Bronikowski u. Eberhard König. 2. Bd. Berlin 1914. S. 129 f. (付録1 資料篇15-4、脚注4を参照)

[7] *Auserlesene Gedichte von Anna Louisa Karschin.* Nachdruck der Ausg. Berlin 1763. Mit einem Vorwort v. Barbara Becker-Cantarino. Karben 1996. S. 92-94. (付録1 資料篇2-1)

[8] Ebda., S. 96. (付録1 資料篇2-2)

ものだったが、少女時代のたくましい空想の世界を描く「カード遊びをする者たちに」[9] は、上記四通の自伝書簡の一部を補完する内容をもっている。

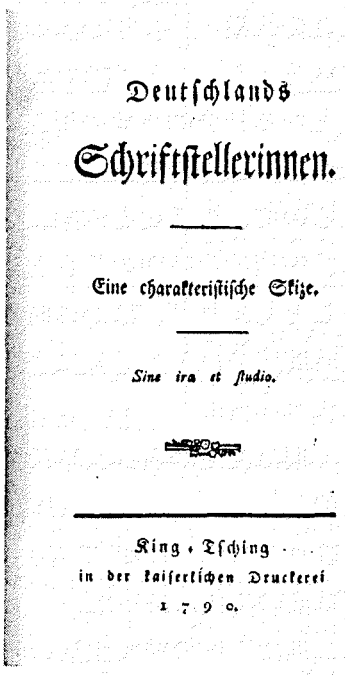
「司教座聖堂参事会首席フォン・ロホフに――かくも美しい詩をものすることを教えたのは愛にちがいないと氏が語ったとき」[10] には、苦難の青春時代と苦渋にみちた結婚生活が痛ましいことばで綴られている。「わたしの青春時代は心配事にうちひしがれ」ていた、無法な兵士に口づけを強要されるがごとくに、わたしも「愛を知らずに母と」ならねばならなかった、と告白する。

しかしカルシュの詩のなかでもとくによく知られている「ベロイーゼの閲歴」[11] は、四通の自伝書簡をそっくりそのまま45行の詩に圧縮したものである。

「ベロイーゼの閲歴」ほどではないにしても、程度の差こそあれ、このような自伝的内容を含む詩は枚挙にいとまがない。

散文のカルシュ伝　これとは別に、カルシュの晩年と死後に、三つのカルシュ伝が残された。一つはカルシュみずからがしたためたといわれる「草稿」（執筆年不詳）で、カルル・ハインリヒ・イェルデンス編『1792年版ベルリン文藝年鑑』に掲載された三人称形式の伝記である[12]。この「草稿」はフリードリヒ大王の死とその後のできごとを含むことから、「下り坂」にあって、おそらくは最晩年にしたためられたものと考えられる。

もう一つの伝記は、ザームエル・バウア（1768-1832年）の『ドイツの女性作家』という小型人名事典（1790年刊）に収められた小伝である[13]。ベルリンに出て、「宮廷でも讃歎の的になった」、『精選詩集』が出版され、「年金も受けるようになった」と述べたあと、奇妙なことには、カルシュが軍役についている夫にあてて、その愁歎を戒めるために書いた手紙が引用されている。総じてカルシュの「性格」を説くことに力点がおかれ、生活史上の詳細には踏みこんでいない。


Deutschlands
Schriftstellerinnen.

Eine charakteristische Skize.

Sine ira et studio.

King, Tsching
in der kaiserlichen Druckerei
1790.

Samuel Baur,
Deutschlands Schriftstellerinnen. Eine charakteristische Skize.
1790.

---

9) Ebda., S. 191 f.（付録1 資料篇 2-4）

10) Ebda., S. 111.（付録1 資料篇 2-3）

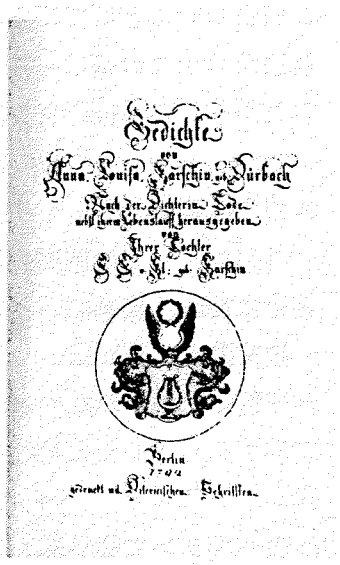
11) *Gedichte von Anna Louisa Karschin, geb. Dürbach.* Nach der Dichterin Tode nabst ihrem Lebenslauff hg. v. Ihrer Tochter C.[aroline] L.[uise] Kl.[encke], geb. Karschin. Nachdruck der Ausg. Berlin 1972. Mit einem Vorwort v. Barbara Becker-Cantarino. Karben 1996. S. 197 f.（付録1 資料篇 2-5）

12) Zit nach: *Anna Louisa Karsch (1772-1791). Dichterin für Liebe, Brot und Vaterland.* Ausstellung zum 200. Todestag 10. Oktober bis 16. November 1991. Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Ausstellungskatalog 39. Konzeption der Ausstellung: Gisela Staupe u. a. Berlin 1991. S. 24-28.（付録1 資料篇 4）

13) *Deutschlands Schriftstellerinnen von Samuel Baur (1790).* Als Nachdruck hg. u. mit einer Einleitung versehen v. Uta Sadji [Stuttgarter Arbeiten zur Germanistik, hg. v. Ulrich Müller u. a. Nr. 194]. Stuttgart 1990. S. 41-53.（付録1 資料篇 5）

第三の伝記は、カルシュの没後、娘カロリーネによって編纂された『詩集』冒頭におかれたカロリーネの手になる母親の伝記である[14]。当時のカルシュ伝としてはもっとも浩瀚なもので、内容の「客観性」に問題はあるものの、128ページを数える堂々たる業績である。

このように、人生の一局面だけをモティーフとする詩を除いて、ある程度まとまった内容をもつカルシュの自伝ないし伝記のたぐいとして、四通の自伝書簡のほか、詩「ベロイーゼの閲歴」、本人の手による自伝草稿、バウアの人名辞典、そして娘の手になる伝記の、つごう五種類のものがわれわれの手に残されたのである。



»Gedichte von Anna Louisa Karschin«, hg. v. Caroline Luise von Klencke (1792).

生涯の三期　カルシュの生涯の歴史はおおよそ三つの時期に区分することが可能であり、生活史と創作史からみても、背景となる社会的事象の視点からも、この区分は有効だと考えられる。三つの時期はさらにそれぞれが前半と後半に二分されるので、生活史を六期に区分することも可能である。ただし、客観的な時間の長さとは連動しない。ある時期が長く続くこともあれば、ほかの時期はかなり短いということがあり、時間区分はその意義によって有効だと考えていただきたい。

第一期は誕生から少女時代全体、すなわち独身時代にあたる。第一期の前半は、誕生から大伯父との出会いまで（1722-28 年）、後半は、ふたたび実家に返され、子守と牛追いに明け暮れた時代（1728-37 年）のおよそ 10 年間である。プロイセンは勃興と建設、隆盛への下準備の時代にあった。

第二期は二度の結婚生活の時代である。この時期には、幼妻となり、離婚を経験し、再婚し、夫が軍隊にいわば隔離されるまでの苦難の時代である。前半は最初の結婚生活の時期（1737-48 年）、後半は再婚生活の時期（1749-60 年）であり、第二期の最後をしめくくるのが、恩人フォン・コトヴィッツ男爵との出会いである。1750 年ないし 54 年には娘カロリーネが生れている。男爵は「こんなところにいたら食糧の心配に天才が窒息してしまう、あなたの天才なら大都会のベルリンへ行けばもっと創作が進むだろう」（第四書簡）と、カルシュを「男爵家の馬車」でベルリンへと導いたのである。このころプロイセンは隆盛をきわめる。1740 年 5 月、フリードリヒ二世が即位し、42 年 6 月、シュレージエンを併合する。シュレージエンにはプロイセンの法が布かれ、結果としてはその法のおかげで、カル

---

14) *Gedichte von Anna Louisa Karschin, geb. Dürbach.* Nach der Dichterin Tode nabst ihrem Lebenslauff hg. v. Ihrer Tochter C.[aroline] L.[uise] Kl.[encke], geb. Karschin, a. a. O. [wie Anm. 10], S. 1-128.（付録 1 資料篇 6）

シュは庶民として最初の離婚を経験するのである[15]。1756年には「七年戦争」がはじまり、プロイセンは疲弊するものの、啓蒙主義の輝かしい勝利と称えられた。

第三期はベルリン時代である。フォン・コトヴィッツ男爵の支援でベルリンに出、グライムを知る。前半はベルリン到着から詩集出版まで（1761-63 年）、後半はそれ以後、終焉まで（1764-91 年）の下り坂の時代である。七年戦争の終結、プロイセン・ロシア・オーストリアによる第一次ポーランド分割（1772 年）、アメリカ合衆国独立（1776 年）、マリーア・テレージア、フリードリヒ二世の死（1779・1786 年）を経て、フランス革命にいたる啓蒙主義の全盛期だが、カルシュにとって大王の死は凋落のきざしだと感じられたであろう。

第一期 1722 - 37 年	誕生から少女時代	前半 1722 - 28 年	誕生から大伯父との出会いまで	プロイセン建設と拡大。
		後半 1728 - 37 年	大伯父のもとでの生活、子守と牧童生活	
第二期 1737 - 60 年	二度の結婚生活	前半 1737 - 48 年	最初の結婚から離婚まで	プロイセンの隆盛／七年戦争勃発／啓蒙主義時代はじまる。
		後半 1749 - 60 年	再婚、別居、コトヴィッツ男爵との出会い	
第三期 1761 - 91 年	ベルリン時代から終焉へ	前半 1761 - 63 年	ベルリン到着 大王謁見、詩集出版	啓蒙主義全盛／フランス革命／市民の時代
		後半 1763 - 91 年	カロリーネとの確執、死	

ところで、先にあげた五種類の自伝ないし伝記が、この三つの時期にどれほどの記述を割いているかを調べてみるのは興味深い試みである。カルシュ自身は生活史のどの局面を力説しようとしたのか、事典項目と娘はどうか、これはカルシュが生きていくための、いわば「生活戦略」にかかわる重要な問題点であると考えられるからである。もちろん再婚以後のできごとを詳述した第二自伝書簡の冒頭、「以後は記述を切りつめようと思います。最初の手紙は読み手にあまりにも負担をかけるものでした」と述べているように、純粋な人生回顧という執筆意図以外にも、執筆作業そのものに影響を与える外的な圧力があり、その結果として記述の分量に「むら」の生じることがある。しかし、それでもカルシュの関心にある程度のかたよりがあるかいなかは、客観的な数値によってある程度推測されるのである（次ページの表を参照せよ）。

記述の力点　「ベロイーゼの閲歴」によく現れているように、カルシュの自伝三種はおもに第一期・第二期の記述に力点をおいている。四通の自伝書簡は第三期前半の時点か

---

15) Vgl. Silvia Bovenschen, *Die imaginierte Weiblichkeit. Exemplarische Untersuchungen zu kulturgeschichtlichen und literarischen Präsentationsformen des Weiblichen* [edition suhrkamp 2431]. Frankfurt a. M. 1979. S. 151.

ら書き下ろしているため、第三期全体にかかわる記述の分量が少ないのはやむをえないが、やはり前半生の苦難の時代に多くのページが割り当てられている事情に変りはない。カルシュはこれら自伝作品において、幸福よりはむしろ深刻な不幸を書き綴っている。貧乏、教育からの疎外、牛追いと子守の生活、夫の暴力、彼女の才能を解しない人間に囲まれ、自分という存在が埋没しているかのごとき不幸の時代——これらを徹底した態度で記述するために、これら自伝作品はあると言ってもいいほど、記述に偏りのあることは明らかであろう。

	製作年ないし成立年	規模*)	記述量の比			
			第一期	第二期	第三期	その他
自伝書簡	1761/62	書簡 4 通、約 21 ページ	12	25	8	
			4		*1*	
ベロイーゼの閲歴	? [ca. 1763 ?]	45 行の詩	9 (27 行)	5 (15 行)	1 (3 行)	
			14		*1*	
自伝草稿	? [ca. 1790 ?]	4 ページ強	3	2	2	
			5		*2*	
バウア	1790	12 ページ強	4 (2 ページ)	4 (2 ページ)	1 (0.5 ページ)	15 (夫宛書簡 7.5 ページ)
			8		*1*	*15*
カロリーネ	1792	128 ページ	1	1	1	
			2		*1*	

*)「規模」のページ数は引用文献のそれにもとづく。

第三者であるバウアの事典は、事典という性格にもかかわらずきわめていびつな記述になっているのは上述のとおりである。項目の最後には夫に宛てた手紙がまるまる引用され、これに 7 ページ半もの分量があてられているからである。しかし前半生の占める割合が圧倒的に多いという事実はここにもあてはまるのである。

母との確執の記憶もさめやらぬ時期に書かれたと推測される娘カロリーネによる母の伝記は、意外にも均整のとれたものである。各時期におよそ 40 ページをあて、全体のバランスをよくとっている。しかしこの均整が「意外」の感を与えるのは、第一期・第二期の記述と第三期の書法とに大きな違いがあるからである。第一期・第二期はおそらく母の記憶に頼るほかなく、母の書簡や母との会話などにもとづいて書く以外に方法はなかったであろう。これにたいして第三期は、たしかに当初は寄宿学校に入れられていたため、母の行

状を「目撃」することは多くなかったと考えられるが、それでも第一期・第二期にくらべると、自分の目で見た事実を記録することが可能であった。にもかかわらず、第一期・第二期のほうが、目撃談のように、ルポルタージュ風に、ときには小説のごとくいきいきと記述されている。他方、第三期のそれは、あえていえば歴史記述のごとき冷静さを保ち、事実を淡々と積みかさねる手法をとっている。したがって、これを一連の物語として読めば、第一期・第二期の物語のほうが圧倒的におもしろいのは否定できない。

カルシュ自身も、またバウアや娘カロリーネも、総じてカルシュの前半生の苦難を記述することに熱心であると断定してよさそうである。

それでは、関係者がそろって力説したがったカルシュの苦難の時代には、いったいどのような事実と特徴が見てとれるであろうか。そのいくつかを拾いだしてみよう。

貧乏と無教育　第一期と第二期は少女時代と二度の結婚生活の時代とである。一貫していたのはひじょうに貧乏だったという事実である。これは結婚してからも変らなかった。貧乏はまた彼女を学校教育から遠ざけた。本人の記述によるかぎり一度も学校に通ったことはない。学習らしい学習といえば、大伯父フェトケのもとで読み書きと聖書の手ほどきを受けたことだけで、子守のあいまに讃美歌を暗記し、牛追いの少年に借りた本を読み、やがて自分も詩作のまねごとをはじめることで自学自習にいそしんだといえばいえる程度である。大伯父の家から母のもとに返され、子守をしていたころのことを回顧してこう書いている。結婚直前のころである。

> わたしは十五歳になっていましたが、女として当然知っているべきことを教えてくれる人もいませんでした。ゆりかごが日課でした。見捨てられた娘でした。[……] わたしは三人の子どものしつけを引き受けることになりましたが、教育を必要としていたのはわたし自身でした。[……] わたしは将来の運命を思い煩うこともなく、剪定されていない野生の葡萄樹のように成長していきました。(第一書簡) [16]

天才と自負　ならば、まっとうな教育を受けなかった「野生の葡萄樹」がなにゆえすぐれた詩を書くことができるのか、という矜持と問いかけがこの背後にはある。無教育だということは、彼女が「野生」であること、「自然児」であることを強く意味している。天才は自然のたまものであり、いたずらな教育は不必要だという時代思潮が、おそらくここでははっきりと自覚されているのである。

しかし他方でカルシュは、「女として当然知っているべきこと」を知らずに終ったことを指摘してもいる。もしも女として身につけるべき知識というものがそもそもあるとすれば、その点での無教育は恥じるべきことだという自己認識もここから読みとれるのである。そして、学校教育を受けなかったということと、女としてもつべき知識を習得しなかったと

---

16) *„Mein Bruder in Apoll"*, Bd. I, a. a. O. S. 348. (付録1 資料篇1-1)

いう意味での無教育はけっして別のことではない。しかし、教育をめぐる二本の座標軸をカルシュは認識し、いずれにおいても「無教育」であったことを人生の不利としてのみ理解するのではなく、むしろこれを、生き抜くための強みとする「戦略」に転ずるのである。

教育の五つの側面　ところで、カルシュの教育水準を語る場合、われわれはつぎの五つの局面を区別しておかねばならないであろう。

一つは「女として知っているべき技能」という側面であり、ここには女の一生、ライフサイクルと女の果すべき役割という問題がある。と同時に、「女として知っているべき技能」があるとすれば、逆に「女として知る必要のない知識」「女として知らないほうが好ましい知識」というものも想定されるのである。祖母は、孫が「書く能力」を身につけることに反対していた。母もまた、「読み書きができる、女の子としてはそれで十分、それ以上のものはいりません」と言い、ラテン語は無理に教えたわけではないと弁解する大伯父にたいし、「でも、大学へ行くわけじゃなし。まあ、とにかくご親切にはお礼を申しますわ。」と応じている。[17] では、「女として」という場合の「女」とはどのような役割を果す存在だと考えられていたのか。この問題にはあとで触れることにしよう。

第二は啓蒙のプログラムとしての「一般就学義務」という側面で、カルシュはここからまったく疎外されていた。

第三は、啓蒙のプログラムの一部としての「女子教育」であり、これは第一の側面と第二の側面とを学校教育というシステムに組み込み、一体化するという Erziehung の意味をもっていた。

第四は、もっと一般的な、自学自習をも含めた「教育」ないし「人間形成」「教養」Bildung という問題である。

第五は、職業訓練としての教育、技能習得 Ausbildung という問題である。カルシュは離婚婦人であり、いわゆるまっとうな職業につくことはむつかしかった。むろん「詩人」は伝統的な「職業」の範疇に属さず、社会的認知のむつかしい微妙な「職業」であった。いずれにしてもカルシュは詩人としての技能を本格的に習得したことがなかった。この側面での学習をあえて語るとすれば、讃美歌や文学作品を読むうちに文学技法を身につけたということであろうか。

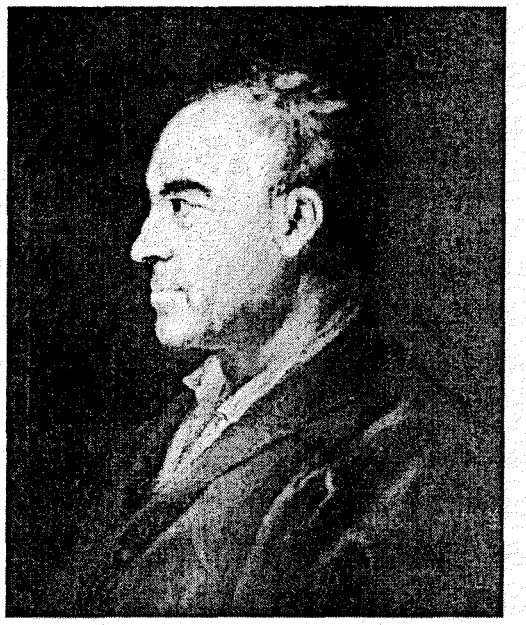
カルシュが少女時代の自分を「野生」と評するとき、それはこの五つの側面のいずれにも関係がある。カルシュの詩人としてのキャリアは、おもにベルリン時代に入ってからは

---

17) 第一書簡。ちなみに、ゴトシェートの妻ルイーゼ・アーデルグンデ・ヴィクトーリアはこう書いている。「多くの人が女性の学識というものに根深い憎悪をいだいているのは、何度みても不思議でしかたがない。たいていの人が女性を、どういうときにいちばんこっけいな、おぞましいものとして思い描くかというと、それは学識のある婦人という肩書をあてがうときである。学識のある妻をもらうくらいなら一生独身でいたほうがましだと考える男がいるのはまちがいない。」(Luise Adelgunde Victoria Gottsched, Das XXIX. Stück der *„Vernünftigen Tadlerinnen"*. Zit. nach: *Frauen der Goethezeit in Briefen, Dokumenten und Bildern. Von der Gottschedin bis zu Bettina von Arnim. Eine Anthologie* von Helga Haberland u. Wolfgang Pehnt [Universal-Bibliothek Nr. 8454-65]. Stuttgart 1960. S. 38.)「学識」を身につけることに熱意をいだいていたアンナ・ルイーザを妻にした二人の夫が妻をうとましく感じたのも、こうした時代の空気と無関係ではないであろう。(付録1 資料篇 10-4)

じまった。カルシュはすでに中年にさしかかっていたのである。これは五つのいずれの意味においても教育が手遅れであることを意味したであろう。しかしカルシュは生きなければならなかった。いまさら教育の遅れを取り戻すために、子守と牛追い、「結婚生活のありとあらゆる拷問」[18] の時代に戻ることなどできなかった。だからカルシュは時代の流れを利用して、身を立てるための戦略を身につけねばならなかったのである。またそれは、貧乏生活と家庭内暴力、子守と牧童の境涯から身を起こして、文壇の大家と対等につきあい、サロンに出入りし、王侯を相手に交渉するほどにまで社会的地位を高めるにいたった筆舌に尽しがたい艱難辛苦をかえりみれば、まことにやむをえぬものであった。

Die Karschin am Schreibtisch.
Nach einer Zeichnung von Hempel.



Johann Georg Sulzer
1720 - 1779
Anton Graff, Replik, um 1780
Gleimhaus zu Halberstadt

18) 第三書簡。Ebda., S. 358.（付録 1 資料篇 1-3）

第三章　牛追いの少年

大伯父のもとからふるさとへ引き揚げたあと、カルシュは牧童の生活を送る。自伝書簡中もっとも美しい場面がここである。

牧童との出会い　自然のふところにいだかれて牛を追っていくと、やがてアザミの群生に行きつく。それを全部敵に見立て、「兵士の勇気をふるって」その頭をかたっぱしから斬りおとす。頭上ではヒバリが息の長い歌を聞かせている。ある日のこと、川向こうに少年がいることに気づく。

> 重要ないくさのあとのある秋の日のこと、小川のほとりにすわっていますと、川向こうに数人の牧童が一人の男の子を取り囲んでいるのが見えました。その子が朗読をしているのです。わたしは聴衆を増やすために飛んでいきました。なんというしあわせでったでしょう。つぎの日からわたしはわざわざ回り道をして、流れのいちばん浅いところを渡って牛を追い、それはそれは長いこと身近になくて寂しい思いをしていた願望、本を、また見つけたのです。[1]

牛とヒバリと牧童と――牧歌の書割としては申し分がない。その牧童が、牧童にもかかわらず本を携え、朗読している。この牛追いの少年はヨーハン・クリストフ・グラーフェといい、カルシュとはのちにベルリンで再会しているので、実在の人物であることはまちがいない。

この牧童との出会いの場面は当時から読者を引きつけたようで、「ベロイーゼの閲歴」を除き[2]、他の三つの自伝・伝記にも引用されている。

ザームエル・バウアの『ドイツの女性作家』は、牛追いの少年が貸してくれた数冊の本がカルシュの天才を助けたと指摘するにとどまり、少年の朗読の場面には言及しない。それよりも、カルシュの創作の天性を力説することに記述の重点がおかれているように思われる。

カルシュ晩年の自伝草稿では、この場面が自伝書簡とは比較にならないほど想像力あふ

---

1) 第一書簡。*„Mein Bruder in Apoll"*, a. a. O. S. 345.（付録1 資料篇 1-1）

2) 「ベロイーゼの閲歴」では、「大きな弟を背負って／三頭の牛を野に追い、／牧童の歳月を過しながら／心ゆくまで自然の美しさを称えたものだった。」と歌われ、つぎに結婚の「くびき」へと話題が移っていく。この詩に牛追いの少年が登場しないことを重くみる向きもあるが、45行からなる短い詩であることから、この問題について断定的なことはいわないでおきたい。この詩の解釈については、Barbara Becker-Cantarino, „Belloisens Lebenslauf". Zu Dichtung und Autobiographie bei Anna Louisa Karsch. In: *Gesellige Vernunft. Zur Kultur der literarischen Aufklärung.* Festschrift für Wolfram Mauser zum 65. Geburtstag, hg. v. Ortrud Gutjahr. Würzburg 1993. S. 13-22 を参照せよ。（付録1 資料篇 2-5）

れる筆で書かれている。

> あるとき牛飼いの娘が小川にかかる木橋に腰をかけていると、向こう岸に一人の牧童がいた。少年は輪になっている牛たちに本を読んで聞かせているのだった。牛飼いの娘はあっという間に輪に加わり、熱心に耳を傾けた。翌日も岸に沿ってずっと牛を追っていき、小川が小石の上をさらさらと流れるあたりまで行った。ここなら楽に向こうへ移ることができた。この秋ほどすばらしい秋を味わったことはなかった。秋が去り、冬が来た。しかしその埋め合わせがあった。その間に親しくなった牧童が今度は本を貸してくれたからである。[3]

少年の朗読の相手は同じ牧童仲間ではなく何頭かの牛である。カルシュを本の世界へと導いた決定的な場面が、ここではほとんど夢物語と化している。しかし娘カロリーネによる母の伝記では、夢物語がさらに神話化ないし伝説化していく。

> そのささやかな家畜を追ってはじめて草の多い牧場に足を踏み入れたとき、彼女は十三歳であった。ここでかつてないほど空想の衝動を感じたが、やりかたさえ知っていたら、それらを絵にしたことだろう。読むべき本もなければ書く道具もなく、思いを告げうる相手もいなかった。こうして彼女は子牛と時間を過ごしながら、ただ空想をもてあそぶばかりであった。しかしある日、感傷的な夢にふけっていると、突然一頭の牛が逃げ出した。牛は別の牧場との境界をなしている濠をやみくもに渡りはじめた。不安にかられて幼い牧童は濠に入り牛のあとを追った。ほかの二頭は自然にあとからついてきた。彼女はかなりの距離を走ってようやく牛に追いついた。さて、少し休もうとしてあたりを見回してみると、そこはまったく別の牧場であった。そしてやや離れたところに牧童がいることに気づいた。少年は木の下にすわり——ああ、すばらしい幸運であったが、本を読んでいたのである。うれしくて胸が高鳴った。思うが早いか少年のそばに立っていた。ごく短いことばをふた言三言交わしただけで終生の友になっていた。そして本好きがたちまち二人の心を友情のきずなで結びつけた。たといこの瞬間にユピテルのような神が天から舞いおりて彼女の子牛の一頭に姿を変えても、詩人はそれに気づかなかったであろう。若い牧童が読んでいた本に、それほど気持ちが執着していたのであった。[4]

---

3) Vorläufige Lebensbeschreibung der Dichterin Anne Luise Karschin, geb. Dürbach. In: *Berlinischer Musenalmanach von 1792*, hg. v. Karl Heinrich Jördens. Zit. nach: *Anna Louisa Karsch (1722-1791), Dichterin für Liebe, Brot und Vaterland.* Ausstellung zum 200. Todestag 10. Oktober bis 16. November 1991, Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Ausstellungskatalog 39. Berlin 1991. S. 25. (付録1 資料篇4)

4) Caroline Luise von Klencke, Vorberichtender Lebenslauf der Dichterin Anna Louise Karschin, geb. Dürbach. In: *Gedichte* (1792), a. a. O. S. 23 f. (付録1 資料篇6)

神話化　自然児は牛の導きによって文明に出会う。川は野生と文明の両世界を隔てると同時につなぐ役割を果たしている。ここには神慮が働いている。いや、なるほどそうは書かれていない。けれども、牧童たちへの朗読は牛への朗読へと変化し、神の使いのごとき牛の導きによる本の世界へのいざないへと、ほとんど非現実的な「物語」へと変貌する（さながらディズニーのアニメだ）。

牧童の実在はおそらく疑いえない。カルシュが後年この少年への感謝を詩にうたい、その生活援助を気にかけていた事実は重いといわねばなるまい。まちがいなく牧童はカルシュに本を貸してくれたのであろう。しかし牧童が本を朗読していたのは実話であろうか。朗読していたのが事実だったとすれば、その相手は同じ牧童仲間だったのか、それとも自分が野に放ってた牛たちだったのか。カルシュを少年のもとに導いたのはどういうきっかけによるものか。朗読する少年を目撃し、小川を渡って少年のもとに急いだのか、それとも木橋を渡って向こう岸へたどりついたのか。いや、三頭の牛の一頭が突然走り出したのを追ううちに見知らぬ牧場にいることに気づいたのか。神牛の導きのままに走っているうち、ふと気づくと桃源郷にいた、そういう風情が娘の伝記にはある。

この場面は、事実の記録としてまずまず容認しうる水準から、しだいに神話化、伝説化が昂進し、ついには寓話、伝説の域に、あるは古代ギリシアの牧歌の世界へとたどりつく。事実は虚構へと進化する。実話は夢物語へと変容するのである。

ここにカルシュという存在を神話化しようとする意図の働きを見てとることはむつかしくないように思われる。カルシュは自然の子であり、その才能は自然ないし神のたまものである、だからこそ自然（牛）の導きは確実にカルシュを育てたのだ。そう、カルシュはいかなる意味においても「教育」から取り残された存在である。その少女がたぐいまれな詩を書く能力をもっていたとすれば、それは自然（神）がその能力を育てたのだ。神慮の働く自然は牛を動かし、このような奇蹟を起すのだと。

神話化の意図はおそらくすでにカルシュ自身のなかにあったと考えるのが妥当である。いや、このような意図は、牛追いから身を起して詩人となり、王都において文壇の大御所や今をときめく国王と対等にわたりあうにいたるほど、社会的栄達をとげるためには、もっと卑俗な言いかたをすれば、生きるために、生き残るために、まっとうな暮しをするために必要な、これも戦略の一つだったのではないか。そしてカルシュの神話化は本人の意図を超えて娘にも引き継がれたのだとしたら、カルシュを神童として売り出すためにベルリン文壇の一部がひそかに採用した巧妙なしかけがまんまと成功した証拠であるのかもしれない。

第四章　女の役割

「カルシュは18世紀の女性がおしなべてそうであったように、ラテン語学校や大学といった教育制度から排除され、文化と伝統のなかでは一人のディレッタントでありつづけた。」[1)]

女の役割　しかし、たとい学校教育を受けられなかった一介のディレッタントであっても、「女」であることをやめるわけにはいかなかった。啓蒙の重要な手段であったはずの教育制度からは排除されていても、女としてのしつけの伝統から自由ではなかった。いや、女として知っているべき技能を知らなかったとしても、知っているべきだとする伝統を意識せずに暮していくことはできなかった。女として当然知っているべきことも知らなかったと自伝書簡にわざわざ述懐しているのは、そのなによりの証拠である。

カルシュは「ベロイーゼの閲歴」に、「女として、下女として、母としての務め」を果す毎日であったと歌っている。カルシュは自分の半生を、女（ないし妻）、下女（ないし主婦）、母だったと認識する。それは、これらの存在の一つひとつに「義務」がともない、女として生れた者は、妻、下女ないし主婦、母となるべき義務を引き受けねばならないという意味でもある。さらにいえば、この三つの役割はそれぞれが、男（ないし夫）、主人、子どもという三つの存在にたいする奉仕の義務を意味していた。男ないし夫に奉仕する女ないし妻、主人に奉仕する下女ないし主婦、子どもに奉仕する母、というわけである。女が引き受けるべきこれらの役割義務は、女にたいするしつけの伝統というだけでなく、近世・近代における「女子教育」の自覚的な到達目標として設定されたものである。三つの役割がいずれも「家」のなかでの義務であることは重要である。総じて18世紀は女を「家庭化」することにきわめて熱心であったということができる。

18世紀の婚姻論　当時の婚姻論の特徴は、婚姻の目的と根拠について議論し、夫婦の役割分担を明確化しようとする努力にある[2)]。

忍耐　しかしその前提として、女は男の命令を遂行するパートナーであり、そうであればこそ女は忍耐強く生れついたのだという主張が行われていた。ウーデンは、「娘は第一に、生れながらに忍耐と服従の定めを負っている」、すなわち、独身時代は両親に、結婚後は夫に服従するものである、女はそれにみあう「身体構造と素質と使命」をもっているのだから、とさえ述べている[3)]。ベックも同様に、「神は妻に、おのれの意志を夫の意志に服

---

1) Barbara Becker-Cantarino, Vorwort. In: *Gedichte* [1792], a. a. O. S. 15.

2) 以下の論述については、佐藤「マダム・ビュルガーの運命——憂鬱な詩人の生活史より」（『文学』季刊、第10巻・第3号、1999年夏）の、とくに212ページ以下とその注を参照されたい。

3) Karl Friedrich Uden, *Über die Erziehung der Töchter des Mittelstandes*, Stendal 1783. S. 159-162. Zit. nach: *Frauenleben im 18. Jahrhundert*. Hg. v. Andreas van Dülmen. München u. Weimar 1992. S. 39.（付録1 資

従させることを命じられた。ゆえに妻は結婚生活においては下女であり、夫はその主人である。[……] なるほど下女というのは、妻の誇りからすれば聞き捨てならないことばである。しかし健全な理性は女性一人ひとりにこの名を冠する。妻が行わねばならないのは自分の意志ではなく、夫の意志である。とすれば、この名が妻にとってどうして侮辱でありえよう。創造主の手で夫の助力者としてのみ造られたはずの妻が、夫の意志がかなうよう手助けすることは自分の使命ではない——自分は下女などではないと、どうして考えていいはずがあろう。——妻が自由に使っていい一人もしくは複数の下女を家においている場合、妻はもちろん卑しい下女ではない——最高位の下女である」と言う[4]。女の忍耐の義務は神と理性の命令である、これがベックの論旨なのだが、カルシュはすでに少女時代からこの要請に十分すぎるほど応えていたことになろう。

> 妻はその家と所帯とに断ち切ることを許されぬきずなで結ばれている。そして自然みずからがそのきずなを妻のために、かくも美しく軽やかなものにしてくれたのである。ここで妻は夫と祖国とに手伝い健康な子どもを育て、ここで女性の偉大な天職をすさんだ気晴らしなどしないで果たすことを求められている。自然によってあらかじめ妻に定められたこの人目につかぬ生活と静かな情緒とが欠落していたら、妊娠期間と最初の子育てのしごとは耐えられないものに思えるだろう。妻がいま、それらをかくも喜んで、かくもすすんで引き受けるのは、それが女性の使命の一部であり、その際に母としての心がいきいきと関与するからである。人目につかない生活をないがしろにすると、妻はけっして良母、良妻にも、また多くの悲しい事例が証明するように、よい産婦にもなれないのである。[5]

こうして女の忍従の義務は、神と自然と理性とが定めたものとなる。が、世は啓蒙の時代を迎えていたのではないか。人間にはひとしく理性がそなわっている。これを立派に教育し、自分の理性によりながら自分の運命を切り開いていくべきであり、またその能力が人間にはあるというのではなかったか。中世の身分観にみられる天与の使命は、個人の使命と責任へと変化したはずなのである。しかし、これらのテクストから明らかなように、女性は中世三身分とはやや趣の異なる新手の身分観にまたもやしばられることとなったのである。

主婦　クリストフ・ゼルハーマーは女のしごとをリストアップしている。「縫い物をし、糸を紡ぐこと、つくろい、掃除すること、料理し、磨くことは、女のためのしごとである。」男が外でパンを稼いでくるとすれば、「女は男からパンを受けとり、男は女から干し草と亜

料篇10-3)

4) Christian Ludwig Beck, *Grenzstein der weiblichen Rechte in und ausser der Ehe von einem Freunde der Wahrheit*, Basel 1876, S. 23-26. Zit. nach: *Frauenleben*, S. 40 f.

5) Karl Friedrich Pockels, *Versuch einer Charakteristik des weiblichen Geschlechts*, Bd. 1, Hannover 1797, S. 19 f. Zit. nach: *Frauenleben*, S. 45 f.

麻布、料理とスープとを受けとらねばならぬ。」男は食糧を調達する。「女は家を守り、よほどやむをえぬ事情がないかぎりは、みだりに家の外にすがたを見せるべきではない。」ゼルハーマーの論調にも、女の家庭化傾向ははっきりと見てとれる。

さらに言う。「夫婦の愛情と安らぎがつねに夫婦生活の支えとなるようにしたければ、とくに女が上品なふるまいと実直さ、目立たぬ態度と孤独、寡黙とまめまめしい労働［……］によって、所帯を注意深く切り盛りしながら、つねに愛情を維持するよう、ひたすら心がけねばならない。家の外で行わねばならない他のしごとは男の領分である。男は市役所、穀物市場、畑、仕事場にいるので、女は針刺し、糸紡ぎの巻竿、食料品戸棚、衣服、亜麻布戸棚、台所などにしごとをもっている。［……］以上に述べた方法で、二人が結婚生活でそれぞれの重荷をにない、等しい愛情をこめてそれぞれの軛を引くならば、この軛としての性格はすべて目に見えて軽減されるか、それどころかすっかり消えてなくなりさえするだろう。」[6]

主婦とは「最高位の下女」なのである。

夫婦の義務　ザイボルトは夫婦それぞれの果たすべき義務を饒舌に語る。夫たる者、妻の暴君とはなるな。妻の失敗を責めるばかりがいいのではない、どこに過ちがあったのかを妻に悟らせるべきである。妻を裏切るな、不倫関係をつくるな、まめまめしく働け。——妻の第一の義務は夫への敬意である。夫は妻のかしらであり、「そのかしらに分別の座があてがわれている」。男は神からよりすぐれた分別を授けられている、だから妻よりも家政全体をよく見渡すことができる。妻の第二の義務は謙譲である。それを守るだけでも結婚生活で多くの不和が避けられるものだ。創造主のおかげで、そもそも女は忍耐強く造られているのだから、がまんしなさい。第三の義務は「夫への貞節」である。不実な妻は女の恥であり、夫の地獄である。「夫をかくも不幸な身の上にするものこそ、本来ならば夫のために束の間の人生を甘美なものにするはずの妻の不実」である。妻の最後の義務は「家の切り盛りに最善を尽くす」ことである。夫が稼いでくるものを節約し、大切に使いなさい[7]。

質のいい女　そのうえ女は「心と体と幸運」の三つの面で良質でなければならない、こう請求するのはホイマンである。

「心の性質」というのは分別のある話し方である。それなくして夫を喜ばせたり、夫に愛されたりするのはむつかしい。また、「やりくりじょうず」も必要な資質だ。節約をむねとせよ。いや、それだけでは足りない。「敬神と美徳に身をささげ、親切で鄭重、純潔で従順でなければならないと、わたしは言いたいのである」。

体についていえば、若くなければならない。若い女であれば、年上の夫をよく敬い、夫

---

6) Christoph Selhamer, Der Wirkungskreis der Frau [1701]. In: Max Rumpf, *Deutsches Bauernleben*, Stuttgart 1936, S. 230 f. Zit. nach: *Frauenleben*, S. 35 f.（付録1 資料篇 10-2）

7) David Christoph Seybold, *Predigten des Herrn Magister Sebaldus Nothanker aus seinen Papieren gezogen*, Prag 1785 [eigtl. 2 Bde. Leipzig 1774/76], S. 191-212.（付録1 資料篇 10-1）

のほうが賢いと信ずるであろう。夫はしたがって妻の教師として、妻をよくしつけなければならない。妻は虚弱だったり、病気をもっていたりしてはいけない。

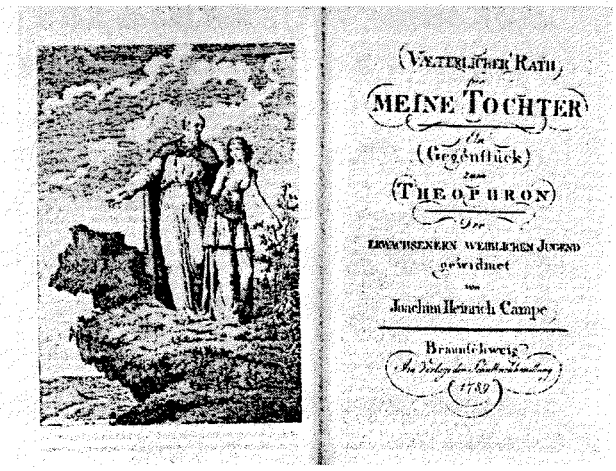
女性は美しくなければならない。「よい血色、非の打ち所がない四肢、愛らしい目、ひじょうに白い、きめ細かな肌をもつ中程度という意味である。なにしろ男が女をその体ゆえに愛するのも、またやむをえぬことだからだ。」

最後に、妻は富に恵まれ、上流家庭の出でなければならない。もっとも上の二つの条件がみたされていれば、この「幸運の質」はあきらめてもいい[8]。言いたいほうだいである。

家庭化から国家化への引き上げ　妻の果たすべき役割は国家の側からも力説された。先に引用したポッケルスも、妻は夫と協力して「祖国」の手伝いをし、子どもを育てるべきだと語っていた[9]。「祖国」と「子育て」との関係は、すでにツェードラーの事典（第8巻、1734年）に現れている。

> 婚姻関係、婚姻とは、性を異にする二人の人間が歩み寄って一つになり、人類を殖やす目的でその愛情をひたすら相手にささげるために結ばれ、もって、かかる結合から期待される子どもをたしかに自分の子どもと認知することができ、しかるのちその子どもたちを人類社会にとって有益ならしめるべく立派に教育することができる、そのような自然なありかたである。[10]

ツェードラーはこれに続けて、夫に奉仕すべき妻の義務を力説するのだが、女が母として立派に育てた子が国家社会に有為の人材となることが、ここでは期待されている。別言すれば、母の義務の一つが、正式な婚姻でのみ産んだ自分の子を国家に寄与しうる人間へとしつける、すぐれた公民を育てることなのである。カンペ（『父から娘への助言』1789年）はこれを川の比喩を使って説く。



Joachim Heinrich Campe,
Väterlicher Rath für meine Tochter. Ein Gegenstück zum Theophron. Der erwachsenern weiblichen Jugend gewidmet. Braunschweig 1789.

> おまえをつくられた方の御心に照らしてみたとき、おまえが全力で努力していくべき目標とはいったいどのようなものだろうか。

---

8) Christoph August Heumann, *Der politische Philosophus. Das ist, Vernunftmäßige Anweisung zur Klugheit Im gemeinen Leben,* Frankfurt, Leipzig ³1724, S. 87-94. Zit. nach: *Frauenleben,* S. 51 f.

9) 25ページおよび注5) を参照せよ。

10) Johann Heinrich Zedler, *Grosses vollständiges Universal-Lexicon* Aller Wissenschaften und Künste, Welche bißhero durch menschlichen Verstand und Witz erfunden und verbessert worden ..., 8. Bd. Halle u. Leipzig 1734. Sp. 360 ff.: Art. „Ehestand, Ehe".

この疑問が際限もなく大切であることはおまえにも今にわかると思うが、その答えを発見するべきところに発見するためにまずもって思い起してもらいたいのは、人として社会人として生きていけるよう成熟していくうえで、これからおまえ自身を、したがってそれはおまえの天職を、という意味でもあるのだが、二つの視点からよく見つめねばならぬということだ。おまえは一人の人間だ——ということは、人類の一般的使命についてまわることは、すべておまえの天職でもあるということだ。おまえは女性だ——ということは、男と人間社会と市民社会にとって女の果たすべき役割が、おまえの天職であり使命でもあるということだ。[……]

[……]

わが子よ、たといおまえの姉妹が、まさかいつまでもあのような状態が続くとは思えないが、揃ってあのみじめな恥じるべき定めに満足だと言っても、おまえの心と分別はきっとそれに強く反撥してくれるだろう。[……] おまえのまだ健やかな人間らしい内なる感情は、わたしたちの万物の父の叡知がおまえとおまえの生活とに関して用意しておられるかもしれない計画について、かならずやもっとすぐれたこと、もっと偉大なこと、もっと尊いことを、おまえに予感させてくれるだろう。そしてこの予感はおまえを失望させはしない。実を言うとおまえたちは、大きな子ども、おもちゃの人形、どこかのおばかさん、あるいはそれどころか復讐の鬼となるべく定められているのではない。それよりもむしろ——ああ、おまえの誉れ高い天職をそのすぐれた品位への感謝にみちた喜びをもって聞きなさい——ひとをしあわせにする妻、かたちづくる母、家の中の賢い管理人となるべく定められているのだ。より大きな重荷と心配と苦労とを担わねばならない人類の残りの半分である男のために、こまやかな心配り、愛情、世話、配慮によって、生活を甘美なものとすべき妻。子どもを産むだけでなく、子どものうちに美しい人間らしい徳の最初の芽を育て、子どもの精神的能力の最初のつぼみを賢明に大きく育てるべき母。細心の注意、秩序、清潔、勤勉、倹約、やりくりの知識と器用さを発揮して、稼いでくる夫の幸福、名誉、家庭内の安らぎとしあわせをゆるぎないものとし、夫のために食事の心配を軽減し、夫の家を平和と喜びとしあわせの住いとすべき家政の管理人。この、女の気高い尊敬すべき天職をけっして忘れてはならない。そして、よく覚えておくがいい、全人類社会の福祉は、究極において、もっぱら、おまえたちの準備がちゃんと整っているか、それともおざなりかに左右されるのだ。なぜなら、家の中の家庭の幸福はいうに及ばず——ちょっと聞くと信じられないように思えるかもしれないが——国家の公共の福祉も、大部分はおまえたちの手に握られ、すべてとは言わないまでもその大部分は、女がその自然の、市民的使命をどのように果たすかに左右されるのだ。川は水源次第だ。女から生れ、のちのしつけをもってしても二度とふたたび根絶できない善悪への最初の印象を女から受け取る市民もまた女次第である。川は水源次第である。人間の公の生活もまた人間の家庭生活次第である。国家の公共の福祉もまた家の中の家族のしあわせ次第である。[…

…] [11]

家庭化された女の存在価値は、国家建設のための子育てという使命を設定することによってたくみに引き上げられる。しかもそれは、自然、神、理性に根拠をもつ、いわば超越的な要請である。妻はこうして理論上、家庭から公共の場へとその役割と価値とを拡大し向上させる。しかし、いわば神聖な自然的素質と社会的要請による妻の価値の引き上げが、家庭内の妻の役割をむしろますます強調し、夫に従属する地位をいよいよ固定する結果を招いたとしても不思議ではない。

女たちの不満　こうした窮屈な要請に、やがて女たちが不満をいだきはじめたのも当然のなりゆきである。ヘレーネ・フリーデリーケ・ウンガーは男女の立場の不公平を批判する。

> もちろん現代の女にとって、自分を本来の主婦に、しかも同時に社交界のひじょうに繊細な礼儀作法にかなうようつくりあげるのは容易ならぬ課題です。本来の主婦は自発性と経験とを積まなければ習得されませんし、実際、後者もしんぼう強い努力と注意とによって獲得されるものです。でも、あなたがた男性はひどく不公正で、この二つをあわせもつ一人の妻を得たいと考えます。ところが、そういう妻を見つけて手に入れても、あなたがたはそれをごくあたりまえのことのように見てしまいます。[12]

1796年4月22日にゲッティンゲン大学歴史学教授アルノルト・ヘルマン・ルートヴィヒ・ヘーレンと結婚したばかりの若妻ヴィルヘルミーネ・ハイネ＝ヘーレンも、新婚生活に味わう屈託を詩人ゴットフリート・アウグスト・ビュルガーの次女マリアンネ・フリーデリーケ（1778-1862年）[13] に訴える。

> あなたの親友はもう一週間前からあわれな、さいなまれた主婦になっています。仕事一色のなかから抜け出したいのだけれど、どっちへ行けばいいのかわかりません。晩になると仕事でくたくたなのに、そのうえご主人さまのご機嫌をとったり、愉快な気分にしたりしなければなりません。あなたは結婚なんかしないほうがいい。自分の人生が楽しめなくなります。[……] もちろんわたしのほうも努力して、なにごとにつけて夫に気に入られ、けっして夫の気分を害しないようにしています。でも、わたしたちのそういうところが男の人たちは気に入らない。そして怒りたいときに怒り、真剣になりた

---

11) Joachim Heinrich Campe (1746-1818), *Väterlicher Rath für meine Tochter. Ein Gegenstück zum Theophron. Der erwachsenern weiblichen Jugend gewidmet*, 1789. Zit. nach: *Kinder- und Jugendliteratur. Mädchenliteratur. Vom 18. Jahrhundert bis zum Zweiten Weltkrieg. Eine Textsammlung*. Hg. v. Gisela Wilkending [Universal-Bibliothek Nr. 8985]. Stuttgart 1994. S. 149-154.（付録1 資料篇9）

12) Helene Friederike Unger, *Briefe über Berlin, aus Briefen einer reisenden Dame an ihren Bruder in H. (1798)*. Hg. v. Heinz Jolles, Berlin 1930, S. 45 f. Zit. nach: *Frauenleben*, S. 47 f.

13) ビュルガーと最初の妻ドロテーア・マリアンネ・レーオンハルトとのあいだに生れた次女。ヴィルヘルミーネの父クリスティアン・ゴットロープ・ハイネもビュルガーとゲッティンゲン大学で親交があった。

いときに真剣になる権利は自分たちにしかないと信じています。一方わたしたちはどこまでも柔和であること、服従することを求められています。[14]

つまり夫が大きなことがらに、わたしが小さなことがらに実権を握っているということです。そして妻にとってはそうするのがいちばんいいのだと、ほんとうにわたしは信じています。なにしろわたしたちのところのような小さな所帯には大きな用件より小さな用件のほうがたくさんありますので、夫の支配圏よりわたしの支配圏のほうが広いくらいです。[……] 残念ですが、わたしはほんとうにたくさん読書をしています。ひとりぼっちだからです。[15]

若妻は読書で退屈を紛らす。しかしこれは知識人の家庭に生れ、知識人を夫にもった女の、いわば特殊な事例である。妻、最高位の下女たる主婦、母に「学識」は不要であるどころか、むしろ家庭の秩序を乱すあらずもがなの能力であり、そのような女は、女としての義務を果すことにおいて不適格だと考えられたのである。

カルシュは女として当然もっているべき忍耐と服従の能力を幼いころから鍛え上げた。しかし女の神聖な自然的使命である、妻、主婦、母たることを立派に果すことはできなかった。妻にはなったが、その詩的才能（学識）、いや、少なくとも教養を積むことにたいする熱望を、二人の夫はうとましく思った。たしかに下女ではあったが、主婦として節約しなければならないほどの収入はなかった。啓蒙主義時代の母たる者は、子を国家社会に有用な人材に育てねばならない。しかしカルシュは何人かの子どもに死なれ、なによりも離婚を経験することとなった。

女の使命　女は、独身時代には両親の意思に従い、結婚後は夫の意思を実現し、家政を切り盛りする最高位の下女たる主婦となり、子を国家に役立つ人間に育てるべき母となる使命を、神、自然、理性から授けられている存在である。両親と夫と子どもという「主人」をもち、彼らに奉仕するには、なによりも寡黙な忍従、人目につかぬ忍耐が必要となる。けれども、がまんを強いられる出産と子育ての幾歳月を無数の女たちが過ごしえたことは、そもそも寡黙な忍耐力が女にそなわっている証拠である。女に必要な知識や技能があるとすれば、それは妻、主婦、母という義務、使命を遂行するのに必要十分な水準のものである。ラテン語の知識はこの範疇には属さない。女は娘時代も結婚後も、一貫して家のなかを仕事場とする。ここで女はその神聖な使命を果すのである。18 世紀はこの意味において、女を家庭化することに大いなる努力を払ったというべきである。しかし子育てが、子どもを国家社会に有用な人間となるよう教育し、しつけることを目標とすることによって、母は家庭に君臨する最高位の下女にとどまるのではなく、国家の福祉の行方を左右す

---

14) 7. Brief vom 30. April 1796. In: *Briefe aus alter Zeit. Wilhelmine Heyne-Heeren an Marianne Friederike Bürger 1794-1803 und ein Nachtrag*. Hg. v. M. Eckardt. Hannover 1913. S. 37 f.

15) 9. Brief vom 22. Jan. 1798. Ebda., S. 48 f.

る「水源」でもあるのだ。こうして女は国家社会の命運に直結する存在として、夫と肩を並べることになった。――これも18世紀の遺産である。

義務教育　しかし世は啓蒙の時代である。そのもっとも有効な手段が学校教育の普及であった。一般就学義務制度の導入においてヨーロッパの他の国々をリードしたプロイセンで、最初にこの制度を定めた勅令が公布されたのは、早くも1717年のことであった。

フリードリヒ＝ヴィルヘルム二世は、とくに田舎で若者の教育がないがしろにされている事態を憂慮し、「このきわめて有害な禍根」を払拭するために一般就学義務制度を導入すると宣言する。子どもを学校にやらない両親は「厳罰に処する」。両親が貧しければ、「各地区の救貧基金より2ドライアーを支給」させる。「つぎに余は恵みもて、今後司祭が、とくに田舎においては毎日曜日午後、教区民に教理問答の授業を遺漏なく実施すべきことを望み厳命する。」この勅令がきちんと実行されるかどうか監視を怠ってはならない。違反者があれば、罰として氏名を公示する。[16]

近代国家建設に意欲を燃やしていた国王の気概にはみるべきものがある。この勅令が女子教育を想定しているのかどうか判然とはしないが、女子は排除されていると解さなければならない理由もない。

この勅令は夏期と冬期とで通学様態に区別をつけ、夏は農家の繁忙期であるから、通学は週に一、二度でよいが、冬は毎日通わせなさいと諭している。季節による通学様態の格差はその後も解決されなかった。

バーデンの学校制度再編　バーデンでは辺境伯カルル・フリードリヒが1803年5月に「一般学校施設設置に関する第十三、最終設置勅令」を公布し、子どもに教育を施すために「一般的かつ学術的教育施設」の整備に取りくんだ。

勅令は「初等学校すなわち基礎学校」（田舎学校と都市学校）と「中等学校すなわち下級学校施設」（ラテン語学校、寄宿制高等学校、ギュムナージウム、リュツェーウムすなわちアカデミー・ギュムナージウム）とを区分する。

初等学校の目的は、「都市民もしくは農民に、キリスト教徒として公民としての生業にとって身につけるべきあらゆる知識を授ける」ことにあり、「精神的発展をめざして生徒をしだいに高く導くことはしない」。Bildungは初等学校の目標から除外されるのである。

---

16) 日付は1717年9月28日。引用は *Geschichte der Pädagogik.* Dokumentationsband I. Hg. v. Albert Reble. Stuttgart 1971. S. 232による（付録1 資料篇7）。フリードリヒ二世は『ブランデンブルク家回顧録』（1751年）で、やはり啓蒙主義時代の産物である科学アカデミーや大学が衰退しつつあることを歎き、情実人事が大学の講座を独占していることを批判している。それが「健全な悟性」と「哲学者」を迫害しはじめた。いや、貴族さえ学問をさながら有害なもののごとくにみる風潮が残っているのは遺憾だと論じている。「士官職を得た若い貴族は、大学での勉強は身を落す原因になると信じていた。人間の精神はとかく極端に走って衰退するものだが、彼らは無知こそ取り柄、知識を得るのはばかばかしい衒学趣味だと考えた。同じ理由で自由学藝も衰退した。藝術アカデミーもつぶれてしまった。」（*Denkwürdigkeiten zur Geschichte des Hauses Brandenburg* (1751). Zit. nach: *Die Werke Friedrichs des Großen.* In deutscher Übersetzung. 1. Bd. Hg. v. Gustav Berthold Volz, deutsch v. Friedrich von Oppeln-Bronikowski, Willy Rath u. Carl Werner von Jordens. Berlin 1913. S. 319.）

田舎学校に関しては、「冬期のみならず一年をとおして開かれている学校」でなければならない。「さもなくば子どもは、冬のあいだに習得したことがらの半分を、夏になるたびにふたたび忘れてしまうからである。」「授業は、夏期においては早朝から年長の子どもと一緒に行われるよう配慮されねばならない。家事のため、子どもたちが両親の役に立つよう昼間の時間を十分に確保するためである。」このような学校を「持続的学校」と呼んでいるが、これは季節によって就学実態に差があったことを証明している。

学齢は男女で区別がある。学齢は「7歳のはじめから、女子にあっては13歳の終りまで、男子にあっては14歳の終りまで」である。ただし、その年齢に達した段階で卒業させるべきだといっているのではなく、学習の進度に応じて「さらに一年学校にとどまり、やむをえぬ差し迫った理由がないかぎり、この延長を免除してはならない」。病気や緊急な家事（収穫、草刈りなど）、両親の病気などのやむをえぬ理由なくして欠席してはならない。欠席する場合には届出が必要である。欠席の原因が両親にある場合は両親に罰金が科せられる。

学科目はつぎのとおりである。

(a) 綴り字　(b) 読み方　(c) ドイツ語の綴り方　(d) 計算
(e) 歌唱　(f) 聖書物語　(g) 宗教教育の材料

ここに「完成課業」が施される。そのうちもっとも重要なものが「教理問答」であった。

実科学校　実科学校では女性教師が女子生徒に「糸紡ぎ、編物、裁縫」を教える。「糸紡ぎと編物という女の仕事はすでに両親のもとで広く行われているため、子どもは家で母親からそれらを習得することができる。」しかし裁縫は、とくに田舎では習得の機会が少ないと考えられるので、「地方を問わず徐々に導入されねばならない」と説いている。

男子の場合は、「辛い耕作」に従事しなければならない「貧しい男子生徒が、その地方の風土にかなったなんらかの手仕事や、緊急時にみずからを助け、さらにはなんらかの方法で自活できるような手仕事を、たといそれが結局のところ編物にすぎないとしても、習得するよう」配慮しなければならない。実科学校は冬期だけ開かれる学校である。

日曜学校　小学校を卒業した子どもが「一般に20歳まで、もしくは、それを逸脱する理由があれば少なくとも学校卒業後さらに三年間通うべくうながされる」のが日曜学校である。「宗教知識、歌唱、読み方、わけても書かれた文章の読み方、書き方、とくにまた一般の生活上の利便に適した短い文章作法、計算」の授業が提供された。日常生活ないし社会生活を送るのに不可欠ないわゆる文化知識の補充教育という意味合いで設置されたものであろう。

なお、都市小学校も男女生徒で別の制度が想定されていた。[17] 以上がバーデンの例である。

---

[17] »*Dreizehntes und letztes Organisations Edict*« über die »*Organisation der gemeinen und wissenschaftlichen Lehranstalten*«, erlassen vom Markgrafen Karl Friedrich von Baden zu Karlsruhe am 13. Mai 1803. Zit. nach: *Deutsche Geschichte in Quellen und Darstellung*. Hg. v. Rainer A. Müller. Bd. 6: *Von der Französischen Revolution bis zum Wiener Kongreß 1789-1815*. Hg. v. Walter Demel u. Uwe Puschner [Universal-Bibliothek Nr. 17006]. Stuttgart 1995. S. 349-357.

女子教育　当時の初等教育はこのように、田舎／都市、男／女、夏期／冬期、年齢、目的による区別にたった制度をもっていた。実態としては総じて女子の就学率は男子のそれに比して低かったが、そうであったからこそ女子教育の必要性がくりかえし訴えられた。バルトロメーウス・バハーの『少女の友』は19世紀初めのものであるが、ここに収められた「通学の励まし」は女子教育普及のための宣伝小説として注目にあたいする。

マリーが六歳になったとき、父がマリーを学校へあげようと思う。「なあ、おまえ、おまえもだんだん大きくおなりだから、だんだんとたくさんいいことを勉強しなければいけません。おまえが立派な人になったら、おとうさまもおかあさまも、ほかの人たちも、いつかきっとおまえのことを喜ぶ日がくるだろうからね。おとうさまがおまえの先生になるのがいちばんいいのだが、毎日おしごとがあって時間がないのは、おまえもよく知っておいでだね。それでね、おとうさまはおまえをあしたから学校へやろうと思う。」マリーは学校が怖いと言う。しかし父はやさしい教師の顔を思い出させ、「お行儀がよくて、おとなしくて、いっしょけんめい勉強する子が学校で罰をもらうことなんかないのだよ。ましてや、ぶたれるなどということはありません。だって、なにもしていない子に、どうして先生が罰をお与えになったり、たたいたりなさるものかね。よいことをおっしゃっても、それを聞かなかったり、ほかになにか乱暴な悪いことをした手に負えない子なら、学校で罰をもらうこともあるさ。だけどそういうことはめったにないのだよ」と説得する。

これを聞くと娘の恐怖心は一度に消えて、「つぎの日の朝、うきうきして学校へ行きましたが、毎日たくさんよいことを教わるので、一時間もなまけませんでした。ましてやまるまる一日なまけるなどということはありませんでした。けれどもほかの子どもはなまけることをおぼえて、それが自分たちをひどくそこねることになりました」。この短い物語はつぎのようなことばで結ばれている。「少女はよいことをたくさん勉強したければ、まじめに学校へ通わねばなりません。」[18)]

カントの表現を使えば、まだ「啓蒙された時代」ではなく「啓蒙の時代」である。そのためのもっとも有効な手段が学校教育であった。そこには制度上、男女の区別などが行われていたが、女子もまた「理性」をもつ同等な人間として評価されるべきであった。

啓蒙団体　ところで、啓蒙を推進するための手段ないし啓蒙の成果にはさまざまなも

---

18) Bartholomäus Bacher (1773-1827), *Der Mädchenfreund,* 1807. Zit. nach: *Kinder- und Jugendliteratur. Mädchenliteratur. Vom 18. Jahrhundert bis zum Zweiten Weltkrieg. Eine Textsammlung.* Hg. v. Gisela Wilkending [Universal-Bibliothek Nr. 8985]. Stuttgart 1994. S. 78 f.（付録1 資料第8は全文訳。）マリーが六歳であり（学齢期の認識）、就学を勧めたのが父親であること（カンペにもあった娘の導き手としての父）、小学校が男女別々に想定されていること、教師が父親代りの男性であること、怠惰への警戒と体罰の容認などに、当時の教育観がよく現れているが、なによりも年齢にふさわしい教育カリキュラムというものが自明のことになって事実は注目にあたいする。教育と年齢層との密接な関係が認識されはじめていたことだけでなく、人間が生れてから死ぬまでの時間が、今日のように、幼年期、青年期、壮年期、老年期などに区分することが一般に行われはじめていたことも、ここで確認しておきたい。

のがあり、雑誌と書籍、文学作品（この時代、人々の新しい希望や欲望を受けとめた重要なジャンルが、母語で書かれた長編小説である）、大学、サロン、各種団体、たとえば農業改良団体、国語浄化運動団体、読書団体、アカデミー、フリーメイスンなど枚挙にいとまがない[19]。しかしこうした啓蒙団体には一貫した特徴がある。会員がそもそも「知識人」の「男子」に限られているといっても過言ではないということである[20]。

フリーメイスンのロージェ	ドイツ学会（文学団体）	読書団体	経済団体	啓明会 *Illuminatenorden*
ミュンヒェン 1781	ゲッティンゲン 1738-1755	ボン 1787-1799	ライプツィヒ 1764-1789	
St. Theodor vom guten Rat 会員数 91（うち貴族 39）	会長ヨーハン・マティーアス・ゲスナー	会員数 174（うち貴族 52）	会員数 279	会員数 454（うち貴族 162）
宮内官／各種官僚 38 軍人 16 聖職者／神学者 15 法律家 9 画家 2 修道院管財人 2 音楽家 2 大学教授 1 大商人 1 医師 1	名誉会員 282 牧師／神学者 76 大学教授 51 官吏 38 校長／教員 28 医師 19 女性 12 貴族 28 軍人 3 大商人 2 正式会員（ゲッティンゲン大学学生） 206 法学生 65 神学生 56 医学生 7	官吏 42 聖職者／神学者 32 教員／大学教授 30 軍人 15 宮廷楽士 12 法律家／公証人 6 ドイツ騎士修道会顧問 6 大商人 2 公使 2 宮廷俳優 2 文書管理人 2 宮廷絵師 2	官吏 41 学者（大学教授／医師／聖職者） 18 大商人 13 手工業者（企業家） 11 地主 11 工場制手工業経営者 3 貴族 184	宮内官／行政官 103 聖職者／神学者 64 軍人 51 大商人 31 大学教授 25 医師／薬剤師 12 音楽家 7 市のお抱え身体医 5 市参事会員 3 修道院裁判官 3

なかでもフリーメイスンは啓蒙主義の申し子であるばかりか、啓蒙主義の代名詞のごとく評価され、知識人のあいだでは入会が流行現象となった。『フリーメイスン憲章』（1723年）をみるかぎり、自由と平等をむねとするキリスト教的博愛主義につらぬかれている。フォン・ムルによれば、団体の特徴は、世界市民精神、人間愛、慈善行為の三つの徳目にあり[21]、信仰、善良、純粋、名誉、友情などの独と区立を道徳律を重視しつつ、人間の道

---

19) Ulrich Im Hof, *Das Europa der Aufklärung* [Europa bauen]. München 1993 はみごとな見取図を提供してくれる。とくにその 95 ページ以下を参照せよ。また、Richard van Dülmen, *Die Gesellschaft der Aufklärer. Zur bürgerlichen Emanzipation und aufklärerischen Kultur in Deutschland,* Frankfurt a. M. 1986, S. 150-171 に各種団体のリストが掲載されている。

20) つぎの表は R. van Dülmen, *Die Gesellschaft der Aufklärer,* a. a. O. S. 59, 49, 87, 68 u. 104 による。

21) Christoph Gottlieb von Murr, *Über den wahren Ursprung der Rosenkreuzer und des Freymaurerordens. Nebst einem Anhange zur Geschichte der Tempelherren.* Sulzbach 1803. S. 71.

徳的完成を目標としていた。その他あらゆる点から検討しても女性を排除する理由はみつからないが、ふたたびフォン・ムルを引用すれば、「国籍、身分、知識、宗教の別」をすべて廃棄した組織でありながら、唯一「性別」だけは例外であり、「すべての女性が排除」されていた[22]。いや、女性だけではない。「庶民」もまた事実上排除されていたのである。

ドイツ啓蒙主義の個性　啓蒙主義は全ヨーロッパ規模の運動ではあるが、ドイツのそれには固有な特徴があった。ファン・デュルメンはそれを四点にまとめている。

一つは、「学術的、学究的な性格が顕著」であり、「フランス、イギリスとは異なり、社会問題は十八世紀末まであまり注目されなかった」。

第二の特徴は、運動が「世俗当局と国家の改革政策に近い立場をとっていた」ことである。「そのため当局に楯突く論調はついぞ聞かれなかった。たいていの啓蒙主義者は啓蒙絶対主義が掲げていた諸目標に同意していたのである。」運動の担い手に「官吏」が目だつのはその証拠である。

第三に、ドイツの啓蒙主義運動には文化的中心がなかった。パリやロンドンに匹敵する中心地をもたず、むしろ「不均質」であるところに大きな特徴があった。「多くの啓蒙主義者は小さな領土に縛られて暮し、お互いのことを個人的に知らなかった。」むろん、文化の中心都市が存在しないことは、神聖ローマ帝国のきわだった個性でもある。これには功罪二面があるであろう。国の文化をリードする中心地をもたないことは、文化の多様性のあかしでもあるからである。

最後に、ドイツでは「宗教問題」への関心が強かった。これは宗派分裂の結果である。「しかし啓蒙主義とプロテスタンティズムの密接なつながりや、啓蒙主義と敬虔主義の息の長い協力関係の痕跡が認められた。とくにまた決然たる啓蒙主義者のなかには牧師と神学者が含まれていた。」どの啓蒙主義団体にも一定数の聖職者・神学者会員がいたのは、上掲の表からも読みとれる。「いずれにしてもドイツの啓蒙主義には、文化と文学両面の要求を超える社会、政治的方面の構成要素が欠けていたのである。」[23]

カルシュは人生の頂点を迎えるころ、1762 年に、ヘルムシュテット学会の名誉会員に推挙された。ドイツ啓蒙主義運動が学術的・学究的性格をもっていたとはいえ、啓蒙団体の会員構成からみれば、これはまことに異例な事態であった。他方、啓蒙主義の教育的恩恵を受けなかったこともまたある意味で異例だといえばいえる。少なくとも啓蒙のプログラムから漏れ落ちた存在であったことは、自他ともに認める事実である。

カルシュのドイツ語の綴りは恣意的であり、職業訓練、すなわち作家としての文学的訓練の面でもカルシュはディレッタント詩人だったといえよう。たとえばソネットに代表さ

---

22) Ebda., S. 71.

23) Richard van Dülmen, *Kultur und Alltag in der Frühen Neuzeit. Bd 3: Religion, Magie, Aufklärung. 16.-18. Jahrhundert.* München 1994. 引用は、リヒァルト・ファン・デュルメン『近世の文化と日常生活』3「宗教、魔術、啓蒙主義——16 世紀から 18 世紀まで」佐藤正[illegible]、[illegible]社、1998 年、290-291 ページによる。

れるような厳格な詩形式は、カルシュ詩集のどこにも見あたらない。いや、総じてカルシュ詩集は、形式の面では雑然とした印象を受ける。一定の韻律と押韻が行われ、詩行構成にある種のリズムがあることは明白である。しかしそこには特定の詩形式と呼べるようなものが存在しない。

カルシュの刻苦勉励、自学自習の成果の一つに、神話的知識がある。それは詩の随所に現れている。しかしその成果は痛ましい印象を与えることがある。なぜなら、神話的知識から拾いだされたエピソードの連鎖は、当の詩の主題を見失わせるほどだからである。特定の人物に贈る「機縁詩 Gelegenheitsgedicht」において、カルシュはなによりも当該人物を称えなければならない。詩人は対象となる人物の美点を列挙するであろう。そのときカルシュは往々にして神話に取材し、神話世界に美点の比喩を探し求める。その博引旁証は強引であり、しばしば文脈を見失わせる。読者は詩の主題が人物の讃美であったことを忘れてしまうのである。

神話世界と同様に、フリードリヒ大王のモティーフもときとして強引に引合いに出される。詩の主題とは離れ、無理やりフリードリヒ讃美の結論が導き出される。

雑然とした印象はこのような「手法」にも原因がある。カルシュに欠けているのは厳格な形式意志である。自学自習の成果を抑制し、詩の対象を一定の形式のなかに閉じ込める、その禁欲的態度である。

Moses Mendelssohn
1729 - 1786
Stahlstich

メンデルスゾーンは、カルシュへの過剰評価を警戒し、彼女はその天才に驕ることなく、周囲の人たちの助言、批評に耳を傾けるべきだと語っている。「雑な筆遣いでも馬の銜のちょっとした泡くらいならじょうずにまねもできるが、一本の薔薇をありありと表現するにはいたらない。そこには軽い筆遣いだけでなく、計画や意図、あるいは十分に練り上げられた全体像といったものが求められるのである。詩を書くことにばかりかまけず、もっと吟味し、できるだけ機会をとらえて、われわれがどの文学ジャンルにももっている偉大な模範と自分とを比較し、読者の前で震えるわざを夫人に教示しておくべきであった。こういう言い方は夫人の自己愛にこびるものではなかったであろうが、どんな行き過ぎたお世辞よりも夫人には有益であったはずだ。お世辞などを言っても、当然のことながら、完璧をめざす夫人の歩みを阻害するだけである。その場合、夫人の名声はさほど速くは拡がらなかったであろう。しかしそれは徐々に高まり、今その名声が徐々に低下していくのを目撃する危機にあれば、なおさらゆるぎないものとなっていたであろう。」メンデルスゾーンはカルシュが即興詩に巧みであることを認めながら、そのようなことにばかりかまけていると、ある程度は名も売

れるであろうが、いつまでたっても素人詩人にとどまるほかないと警告したのである。[24)]

カルシュは教育の五つの局面いずれにおいても例外的現象である。女の身につけるべき技能の第一である「忍耐」と「忍従」——カルシュが及第点をもらったのはこの美徳だけであった。彼女は貧乏で、教養とは無縁な層に属していた。妻として、夫からの脱出という前提をまず克服しなければならなかった。そもそも啓蒙の対象となっていたのは中流階級と教養市民層とである。ここに属する人々こそ国家社会に有為な人材となることが期待されていた。

カルシュは女であり、庶民であり、元来は文盲に属し、離婚を経験し、教育を受けなかった。文盲は大伯父の配慮と自学自習をつうじて、恣意的なドイツ語にとどまったかもしれないが、克服することができた。離婚のハンディキャップは再婚と「詩人」という職業によって克服した。詩人として名声を博するなら、教養市民層に属さない庶民であることも帳消しになるであろう。克服できなかったのは、女であることと、詩人として文壇で生きていけるだけの訓練と知識であった。にもかかわらず詩を書き、それを売って生活することができた。それを可能にしたのは「才能」なのであろうか。

---

24) Moses Mendelssohn, *Briefe, die Neuste Litteratur betreffend.* Berlin 1761 u. 1764. 272. u. 273. Brief (1764). In: *O, mir entwischt nicht was die Menschen fühlen. Gedichte und Briefe von Anna Louisa Karschin.* Hg. u. mit einem Nachwort v. Gerhard Wolf [Märkischer Dichtergarten]. Berlin 1981. S. 239-245. (付録1 資料篇 21-1)

第五章　天才と自然と教育と

天才の自覚　カルシュは詩の天才であろうか。教育の欠落を補ってあまりある詩才に恵まれていたのであろうか。カルシュは何度も神の賜物を歌っている。

安らかな心、わたしの周囲を支配し、
仕事にも不機嫌にも一日として
わたしを疲れさせないこの静かな平安、
血管を流れるこの柔らかな火、
そして、わたしのなかで考え歌うこの感情、
これらはみなわたしを慈愛をこめてはぐくまれた方の賜物だ。[1)]

生れたばかりのわたしを神は天使の手にゆだねられた。天使はわたしにムーサイと竪琴を授けた。この竪琴でフリードリヒ大王を称えるのだ[2)]。

この才能は教育のおかげではない。神の賜物であり自然の贈り物である。「教師から美しい表現の／選びかたを教わったことはなかった。」[3)]

徳を愛する友よ、真理を語る者よ――
あなたはわたしの才能をほめ、それは自然の賜物だという。
自然にはその価値があり、名誉が与えられて当然だ。
わたしの着想、表現、精神、飛躍は、自然の贈り物だ。
技藝から得たものはなく、
教師から教わったものもない。

[……]

ああ、わたしの青春時代は
奇妙というもおろかなものだ。あなたのご親切ゆえに
わたしはあなたを友人の一人に数えることができる。

---

1) „Morgen-Gedanken. 1761". In: *Auserlesene Gedichte von Anna Louisa Karschin.* Nachdruck der Ausg. Berlin 1763. Mit einem Vorwort v. Barbara Becker-Cantarino. Karben 1996. S. 23.（付録1 資料篇 14-1）

2) „An Palemon, an ihrem Geburtstage. Den 1ten des Christmonaths 1761". In: ebda., S. 217 f.（付録1 資料篇 14-3）

3) „Der Sänger bey der Heerde, in Welschland, eine Erzählung". In: ebda., S. 312.（付録1 資料篇 14-4）

ならば、うるわしき詩人よ、わたしはひたすらに
感情をこめて、自然がいかにして
わたしをはぐくんでくれたかを、
自然に敬意を表してお話ししよう。[4]

天才と教育　カルシュの天才は教育によるものではなく、神と自然からの授かり物だというのだが、このことはカルシュ自身はいうに及ばず、その周辺の人々によってもくりかえし宣伝されたメッセージであった。教育が与えうるのは詩の規則だけである。すぐれた詩は自然の恩恵である――ズルツァーが『精選詩集』の序文で主張したのは、まさしくこのことであった。「詩人は教育と規則によってつくられるのではなく、その召命と能力とを自然からのみ受けとる、とは古来よく知られたことばである。この召命を授かった者は意図や技術とは無関係にムーサイの言語を語る。しかしこの召命がなくても教育と規則とで補えるかというと、そうはいかない。プラトーンは、歌を感激によって生みだし、その歌が何であるか自分も意識しないというのが、詩人のほんとうの特性だと言っている。詩行が調和し進行するのにともない詩人は熱狂する、それが詩人に思想と像とを提供するのであって、そういうものは腰を落ち着けて見つけられるものではないというのが、プラトーンの見解である。」そして、その実例がカルシュだというのである。(傍点は筆者。)

ここにわたしたちが何篇かの精選された歌謡を世に送りだす詩人の例は、先のことばの真実を疑いようもなく証明する。意図もなければ技術も教育もなく、彼女が最上の詩人の仲間入りを果たすのをわたしたちは目撃する。自然が感激をとおしていかに作用するか、それなくしては意図も努力もいかに自然の欠落を埋めるすべがないか、この詩人をみてわたしたちは驚きを禁じえない。もっとも成功した歌謡はすべて想像力の灼熱のうちに書かれたものである。これにたいして、意図をもち、じっくり考えた末にこしらえた作品では、つねに無理強いした痕跡とムーサイの不在がかなりあらわになっている。詩人が集いにおいて、あるいは孤独な時間に、なにかの対象に活きいきと心を動かされると、その精神が突如として熱を帯びる。忘我の境地に立ち、魂の一本一本のばねが活発に動きだすと、彼女は詩作へのあらがいがたい衝動を覚え、ムーサイの吹き込む霊感のままに、驚嘆すべき速さで歌を書く。[5]

ザームエル・バウアの事典も、カルシュの項目の冒頭にこのメッセージを引用している。「詩的天才を生みだすのは自然であって技藝ではない、とは古くから言い伝えられたことばである。この詩人の例はその雄弁な証拠である。もっとも成功した歌謡はすべて熱狂のうちに書かれたものだが、落ち着いた熟慮の末に完成されたものは、例外なく詩神の不興

---

[4] „An einen jungen Freund. Im März 1763". In: ebda., S. 76 f.（付録1 資料篇14-4）
[5] [Johann Georg Sulzer,] Vorrede. In: ebda., S. VIII-X.（付録1 資料篇11）

をかなりあからさまに現している。」「[……] その直前から文藝への自然な愛着の最初の痕跡が現れた。」「この詩人の多くの作品は高い詩的天才を証明している。」[6]

娘カロリーネによる母カルシュの伝記も、自然に授けられた天才を力説し、人為的教育の弊害を指摘している。

> 彼女は多種多様な鳥と田舎の昆虫を覚えた。木や草や花の種類の違いを研究し、もっとも取るに足らない雑草もたぐいまれな記憶力を駆使してその名前を覚えてしまった。同じようにして四季の移り変わりも自然界の変化も知り、星空に親しんだ。だからこそ美しい色彩のすべてを動員して輝かしい自然のすがたを描くことができたのであり、それが、もしかすると他の追随をゆるさぬ美質をその傑作のかずかずに与えたのかもしれない。詩人がこのような牧童の暮しではなく、人の手によるしつけの幸福に恵まれ、現代の本を持っていたら、いま広く知られている高い水準にまでその才能を飛躍させることはかなわなかったであろう。ほんとうの天才は、永いあいだその才能自身にのみゆだねられたとしても、そのことによって損なわれることはないであろう。事実、あまりにも早くひじょうにすぐれた手本を示してしまうと、そのような教育法によって天才はみずから大胆に飛翔することにたいし臆病になってしまうのである。それゆえ、早くから養成された才能が大胆に躍動するほど高められるのはまれなのである。他方、放任された天才の野性の自由な力がそれを容易になしとげてしまうのは、天才の奔放な流れに翻弄されてときどき規則をないがしろにしたり、流れに任せて取りかえしがつかないことになる危険はあるものの、まだ知らない藝術の規則を恐れる必要がないからである。[7]

ここでは、「天才」が「教育」によって得られるものではないという主張を超えて、「教育」は「天才」を阻害する、「教育」が授けうる「規則」は「天才の野性の自由な力」「天才の奔放な流れ」をかえって萎縮させるとさえ語られている。天才の奔放な力は野放図になる危険はあるものの、母はさいわいにして教育の人為にわずらわされなかったがゆえに、生来の才能を開花させることができたのだ、と。

啓蒙主義から天才讃美へ　ゲーテは名高い演説のなかでシェイクスピアの天才を称え、「規則づくめの演劇」と手を切り、自然を旗印とした新しい演劇を宣言するが、これは啓蒙主義に代表される理性・悟性と規則を重んじる作劇法から、天才を讃美するシュトルム・ウント・ドラング演劇への激越な脱出を意味する。

> 規則ずくめの演劇と手を切ることに一瞬たりともためらいませんでした。場所の統

---

6) *Deutschlands Schriftstellerinnen von Samuel Baur (1790)*, a. a. O. S. 41-53.（付録1 資料篇5）

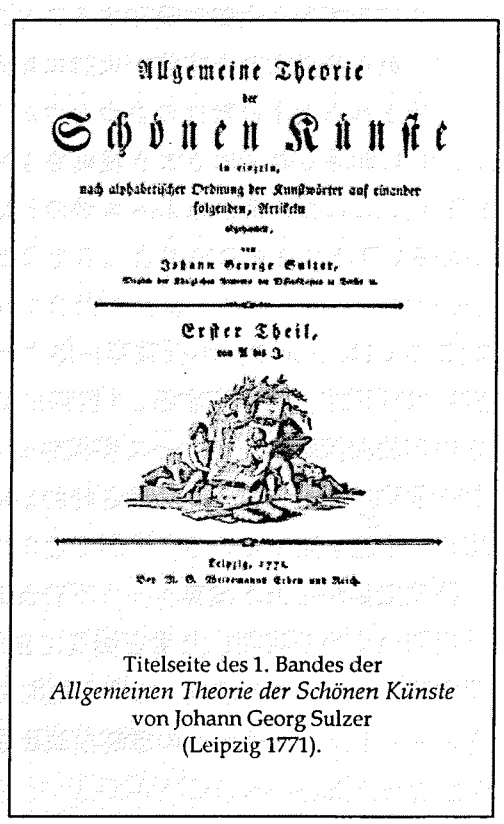
7) [Caroline Luise von Klencke,] Vorberichtender Lebenslauf der Dichterin Anna Louise Karschin, geb. Dürbach. In: *Gedichte von Anna Louisa, Karschin, geb. Dürbach*, a. a. O. S. 28 f.（付録1 資料篇6）

一はまるで牢獄のごとく窮屈に思われ、筋と時間の統一はわたしたちの想像力をしばる重い足かせのように感じられました。わたしは自由な大気のなかに飛び込み、わたしにも両手両足のあることをはじめて感じたのです。規則という君主がその穴のなかにいて、わたしたちにいかに多くの不正を働いていたか、いかに多くの自由な魂が今もそのなかで窮屈な思いをしているか、それを知ったいま、この連中に挑戦状をたたきつけ、毎日彼らの塔をこなごなにたたき壊すことを試みなかったら、わたしの心臓ははり裂けていたでしょう。[8]

みずから天才を自認する矜持は、世界史のなかに自分自身が埋もれてしまうことを拒否し、天才シェイクスピアの業績を正当に評価しうるとすれば、その評価能力がみずからの天才の証明であるとさえ豪語し、晴やかなウィリアムの聖名祝日に「魂の平静」はふさわしくない、熱狂すること、「叫ぶ」ことこそふさわしいと語る。「そこでわたしは叫びます。自然、自然、シェイクスピアの描く人間ほど自然なものはない、と。」

啓蒙主義への訣別宣言に先立ち、その両者が共存する段階について考察しておきたい。

ズルツァーの文藝理論　ズルツァーはゲーテのシェイクスピア讃美と同じころ、大著『文藝の一般理論』を出版した。このなかでズルツァーは「悟性」と「天才」との協同こそ傑作の源泉であるという思想を展開している。「天才」の根拠は「自然」にあるらしい。自然はとくに選び出した人間に、「特定の対象に格別な感受性を示す」ようしむける。すると、当の人間に「欲求」が生ずる。このような欲求がなければ、いかにすぐれた悟性といえども活動は停滞するであろう。「したがって天才には暖かい感情というものが必要である。」いや、「天才というのは、こうした感情が支配してしまった人間である」。


Allgemeine Theorie
der
Schönen Künste
in einzelnen,
nach alphabetischer Ordnung der Kunstwörter auf einander
folgenden, Artikeln
abgehandelt,
von
Johann George Sulzer,
Mitglied der Königlichen Akademie der Wissenschaften in Berlin u.
Erster Theil,
von A bis J.
Leipzig, 1771.
Bey M. G. Weidmanns Erben und Reich.

Titelseite des 1. Bandes der
Allgemeinen Theorie der Schönen Künste
von Johann Georg Sulzer
(Leipzig 1771).

では、悟性だけでもすぐれた作品は書けるのであろうか。「悟性の人間は、感情や内面の欲求がなくても、流行から、あるいは模倣の喜びから、あるいは感情の外にあるなんらかのきっかけによって、ほかの人が天才の衝動から行う仕事に巻きこまれることがある。しかし、どれだけ悟性が立派

---

8) *Zum Shäkespears Tag* (1771). Zit. nach: *Sämtliche Werke*. Jubiläums-Ausg. Hg. v. Eduard von der Hellen. 36. Bd.: *Schriften zur Literatur*. Mit Einleitung u. Anm. v. Oskar Walzel. 1. Teil. Stuttgart u. Berlin o. J. S. 3-7.（付録1 資料篇 13）

でも、真の天才のはるか後塵を拝するしかないであろう。」悟性が冷静な計画にもとづいて執筆しても、それは技術と模倣の産物だと見抜かれてしまう。悟性は秀でた感性と結びついてはじめて天才となるのだ。

卓越した作家は「異常な魂の活動」を感ずるという。それが想像力を刺激すると「感動」が生れる。「感動に襲われた詩人」は、わざわざ計画など立てなくても、最適な思想と形とをやすやすと見出してしまう。

「異常な魂の活動」は「欲望の力」として現れるか、「魂の想像力」として現れるかのいずれかである。つまり感激には「感覚」にはたらくものと「想像」にはたらくものの二種類がある。どちらもそのみなもとは、一定の対象が魂におよぼす活きいきとした「印象」にある。この対象が不分明で、想像力の飛躍する余地がなかったり、対象の作用による感情のほうが強く、対象の性質についての知識が不足したりするときには、感情が優位に立つため心は熱狂し、注意力は内面の魂に向けられる。讃歌、頌歌、悲歌が生れるのはこういうときである[9]。

これにたいして、対象が明瞭な像を結び、精神が対象の全体と細部とを明確に把握する場合、悟性と想像力とはともにその対象をしっかりとつかみ取る。天才の感激はこうして生れる。

> 今や対象は尋常でない光のなかに見られる。そのなかにまだ見たことのないものが見える。長いあいだ見たいと思っていたものが、今や努力なしに現れる。なにか高い善意の存在がわれわれの五感を鋭利にし、あるいは超自然的な方法で願わしい対象をわれわれの想像力の前においてくれた、そう信じたくなる。
>
> [……]
>
> 感激につつまれて成った作品もしくはその一部には、藝術家がその対象を見たときの豊かな生気と燦然たる光の、明確な痕跡が刻まれている。すべてのものが豊かな泉から流れ出たかにみえる。一語一語、一筆一筆が力強く、まさになすべきことをなしている。この藝術家にとっては一切が容易であった、彼は何も求めなかった、あるべきところに見出したにすぎない、その魂全体をかくも活きいきとみたしてくれた対象を自分の外に表現したくて、彼はうずうずしていたのだ、ということがよくわかる。

悟性・理性を高らかに宣言する啓蒙主義文学観は「天才」によって修正されようとしている。すぐれた作品を産みだすのに必要なものは、天才と悟性、そして両者を結びつける「感激」「感動」「感受性」「感情」である。

> 悟性と天才とをもちあわせる藝術家なら、感激に浸ることができれば、すぐにでも

---

9) ここでズルツァーがカルシュを念頭においていたかどうかはわからない。しかし、そうかもしれないと想像したくなる主張である。

創作の成功はまちがいないと信ずることができる。もう心配することはなにもないからである。自分の感覚に身をゆだねさえすればいい。表現すべきことはすべて彼の空想の世界に明瞭な像を結んでいる。意図も熟慮もなく、魂があらゆる部分を最善の方法で秩序づけ、もっとも活きいきと作り上げる。

悟性と天才の二つが必要である。両者を結びつける「感激」は対象の魅力から生れる。これらを教育によって補うことはできないのである。

あらゆる感激のみなもとは、すべての注意力を集中させる対象の強い魅力にある。だからそのために二つのものがぜひとも必要になる。申し分のない魅力をもつ対象と、藝術家の側の感じやすい鋭敏な魂とである。[……]
空想の美しさ、悟性の完璧、道徳的偉大さなど、繊細な感情が完全に欠落していると、もはや教育によっても練習によってもこれを補うことはできない。

ただし特定の対象に注意力を集中するには一定の「技術」が必要である。「感激すると、すべての注意力がとくに一個の対象に向けられているので、同時に存在する他のすべての魂の表象は闇のなかへ落ちていく。そのため、つぎには、注意力をただ一つの対象に限定する技術も、感激のための手段として必要になる。この技術は明晰かつ熱心な沈思によって得られる。」[10]「技術」と冷静な「思考」、「計画」は「感激」を遺憾なく発揮させるうえで有効であり、必要不可欠である。もしもこの「技術」が「教育」ないし「訓練」によって与えられ鍛えられるものであるなら、たしかに天与の才能は教育によって支援されるのである。このようにズルツァーの文藝理論は、啓蒙主義時代と新しい天才讃美の時代とをつなぐ橋渡しの役目を果したのである。

シュトルム・ウント・ドラング　1777年11月、ラーヴァーターは青年ゲーテを髣髴とさせる口調で「天才」を論ずるが、もはや冷静な考察とは無縁な叫びとなっている。

何が天才なのか。何が天才ではないのか。想像と概念におけるたぐいまれな明晰さの才能にすぎないのか。目に見えるがごとき認識にすぎないのか。正しく見、判断し、さかんに働き、秩序づけ、与え、拡げることにすぎないのか。異常なほどやすやすと学び、見、比較する能力にすぎないのか。それは単なる才能か。

天才は創造的精神である。
創造的精神、目には見えない高い存在から命令され、あるいは指図されたかのように、

---

10) Johann Georg Sulzer, *Allgemeine Theorie der Schönen Künste in einzeln, nach alphabetischer Ordnung der Kunstwörter auf einander folgenden, Artikeln abgehandelt,* von Johann Georg Sulzer. Leipzig 1771/1774. Zit. nach: Digitale Bibliothek Bd. 67. Berlin o. J.: Artikel „Genie" und „Begeisterung". (付録1 資料篇12)

気づき、知覚し、ながめ、感じ、考え、語り、行動し、造形し、詩作し、歌い、こしらえ、比較し、分類し、結びつけ、推論し、予感し、与え、奪う者は、天才をもっている、彼自身がなにか高い存在でもあるかのように、いや彼は天才なのだ。

[……]

人間には学ぶことも教えることもできない作用、力、行為、思考、感覚があるとき、そこには天才がある。天才、火を見るよりも明らかな、もっとも説明しがたいもの、そこにあれば感じられるが、愛のように語りえないもの。

天才と、天才のあらゆる作品と働きの特徴は、私見によれば、現れである。天使の幻のように、来るのではなくそこにあるものだ。去るのではなくすでに不在である。天使の幻のように骨髄に達する。滅びることなく人類の不滅の域に働きかけて、消え、消えたあとも働きつづけ、甘美な戦慄、おののきの涙、歓喜の蒼白をあとに残す。これが天才の作品と働きだ。

[……] 望みのままに、できるがままにそれを名づけ、記述するがよい。いつもそれは確実に存在する。学んだものでも借用したものでもなく、教えられないもの、借用できないもの、内的に独特なもの、模倣しがたいもの、神々しいもの、これが天才だ。霊感のようなものが天才だ。あらゆる民族と時代をとおしてそれを天才と称してきた。そして人間が考え、感じ、語るかぎり、天才と称せられるであろう。天才はきらめく。天才は創造する。組織化などしない。創造するのだ。[……] 11)

カルシュはこうした時代の流れをたくみに利用したとはいえないであろうか。ズルツァーは『精選詩集』序文で、カルシュをみずからの文藝理論の証人として提示した。カルシュの天才は自然の賜物である。教育は関与していない。天才は「感激」によって発動し、「歌はたちまちにして流れはじめる」。

わたしたちの詩人がその召命を自然からのみ授かったことがいかに疑いえぬ事実であるか、当人の生活状況のすべてがそのことをもっとも明確に証明する。なぜなら、そこには自然にもって生れた素質以外に、文藝への衝動を人工的に彼女のなかにつくり出せる要因が何も見出せないからである。この詩人の場合、学習によって獲得した規則が天才の代役を務めうるということを納得させられるような状況が何一つないのである。

---

11) »*Physiognomische Fragmente zur Beförderung der Menschenkenntnis und Menschenliebe*« (1775-1778), 4. Bd., 1. Abschnitt, 10. Fragment: Genie. Zit. nach: Johann Caspar Lavaters *ausgewählte Werke*. Hg. v. Ernst Staehelin. 2. Bd.: *Gott schuf den Menschen sich zum Bilde 1772-1779*. Zürich 1943. S. 198-200.

この詩人はどん底と紙一重の境涯に生れ、その教育も、子ども時代と青春時代のはじめに与えられた仕事も、卑しい出自に見合うものであった。しかし長じてなおその暮し向きは、自然のほうが彼女の遭遇するあらゆる障害よりもはるかに強力でなかったら、かならずやその精神をもっとも深い泥にまみれさせたであろうたぐいのものであった。[12]

感情　カルシュは自分が無教育であったこと、自然にのみ天才を負っていることをくりかえし強調し、強い感情に身をゆだねることが創作の発端になるという意味のことを力説する。

葡萄酒に酔いしれて地上の悦楽を歌いし君よ、
アポローンは黄金の弦を張りし抒情の調べを
われに贈らざりき。されどわが歌は歌なりき、
たましいの感じたる底より甘きしらべをわれは歌えり。[13]

笑いさんざめく一月に
愉悦こそわが務めなりき。
そっとざわめきつ歌はのぼり来れり、
多感なるこの胸のうちより。[14]

やめよ、いとしき女魔術師よ、
歌い弾くのをやめよ、
われは燃ゆ、女なれば［……］[15]

わたしが詩的に語るなどとお思いにならないでください。そう、わたしは心が告げるとおりに語ります。[16]

醜い容貌　第一自伝書簡でカルシュは、「母はわたしの顔を見たとき、わたしが陰気な額をして見上げたので、わたしにキスをするのを嫌いました」と、生れたときの顔だちについて報告している。カルシュは何度も自分の醜さを話題にしているが、ラーヴァーターもつぎのように述べている。

「こんな顔になるくらいなら詩など作らないほうがましだ。」――わたしはこのささ

---

12) Vorrede, S. XI-XII.（付録1 資料篇11）
13) „An Herrn Utz, den Verfasser der lyrischen Gedichte". In: *Auserlesene Gedichte,* S. 186.
14) „An Palemon, nach ihrer Zurückkunft aus Halberstadt. (Im Weinmonat 1761.)" In: ebda., S. 212.「一月」（原文は30日）とは、ハルバーシュタットで過ごした快適な30日間という意味。
15) „An eine Dichterin, welche das Klavier spielte (1767)". In: *Gedichte* (1792), S. 78.
16) Karsch an Gleim, Berlin, d. 8. Juli 1761. In: *„Mein Bruder in Apoll",* Bd. I, a. a. O. S. 20.

やかな骨相学をつうじて以前よりもはるかに寛大でやさしくなった。そう。「むしろこんな顔をしていても詩を作ったほうがましだ。」——美にはどれだけ異議申立をしても、やはりこの顔が精神にあふれているのはまちがいのないところだ。しかも異常なほど明るく輝く、気持ちのこもった予言者の眼光だけではない——いわゆる醜い鼻もだ。とくに口——その他の筋肉と影の作用もすべてそう。忘れてならないのは、男のような高い額から骨ばった顎までとどく巻き毛の輪郭全体——それ以外にも忘れてならないところがある。とくに鼻と下唇とのあいだには、いわくいいがたい豊かな精神が漂っている。ポエジーがポエジーとしてこの顔の両眼にいるべき座を占めているように思われる。——そのほか頭全体のかたち、少なくとも額と鼻は、むしろ冷徹に探求する思想家のそれだ——そして、これはだれにも判らないのだが——もしかするとこの人、カルシンは、詩人よりもむしろ哲学者にもなれたであろう。　　J. C. ラーヴァーター[17]

娘は母の容貌を弁護する（傍点は筆者）。

母はこの子を 1722 年 12 月 1 日に産んだ。詩人みずからの記述によれば、生れたとき醜い子だったという。額のしわだらけの皮膚が、顔に深く陰気にくぼんだ両目の上まで垂れ、やせこけた顔にはうっとうしい気難しさが現れていた。体も顔の皮膚とまったく同じ黄色で、しわくちゃだった。上のかわいい子どもたちに慣れてしまっていた母は嫌悪の情をおぼえて生れたばかりのいきものから目をそむけ、こんな醜い子はどこかへやってもらいたいものだわ、水車の川にでもほうりこんでよ、と、思わず辛辣な冗談を口にした。他方、ぜひともここに書いておきたいことがある。詩人はその後けっして醜く育ったわけではなく、また、もしも身体と表情とをうまくあやつるすべを心得ていたら、死ぬまで美人でとおったであろうと思われることである。彼女は中背の、均整のとれた上品な立ち姿をしており、美しい、ずっと変らない顔色で、淡い褐色の髪と、これ以上望めないほど美しい、いかにも人間らしい額をもち、そこにはまさしく偉大な精神の光が宿っていた。輝きにみちあふれ、ひじょうに明るく雄弁な目、つねに赤い唇、上機嫌のときは表情に心から陽気な気分があふれていた。しかし、たいていその顔を支配していた眼光にさらされると、ひとは耐えがたい印象を受けた。しばしばある瞬間に気が散ることはあるが、それでも思考やふるまいが逸らされないようなとき、相手になるのはむつかしかったであろう。[18]

晩年のカルシュを苦しめた娘との確執にもかかわらず、その娘の母を見る目は慈しみに

---

17) *Physiognomische Fragmente, zur Beförderung der Menschenkenntniß und Menschenliebe,* Leipzig u. Winterthur 1777, 3. Bd., Abschnitt 11, Fragm. 14, S. 315. Zit. nach: Anna Louisa Karschin, *Gedichte und Lebenszeugnisse.* Hg. v. Alfred Anger. Stuttgart 1987. S. 3.

18) Vorberichtender Lebenslauf der Dichterin Anna Louise Karschin, geb. Dürbach. In: *Gedichte* (1792), a. a. O. S. 12 f.（付録 1 資料篇 6）

あふれているように思われる。娘は評判の悪い母の額に叡智の宿りを見、鋭い眼光に人は射すくめられるような感じを受けたと述べている。

カルシュ当人はしかし醜い容貌をあえて公言してはばからない。「わたしは美人だといわれたことなど一度もありません」と第一自伝書簡に書いている。「エーザー氏が女詩人の肖像画を描いたときパーレモンに」(1761年12月16日)では、画家が魅力のない口と頬をわざと無視しながら、「わたしの目にわたしの心を」見つけ、そこに「精神を発見」したと歌う。

彼女のために魔術をつかうこの画家の名を教え、
こう告げてほしい、この歌姫は
外側の魅力には乏しいが、
甘美な感情は豊かであると。

繊細につくられた心をもって
女はかつてサッポーと呼ばれた。
ムーサイにめでられ、
友を裏切るようなことはなかった。[19]

Anna Louisa Karsch
Gemälde von Carl Christian Kehrer, 1791

この詩が書かれたのと同じ年、1761年5月14日付のグライム宛書簡には、さながら不美人であることが、自然から与えられた才能の代償であるかのごとく、「でも美人のサッポーを想像なさらないでください。いえ、詩人ような陰気な額、無口な二つの青い目、口づけを受けるためにグラティアたちの唇にならってつくられたらよかった口、しかしわたしの全体をご覧ください。わたしの心を。心については自然は親切でした。詩人にふさわしく心は感情そのもの、友情そのものです」と、むしろ胸を張って書いている風情がある[20]。カルシュは、「深刻にしわの刻まれたその額」は考えるために神の手で造られたものだと天使に語らせる。すると、「そなたに預けよう」と神は天使に言われた。天使はカルシュにムーサイと竪琴とを、すなわち詩の才能を恵み与えた[21]。醜い容貌のおかげで天才を賦与されたのだと言わんばかりである。

天才は教育によって与えられるのではない。教育の人為は規則を教えることはできるが天才をつくることはできない。カルシュが自然児として育ったのはその天才にとってさいわいであった。カルシュは即興詩を得意とした。その多くはなにかの機縁、あるいは特定

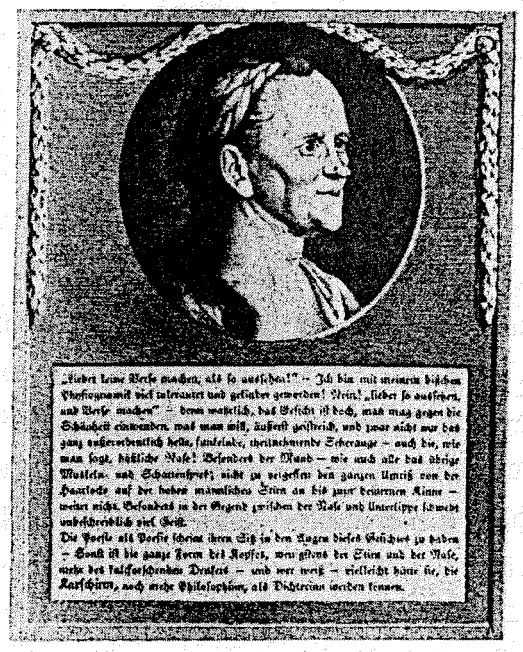
---

19) „An Palemon, als Herr Oeser das Bild der Dichterin entworfen hatte. (Den 16ten des Christmonaths 1761.)" In: *Auserlesene Gedichte*, a. a. O. S. 230. (付録1 資料篇3)

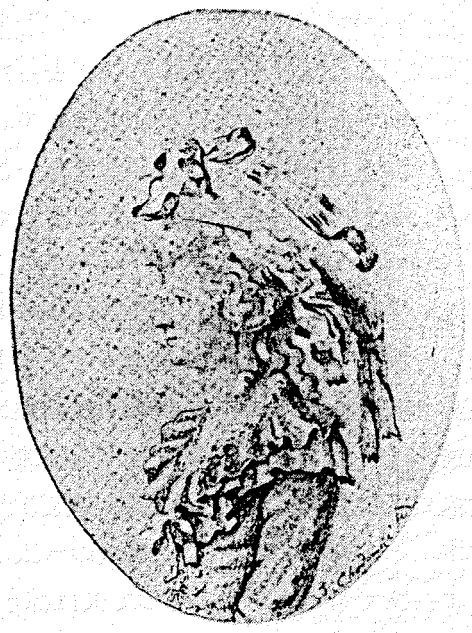
20) An Gleim, den 14. Mai 1761. In: *„Mein Bruder in Apoll"*, Bd. I, a. a. O. S. 7. (付録1 資料篇15-2)

21) Siehe: S. 38 der vorliegenden Abhandlung. „An Palemon, an ihrem Geburtstage. Den 1ten des Christmonaths 1761". In: *Auserlesene Gedichte*, a. a. O. S. 217 f. (付録1 資料篇14-3)

の人物に寄せて書かれた「機縁詩 Gelegenheitsgedicht」である。そこには詩の契機と対象が存在する。カルシュは対象に「熱狂」し「感激」する。その熱狂と感激、灼熱のまにまに、さながらペンがひとりでに動くかのように詩が書かれていく。これこそ天才のあかしである。が、カルシュの容貌はその天才の代償なのだ。たしかに醜い容貌は余計な話題である。が、容貌にも現れた洗練されない野生、教育に損なわれていない天性こそ、カルシュの存在理由なのであった。カルシュは啓蒙主義運動のもっとも重要な手段であった学校教育を受けることがなかった。読み書きが実際にはどの程度の水準であったか定かではない。少なくとも文藝の規則にも、ドイツ語の書法にもうとかった。カルシュ批評が賛否相半ばした原因はここにある。



Johann Caspar Lavater über das Antlitz der »Louisa Karschin« im 3. Bd. seiner *Physiognomischen Fragmente, zur Beförderung der Menschenkenntniß und Menschenliebe*, Leipzig u. Winterthur 1777. Absch. 11, Fragm. 14, S. 315, zum gegenüberliegenden Kupferstich von Johann Heinrich Lips (Taf. 88E) nach einer Zeichnung von Daniel Chodowiecki.



Anna Louisa Karsch.
Zeichnung von Daniel Chodowiecki.

第六章　フリードリヒの詩人と矜恃

Ist Sie die Poetin ?

人生の秋　カルシュは人生の頂点を迎える直前、すでに「人生の秋」を感じとっていた。しかしそれは豊穣の秋、恵みを刈り取る充実の季節であった。

秋がすべての装いをまだ持ち去らぬうちに、
来てください、今ならまだ花を摘むのに間にあいます。
それと同じように、幸福は頑固一徹をつらぬいた末
わたしの竪琴を飾るべく、いま月桂樹を折るのです。

秋の日々を迎えて、過ぎ去った青春の喜びが
わたしにほほえみかけてきます。
お友だちに訊いてごらんなさい、きっとこうおっしゃるでしょう、
今わたしは侯爵夫人をさえうらやんではいない、と。[1]

先に引用したグライム宛書簡（1761 年 5 月 14 日付）にも、「わたしの人生の春、朝は、悲しい雲に覆われたまま過ぎていきました。人生の真昼に垂れ込める雷雲の晴れるためしはありませんでした。今わたしは秋を迎えています。幸運はうれしい勤勉の果実を両手一杯運んでくれます。勤勉はどんな労苦のさなかにもわたしを元気づけてくれました。友は幸福のもっともすばらしい贈り物です。どんな富とも交換しません。皆わたしの心の偶像です。そのなかでも先生は筆頭の一人でなければなりません」と、おとめのような恋心にはずむ筆で書いている。かつて夫は稼ぎもせずに、ただカルシュを支配するだけであった。心配事はすべてカルシュが引き受けた。「甘美な慰め手の眠り、預言者のような夢は／日ごとに新しい苦難の抑圧を軽くしてくれた。」「昼間は辛かった。それよりはましなやさしい夜は、／眠っていても考え目を覚ましていた／魂に、喜びを貸してくれた。」夜は神の御手に守られているかのように、ぐっすりと眠った。

わたしは神に過分な幸福を頼んだことはない。
堪え性もなく、わたしを抑圧する心配事を
取り払ってくださいなどとお願いしたこともない。そう、
わたしは捨てられていた、神がわたしの心労を
霧のように晴らしてくださるまで。

---

[1] „An Herrn Utz. (Zu Halberstadt den 8ten des Weinmonats 1761.)" In: *Auserlesene Gedichte,* S. 189.

あなたにもあの穏やかなまどろみがありますように、
貧乏なわたしに親切をほどこしてくれたまどろみなのだから。[2)]

神に過分な幸福を頼んだことはなかったというカルシュは、他方で一歩一歩、人生の頂点に向かって登りつつあった。「すでにわたしの手中にある幸福は／わたしの精神には小さすぎる。／わたしの精神のために、墓を越えて／幸福と安らぎはもっと多くなければならぬ。」もちろん生活難はあいかわらず解消されなかった。戦中戦後のベルリンは物価高にあえいでいた。しかしカルシュは幸運を手中に収めつつあったのである。過去の貧乏生活と今の栄光と——カルシュの心は揺れていた。

わたしもかつてはすり切れた服を着て歩いていた。
子どもたちはどもりながらパンがほしいと言った。
夜、はっと夢からさめてため息をつき、
あしたの苦労を夢に見た。

今わたしはたびたび十年前の春のことを思い出す、
そしてわが身に起ったことに驚いて
胸がいっぱいになる。目の一粒の涙は
問いかける、神よ、わたしはこれに値する人間でしょうか。[3)]

大王との会見　頂点はさらにこのあとにやって来た。1763年8月11日午後5時、カルシュはフリードリヒ大王を謁見する栄誉に浴する。場所はサンスーシ宮、鏡の間であった。カルシュはこのときの様子を、後日グライムにしたためた手紙にややくわしく報告している[4)]。

8月11日、午後5時、わたしはダルジャン侯爵のもとに呼ばれました。侯爵と、王の朗読係であるフォン・カット氏が紹介してくださることになりました。数日前、王女様がたが前庭でダンスをなさる前におられた大理石の大広間に、わたしは立っていました。何万という明りが広間をあかあかと照らしていました。ここに立ち、全ヨーロッパはおろかインドさえ交誼を得たいと願う君主、偉大な君主を待ちました。心臓が突き上げるように十二回も打ちましたが、十分な時間がありましたので、王が扉を開けられるまでに自分の生命力をきちんと整えることができました。

---

2) „An den Dohmdechant Freyherrn von Spiegel, zum Diesenberg, als er gesagt hatte, daß er schlaflose Nächte hätte, und bey Lichte nicht gut lesen könnte. 1761". In: *Auserlesene Gedichte*, S. 278-281.

3) „An Palemon, der Spaziergang auf dem Fürstenwall. (Zu Magdeburg im kalten April 1762.)" In: ebda., S. 215 f.

4) An Gleim, den 15. August 1763. In: *„Bruder in Apoll"*, Bd. I, a. a. O. S. 182-185.（付録1 資料篇15-4）

Die Audienz von Anna Louisa Karsch bei Friedrich II. am 11. August 1763. Stich von Daniel Chodowiecki, 1789.

厳かな誇りをもってそう前置きすると、カルシュは大王との問答の一部始終を再現する。冒頭、王は、「そのほう詩人か Ist Sie die Poetin ?」と質問した。「はい、陛下、そう呼ばれております。Ja ! Ihro Majestät ! Man nennt mich so !」

王は定冠詞をつけて職業を訊ねた。おまえが話題の詩人か、という含みであろう。人称代名詞の三人称単数形を二人称として用い、職業に定冠詞を付するのが、ほんとうに国王のことばとして品位のあるものかどうか、あるいは、このような語りかたが国王の確かな自覚にもとづくものであったかどうかという疑問はぬぐい去れない。フリードリヒのドイツ語はまことに覚束ない水準のものであり、フランス語のほうが、考えるうえでも語るうえでも使いやすかったことはよく知られた事実である。

しかし、たといこれが自覚的に語られたドイツ語であり、国王のことばのなかに多少の揶揄や傲慢、むら気といったものがまじっていたとしても、カルシュのこの報告の厳粛な気分と、謁見のあとの興奮状態とからみて、少なくとも詩人が大王のことばをからかいと解した気配はない。ドイツ文学を軽蔑し、しかも見たことも聞いたこともない「醜い容貌」の中年女流詩人との短時間の会見である。大王の生涯のほほえましいエピソードの一つというほどの重みもない時間つぶしか、せいぜいのところ貧しい詩人への慈悲心をアピールする絶好の場として利用できるという政治的計算があってのことだとしたら、国王がカルシュをこばかにして、さながら珍しい動物でも見るかのように語りかけたと推測してはならない理由はない。しかしこのあと国王が退出すると、カルシュは「よろよろとよろめくように広間を」出た。途中レントゥルス将軍に会ったが、「どんなことを申し上げたか覚えてはおりません」というほど陶酔していたのである。事実その二日後の手紙でもグライムにこの事件を再度報告し、大王が年金の支払と住居の建築を約束してくれたことを自慢げに書いている。

> 驚かないでください、グライム様、友人の常軌を逸した幸運に驚かないでください。きょうその友人のもっとも偉大な、神のごとき父上フリードリヒが証書にご署名なさいます。ご自身の歌びとのために、彼女が自分で選んだ家をシャルロッテンブルクにあてがってくださり、200 ターラーの年金と燃料費とを下賜されることになりました。いかがですか大切な友よ、いかがですか、わたしのただ一つの希望をかなえることを運命は思いついたのです。自分だけのささやかな家はわたしがいちばん望んでいたものです。

国王が願いを温めていた一人の女の空想をよしとされたなどといったら、みな仰天するにちがいありません。[5]

Johann Wilhelm Ludwig Gleim
1719 - 1803
Zeitgenössischer Punktierstich

ところが、10月24日にクリュニツ博士から宮中参内の招請状が届くと、もう一度8月の謁見の風景を長い詩に歌ったその末尾に、「フリードリヒが匠の技に／糸杉の家を建てさせられても、／サッポーの魂が驕ることはありません、／なぜならサッポーにとっては友情だけが甘美だからです」と書いた[6]。友情こそいちばん大事な宝物である、だから家を建ててもらってもわたしは傲慢な人間にはならないというのである。カルシュは約束が守られないことにいらだちはじめる。約束は十年たってもなお果されなかった。

先だってポツダムにまいりましたら、クヴィントゥスが、国王にお約束を思い出していただけるよう働きかけるべきではないかと、ふたたび助言してくださいました。それどころか王がおことばを思い出されるまで、四週間に一度は手紙を書きなさいとまで言われます。[……] 王がわたしとお話しになってちょうど十年になります。いい機会ですから、王に手紙をしたため、それをフォン・クネーベル氏をつうじて侍従のテシェンに渡していただきました。王が出立される二、三日前のことです。それから一週間前の日曜日にようやくこの方々はわたしにいたずらをしようと思いつきました。王がわたしの手紙をご覧になったとは考えられません。しかしご覧になろうがなるまいが、どうでもいいことです。

やがて宮中から封書が届く。カルシュはつづけてこう書いている。

要するに郵便配達された書付を受けとりました。ドイツの詩人A・L・カルシン様と書かれています。宮廷の印璽が捺してあり、いちばん下に、「御下賜金2ターラー在中」と書かれていました。帰宅したとき開封されていることに気づきました。わたしは平静を保ち、翌朝、宮廷尚書殿につぎのような文章を書きました。

二ターラーなど偉大な国王の贈られる金子ではありません。

このような贈り物でわたしの幸福は増えません。

---

5) *„Mein Bruder in Apoll". Briefwechsel,* Bd. I, a. a. O. S. 185 f. 1763年8月17日付。（付録1 資料篇 18-1）

6) „Aufforderung an die Dichterin von Herrn Doktor Krünitz. [Als in Sanssouci der König mit ihr gesprochen hatte.] Den 24. Okt. 1763." In: *Gedichte* (1792), a. a. O. S. 182; „Antwort der Dichterin. Geschichte der Unterredung mit dem Philosophen zu Sanssouci." In: *ebda.*, S. 183-187.（付録1 資料篇 18-2 / 18-3）

しかり、これはわたくしをいささか貶めるものです。
ゆえにご返却いたします。

お金を戻して封印し、封筒に、「配分金2フリードリヒスターラー同封」と書きました。同時にクヴィントゥスにも手紙をしたため、一部始終を説明し、尚書からの手紙を添えて、これが陛下のご命令によるものかどうか訊ねてほしいと伝えました。おそらくそうではないでょう。手紙の宛名はまちがいなく例の廷臣、先日わたしがその奥さんと仲直りをした例の廷臣のさしがねでした。二度とこんな金額は受けとりません。結局まともな報いはなかったわけです。[7]

約束は果されないまま、さらに十年が経過した。『カルシュ詩集』によれば1783年1月に書かれたという「受領書窓口」宛の詩にはあからさまないらだちが感じられる[8]。大王は3ターラーを与えよと命じたようだが、「しかし3ターラーでは／ベルリンで大工が／わたしに終の住処を建てることはできない」。国王はわたしを飢えさせるのだ、と。

1786年、フリードリヒが年金支払の約束を果すことなく崩御すると、翌1787年、新国王フリードリヒ・ヴィルヘルム二世は先代の約束をようやく果したのである。カルシュは、

家、わたくしのために家の礎石がおかれ、
建てられ、飾られる、
さながらムーサイの神殿のごとく——
それを目のあたりにすれば、
老い衰えたこの胸も
心の衝動を容れるには狭すぎることでしょう。
心は幾日も燃えつづけ、
至福のあまり病に倒れ、
喜びの美しい死をとげるかもしれません。
いまわの際には感謝の鼓動を打ちます。[9]

Friedrich Wilhelm II. König von Preußen
1744 - 1797
Lithographie

と狂喜した。しかしカルシュが入居したのはさらに1789年春のことである。大王の約束から実に二十数年を経過していた。

詩人としての矜恃　この間、カルシュはいわば詩人としての矜恃を守り、適当にあし

---

7) *Die Karschin. Friedrichs des Großen Volksdichterin. Ein Leben in Briefen.* Eingeleitet u. hg. v. Elisabeth Hausmann. Frankfurt a. M. 1933. S. 266-267. 1773年9月4日付、グライム宛書簡（付録1 資料篇18-4）。韻文の箇所は付録1 資料篇4にも引用されている。

8) 巻末の付録1 資料篇18-5がその全文。エリーザベト・ハウスマンによれば、この詩は同年5月17日付書簡に挿入されている由である。同資料の脚注を参照されたい。

9) „Versuch einer Danksagung an König Wilhelm den Vielgeliebten. Im Februar 1787." In: *Gedichte* (1792), a. a. O. S. 235 f.（付録1 資料篇18-6）

らっておこうとする王宮の意図を拒絶しつづけ、新築家屋によってかさんだ借金に悩まされることになるとはいえ、とにかく約束をきちんと果させたのである。

詩人の矜恃はあの大王拝謁の記録にも如実に現れていないであろうか。大王「教育を受けたことがないとのことだが」——カルシュ「わたくしの教育はこれ以上ない粗末なものでした」。では、だれのおかげで詩人になれたのだ、この王の問いにたいして、「自然のおかげです。それと陛下のあまたの勝利のおかげでございます」と、きっぱりと答えている。この簡潔な返答はまさしくカルシュの生涯の要約ではないか。韻律の知識の有無を大王に訊ねられても、いや、耳で聞けば韻律のことは自然に習得できる、要するに自然に教えられたのだと言う。この、人生の要約をまちがいのない真実だと認めたのは、ほかでもないカルシュ自身である。すでに引用した本人の手になる自伝草稿 (15ページ以下参照) がこの「要約」をくりかえしているからである。「この女は戦争終結後、不滅の君主ご自身に向って、わたしは自然とフリードリヒの勝利のおかげで詩人になりました、と答えた。」[10)]

詩論にたいする無知を隠そうともせず、大王の戦勝を歌いつづけた「フリードリヒの詩人」であることへの誇りは、大王の面前であるだけになおさら、臆することのないカルシュの性格をますます際立たせる。そして夫は大王の軍隊から脱走しましたと語るとき、臆さぬ剛毅なカルシュの面目躍如たるものがある。

冒頭、大王は「そのほう、詩人か」と訊ねた。「はい陛下、そう呼ばれています」とカルシュは答えた。職業に関する単純な問答にはなっていない。カルシュは、「はい陛下、そうです」「わたしは詩人です」と、答えることもできたはずである。したがって、この返答がカルシュの誇りから発せられたものであることは以上の説明から明らかであろう。「そう呼ばれている」とは、世人がカルシュをれっきとした詩人として認めているという意味である。世に名高い詩人であり、それゆえだれもが認める一級の詩人である、大王ともあろうものがそんなこともご存じないか。ご存じないのであれば今からご説明いたしますので、よくよく肝に銘じておいていただきたい。なるほど極貧の境涯に生れ、まともな教育さえ受けられなかった、啓蒙の時代に乗り遅れ、見捨てられた牧童であった。しかし、自然はわたしに詩の天分を授けた。それだけでは詩は書けなかったであろうが、大王のいさおしはわたしに詩の題材を与えてくださった。だから、わたしという詩人は「自然」と「大王」によって鍛えられたのだ。国王にたいする堂々とした受け答えと自己主張を読むと、それどころか、「地位や勲章は国王にも授けられましょうが、天才は自然のたまものであり、いかに国王とてそれまでも人に与えられるものではありますまい」——ベートーヴェンなら

---

10) 付録 1 資料篇 4 を参照せよ。「人生の要約」はズルツァーの『精選詩集』序文にも、「これら天才の発露は、詩神が彼女のうちにともした炎もなかば押しつぶされた果てに、その小さな火花として残るにすぎなかった。しかしフリードリヒの勝利がこの火に力を授け、ついにそれは爆発を阻害していたものを打破し、激しく燃え上がらせた」というかたちで力説されただけでなく、ザームエル・バウアのカルシュ伝もズルツァーのこの文章をそのまま引用している（付録1 資料篇 11、5)。カルシュの詩はフリードリヒ讃美にみちあふれている（そのなかのいくつかを付録1 資料篇 16 に引用しておいた)。年金と住宅の約束を大王が失念したこととはかかわりなく、カルシュは詩人となってこのかた「フリードリヒの詩人」でありつづけたのである。

さしずめそんな表現になるであろうか——とさえ言いたげにみえる。——カルシュが不遜と紙一重の誇りをこめて言いたかったことは、おおよそ以上のようなことではなかったであろうか。

要約　カルシュは学校教育も受けず、文学修業も経験せず、総じて啓蒙のプログラムにすくい取られることはなかった。そのような詩人がこの時代に名のりをあげるためには「天才」讃美の時代を利用するしかなかった。いや、そのように書けばカルシュの気持ちを邪推することになるかもしれない。少なくともカルシュを世に売り出そうとした周囲の男たちは、さいわいにして「天才」讃美の風潮をいち早く利用することができたとでもいえば穏当であろうか。

しかし自然の授けてくれた「天才」をいかに宣伝しても、「天才」だというだけでは文学作品の未熟ないし未完成は克服できない、読者を納得させられるほどの作品は書けない、職業作家としての自覚に欠けた素人だ、そういうメンデルスゾーンやヘルダーの厳しい批評をかわすことはできない。世は啓蒙主義の時代である。ならばその時の運を利用して教育を受け、まずは修業を心がけてはどうかという声も聞える。「理性」の鍛錬は詩人をも自立させるであろう、と。

こうした批評は当然カルシュの耳にも入っていた。詩人として後世に名を残すためには批評家をもだまらせるほどの詩の名手とならねばならない。が、おそらくカルシュの教育はすでに手遅れであっただろう。ベルリンに出て自他ともに認める詩人となったときにはすでに中年になっていた。人生の秋を迎えていたのである。今さら「正規」の教育を受ける時間の余裕はない。

その意味での「未成熟」を脱して「自立」できない者にとって、「天才」はまことに好都合な合言葉であった。「天才」讃美の風潮はカルシュを助けたのである。未成熟でも神童である。神に遣わされたかのごとき一頭の牛は彼女を書物に導いたではないか。そのような稀有な人間には神意が現れるのだ。こうしてカルシュは神話化、伝説化される。啓蒙が「理性」を対象とした運動であったとすれば、彼女が何度も力説している感情、感覚、感激、感傷こそ「天才」の証明である。それは恩師ズルツァーの本にも書かれているではないか。「天才」は灼熱のうちに、無意識裡に、そして才能のおもむくがままに作品を仕上げてしまうのである。だから作品にはときとして論理の飛躍や文章の破綻もみられはする。しかし学習に基礎をおく職業作家にはとうてい太刀打ちのできぬ輝かしい論理の「飛躍」も、「天才」には許されるのだ。

カルシュは、身分卑しき者の社会的上昇、出世の可能性を実証した。無教養は最後まで彼女を苦しめたであろうが、「天才」が「抜け道」となった。無教養からでも出発は可能であり、新しい時代の道しるべとなりうることを示したのである。が、彼女の周辺に教師がいなかったわけではない。『精選詩集』は、グライム、ズルツァー、ラムラーらの協力を得て、おそらくは彼らのかなり熱心な添削の末に出版されたものである。

ドイツ女性文学史にカルシュの占める位置は重い。多くの人が指摘するとおり彼女は初めて自活できた女流詩人である。身分の壁を突破し、しかも女性であるという不利な立場を超えて名をなしたおそらくは最初の女流詩人でもある。かくまでも無教育でありながら多くの読者を獲得した事実も特筆にあたいするであろう。

しかし啓蒙の埒外にいたはずの女性、その日暮しの貧乏人が、たぐいまれな詩才を駆使して生き抜いていくために利用できるものをとことん利用したとしても、非難されるべきことがらではない。彼女は教育の欠落を「天才」によって補い、啓蒙から漏れたことを「天才」によって補償し、未成熟の開き直りをやってみせた。男を利用した。時代の風潮を敏感に察知してこれを活用した。上げ調子のプロイセンのためにフリードリヒの戦勝歌を書いて売った。「天才」だけでは食べていかれない。彼女は愛国詩人となったのである。さいわいにしてフリードリヒは二重の意味で彼女の解放者であった。一つは、シュレージエンがプロイセンに併合され新しい法が導入されたことによって、カルシュは粗暴な夫から自由になった。フリードリヒは彼女をシュレージエンで最初の離婚婦人にしたのである。離婚婦人は世を渡るうえで不都合であったが、さいわい詩人はいわゆる職業ではなかった。フリードリヒを題材として愛国詩人を演ずれば、詩はある程度売れたはずである。粗末な刷り物はおそらく貴族がこれをまとめて購入し、社交の場で配布されたのであろう。つまりフリードリヒは彼女を生活苦から解放したのである。いや、最後にはベルリンに新築家屋を与えられ、ついでに名誉を授けられたことになろう。

最晩年　新築住宅に入居し、寄宿舎に入れていた娘を引き取るや、たちまち母と娘との戦いが始まった。娘は母が父を捨てたのだといって責めさいなんだ。母は抗弁したが詮なきことであった。やがて娘が詩を書きはじめると、たちまち母は自分が時代遅れになったことを痛感した。恋いこがれたグライムと文通を始めた娘に、母は激しく嫉妬した。栄光の末に書かれたカルシュの「遺言」は、最晩年のまことに痛ましい記録である[1]。

Caroline von Klencke
1750 - 1802
Gemälde von Frisch 1786

やがて家を出た母親はシュレージエンに知人を訪ねる。が、まもなく病を得、ベルリンの「自宅」に戻される。カルシュはそのわずか十日あまりのちに世を去った。まことに壮絶な生涯というべきである。

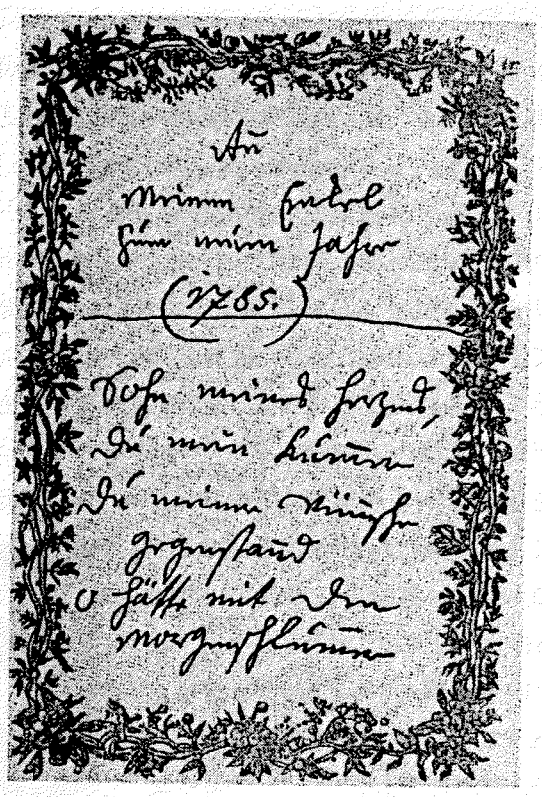
母の死後、その供養のためでもあるかのように、娘は母の遺稿集を出版した。その第二版にたいするヘルダーの批評は温かい。かくも困難な人生を歩んできた詩人に、職業詩人の熟練を求めるのは筋違いというものである。ここには傑作が含まれている。それを鑑賞すべきだ。願わくはさらにもう一冊の遺稿集が出版されんこと

---

1) 付録1 資料篇19を参照せよ。また、カルシュの晩年の様子を知るよすがとすべく資料20をも参照せよ。

を。なぜなら、集に収められなかった美しい歌がまだまだあるにちがいないからだ。とくに1762 年以降の詩に傑作がそろっている。ヘルダーの批評は残念ながら現代においてなおそのまま通用する。カルシュ詩集は依然として不完全なまま放置されているからである。

ヘルダーの炯眼は尊敬にあたいする。


An
meinen Enkel
zum neuen Jahr
(1785.)
Sohn meines Herzens,
Du mein Kummer
Du meiner Wünsche
Gegenstand
O hätte mit dem
Morgenschlummer

An
meinen Enkel
zum neuen Jahr
(1785.)

Sohn meines Herzens,
Du mein Kummer
Du meiner Wünsche
Gegenstand
O hätte mit dem
Morgenschlummer
[Der Gott Erleichterung gesandt]

付録1　資料篇

1. アンナ・ルイーザ・カルシュの自伝書簡

☞ *„Mein Bruder in Apoll". Briefwechsel zwischen Anna Louisa Karsch und Johann Wilhelm Gleim.* Hg. v. Regina Nörtemann. Bd. I: Briefwechsel 1761-1768. Göttingen 1996. S. 342-363. カルシュ最初の詩集『精選詩集 *Auserlesene Gedichte*』序文のために、哲学者ヨーハン・ゲーオルク・ズルツァー（1720-79年）の求めに応じてしたためた四通の自伝書簡。書簡の日付はズルツァーが記入したもので信頼できない。実際には、はじめの三通は1761年秋に、四通目は1762年9月初旬にしたためられたと推定されている。小見出しは筆者による。

1-1. 第一の手紙（1762年9月1日付）

故郷　わたしの歴史をおたずねの由、それにお応えしたいと存じます。ただ、重大事の物語など期待しないでください。まだゆりかごにいたころ、祖先のことも財産のことも歌ってもらったことはありません。祖父はいなかの小屋住いで、律儀な男という肩書で満足していました。慈悲深い領主さま［フォン・ケスリッツ］からも、周辺の十五を超える村からも、シュレージエン随一のビール作りという讃辞までもらっていましたので、この誉れだけで祖父には十分でした。のちにわたしの父となる息子にほかでもないその方面の知識を授け、息子も父親に負けないほど有名になりたいと、麦芽の調合にますます精を出しました。

両親　母と知り合ったとき少年時代は終りました。母はかつて役人[1]だった人の孫娘で、とても心の広い在地貴族の夫人の手で育てられました。母はそのお礼に、十（とお）のときから二十七になるまでこの夫人のおそばに仕え、よけいなことには家政婦頭と料理人の地位まで拝命しておりました。三つの官職を同時にというわけです。父が母をこの多くの官職から解放したとき、夫人は嫁入り支度までしてくださいました。祖母は貧しく、まだ七人の子どもをかかえる未亡人だったので、そんなことはとてもできませんでした。もっとも祖母にしてみれば、娘がしあわせになると信じていい理由がありましたし、それは間違っていませんでした。父はある荘園[2]で宿屋兼料理屋をやっていました。領主さまは母のことを思いやり、父のためにいろいろと便宜を図ってくださいました。父は旅人が注文する飲み物を自分でこしらえ、腹をすかした旅人に食事を提供するために料理をしました。母も父の横で立ち働いていました。なにをするにも父は母に手を貸しました。母はよくわたしに、おまえが生きていられるのは、いちばんすばらしい、いちばんやさしいおとうさんのおかげだよと申しました。

出生　罪はないのですが、わたしは長男である兄を母の乳房から追い払ってしまいました。兄はわたしが［1722年12月1日に］生れたときにはもう死んでいませんでした。母はわたしの顔を見たとき、わたしが陰気な額をして見上げたので、わたしにキスをするのを嫌いました。わたしは母に愛されたことがありません。思うに、わたしが最初の数年間、自分の存在というものを自覚せずに過したのは、このようにほとんど注意を払ってもらえなかったことに原因があります。春が六回ほども過ぎたでしょうか、祖母の兄[3]という人が妻を亡くした寂しさを慰めようと、わが家を訪ねました。向こう一年ほど妹を自分の飲食店におきたいというのでした。母も家政じょうずな年寄りにいてもらわないとやっていけなかったのですが、頼みを断るわけにはいきませんでした。出発することが決りました。おじさんはある日わたしの教育方針について訊ねました。「あら」と母は言いました、「このじゃじゃ馬にも勉強してもらわないといけないけれど、何を教えても右から左なんです」と。おじさんは、飲食店も騒々しいし、監督も教える者もいないので勉強は無理だと説明しました。おじさんはわたしも連れて出発しました。

---

1) 原文はAmtmann。歴史学の厳密な定義は別にある。

2) わずかな戸数のこの荘園は「デァ・ハンマー」と呼ばれ、ニーダーシュレージエンの国境沿いシュヴィーブスの近くにあり、フォン・モーゼ家の領地であった。

3) マルティーン・フェトケ、カルシュの祖母クーヘルの兄。

大伯父　住いはポーランドにありました。小さな家で静かに余生を送り、若いころ役人をしていて蓄えがあったので、それで生活していました。おじさんの授業の一つひとつのことばには深い愛情のこもった魂が宿っていました。それでひと月もたたないうちに、わたしは考えうるかぎりたくみにソロモンの箴言［旧約聖書］をおじさんの前で朗読しました。わたしは読んだものについて考えることを始めました。そして名状しがたい熱望に燃えていつも本にかじりつき、わたしたちの宗教の諸原則をそこから学びとりました。

自然と読み書き　律儀なおじさんは心のうちでそれを喜びましたが、ときどきわたしを本から引き離し、一緒にちょっとした雑木林や花畑を歩きました。どちらもおじさんの土地で、そこはわたしと自然の美しさについて語り合うきっかけをおじさんに与えました。わたしは読んだものを全部おじさんにくりかえし、とても歯が立たない、理解力を超える箇所について説明をねだりました。おじさんはわたしの解釈者となることに満足していました。わたしもおじさんの親切な骨折りに、ちょっとしたお世辞をたくさん並べて報いました。おじさんには子どもがなく、教師の義務を引き受けてくれたときおじさんの心は空虚だったからこそ、それだけわたしに開かれていたのです。おじさんとしては、わたしに書くことを教えるのがたいせつなしごとになりました。祖母はそれに反対で、ありったけの熱弁をふるってこのもくろみに水を差そうとしました。でもうまくいきませんでした。わたしはどこからか板切れを探してきて、ひとのいいおじさんのところへ持っていきました。おじさんがそこに文字を書いてくれるのをまねて綴り、たちまちペンをもつようになりました。そして両親がはじめてわたしたちのところを訪問したとき、手に紙をもって飛んでいき、心から感激して、「とうさん、字が書けるの」と大声で言いました。やさしい父はキスをしてくれました。それが父に会った最後です。この訪問から二、三カ月して父は死にました［1730年ごろ］。

母の再婚　母はいつまでも独り身ではいませんでした。別の男性［ヘンペル］に心をゆだね、その人と一緒にわたしたちのところへやって来ました。「おじさま」と母は言いました、「娘を引き取りにまいりました。この子はこれからゆりかご用にいりますので。それに、このまま昼も夜も本にかじりついていたら、頭が変になりゃしないかと心配なんです。読み書きができる、女の子としてはそれで十分、それ以上のものはいりません」。――「そうだな」とおじさんは言いました、「たしかにそうだ。だけど、わしが知っているかぎりのラテン語を教えたのは、この子がそうしたいと言ったからだよ。意欲旺盛で、もうたくさんの単語を暗記したのだよ」。――「そうかもしれませんが」と母、「でも、大学へ行くわけじゃなし。まあ、とにかくご親切にはお礼を申しますわ」。

帰郷――子守と牧童　どんなに抗弁しても無駄でした。おじさんはわたしに祝福を与え、わたしは頬をおじさんの涙でぬらして旅立ちました。母は新しい夫とのあいだに男の子[4]をもうけ、わたしは子守というしごとをもらいました。十歳でした。種違いの弟がわたしのただ一つのしごとになりました。本がないので、ゆりかごの横にしょんぼりすわっていました。わたしが生れた町の荘園では本など一冊も見当たりませんでした。が、とうとう義父の情熱的な性格から、わたしたちはこの土地を出なければならなくなりました。シュヴィーブスという、グローガウ侯国の小さな町で、わたしが生れた町からそんなに離れていないところに移り住みました。両親は町の郊外で小作をし、わたしは牧童になりました。

牛追いの少年――本との再会　朝早く、まだ太陽が夜露を飲んでいないうちから、やりくりじょうずな祖母が三頭の雌牛の乳を搾ると、わ

---

4) エルンスト・ヴィルヘルム・ヘンペル、1732年生れ。のちに指物師になったがたいていは失業状態にあり、1764-80年にはカルシュに養ってもらった。1770年、カルシュの娘カロリーネ（1750年生れ）と結婚、最初の子ヴィルヘルム（1770年生れ）はカルシュの秘蔵子であった。1780年離婚。

たしはその牛を追っていきました。頭上でヒバリが息の長い歌をつづけるたびに満足感をおぼえ、誇らしく思いました。わたしは夏のありったけの快適さを味わい、ときには聖書の物語に似た短いお話をつくりました。砂の塔をこしらえ、石をまわりに並べ、木の弾でそれを壊しました。右手の杖で指図し、ひとりごとを言いながらわたしは軍隊の大将になっていました。アザミは全部敵。兵士の勇気をふるってアザミの頭をかたっぱしから斬り落しました。ダヴィデとマカベア一族[5]の事蹟が手本でした。彼らのように勝利を収めるのが愉快でした。重要ないくさのあとのある秋の日のこと、小川のほとりにすわっていますと、川向こうに数人の牧童が一人の男の子[6]を取り囲んでいるのが見えました。その子が朗読をしているのです。わたしは聴衆を増やすために飛んでいきました。なんというしあわせだったでしょう。つぎの日からわたしはわざわざ回り道をして、流れのいちばん浅いところを渡って牛を追い、それはそれは長いこと身近になくて寂しい思いをしていた願望、本を、また見つけたのです。そこにはロビンソンもの、さまよえる騎士たち[7]、死者の国での対話[8]といったものがありました。ああ、そこには未知の新しい世界がありました。

秋の過ぎるのはわたしには早すぎました。わたしは泣きました。けれどもわたしたちは会いつづけました。母に遣いにやられるたび、こっそりと牧童の家にはいりこみました。すがた形はアイソポスのようでも[9]、それだけに持っている本はなおさらすばらしいものに思えました。わたしたちの会合はすぐに知れました。義父はわたしの読書熱をとがめて雷を落しました。それで、だれも知らないトネリコの茂みの蔭に本を隠し、ときどきそっと庭に出て魂に栄養を与えようとしました。この人知れぬ楽しみは一年ほど続きました。

下女として　母はわたしをある町娘のところへ遣り、そこで針仕事を覚えさせようとしました。呑み込みが早く、一夏でお針子のいろいろな知識を習得してしまいました。けれども先生はやがてわたしにたいして誠実さを欠くようになりました。やもめ暮しをしていたポーランド出身の金持ちの男が先生のところへころがりこみ、先生と結婚してしまいました。わたしはつくづく自分の運命がいやになりました。たいせつな本しか逃げ込めるところはありませんでした。もう自分が女であることをまた忘れていましたが、そんなある日のこと、一台の豪華な狩り用のそりがわが家の前にとまりました。肩に真赤な毛皮みたいなタフタを掛けていましたが、先生でした。先生はそりから飛び下り、なにか女傑といった上気した感じでつかつかと歩み寄り、わたしの母を抱きしめて、このわたしをお相手として連れていきたいと頼みました。先生の弁舌はここには再現しません。とにかく母をくどき落し、わたしはその晩のうちに旅支度をしなければなりませんでした。わたしの頭には若いスペイン女のように冒険がいっぱい詰まっていたので、一から十まで同意しました。わたしは母にキスをし、こんなきれいなそりで旅ができるのかと、誇らしく思いました。日暮れ二時間前にK…に到着しました。

最初の数週間はありあまるほどのもてなしを受けました。が、それからはないものづくしで困り果てました。洪水で耕地が水浸しになり、国じゅうどこへ行っても物価高でした。だれしも零落することを恐れ、わたしも小さくちぎったパンしかもらえませんでした。先生は夫との

---

5) ユダヤ史。ユダス・マカベーウス一族（マカベーウスは「ハンマー」の意）。ユダヤ民族をシリアの支配から解放した。

6) 牛追いの少年ヨーハン・クリストフ・グラーフェ。

7) したがってカルシュが最初に読んだのは庶民世界を舞台とする「低俗」な悪漢小説や冒険小説であった。ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』（1719年）とは「ロビンソン」の名を借用した以上の共通点はない。読書の第二は、王侯貴族の世界を描いた宮廷バロック風の恋愛小説と国家小説、およびその「みやびやかな」模倣小説であった。

8) ダーフィト・ファスマン（1686-1744年）が発行していた「みやびやかな」雑誌（ライプツィヒ、1718-39年）。

9) アイソポス（イソップ、紀元前6世紀）はひじょうに醜かったという。

悪因縁にいらだち、その復讐心のほこさきをわたしに向けました。わたしは下女に徹することを求められましたが、十二という年齢では力不足でした。水を汲み、手押し車に穀物を載せて水車小屋まで運び上げるのが日課でした。わたしの善良な創造主は、将来もっと過酷な試練に会わせ、不平を言わせないために、早くからわたしを忍耐の学校で学ばせることを好まれたのです。母はわたしのことなど心配していませんでした。それにもう居場所を替えていました。あの年老いた律儀なおじさんはもうこの世の人ではありませんでした。おじさんの妹、つまりわたしの祖母が遺産を受け継ぎ、その遺産をまるごとわたしの両親が買い取りました。たまたま母の不幸な妹婿がK…に来て、そのことを教えてくれました。

わたしはこの絶好の機会をとらえ、母の家で腹をいっぱいにするため、旅に出ることに決めました。それまで主人だった先生は別れるとき涙を流す芝居をしました。先生はわたしの義父が腹を立てるのではないかと疑っていましたが、義父を恐れるのも無理はなかったのです。

旅立ち　残っていたわずかばかりの持ち物は先生のところに預けたまま、大きなそりのうしろに乗って出かけました。かつてイスラエルの娘たちもこんなふうに旅立ち、できあがっていないパンを肩にかついだのでした[「出エジプト記」12、34]。わたしはというと、期待する胸によりよい未来への希望を詰めて、それまでの難儀を全部忘れていました。初日の行程が終りました。

まだ太陽が地上のほかの住人たちに顔を見せない前に、迫り来るあらしが夜の訪れを早めました。わたしたちはある納屋の土間に泊めてもらい、夜が明けると、もうまたわたしは旅をする元気を取り戻していました。午後も半ばを過ぎて小さな森にはいりました。ここまで連れてきてくれた人はわたしの数歩前を歩き、わたしの叔母の手をとって戻ってきました。やせた貧相な女性で、憂いにやつれ果て、予言をするエジプト女［ロマ（ジプシー）はエジプトから来たと信じられていた］のようにみえたのは小屋の煙のせいでした。叔母は礼儀正しくわたしを迎え、朝食にヤギの乳を木皿に入れて出してくれました。わたしたちは小屋の戸口にすわっていました。わたしの縁者はロビンソンの生れかわりのように、人の世から離れてここに住んでいました。家はなかば土に埋もれたようになっていて、地面から上の部分は板と四角の芝草とで覆われていました。財産といっても、二頭のヤギと耕地が二枚あるきり、そこをせっせと耕して、一方に大麦を、もう一方にいろんな種類の野菜の種を撒きました。昔はなかなかの伊達男で、紙作り職人をしていましたが、気分だけは王子でした。傲慢で恩知らずだったため貧乏にはなりましたが、かといってすばしこく立ち回るわけでもなければ、腰を低くするわけでもありませんでした。ひとのいい叔母は夫の軽率な言動の報いを分ちあわねばならず、夫の気にさわらぬよう、ため息を押し殺しているようにみえました。彼の話にはしょっちゅうカルル十二世［スウェーデン王。1682-1718年］が登場しました。スウェーデン生れだったのかどうか存じませんが、とにかく、この不世出の戦士がまだ世界のどこかに生きていて、しかるべき時が来ればまた現れて敵をことごとく平伏させるのだと、自分に言い聞かせていました。

ふたたび帰郷　わたしたちはようやくそろって両親の住む村へ向かいました。4分の1マイル[10]もありませんでした。義父は庭まで出迎えてくれましたが、そのときの歓迎のことばをここに再現することをお許しいただかねばなりません。「こんちくしょう、この娘っ子めどこから来たんだ。」父はそう大声を張り上げて、乱暴な表情で笑ってみせました。父にいきさつを手短に話すと、父はわたしの手をとって母のところへ連れていきました。これまでのことを話せば話すほど、そりに乗せたのはあまりにも軽率だったと、非難の応酬がありました。母は感心したように頭を振りながらわたしの身の上を歎

[10] 1872年まで行われていた「ドイツ地理マイル」。7.5km にあたる。

き悲しみ、昼食を運んでくれました。わたしは放蕩息子の食欲よろしくがつがつと食べ、ようやくまたパンがまるごともらえたことを天に感謝しました。

母の出産と義父の死　母はこの日から数週間後に三人目の子を出産しました。男の子でした。わたしはまたゆりかごのそばに地位をあてがわれました。読書熱がここでは抑圧されるように思われました。第一その機会がなく、どんなに訴えても無駄でした。義父はわたしが改心したと思い、ほめちぎりました。そしてとうとう母よりもわたしをひいきしはじめました。なにしろわたしは義父に接するときはへりくだり、こびるようにしたので、義父の反抗心をなだめる効果を及ぼしたのです。毎日いさかいが絶えず、死ぬほど不安になることもめずらしくありませんでした。ああ、神よ、これから先、こんな生やさしいものとは違う猛烈なあらしがわたしを待っていようとは思いもしませんでした。わたしはときどき震えながら母に黙っていてくださいと頼みました。義父がはじめて母をなぐったので、せめてそんな心配をしないですむようにと思ったからです。義父はすぐにかっとなる人でしたから、母が殺されはしないかと恐れさえしました。が、こんな悪人でも、いちばんの親友を虐待してはならないと諭す理性には耳を貸しました。口論の原因はたいてい末世ともいうべきひもじい時代にありました。苦悶と沼がちな地方のせいで、義父は悪性の熱病にかかり、耐えがたい炎熱を感じ、昼も夜も新鮮な水をほしがり、とうとう水を飲みすぎて体が腫れ上がりました。こんな、だれも知らない砂地で墓を探さなきゃならないなんて、と、ひどく毒づきながら義父は死にました。

見捨てられた娘　一方、母もあまりかんばしい状態ではありませんでした。女手一つに五人の子をかかえ、世話をしてくれる男手もなく、自分でパンをかせぐあてもない、まことに歎かわしいありさまでした。しかも病気ばかりしていました。わたしは十五歳になっていましたが、女として当然知っているべきことを教えてくれる人もいませんでした。ゆりかごが日課でした。見捨てられた娘でした。それは毎日の暮しのなかでその痕跡がはっきりと判るたぐいの不幸というべきものでした。母は病気の体だけでなく、むしゃくしゃする気分をもてあましていました。丸一年というもの熱の下がる日は一日もありませんでした。わたしは三人の子どものしつけを引き受けることになりましたが、教育を必要としていたのはわたし自身でした。わたしたちが住んでいたのはかんばしくない土地で、わたしの教育に欠けているものを補ってくれるようなつきあいのできる人はどこにもいませんでした。わたしは将来の運命を思い煩うこともなく、剪定されていない野生の葡萄樹のように成長していきました。

縁談　わたしは美人といわれたことなど一度もありませんが、それでも祖国の青年のなかにわたしを求める人が一人だけいました[11]。ある日、母がいつになく上機嫌でわたしに向かい、一人の若者のことを話しました。たった今やって来た人で、おまえのお婿さんにどうか、というのです。「美男子で恰好がいい、感じもいい」と母は語りかけました、「いつだったかS…から来た何人かの友だちが教えてくれたんだけど、あのひとはわたしの息子になりたいらしいんだよ。わたしはいやじゃない」と。この思いがけない知らせに仰天しました。が、その見知らぬ人を快く迎えなさいと母は命令しました。わたしは言いつけに従いましたが、実際その人にもいいところがたくさんあると思いましたので、母の宣告は正しいと思いはじめました。この間の事情はくわしくお話しいたしません。とにかくわたしは負けました。わたしのためにそのひとが二度目の旅行を計画したとき、母とその人の言うとおりにいたしました。

幼妻　わたしは求婚されました。母はわたしが若いという理由でいろいろと難題をもちだしました。彼は母のいう根拠を論駁しました。母

---

11) 織物職人ヒルゼコルン、シュヴィーブス生れ。カルシュとのあいだに三子をもうけたが、生き残ったのは二人の男児だけであった。

の心も負けました。母としてはとにかくわたしを養ってもらいたかったのです。彼は吉例により指輪を二つくれました。それをわたしは無邪気な顔をして受け取りました。正式に婚約が成り、一カ月後にその人の妻となりました。

フランクの詩　妻とはなったものの、急に子守女の顔から抜け出せるものではありません。夫は結婚する前、父の遺産のことを訊ねませんでした。寛大なところを見せようとして質問せずにいたのですが、わたしの財産は彼には少なすぎたのだと、あとになって感じました。わたしたちは性格が合いませんでした。わたしの柔和な心、やさしさとあの人の金銭欲とでは水と油も同然でしたから、二人が一緒にやっていくことにしあわせを求めるのはしょせん無理な話でした。わたしのただ一つの慰めは、その後もあの牧童のおかげで手にすることができた本でした。これは大切なことですが、かつて牛を追った野のあるあの村に、わたしはまた戻っていたからです。もっとも毎日の仕事は骨の折れるものでした。曲がった棘がたくさんついている木の葉[12]で羊毛を引っかいて、紡ぎ女に渡すしごとをするか、小さな糸車を休まず手で回して速く動く織機の管に通す糸を巻きつけるかしていました。わたしは讃美歌を幾百と記憶していました。仕事をしていても、いちばん美しい讃美歌をうたうじゃまになるわけではありません。とくに頌歌が好きでした。歌うといつも心がみちたりたように感じましたので、ならば自分で歌がつくれないものかと自問しました。わたしは、さまざまな讃美歌を残してその名を永遠にとどめたヨーハン・フランク[13]の作品を刷ったビラ以外には、まだ詩人というものを知りませんでした。ヨーハン・フランクの歌はわたしのお気に入りで、残された彼の俗謡は今も思い出します。幼いころ、おじさんの家の屋根裏部屋でほこりをかぶってばらばらになっているのを見つけたことがあったのです。それらは祝婚歌に多くの神話を詠み込んだもので、内容はよくわかりませんでしたが、美しいとは思いました。「籠(コルプ)づくりのクピードー」という題の歌の冒頭を思い出します。夫の名がコルプだったからです。詩人はこう歌いました。

あるときウェーヌスは緋の絨毯を
敷きつめさせた
カタツムリの舟に乗り
おおぜいのニュンフを舟遊びに誘った。

詩人はつぎの行でまちがいなく多忙を歌っていましたが、あとは忘れました。この歌人の作品がどうしてこれほどきれいさっぱりなくなってしまったのかと思います。ほかのものに交じって二つの輝かしい詩、「メシーアス」と「昇天」もありましたが、この誠実なフランクを神のごとき人と何度呼んだかしれません。

最初の創作　さて、自分の知識が増すにつれ、あの詩の断片のかずかずをどうしてきちんと保管しておかなかったのかと思うだに、残念でなりません。しかし今度は自分で試してみようと決心しました。どれか讃美歌の旋律を選び、不平を言うようにうなる糸車の前にすわり、作ったばかりの詩をすっかり記憶できるまでくりかえし歌いました。安息日の午後の数時間、それを書きとめるいとまがありました。赤ん坊の枕の下にはいつも本が一冊はさんでありました。母親に似た乳母の義務を果たしたり子守女の役を演じたりするたびに、その本を取り出しました。読んだのは『アジアのバニーゼ』[14]とアラビアの物語『千夜一夜』、シリアの長編小説『アラメナ』[15]です。ところどころに詩が挿入されておりましたが、無理強いするようなところが好きになれませんでした。それで小説家よりもましなものを考えようと誇り高い決意を固めました。たまたま熱狂的な歌を満載した一冊の本にめぐり会いました。軽やかに流れる韻律があり、それがわたしを大胆にするのに役立ちまし

12) 羊毛、亜麻の繊維を梳くための櫛、麻櫛。

13) 1618-77年、聖俗歌謡をうたったプロテスタント詩人。

14) ハインリヒ・アンゼルム・フォン・ツィーグラー・ウント・クリップハウゼンの長編小説（1689年刊）。

15) ブラウンシュヴァイク公アントーン・ウルリヒの長編小説（全5巻、1669-73年刊）。

た。この詩人[16]は熱病に冒されたとき、その熱のあまり熱狂的な気分になったとのことです。ふだんは説教壇に立つのが務めなのですが、感激に襲われると、説教も会話も全部詩になってしまったといいます。どんな偶然から職務を解かれることになったのかは存じませんが、この詩人はわたしの祖国へ来て、さる男爵家にかくまわれ、その家でわたしが勉強したような詩を書いたのです。しかしわたしの精神にもっと生気を与えてくれたのは、向かいに住んでいた、神学の博士論文を書いていた人の詩です。わたしはもっと多くの本と、もっと自由な時間がほしいと思いました。フリードリヒの事業を耳にし、それを歌いたいものだとうずうずしていました。王の名を聞くだけで、早くもわたしは火がついたようになりました。けれどもわたしの思考には飛躍というものが欠けており、天賦の才能は日々の労苦の石の山の下に横たわっていました。が、それでもわたしのなかにあるこの神々しい炎の息の根を止めることなどできませんでした。

夫　あのころの人生のつれあいは、もしも人に未来を見る力が授けられていたら、きっとわたしを励ましてくれたでしょう。未来を一目見さえすれば、わたしの読書熱にもっと公平で寛大な態度をみせてくれたでしょう。もしかするとわたしを愛してくれたかもしれません。そういう将来の展望はつれあいの大好きなことに好都合ですし、わたしに一目おいてくれていたでしょうから。大切な友よ、不愉快なできごとを思い出すのはむつかしいものです。それについては何も申し上げません。夫の性格にもいい面がなかったわけではありません。どんなにひどい目にあっても、結局、夫にも好ましく思えるところがあり、夫はそれで平気な様子でした。店の主人としてはたいしたもので、暴飲暴食をことごとく嫌い、だれにでも愛されるという才能がありました。が、家でどんなささいなことでも何か起ると、もう自分を抑える力がありませんでした。あの人には、わたしの心を知ることなどできませんでした。夫婦生活は、おたがいのためにつくられた二人の人間が静かに打ち解けて仲むつまじく暮すような関係ではありませんでした。

離婚　ある高い存在の、ものごとを決める手は、ついにわたしたちを引き離すことを好まれました［1749年、正式に離婚］。もしかすると、このときを境にわたしの難儀は終りを告げた、いっそう自由な空気を呼吸することができるようになったと、そうお思いでしょうか。とんでもありません。運命はときどきわたしたちの舞台を変えるにすぎません。目先のものしか見えないわたしたちあわれな人間は、闇夜に森のなかをふらふら歩いていて、何かちらちらする光を見、ひとの目を欺く硫黄を含んだもやにだまされて深い沼地に迷い込み、腰を抜かして、長いあいだいたずらに助けを呼ばずにはいられない旅人に似ています。

どうか同情のお心をもってください。けれども同時に、むなしい石だらけの道から貴兄の友情にあずかる名誉へとわたしを引き上げることを思いつかれた、あの導きのみ手をぜひとも称えてください、わたしのこの願いに耳をお貸しください。

1-2. 第二の手紙（1762年9月3日付）

帰郷　友よ、その炯眼の精神をもって、話の続きをお聞きください。わたしは生れた土地からふたたび母の住む、隣国のポーランドへ戻りました。以後は記述を切りつめようと思います。最初の手紙は読み手にあまりにも負担をかけるものでした。とりとめもないこまごまとしたことをお話ししたら笑われるでしょう。

まだ若く、心やさしい姑の祝福のおかげで、また大きなしあわせに恵まれる予感がありました。誠実なこの婦人は、うれしい予言の結末を知り、それを喜べるようになるまでに、わたし

---

16) ベルリンの伝道師、詩人ダーニエル・シェーネマン。フリードリヒ・ヴィルヘルム一世が1735年にルター派の礼拝に介入したとき職を辞し、グローガウ近郊グート・コッペンにかくまわれ、ここで詩集『男爵閣下領グート・コッペンにて有益に過せし時間』（1736年）を完成した。

の忍耐がどれほど険しい山を越えねばならないかを知りませんでした。神の摂理は、わたしの心を試し分別を鍛えるために、もっとも過酷な手段を選ばれました。とうの昔に自分の幸福を疑うようになっていた一人の男性に、わたしを選ぶことを思いつかせられたのです[17]。

再婚　この人はわたしとさほど年の差がなく、仕立職をなりわいとしていました。外見だけならその人を選ばなかったでしょう。が、とにかく母はその人のことが気に入りました。母は、言うとおりにしなかったら、母親としての愛情も祝福もないと思えとくりかえし誓ってみせました。自分の心にこのような暴力を加えるのは、わたしにとって筆舌に尽しがたい辛い体験でした。その大切な男性の顔だちには、わたしと合わないもの、野蛮なものが目立つように感じられましたので、ぞっとしました。それでも母の勧めをないがしろにはできず、その命令はなかば神の命令でもありましたので、自分の気持ちに逆らって言われるとおりにしました。自分で自分の心を説得し、はい、と答え、それから気のめいるような長い歳月を縛られて過すことになりました[1749年結婚]。新しい夫に連れられて、ポーランドでもどちらかといえば文化的な土地へ行きました。しかし貧乏がすぐあとからついて来ていることをわたしは知りませんでした。

カロリーネ誕生　迎えてくれた町はフラウシュタットです。当時、世間の人はみな黄金時代の陶酔のなかに生きていましたが、わたしにだけは窮乏の運命が定められていました。夫は地上でいちばんのんきな人たちの仲間で、生れながらに善良なわたしの心を悪用し、わたしの財産をことごとく使い果たし、しごとを探したり、勤勉になる努力をしませんでした。けんかがきらいなわたしはみすぼらしいことこのうえない暮しの重荷に、不平も言わず耐えました。以前の状態をふりかえってみると、それはたしかに気のめいるようなものでしたが、それでもしあわせでした。それにひきかえ今は一人の男がわたしに子どもを産ませ、いまわしい飲酒癖に負けるたび、子育てはわたしに任せるというふうでした。

どん底生活　1751年の冬とその後の歳月は、貧乏ゆえのありとあらゆる災厄に苦しみました。粗末な服では身を切るような寒さを防ぐことはできませんでしたが、それでも子どもたちを温めるために出かけていき、二束、三束、たきぎを買いました。どんなに意気消沈していたか、わたしのおかれた状態がどんなに希望のないものであったか、わたしの魂はそれをけっして忘れません。絶望から夫はわたしをポーランドの中心へ連れていくことを思いつきました。こんなやりかたはやめさせてくださいと天に祈ったところ、その願いは聞き届けられました。一人の旅人が正式な営業でない宿屋に泊まりました。そこの親切な住人が旅の人に夫を紹介し、しごとを注文させてくれたのです。夫は計画を反故にしました。わたしは二着の新しい服の仕立てをまめまめしく手伝い、すべてを養いたまう神を信じ、その家に感謝しました。が、その家の七十四になる老主人はその直後に亡くなりました。

機縁詩　わたしは感謝の心にうながされ、そこの娘さんたちと未亡人のために一種の弔問歌をつくることにしました。みなさんにとってそれは心なごむ贈り物になりました。二、三週間後、ひじょうに立派な紳士を先頭に、そろってわたしに会いにこられました。わたしはその人たちにお辞儀をしましたが、とても見られたものではないみすぼらしい服装でしたから、額には恥ずかしさがありありと現れていました。翌日、その姉妹の一人が声をかけてくれ、弔いの歌をつくりたいので助けてほしい、もらったのを渡したが最後、返してもらえない、と言います。今度はその兄という人が口を挟み、こんな粗末ななりをした女に詩なぞ作れるはずがない、と申しました。そこで梁が真っ黒になっている住いへ戻り、詩を思い出して書きました。つい

17) 夫の名はカルシュ。フラウシュタットで通いの仕立屋をいとなんでいた。アンナ・ルイーザは夫の姓カルシュ Karsch に女性名詞の語尾 -in を付け、カルシン Karschin と呼ばれることも多い。

でに故人の息子さんにあてて何行か詩を書きました。この方はベルリンとマクデブルクのあいだにある、ある町の出納係長をしておられましたが、家族を慰めるためにこちらへ来ていました。書いたものを持参すると、びっくりしてちょっとした贈り物をくれ、日曜日にもう一度来るようにと言い、才能を埋もれさせてはいけないと忠告してくれました。わたしははじめて会ったときと同じように伏目がちに現れました。たまたま来ておられたリボフ[18]という校長先生と二人で声をそろえて忠告してくれました。わたしは貧乏ですからと口実をつけ、失礼して隣家へ行き、一時間ほどしてから便箋一枚分の、学校の先生の苦労をうたう詩を持っていきました。二人とも、いまにわたしのことを魔法使いとでも呼びそうなほど唖然としてすわっていました。校長は家に来るようにと言い、一冊また一冊と美しい本をくださいました。わたしはギュンター、フォン・ベサー、フォン・ハラー、ゲラート[19]、『メシーアス』[20]の最初の五つの歌を読みました。校長の同僚[21]の方からは深遠な英国人の『夜想』[22]と最後の審判をうたった歌を贈られ、これらの書物がわたしの蔵書となりました。校長はフラウシュタットの二つの名望家、グライフェンハーゲン家とノイゲバウアー家[23]を紹介してくださいましたが、わたしにとってはありがたい名前です。両家ともわたしから感謝のことばを聞きたいと言い、蔑むことなく歌を受けとってくれました。もっとも、今これら処女作のうちの一つを読むと、当時の自分自身に苦笑を禁じえませんが。

母の死　そのころわたしのおかれていたみじめな状況は、母の死の知らせを受け取ったときよりも多少はましになっていました。母は死の床で、母の忠告に従ってはいりこんだ迷路からわたしを救い出してくださいと天に祈りました。神はこのような祈りをお聞きになりながら、なぜ母を生かして、そのみ手がわたしになしとげたあらゆる奇蹟を見せてやってはくださらなかったのでしょうか。

天才の自覚　わたしは機会があれば詩をつくりました。ほめことばはいうに及ばず、ほめことば以上のなにかが天才を発揮させたのです。が、そうはいってもあいかわらずそれは弱いものでした。作品は一つとして印刷されたためしがありませんでした。ところが、ああ、大きくふくらみつつあった作家としての誇りをご想像ください。リッサのある若い郵便局長［ケルバー Körber］が結婚して、フラウシュタットでわたしの讃美者になりました。この人の婚姻のきずなのために一つの歌をつくったのですが、この歌を印刷してくれ、讃辞をしたためた短い手紙をそれに添えて送り返してくれたのです。あのときの喜びをご説明したくても、いたらぬ文章ではそれもかないません。そのときわたしの天才は、はじめて飛ぶ能力のあることを自覚する鳥に似ていたといった感じです。ほかにも二つのきずなを大急ぎで歌いました。素材に選んだのは最初の人間です。一つは至福の園での、あらたに創造された連れあいとのきずなを、もう一つは、男が女とともに閉ざされたエデンを去り、

---

18) 『精選詩集』(1763年)のズルツァーによる序文と、『カルシュ詩集』(1792年)中の娘カロリーネ・ルイーゼ・クレンケのカルシュ伝では、校長の名はリボフ Ribow ではなくリケルト Rickert となっている。

19) ヨーハン・クリスティアン・ギュンター(1695-1723年)はシュレージエンの抒情詩人。感傷的な恋愛歌、聖俗の悲歌、諷刺詩、無数の機縁詩を書いた。――ヨーハン・フォン・ベサー(1654-1729年)はベルリンのプロイセン宮廷とドレースデンのザクセン宮廷で式武官と宮廷詩人を務め、諸侯のための頌歌と英雄詩、粋な恋愛詩、祝賀文学と機縁詩を残した。――アルブレヒト・フォン・ハラー(1708-77年)はスイスの詩人、医師、大学講師、哲学的な自然詩と教訓詩の作者。――クリスティアン・フュルヒテゴット・ゲラート(1715-69年)は抒情詩人、寓意詩人、感傷喜劇とドイツ最初の家庭小説『スウェーデンのG…伯爵夫人の生涯』(全2部、1747-48年)の作者。

20) フリードリヒ・ゴットリープ・クロプシュトックの『メシーアス［救世主］――英雄詩』(全20歌からなる叙事詩全4巻、1748-73年刊)。

21) プリューファース Prüvers という名の教師。

22) エドワド・ヤング(1683-1765年)。『不満、別名、生と死と不死に関する夜想』(全9部、1742-45年)の著者。ヨーハン・アルノルト・エーベルトによるドイツ語訳は1760-69年に出版された。

23) グライフェンハーゲンはフラウシュタットの市長。ノイゲバウアーはフラウシュタット出身のプロテスタント聖職者で、隣町(グロース)リッサの伝道師であった。

ただ愛だけを道連れにいずこへとも知れず旅立っていく様子を描いたものです。みな心底驚き、百万巻の書物を読んだのかと質問しました。そういう名の人物がこの世に生きていたこともよくは存じません、ただ何かの本でそのような名前が呼ばれるのを聞いたことはあります。その歌を読んだことはありませんが、と答えました。すると、要するにあなたは短い失楽園を書いたのです、と言われました。

出会いのかずかず　隣町のリッサに住んでいた一人の伝道師がわたしと知り合いになりたいと、合図を送ってきました。わたしはうれしくて、居ても立ってもいられませんでした。その人のところにはほしいものが何でもありました。名をフィービヒとおっしゃいました。わたしの友人になりたいという熱意、公明正大な人がら、誠実な開かれた心に接するうちに、すでに塵となって久しい父の代りに、神の摂理がふたたび授けてくださった父親を見るような心持ちになりました。この方はあらゆる方法でわたしを励まそうとなさいました。その紹介で、改革派の長老であられたジツコフとカーシウス両氏、希望にみちた二人の若者、クローゼとツィンマーマンとも友人になりました。誠実なフィービヒ氏が紹介してくださったすべての家をここにあげることはできません。とにかくこの人は、ご自分の段取りでわたしの窮乏に救いの手をさしのべることができると、いつも心のうちに満足を覚えておられました。筆舌に尽しがたい辛苦にあえぐとき、師のお宅はわたしの避難所となりました。ああ、わたしが生気あふれる感謝の気持ちをお伝えしないうちに、早くも逝ってしまわれたのはなぜでしょう［1761 年 12 月没］。天使たちはあの方の魂に、わたしがそれを愛しているということを告げねばなりません。それは輝かしい教師の魂のなかでもきわだって光り輝く地位を占めていなければなりません。夫に先立たれた夫人の手には厖大な数の歌と手紙とが残され、娘さんも堂々たる蔵書を引き継がれることでしょう。ところがこのやさしい奥さまは戦争で幸福の一部を奪われました。その昔タタール人と激戦のあったシュレージエンあたりに住んでおられたのですが、兵士どもに財産を掠奪され、愛する夫の心と、夫とのあいだに生れた三人か四人かのお子さんしか手もとに残りませんでした。この感情豊かな伝道師の奥さまはそれでも幸福なのです。夫を抱きしめ、ああ神さま、ありがとうございます、敵はすべてのものをわたしに残していきました、と叫ぶのでしょう。ああ、この不幸な戦争はわたしの友人の一人をも奪ってしまいました。フラウシュタットの名高いヘルベルガー家[24]の出であった一人の伝道師こそ、当時わたしの蔵書をつくってくださった方なのですが、ヤングがそのルシアを悲しみ、この方々が、大切な友よ、人生の楽しみ、消え去った心の喜びを悲しむがごとく、十年以上にもわたって悼みつづけておられる愛する夫人がふたたびこの方のもとに返されるならば、この方はシュレージエンで敵軍に奪われたすべてのものを喜んで忘れてしまわれるでしょう。

それにしても話の筋道をあまりにも遠く外れてしまいましたので、もう一度話をもとに戻して、わたし自身のことを、精神の鍛練に倦むことがなかった次第をお話しいたします。

結婚生活　わたしは主婦であると同時に下女ともならねばなりませんでした。あすの朝のパンの心配は寝室まで追いかけてきました。まず、むずかる子をなだめようと努め、つぎに、昼間読んだり自分で書いたりしたものについて深く考えることで自分の心をなだめました。ほんとうに、かの卓越したブリテン人［ヤング］は、作曲を、そして文藝を、人生の苦難のなかの慰めの泉と名づけておりますが、それはわたしの気持ちにかなう表現でした。経験に立って、わたしはその意見に快哉を叫んだものです。いろいろな考えで頭が一杯になると突然睡魔が襲い、命令を出す昼の目に夜が逃げ出すまでわたしを放しませんでした。わたしが満足感を覚えたの

---

24) ヴァレーリウス・ヘルベルガー（1562-1627 年）、1599 年からフラウシュタットで伝道師を務めた。よく読まれた建徳の書の作者。

はいつも同じ理由からです。つまり、どんなに粗末な食事でも、どんなにみすぼらしい服を着ていても、とにかく夫にもっと理性をもってもらいたい、夫にもっと確実なパンを差し出したいと思うほかには、なんの願いもありませんでした。

創作　わたしは詩をつくることを日課とし、しだいに熟達していきました。そしてあるときヘーロルトとかいう伝道師と一緒に詩を朗読することになりました。席にいた人たちの拍手に勇気を与えられました。そのとき以来、食事の席で小さな詩を語るのが習慣となりました。申すまでもなく、詩をこしらえたのはわたしの食卓ではなく、友人たちの食卓でのことです。わたしの暮しぶりは年を追うごとに耐えられるものになっていくようにみえました。しかしわたしはまだポーランドにいて、祖国への激しいあこがれを胸に感じておりました。わたしがどのような道をとおってここまで運ばれてきたのか、それをお話しいたします。

才能の発見　夫は改革派教会に改宗いたしました。粗野な生活に明け暮れた丸六年、夫はいつか会衆の前で罪びとの一人として槍玉にあげられるかもしれないなどと考えたことがありませんでした。わたしは夫を深い眠りから目覚めさせ、キリスト教徒の聖餐を拝受するよう勧めました。とうとう夫に詩のかたちの依頼状をもたせ、リッサ近くの改革派の伝道師テュチュケ［?］という人のところへ遣りますと、受け入れてくださり、夫は伝道師の挨拶状をもって帰ってきました。この立派な方はわたしを奇蹟のたまものかなにかのようにご覧になり、すぐさま親友にわたしのことを伝えられました。この人こそ、わたしの歴史の第三期が始まるきっかけをつくってくださった方です。雲をいただく山に登るとき好奇心にみちた青年の一方が他方に手を貸すのに似ています。あとの者は先頭の者について登っていきます。二人は一緒に頂上へたどり着き、足下の大きな湖のかずかずとはるかに拡がる風景に感歎するのです。

1-3. 第三の手紙（1762年9月8日付）

夫の暴力　誠実なズルツァー様、深い悲しみのあらしが吹きすさぶ七回の冬を、わたしはフラウシュタットで生き抜きました[25]。この町はときどきポーランド王を二、三週間お泊めするという誇り高い喜びを享受します。けれども偉大なムガル朝の王のように、アウグスト[26]はめったにそのおすがたを見せないすべを心得ておられます。食卓を広く開放しておられましたが、ついに拝顔の栄に浴することはできませんでした。だからといって悲しくはありませんでした。わたしの魂はずっと一人のもっと偉大な王の名声に夢中になっていたからです。いつだったか、王が占領された最初の要塞[27]からすぐ参上せよとお召しになったとき、飛び上がって喜びました。グローガウの宮廷伝道師デーベル[28]は、ポーランド人の友だちが一人の女流詩人を発見したと語るのを聞いて夢中になっていました。デーベル氏はわたしの話をじかに聞き、ご自分の希望でもあり、結婚している女友だちの助言でもあるといって、わたしに住いを変えなさいと助言してくれました。とくにむつかしい条件も見当たりませんので、ポーランドを去り、1755年の秋、グローガウへ移りました。家族は人数が増えていました。わたしは四人の子どもの母であり、あいかわらず改善の見込みのない夫の妻でした。ほどなくして夫は不品行の罪で伝道師の恩愛を失いました。が、それだけになおさらわたしの腹は決りました。だれあろう、地に落ちたわたしのしあわせを引き上げる助けになりそうなことならどんなことにも喜

---

25) 正確には6回の冬（1749/50年の冬から1754/ 55年まで）。

26) 1752年にカルシュは、ザクセン選帝侯にしてポーランド王であるアウグスト三世に表敬の詩を書いている。

27) プロイセンのフリードリヒ二世はオーストリアにたいしてシュレージエンの領有を主張し、第一次シュレージエン戦争（1740-42年）を行った。その際グローガウ要塞は1741年3月9日、十一週に及ぶ攻囲のあとプロイセン軍の攻撃を受けた。

28) ヨーハン・ミヒャエル・デーベルはグローガウの改革派教区の首席伝道師であった。フリードリヒ二世は1747年、デーベルに宮廷伝道師の称号を授与した。

んでくれて当然の人から、わたしは妬みを買っていました。わたしの人生を苦悩にみちたものにした原因を細大漏らさずお話ししようとすれば、大型の本を半分ほど書かねばならないでしょう。が、あの野卑なふるまいと恐ろしい悶着はカーテンの下に隠しておくのがいいのです。すべてを見たまう神の御目はわたしが苦しむのをご覧になり、わたしの忍耐と、かつてもっともすばらしい、もっとも愛すべき夫が要求しえたあらゆる義務を果たすすがたをご覧になりました。それでもすべてが浪費された以上、奇蹟でも起らなければわたしは救われませんでしたし、家族を養うための心痛が終ることもありえませんでした。すばらしい宮廷伝道師のお宅は唯一気の休まる場所でした。奥様は男性のように気丈な方で、賢く、ゆるぎない意志の人でした。弁舌はさわやか、同時にまじめで、妹さんと競ってわたしの友人になろうとなさいました。

戦勝歌　王はけっして妥協せぬ敵ゆえに戦地へ赴き、しかもそれを六回もくりかえさねばなりませんでした。王はロヴォシツェ近郊で勝利を収められ[29]、わたしはわたしの随一の方のために勝利の調べをうたいました。友人のデーベルがその歌を印刷してくださいました。当時はまだ王の願いはかなっていませんでしたが、オーストリア勢がプラハ近くのベーメン山地で敗北を喫しましたので［1757年5月6日］、わたしは一種の戦勝歌を書きました。群を抜いた愛国者として戦死されたフォン・レーダー伯[30]はその歌に聞きほれていました。伯爵家はこの日を境にわたしの支えとなりましたが、こういう方々にどれだけ親切な人たちが加わっても、すべて無益でした。わたしはあいかわらず窮乏の重荷を背負いつづけておりました。

大火　不幸な偶然からグローガウの三分の一が瓦礫の山になりました[31]。わたしはわずかばかりのものを地下室に保管し、末の子を腕に抱き、三番目の子の手を引きました。上の二人がわたしの前を泣きながら走るのを見ました。そうやってもうもうと立ちこめる煙のなかを郊外まで逃げました。町の悲惨なすがたに魂は悄然としました。ようやくわたしは泣く自由を得ました。そして猛威をふるう炎を鎮めてくださいと神に祈りました。野に横たわる幾千という人々の祈りがつうじてか、灼熱の炎は消え、危険を避けて出てきた屋根の下でふたたび夜を過せるようになりました。それから一週間というもの動揺がおさまりませんでした。教会委員会の長老ルドフキが青空の下、祭壇の焼け跡で説教をなさるまで、わたしは集中してものを考えることができませんでした。が、ようやく正気に戻った感じがするので、すわって、この悲しむべき事件を記念する二つの詩を書きました。書籍商のギュンター氏が両方とも印刷してくれました。今もあの丸天井の店に行けばそれがおいてあると思います。

知人の支援　この火災は多くの人に悲しい結果をもたらしました。わたしも例外ではありませんでしたが、ときどきは心配事から逃げ出していなかへ行きました。あちこちの伝道師が温かく迎えてくださいましたので、そこへ飛んでいきました。そのなかのお二人はクリュルとベリングとおっしゃいました。この名前はどうしてもここに記しておかねばなりません。わたしに親切をほどこしてくださいましたが、お二人が他の多くの人と同じように戦乱のさなかに失ったものは、天の恵みによって償われてしかるべきだと思います。この二人にくわえて、とくに、もうかなり早くから友人になっていたチルナーとかおっしゃった伝道師のことを書いておきます。この人はわたしのために数えきれないほど心からの願いを寄せてくださいました。そ

29) 1756年8月末、フリードリヒ二世はザクセンへ侵攻し、たちまちピルナでザクセン軍を包囲していた。包囲されたザクセン軍を救援すべく接近していたオーストリア勢を、フリードリヒは10月10日、ロヴォシツェ近郊で破った。ロシア、フランスと同盟を結んだオーストリア、およびスウェーデンと多数の帝国諸侯にたいするプロイセンの七年戦争（1756-63年）が始まっていたのである。

30) カルル・アルベルト・ライヒスグラーフ・フォン・レーダー（1766年没）。プロイセン国務大臣にしてグローガウ行政区長官。

31) 1758年5月13日の大火で一市区が完全な廃墟と化した。

れだけでも、神がこの方の大きな損害を、この方の慈悲深い後援者であるフォン・ルーケ氏にたいしてと同じように、七倍にして返してくださるだけのことはあります。フォン・ルーケ氏も、わたしにたいする親切と高貴な心ばえが称讃されてしかるべき人物です。彼らは知らず知らずのうちに、こぞってわたしが歌う意欲を失わないように気をつかってくれました。

大王を目撃する　あるとき田舎へ行きたいという衝動を覚えました。わたしは面識のない伝道師たちのところへ行きました。すると偶然着いた村にフリードリヒが宿泊しておられたのです。王は今しもツォルンドルフへと出立されるところでした。伝道師の家にはヴォーバースノフ将軍[32]が泊まっておられ、すぐに親しくなりました。翌朝わたしは、王のなかでも最上の王の馬上ゆたかなおすがたを目のあたりにし、王を囲んで朝の歌を唱和する兵士たちの歌声を聞きました。衝動のおもむくがままにここまでやって来て、2マイル［15㎞］も歩いた甲斐はじゅうぶんあったと思いました。わたしは王の勝利を歌う計画を立てました[33]。ヴォーバースノフは会戦のあとすぐ伝道師［？］に手紙をしたため、その報せをわたしに伝えるよう指示しました。わたしはこのときの勝利のために二つの歌を書きましたが、もっとも大切な方よ、そのあとのできごとと、ロスバハ近郊の勝利［1757年11月5日］に事態があまねく切迫していたことはご存じのとおりです。このロスバハの戦勝だけはまだ詩にしておりません。ちょうど竪琴に手を伸ばしたとき、ちりぢりに敗走するベーヴェルン部隊がグローガウを通過したからです[34]。困り果てたわたしは旅立ち、ポーランドの友人たちのもとに身を寄せ、平和な時代の到来を夢見ながら誕生日を祝いました。兵士たちはもうそこに来ていました。旅から帰るのと同時にロイテン近郊の勝利という重大な報せが届きました。このときをとらえて、わたしは詩神に歌えと命じました。なにしろ感謝祭まであと二十四時間しかなかったからです。歌の第一聯を植字工に送り、まだ完了していないうちに第二聯を持っていってもらいました。こうして歌の最後までいき、それは印刷されて、誠実な心ばえの歓呼する群集に配られました。みな口をそろえて、わたしが歌に魔法をかけたのだと言い、わたしに会いたがりました。ああ、この讃歎によって名声を獲得しましたが、主人としてわたしを支配したがり、わたしの手からパンを受け取り、神がその手から自分の手にパンを落してくれないといって神をののしっていた男はますます腹を立てました。低劣な傲慢から人が陥りがちな夫の狂暴なふるまいをわたしは話しませんでした。『道徳書簡』[35]の第二部にはそのような実例が紹介されています。

わたしはすべてをお話ししたと思いますし、同時にまたわたしの心はすべてを赦すことができ、よりよい神の摂理に期待をかける誓約を誇りに思うようになりました。

湯治旅　恐怖と不機嫌のあまり体がひどく弱っておりましたので、やむをえずヒルシュベルクに近い有名な湯治場[36]へ行きました。手もと不如意の身でありながら、これほど費用のかかる計画をあえて実行したことをいぶかしくお思いにならないでください。まだ面識のない一人の友がわたしのために食卓を用意し、到着したときにはわたしのために部屋が用意されていました。このような旅行ができたのは、ヴァルムブルンの牧師さんのおかげです。わたしは旅

---

32) モーリツ・フランツ・カージミール・フォン・ヴォーバースノフ（1708-59年）、プロイセンの少将。七年戦争では、プラハ、ロスバハ、ロイテン、ツォルンドルフ各近郊の戦いに参加、1759年7月23日にカイ近郊の戦いで戦死した。

33) カルシュの勘違い。ツォルンドルフ近郊の戦いはこれから一年後、すなわちロスバハおよびロイテン近郊の戦いのあとである。

34) 1757年11月22日、アウグスト・ヴィルヘルム・フォン・ベーヴェルン将軍の率いるプロイセン軍が、ブレスラウ近郊でオーストリア軍に敗れ、将軍自身が捕虜となった。

35) 『心を養うための道徳書簡』（全2部）は1759年にライプツィヒで刊行されていた。著者はアルトーナの教育家、作家、翻訳家ヨーハン・ヤーコプ・ドゥシュ（1725-87年）。

36) ニーダー・シュレージエン、ズデーテン山地のふもとにあるバート・ヴァルムブルンを指す。

をつうじて、ヒルシュベルクの何軒かの家に知られるようになり、二、三人の愛すべき姉妹と友だちになりました。そして、わたしにとってかけがえのないものですが、一面識もないフォン・ザイドリッツ中将[37]と手紙のやりとりをする栄誉を獲得し、中将も友人になりました。あの方を友人にできたのはまことに幸運でした。今もまだ友だちでいます。

二カ月というもの、さながら楽園にいるようでした。しかしつぎつぎと送られてくる夫からの手紙と子どもに会いたい気持ちに負けて、帰ることを余儀なくされました。

二人の娘の死　四週間、家庭の安らぎを味わいましたが、それは身構えるハリケーンに乱される前の不気味な海の静けさに似ていました。

一本の茎に育ち、この世にあらしめてくださった方にまだ喜びのかおりも送りえない前に、毒虫にむしばまれて枯れる定めの双子のバラのように、下の二人の娘が死の腕にいだかれて逝きました。わたしは勇気をふりしぼり、なぜ時をおかず子どもたちを召されたのか神にお訊ねしました。無知なわたしとしては当然感謝申し上げるべきところでしたが、思わずわたしもあとを追って死にたいと口走りました。このときを境にわたしのおかれた状態は耐えがたいものになり、四カ月ものあいだ不幸な結婚生活のありとあらゆる拷問にさいなまれながら、ただもう苦痛と、わたしを震えさせる恐怖のなかで生きているとしか感じられないありさまでした。

夫を隔離　1760年1月21日がこの悲劇的な役回りを変える日と定められておりました。こうして歎き悲しんでいたとき、その歎きの原因をつくっていた人が周囲の方々のおかげで戦争の旗の下へ連れていかれたのです。もっと別の時だったら、わたしは異議を申し立て、自分がみじめな境涯にあることをもう一度忘れることもできたでしょう。しかしほかならぬこの日は、わたしたちの人生の日々をその書物に書き記しておられる方があらかじめ記録しておられた日だったのです。わたしはさながら悪夢から目覚めたような状態でした。元気を回復し、王のお誕生日〔1月24日〕を祝う詩を書きました。この日から幸運がわたしのほうに顔を見せ、わたしはバラが花を咲かせるころまで深い安らぎのうちに過し、偶然のことから思いもかけぬ贈り物をいただき、身を切るような悲しみがあとかたもなく消えた毎日を過したのでした。

夫との再会　7月5日、フケ部隊の一部が帰還し[38]、わが家も宿営を求められました。わたしは自分の名字になっている人を、妻として礼を尽して迎えました。軍服姿、それを身にまとっているときの快活な様子、お仕えしている王ゆえに、以前より夫を尊敬いたしました。夫の身分に変化が生じたこと、半年間の苦労、ある種の欠落が、わたしにとってほんとうにいい効果を及ぼしたのだと思いました。ほかのことはひとの親切に頼ってなんとか乗り切れると考えておりました。夫と公の散歩道を歩き、夫を満足させるために望むことは何でもしてあげました。が、おまえは傲慢になったと言われました。

城塞周辺にはプロイセン兵とロシア兵が陣取り、物価は高騰し、借金はかさみ、冬が恐ろしいすがたで近づいてきました。迷路のような憂いのなかから逃げ出す道は見つけられませんでした。それをわたしは一人で担いつづけました。夫はそんなことにまったく頓着しなかったからです。王はトルガウ近郊で勝利を収めました。同時に、いくさの幸運に乗じてわたしの詩にも幸運が舞い込んできました。詩の女神は困窮した暮しにもかかわらずはつらつとして、名状しがたい希望がわたしの心にきざしました。

戦勝詩　11月12日、わが家の客人が去って

---

37) フリードリヒ・ヴィルヘルム・フォン・ザイドリッツ（1721-73年）、プロイセンの騎兵隊総司令官。1757年11月、ロスバハ近郊でフランス軍および帝国軍にたいするプロイセン軍の勝利を決定的なものにし、1758年8月25日にはツォルンドルフ近郊でロシアにたいする勝利を決定する転機を招きよせた。

38) 1760年6月23日、大将ハインリヒ・アウグスト・バローン・ドゥ・ラ・モット・フケ（1698-1774年）の率いるプロイセン軍は、ニーダー・シュレージエン、ランデスフート近郊で大敗を喫し、フケ自身もオーストリアの捕虜となった。

いきました。兵士たちは行進し、わたしはトールガウの勝利を詠みました。この歌はやがてわたしが行く運命にあった幸福の地へ、わたしよりも先に飛んでいきました。王弟、グローガウに来ておられたハインリヒ王子を歌にしました。わたしは体じゅう精神そのものになったかのようでしたが、あいかわらず将来を思って震えておりました。

コトヴィッツ男爵との出会い　折しも誕生日のこと、神に感謝のことばをささげていたとき、一人の従僕がはいってきて、フォン・ヴレーヒ将軍の令夫人[39]の手になる小さな書付をくれました。夫人にはご返事をさしあげねばならなかったのを失念していたのですが、そのことをフォン・コトヴィッツ男爵をつうじて催促なさったのです。じつはこの非の打ち所がない貴族の弟君のほうは存じあげていたのですが、男爵ご自身とは一面識もありませんでした。男爵はわたしを呼び寄せられ、将軍夫人からのあいさつをお伝えになりました。本来なら男爵に詩の一つでも朗読させていただくべきところでしたが、「ある未亡人の嘆き」しか思い浮びませんでした。が、男爵はそれがお気に召し、タバコ入れを贈られ、ブレスラウへ発っていかれました。わたしはその贈り物に天にも昇る気持ちでしたが、三日後、タバコの下から一枚の金貨が出てきました。恍惚として机に向かい、その容器に刻まれた絵を歌にうたい、男爵に手紙をしたためましたが、将軍夫人が男爵の心にどのようなものを授けていたかは知るよしもありませんでした。

未来への希望　男爵はお帰りになるとわたしを召され、男爵家の馬車でベルリンへ行く気はないかとお訊ねになりました。あなたとお子さんたちの面倒はみてやろう、こんなところにいたら食糧の心配に天才が窒息してしまう、あなたの天才なら大都会のベルリンへ行けばもっと創作が進むだろうと思う、とおっしゃるのです。仰天しました。その昔、輝けるセラピムが牢獄の鉄の扉をとおって舞い降り、鎖に触れてそれを外したまい、あとについて来なさいと命じられたときの使徒の一人[40]も、ちょうどこんなふうに仰天したものでした。わたしはよろよろと病気の友人、宮廷伝道師デーベルを訪ね、彼を神の救いの手にゆだね、わたしへの友情を忘れないでくださいと頼みました。

旅立ち　友人たち全員のお祝いのことばに送られて、わたしはグローガウをあとにし、ツィーテン［不詳］、ハーク[41]両家を祝福しました。しばしば冬の寒さからわたしを守ってくれたからです。が、今はもう北風など感じませんでした。ピョートル三世によってシベリアの荒野から呼び戻された追放者たち[42]も同じように北風など感じてはいませんでした。みな心はずむ思いで、長く打ち捨てられたままになっている自分の住いに戻ってきました。そしてふるい落とされた雪は彼らを慰める露のしずくとなりました。

1-4. 第四の手紙（日付なし）

王都へ　かつて犂を引く牛たちによって諸民族の支配者に任ぜられた方[43]は、喜びに心みたされることがありませんでした。しかし牛はわたしに飲み物を与えてくれました。わたしは王都の宮殿のかずかずを凝視し、その宮殿の一つに導かれました。親切に世話をしてくれる人の住いに身を寄せ、さながらアルプスの高山で、雷雨と暴風が轟音を残して足下を遠ざかっていくのを、なんの心配もなく聞いている人のよう

---

39) ルイーゼ・エレオノーレ・フォン・ヴレーヒ、旧姓フォン・シェーニング（1707-84四年）。1723年、中将アーダム・フリードリヒ・フォン・ヴレーヒ（1746年没）と結婚。キュストリーン近郊タムゼルの農園主。フリードリヒ大王の幼なじみ。

40) ペテロ。「使徒行伝」12、7――「視よ、主の使ペテロの傍らに立ちて、光明室内にかがやく、御使かれの脇をたたき、覚していふ『疾く起きよ』かくて鏈その手より落ちたり。」

41) フォン・ハークはフェステ・グローガウの駐屯部隊長。

42) 女帝エカテリーナの死後（1762年1月5日）、ピョートル三世はポーランド人捕虜をシベリアから戻した。なお、ピョートルは5月5日、プロイセンと講和を結んだ。

43) ダヴィデ王。「サムエル後記」第一章以下。

に、遠く雲の上まで昇ってきたかのような心持ちでした。四週間、不思議な静けさのなかで過しました。しごとといえば、サン・スーシの賢人から送られてくる手紙を読むことだけでした。わたしは大胆にもそのうちの二通を韻文にしてみたのですが、ホメーロスの高い調べの歌に、厚かましくも韻律の足かせをはめようとする詩人たちと同じように、無理強いするところがあったかもしれません。わたしは幸福な隠棲を楽しみました。しかし気がつくと、わたしが当地へ来ていることが世間のうわさになっていました。貴兄の耳にも達したことでしょう。お救いくださった方にお願いして貴兄を食事にお招きするというのは、われながら妙案だと思いました。貴兄はわたしに会うことを条件に男爵の招待を受けてくださいました。

新しい交友　わたしたちの発音の違いはたいへんなものでした。シュレージエンの方言で語ったわたしの詩はご理解いただけず、あいかわらずいちばん美しいドイツ語を話すのはスイス人だと考えておりました。しかしそうであるからといって貴兄がわたしの友となる妨げとはなりませんでしたし、わたしもペンを頼りに自分の考えをいっそう理解していただくことができました。わたしは貴兄を第一の友人と名づけました。あのころ貴兄と親交のあった、あのすばらしい機械工H[44] は、わたしを実の妹のようにおっしゃってくださいました。なぜならわたしたちは同じ一つの御手から異なる天才を授かり、そのおかげで幾千という人々に知られる幸福を味わっているからです。氏はまた思想を歌うドイツのホラーツィウス、R[45] を紹介してくださいました。

ズルツァー、グライムとの邂逅　春になり、ご存じのとおり毎日のようにモンビジュ［ベルリンの離宮］近くの柳の下を散策しました。厳格な思想のもちぬしでいらっしゃる貴兄のところへお邪魔することもたびたびでしたし、かの気高い頌歌の詩人を訪問することもよくありました。かつてわたしは戦争歌人[46] からの手紙をつうじて詩人を発見したのです。「よく聞きたまえ、いいかね」と詩人は言われました、「いいかね、グライムがアポローンの名において、妹にあいさつをしておきなさいとわたしに命じているのですよ」と。この格別なあいさつに、わたしは天にも昇る気持ちでしたから、すぐアポローンの兄弟に手紙を書きました。その返信はご存じのとおりです。わたしは貴兄の手から、未知の個性を知らしめることを喜びとする一人の人類の友の最初のあかしを受けとったのでした。もちろんわたしに誇りうる業績があれば未知の業績を、と申し上げるところですが、友人や、交わることを余儀なくされたすべての人々にたいしてわたしがもっているものといえば、飾らない心ただそれだけです。

詩集への意欲　これまでは自然がわたしの第一の書物でした。今は貴兄とグライムとバハマン[47] が蔵書を手配してくださるようになりました。わたしの財産は三十冊以上にもなりました。しかもグライムから授けられたものは創作の意欲だけではありません。グライムはベルリンへ来て、貴兄と一緒にしだいに力をこめて激励してくださいました。このくわだての成果についてはとやかく申し上げる立場にありません。読者は歌集のなかの第三部を期待しています。が、かくも心豊かな友が鼓舞してくださらなかったら、わたしの天才だけではこれほど多くの実を結ぶことはなかったでしょう。かなり以前からわたしを引き立ててくださったのは、書籍商というよりは文藝愛好者、出版者というより

44) ゴットフリート・ホールフェルト（1710-71年）、ベルリンの名高い機械工、機械技術者、発明家。

45) カルル・ヴィルヘルム・ラムラー（1725-98年）、ベルリンの抒情詩人。その頌歌はホラーツィウスの技法をまねたもの。詩人博士 Poeta doctus、王立幼年学校の哲学・文藝学教授（1748-90年）、当時、文体および韻律分野の権威とみなされていた。

46) グライムは1758年に『1756年および1757年の出征にてある擲弾兵の歌えるプロイセン軍歌集』を刊行していた。

47) ハインリヒ・ヴィルヘルム・バハマン、マクデブルクの商人、織物工場主。

は友人である男性[48]の手紙でした。しかし、いかなる暴力がわたしのゆるぎない決心をくじいたのかわかりません。詩のかずかずをわたしに仕上げさせたのは、彼の約束でも、約束の洗練されたことばでも、わたしの窮乏でもありません。彼自身がそれを提案し、わたしが詩集の約束をした、ということです。いずれわたしはこの約束を果す所存です。

いっそうたくましさを増した精神の最初の産物であるこれらの詩は、これから世の人々にそれを迎えていただくための道として定められていたものです。わたしの天才がその父と申し上げたいのは友情の炎です。これらの子どもが完璧なものかどうかは判りません。ここには藝術など関与しておりません。ただところどころ、読書家であったことが功を奏しているにすぎません。なにしろ夏の日の多くの時間を利用して、ギリシア、ローマの英雄列伝八巻を読破しました。プルタルコス[49]こそ、ティーアガルテンのウェーヌス像のある柱まで出かけるときの唯一のお供でした。あの若いブナの木陰にすわって、夕闇が迫り、散歩していた人たちが町への帰り道を急ぐ時刻になるまで書をひもときました。そのあとバハマン家とシュタール家の方々が親切な食卓を用意して待っていてくださいました。ひともうらやむこんな生活が九月なかばまで続きました。

恋と文通　グライムとの文通はことのほか活発で、頻繁になりました。グライムがベルリンにいたのは四十日間でしたが、ちょうどそれだけの数の歌を快い掠奪物としてハルバーシュタットへ持ち帰りました。わたしはマクデブルクとハルバーシュタットへ行きたいという衝動に逆らえませんでした。万難を排しました。訪問のためだと自分に言って聞かせました、旅をしたいのだ、と。友人のバハマンが部屋を一つ用意してくれました。向こうに到着して最初のしごとはマクデブルク市に歌をささげることでした。でも、まるまる一年この町で過すことになろうとは予想もしませんでした。

司令官の令夫人が食事に招待してくださいました。そしてフォン・ライヒマン夫人［マクデブルク駐留部隊長の妻］がやがて世話をしてくださることになるとは予想だにしませんでした。お心の広いこの婦人にどうやら気に入られたようでした。いつまでここに滞在するつもりかとお訊ねになりました。詩人というのは大胆なものです。ここで冬を過せたら満足でしょう、ところが今の住いにはもう人がはいっているのです、わたしはそう答えました。夫人は自室の一つを提供してくれました。わたしにとってたとえようもなく美しい驚きでした。このことばを頼りにハルバーシュタットへ飛んで行き、そこで三十日間を過しましたが、わたしにとっては喜びと歌にみちた日々でした。

詩集出版　友情は三度までもわたしを冠で飾ってくれましたが[50]、友情の手で編まれた月桂冠は、君主のご命令で編まれた冠より青々としているものです。そのころわたしの歌集を編む最初の計画[51]が立てられました。フォン・シュピーゲル氏[52]とグライムがそのことで相談なさったようですが、わたしは通りすがりにちょっと耳にした程度です。

マクデブルクに戻ると、司令官のお宅もフォン・ライヒマン夫人のお心もわたしのために開かれていました。友人のバハマンはわたしのために四つ目の月桂冠を編み、敬虔な王女アマーリエ[53]のために受難カンタータを書かせようと、わたしの詩神の手に黄金のペンをもたせました。この神聖な歌が成功したかどうかは判り

---

48) ベルリンの書籍商、出版業者ゲーオルク・ルーデヴィヒ・ヴィンター。カルシュの多くの詩と詩集はここで印刷された。

49) ギリシアの哲学者、歴史家（50年ごろ—125年ごろ）。ギリシア・ローマの著名人四十四人の対比列伝を著した。

50) ハルバーシュタットでカルシュは三度、桂冠詩人の称号を授与された。

51) 1763年に刊行された『精選詩集』の予約出版。

52) エルンスト・ルートヴィヒ・フライヘァ・フォン・シュピーゲル・ツー・ディーゼンベルク、ハルバーシュタットの司教座聖堂参事会首席。

53) フリードリヒ大王の妹（1723-87年）、クヴェードリンブルク女子大修道院長。

ません。わたしはまだ気高いハープの調べにあまりにも不慣れな状態でした。信心深い悲しみに席を譲るため、わたしから頌歌の精神が去っていきました。国王の妹君のお好みにあわせて創作したという名誉は、わたしの幸福の輝かしい一部をなしています。宮廷伝道師ザックがわたしにそのための計画を伝えました。アマーリエご自身が構想を練られ、わたしは王女があらかじめ引かれた道筋からたびたびそれることがないようにと、おのが詩才に命じました。「王女がその音楽藝術をつうじてわたしのアリアに命を吹き込んでくださる」、そう思うだけで、さいなまれつづけた十五年という歳月を顧みてわが身を慰めるのに十分だったでしょう。

人生の頂点　わたしの幸福は高いいただきを目指して登っていきます。制約のない自由を享受し、食事が司令官の食卓に供せられ、もはや生活苦など無縁になったからです。息子[54]は寛大なコトヴィッツさんが育ててくださいますし、娘[55]のことはベルリンの友人たちが面倒をみてくれています。女王様も王子様と王女様もわたしのことばに耳を傾けてくださいます。友人たちは変らぬ誠実さを示してくれます。医師の助けもいりません。どのような歌、どのような本、あるいはどの散歩道を選ぶかは、全部わたしが決めます。

デルポイの神託を訊ねさせ、その者に山のような黄金を贈り、みずから捕えられたときには、おのが足かせを送った、かのリュディアの王[56]よりもわたしはしあわせです。ああ、たびたびその王のことを、また、人間にものごとの結末を問うよう命じたアテーナイの賢人［ソクラテス］のことばを思い出します。神の摂理はわたしの人生の秋を実り豊かなものにしてくれます。秋を春にしてくれます。神の摂理は、わたしたちが行儀のいい子どものように、驕ることなくその才能を用いるかぎり、わたしたちに至福と喜びとを授けたまうのです。しかし幸福な人間は、かつて傲慢と自己愛とをもったペルシア人に占領されたときクロイソス王が戦った相手、あの奸智にたけた二人の暴君よりも、はるかに強力な敵と戦わねばなりません。ああ、英知を語る友よ、どうかつねに自分自身を戒めるようわたしに命じてください。つねにわたしの心が困難な日々を顧みるのでなければならないと、また、その回顧の一つひとつが、荒れ狂う海に岸をめぐらせ、人間の不幸に限界をもうけてくださる神へのほめ歌とならねばならないと、そうおっしゃってください。神は、みずからつくりたもうた最上の人間のうちでもっとも高貴な人々の好意がわたしに注がれるよう計らってくださいました。わたしの人生は幸福であることをやめないでしょう、もしもわたしからこの最大の贈り物を奪うことを神が好まれず、わたしが最後の役割を終えるとき、貴兄の友人だという感情をもちつづけるかぎりは。

2. 自伝詩

2-1. 大伯父の思い出

☞ *Auserlesene Gedichte* von Anna Louisa Karschin. Nachdruck der Ausg. Berlin 1763. Mit einem Vorwort v. Barbara Becker-Cantarino. Karben 1996. S. 92-94.

今は亡き叔父、彼女の子ども時代の導き手に
1761 年

砂のなかから昇り来れ、
わが幼き日々の国にありて
安らぎを得たる、おんみ、なきがらよ。
かけがえのない老人よ、その手足に命を
　　ふきこみたまえ、
教えの蜜をわたしに授けた
くちびるよ、いま一度語りたまえ。

---

54) 前夫ヒルゼコルンとのあいだに生れた息子クリスティアン。1749 年の離婚後に生れた。この「才能がない」息子は 1763 年にベルリンへ出てから、生涯母に養ってもらった。最後は教会用務員、助教師となった。

55) カロリーネ・ルイーゼ、1750 年 6 月 21 日、フラウシュタット生れ。カルシュの最初の子。カロリーネもその子どもたちも生涯カルシュに養われ、母の家政を切り盛りした。

56) リュディア最後の王クロイソス（紀元前 560 年ごろ–546 年）とデルポイの神託成就をめぐる伝説。

あるいはオリュンポスの頂にいます
かしこい影よ、わたしの行くところをご覧あれ。
牛のあとについて牧場を行くのではありません。
この上品な人々を見てください、
だれもがあなたの姪の歌を口ずさんでいます。
その会話を、あなたのほめ歌をお聞きください。

枝を拡げた科の木は永遠に青々と
していなければなりません。
辛いしごとに刈り手が疲れるように
長い一日に伯父上がお疲れになり、
芝の椅子が疲れ切った伯父上を受けとめると、
あそこでわたしは最上の父の子のごとく
心をこめて伯父上の首にすがりついたものです。

あの緑の葉の屋根の下で
神々のなかの神について理解できた
二十のくだりを伯父上に復唱しました。
信者が大切に守りつたえた書物から
理解しがたいかずかずの箴言を引くと
敬虔な方よ、その意味を教えてくださいました。

黒い職服に身をかため
高い説教壇からわたしたちに
正しい生きかたを教える人たちと同じように、
伯父上は人間の堕落[1] と約束[2] について
お話しなさるとき、さながらやさしい
口づけのように
すべてのことばは語られました。

天界の住人たる伯父上よ、
ごらんください、わたしの友人たちが
しずかに涙して
しばしばわたしの頬をぬらすさまを。
もしも語りうるものなら、かけがえのない
影よ、語ってください、
伯父上の心はあのとき、わたしが生涯
幸福と名誉とに恵まれることを望んで
おられましたか、

毎日のように知恵の書を前において
ページをながめ、
野の花を摘み、
小さな両手でそれを運び、
伯父上の髪の飾りにしては、にっこりと
伯父上の横で薔薇の花びらのうえに
すわっていたとき。

伯父上がまわりのほかの魂の
三倍も光の衣を身につけられ、
もっと神のまなざしを楽しまれますように。
この地上の喜びの杯から
わたしに与えられるすべての滴の代りに
至福の海が伯父上をぬらさんことを。

2-2. 牛追いの少年

☞ *Auserlesene Gedichte* von Anna Louisa Karschin. Ebda. S. 96.「捕えられたヒバリに」(1761年10月5日、ハルバーシュタット) より。

背の高い草むらで牛は草をはんでいた。
牧童はおまえたちのさえずりに耳を傾けながら
柏の木の根元に立っていた。谷はおおぜいの
子どもたちが
おまえたちの歌にあわせて歩くのを見ていた。

2-3. 若い日の苦難と結婚生活

☞ *Auserlesene Gedichte* von Anna Louisa Karschin. Ebda. S. 111.「司教座聖堂参事会首席フォン・ロホフに――かくも美しい詩をものすることを教えたのは愛にちがいないと氏が語ったときに」より。

わたしの青春時代は心配事にうちひしがれ、
夏の多くの朝にはためいきまじりに
この単純な頭で口ごもるような歌をうたった。
若者にささげた歌ではなかった、
いな、蟻の群をごらんになるように
群なす人間を見下ろしたまう神にささげた
ものだった。

しばしば歌のたねとする感動もなく、
やさしい気持ちもはたらかずしてわたしは
妻となり
母となった。野蛮な戦争の時代に

---

1) アダムとイヴの堕落。
2) 神がイスラエルに与えた約束。

都市の壁をよじ登った戦士から
なかば口づけを強要された娘が
愛を知らずに母とならねばならないように。

わたしは愛を知る人のために歌をうたうとき、
つねに望みながら得られなかった
男のなかでもいちばんやさしい男のことを
考えている。
いかなる妻といえども、わたしが感じたこと
のないくちびるに
サッポーの静かな炎をもって口づけをする
ときほど
まことの心をこめて口づけする者はいまい。

2-4. 本と子どもの遊びの世界

☞ *Auserlesene Gedichte* von Anna Louisa Karschin. Ebda. S. 191 f.「カード遊びをする者たちに」より。

本だけをわたしは愛し、
読み、深く思いをめぐらせ、
粗末なものとはいえわたしも一冊こしらえた。
そこでは遊びもダンスも問わなかった、
英雄の頭を飾るものを読み、
戦と危険とを夢見た。

自分でつくったとりでを攻めて、
おのが民を整列させ、
さながら将軍のごとくふるまった。
槍を投げ、瓦のかけらを飛ばし、
めったなことでは退却せず、
声を張り上げて突撃を命じた。

要塞を攻め落すと
民を呼び寄せ、
敵国深く侵入し、
知恵を働かせてジグザグ行進、
ありとあるイラクサを敵に見立てて
その無数の敵をなぎ倒した。

そこにはわたしの強い一撃で倒れた
小さいなきがらが幾千となく
身を横たえていた。
わたしは誇りをもって自分のことを勝利者
だと思った。
わたしは子どもだった。けれども人はしばしば
歳をとっても子どもようにふるまうものだ。

それにしてもわたしの空想力は強い。
まだ家畜を追っていた
あのころからそれはもう働いていた。
しかしそれが見ているのは別な戦、
考えているのは、みずからを不滅の存在
とした人たち、
みずからを書いて不滅の存在とされた人
[グライム]。

2-5「ベロイーゼの閲歴」

☞ *Gedichte von Anna Louisa Karschin, geb. Dürbach.* Nach der Dichterin Tode nebst ihrem Lebenslauff hg. v. Ihrer Tochter C.[aroline] L.[uise] Kl.[encke], geb. Karschin. Nachdruck der Ausg. Berlin 1792. Mit einem Vorwort v. Barbara Becker-Cantarino. Karben 1996. S. 197 f.: *Belloisens Lebenslauf.*

わたしが生れたときは教区の厳かな祈願もなく、
わらぶきの小屋で司祭の願いもなしに
はじめて陽の光を見てこのかた、
小羊や鳩、
山羊を相手に五歳まで成長し、
一人の造物主の存在を信ずることを学んだ。
なるほど朝焼けは心地よく、
森はどこまでも青々と、野辺は色とりどりに
染まり、
小川は澄んで銀のように美しかったのだから。
ひばりがベロイーゼのために歌うと、
ベロイーゼもひばりのあとについて歌った。
小夜啼鳥がハンノキのしげみで
甘い歌声を聞かせてくれると、わたしは
早くもその調べと競いあいたいと思った。
そんなわたしを大伯父は見て、
ついて来なさいと言った。
向こうへ着くとすぐ大伯父から、
わたしたちの心を天まで引き上げてくれる
本を読み、理解することを学んだ。
四度の夏と四度の冬がわたしたちのかたわらを
羽が生えたように飛び去った。
大伯父の腕から引き離されて、わたしは

生れたばかりの弟のゆりかごの横に立った。
大きな弟を背負って
三頭の牛を野に追い、
牧童の歳月を過しながら
心ゆくまで自然の美しさを称えたものだった。
けれども幼くして結婚のくびきにつながれ、
つづけて二度までもその重荷に耐えねば
ならなかったが、
うれしいときも苦渋のときも
その慈しみを生れる前から
感じる者に寄り添ってくれる
ムーサイがいなかったら、
奮起することもおぼつかなかったであろう。
ムーサイはわたしに勇気と忍耐とを授け、
おさな子たちを膝にのせて
歌をつくるすべを教えてくれた。
女として、下女として、母として務めを果たし、
辛く重たい苦悩のかずかずにさいなまれつつ、
わたしはかの王のために、そして、
王とその勇士の群に
不滅の緑の冠を授けた戦のために歌った。
そうして、なお艱難辛苦の幾歳月を送った
はてに
ようやく他の重荷から解き放たれて、
わが人生の日々は歌となった。

3. 容　貌

☞ *Auserlesene Gedichte* von Anna Louisa Karschin. Ebda. S. 228-230.「エーザー氏が女詩人の肖像画を描いたときパーレモンに」(1761年12月16日) より。

ああ友よ。絵描きであろうか、絵描きは
わたしの目に
わたしの心を見つけた。
絵描きは探るような目つきで
精神を発見してそれを描いた。

しずかに感じる魂を
絵筆は描き、
魅力のないことをあなたもご存じの
口と頬とほほえみは描かなかった。

ああ、美しすぎるこの絵を
見ても、わたしのなかで考え感じる
不滅の友の
肖像であることがわかる。

この女は神々からわたしに
遣わされ、長いあいだ誤解されていたが、
向上しようと努めるその飢餓感は、
パンではなく、
自分のために友を求めてやまなかったのだ。

[……]

彼女のために魔術をつかうこの画家を教え、
こう告げてほしい、この歌姫は
外側の魅力には乏しいが
甘美な感情は豊かであると。

繊細につくられた心をもって
女はかつてサッポーと呼ばれた。
ムーサイにめでられ、
友人を裏切るようなことはなかった。

4. 詩人アンナ・ルイーザ・カルシュ、旧姓デュルバハ伝草稿

☞『1792年版ベルリン文藝年鑑 *Berlinischer Musenalmanach*』(カルル・ハインリヒ・イェルデンス編) に発表された、カルシュ自身によって書かれたという自伝。Zit. nach: *Anna Louisa Karsch (1722- 1791). Dichterin für Liebe, Brot und Vaterland.* Ausstellung zum 200. Todestag 10. Okt. bis 16. Nov. 1991. Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Ausstellungskataloge 39. Konzeption der Ausstellung: Gisela Staupe u. a. Berlin 1991. S. 24-28.

ニーダーシュレージエンの国境近く、ツュリヒャウ[ポーランド語でスレフフ]とクロッセン[1]とのほぼ中ほどにハンマーと呼ばれる分農場[2]

---

1) クロスノ・オジャイスクエ。12世紀以降ドイツ人の入植が始まった。1163年シュレージエンに併合、1742年プロイセンに併合。

2) ここは村落共同体の外にある荘園。

があった。この名前はおそらく、この地の水車を回す川に沿って他の水車小屋とならんで建てられていた何軒かの縮絨小屋[3]から起ったものであろう。建物といってもわずかしかなく、藁葺の宿屋兼料理屋がそこでいちばん立派な建物だった。この料理屋で、1722年12月1日、アンナ・ルイーゼ・デュルバヒンは生れた。父クリスティアン・デュルバハは村の農夫であり、料理屋の亭主であり、当地の穀物集積場の監督をしていた。父も母もしごとに追われ、幼い娘のしつけのことになど、ほとんど、あるいはまったく頓着しなかった。

五歳になると、祖母の兄という人がアンナを引き取った。名をマルティーン・フェトケといい、かつては役人であったが、当時は隠居生活をしていた。この人が両親を訪問し、アンナをポーランドのティルシュティーゲルという小さな町へともなったのである。当時はほかにしごとといって何もなかったこの賢明な老人は、少女に読み、書き、計算を教えることを喜びとするようになった。読み物は聖書であった。少女の興味をかきたてたのはとくにダヴィデとマカベア一族の英雄たちだった。

それからほどなくして母は未亡人になった。母は再婚すると、こまやかな愛情を注いでくれた大伯父のもとから幼いデュルバハをもう一度連れ戻した。おりしも大伯父は、かつてさる地主貴族と一緒に習ったラテン語の知識を全部少女に教えようと考えたところであった。少女はもう単語を五百も暗記し、十歳にしてもっと覚えたいと意欲を燃やしていた。しかし母は大伯父に娘を戻すよう真剣に求めた。娘にラテン語がいったいどんな役に立つものか、母には理解できなかったからである。どれほど異議を申し立てても無駄であった。悲しみのうちに、涙を流しながら娘を大伯父は手放した——そして二度と会うことはなかったのである。

娘は自分がまだ子どもだというのに、種違いの弟の子守女にならねばならなかった。両親は翌年分農場を出て、シュヴィーブス［シフェボジン］のほかの農場で小作をした。その年の夏、幼いデュルバハは三頭の堂々とした雌牛の牧童になった。少女は早くから運命の意志に従う才能をもっていた。うきうきしながら刈り株の残る畑で三頭の牛に草をはませ、かつてダヴィデやヨアブやマカベア一族の人々がイスラエルの敵どもにたいしてしたように、小枝でアザミの首をかたっぱしから刎ねた。刈り株の残る畑で草をやったあと、二番刈りの干し草が積まれた畑に移動した。小川が畑と野菜畑のあいだをくねくねと伸びていた。あるとき牛飼いの娘が小川にかかる木橋に腰をかけていると、向こう岸に一人の牧童がいた。少年は輪になっている牛たちに本を読んで聞かせているのだった。牛飼いの娘はあっという間に輪に加わり、熱心に耳を傾けた。翌日も岸に沿ってずっと牛を追っていき、小川が小石の上をさらさらと流れるあたりまで行った。ここなら楽に向こうへ移ることができた。この秋ほどすばらしい秋を味わったことはなかった。秋が去り、冬が来た。しかしその埋め合わせがあった。その間に親しくなった牧童が今度は本を貸してくれたからである。なかでも「不死身のジークフリート」「ペーターと銀の鍵」「美しきアラメーネ」「アジアのバニーゼ」「千夜一夜物語」などが牧童の蔵書のおもなものだった。幼い牛飼いはこれらをむさぼるように読み、牧童の境遇をとても愉快なものに変えた。

夏がまた近づいた。義父は本を読んでいるのを見ると不機嫌になった。文学少女は今度は裁縫学校に通い、そこで色とりどりの花の刺繍を覚えてうれしかった。しかし空き時間になると接骨木の茂みの根元に隠しておいた本をそっと取り出し、気づかれないように読んだ。

十四歳になったとき大伯父が死んだ。大伯父の小さな家と花畑と広い果樹園は祖母が相続し

---

3) 槌で素材（布、革など）を縮絨する工場や小屋。毛織物にせっけん溶液、アルカリ溶液を含ませ、圧力や摩擦を加えて収縮させ、組織を緻密にする、メルトン、フラノ、ラシャなどの整理工程の一つ。

た。祖母の娘はシュヴィーブスからここへ移り住み、これらすべてを買い取った。夫、つまり幼いデュルバハの義父がそれから一年して死んだ。父はルイーゼが子守をしていた三人のいたいけな子どもを遺していった。母はずっと病気がちであったため、死ぬ前に娘が食べていけるのを確かめたいと思い、まだ十六にもなっていないルイーゼを今度は結婚させた。この男のもとで与えられたしごとは、羊毛を仕分けし、撚り糸を巻き取り、仕分けした羊毛をすくことだった。この間、ルイーゼはこういうしごとをすべていそいそとこなした。しごとをしながら早くも歌をいくつもこしらえ、そのあと日曜日に、記憶しておいたのを紙に書きとめた。それから隣人が「死者の国の対話」を貸してくれた。それはこれまで接したことのない新鮮な分野だった。アレクサンダー、ポンペイウス、カエサルが登場した。そして文学少女は第一次シュレージエン戦争後 [4] からもうドイツのカエサルを称える歌を試みたが、今となってはもう覚えていない。むろんごくありきたりの内容であったと思われるが、将来の花の芽であることに変りはなかった。

彼女は最初の結婚で四度母になった。二度目の結婚生活は極度の貧困を招いた。およそまっとうな女が耐えられるかぎりのありとあらゆる悲惨な暮しを耐えた。1751年には、今なお存命の娘、旧姓カルシンに、憂いに沈む乳房を含ませた。泣きながら娘を胸にだきしめ、なかば餓死したような乳房からあたうかぎりの栄養を与えた。神はこの悲しみをじっとご覧になり、ある家族の心を引き立て、彼女にいささか援助の手をさしのべさせられた。彼女は感謝のしるしに、この家族の年寄の死を悼む歌を書いた。故人の息子が父の死の知らせを受けて帰宅したところ、この弔問歌があったため、この貧乏な女を学校時代からの旧友だったさるラテン語学校の校長に引き合わせた。校長はほとんど本など読んだこともない女がこれまで手にする機会がなかったような良書を貸してくれた。たとえば、ギュンター詩集、ハラー詩集、ヤングの訳書などである。さらに校長が紹介してくれた二、三の名望ある家からは、折節いろいろな贈り物をもらった。ほかにもポーランド・リサ［ポーランド名レシュノ］の二つの教会の説教師との友情もめばえた。苦しみはしだいしだいに軽減されていった。しかしいちばん大きな原因、今もその姓を名のっている原因は残り、妻をともなって、1755年、グロースグローガウ [5] に転居した。今は自分と四人の子どもと、働かない酒びたりの夫を養っていかねばならなかった。

七年戦争［1756-63年］が勃発した。偉大な国王のいさおしは目にみえて女を燃え立たせた。ロイテン近郊の戦い [6] ののち、勝利が宣言されたちょうどそのとき、疎開先のリサから戻った。女は大急ぎで戦勝歌を書いた。翌日それが感謝祭を祝う人たちに配られると、だれもが、これほどの貧窮にさいなまれながらこのような詩を書きえた奇蹟の女性に会いたがった。この女は戦争終結後、不滅の君主ご自身に向って、わたしは自然とフリードリヒの勝利のおかげで詩人になりました、と答えた。その後も、トールガウ近郊の最後の決定的な勝利［1760年11月3日］をうたったが、それからまもなく、呻吟していたさまざまな困苦のなかから、さながら神の天使に導かれるかのようにベルリンへと導かれたのである。二人の子どもはグローガウの墓に納めてきた。二人はさしあたりなんとか食べさせた。息子は、自分をベルリンへ連れてきてくれたシュレージエンの気高い貴族［フォン・コトヴィッツ男爵］の所領に残してきた。娘は、宮廷顧問官シュタールがベルリンの寄宿学校へ入れてくれた。

---

4) 1740年12月、プロイセンはシュレージエンを要求してオーストリアと開戦（第一次シュレージエン戦争 1740-42年）、これを契機にオーストリア継承戦争（-1748年）も勃発した。

5) グローガウはポーランド名グオグフ、ニーダーシュレージエン北部、オーダー河畔の町。

6) 1757年12月5日、プロイセンはロイテン（ポーランド名ルティンヤ）近郊でオーストリア軍を撃破。ロイテンはニーダーシュレージエン、ブレスラウの西方。

1761年、女はベルリンからマクデブルクの司令官フォン・ライヒマン夫人を訪ね、ここに丸一年滞在した。ここで安らかな静かな生活を味わった。つづいて戦争詩人グライム氏とのあいだにも親しい交際が始まった。こういうできごとが、詩人としての才能を発展させ完成させるために必要なすべてのものをかなえてくれた。かくして、ついに最初の詩集が成り、1764年に代金前納の形式で印刷された。彼女は当時読者が示してくれた心遣いに、心から感謝していると語っている。それは必要経費全額を差し引いて、フリードリヒスドール[7]で2000ターラーもの収入をもたらしたのである。しかしそれでも、これを維持するには涙ぐましい努力とぬかりない切り盛りが必要であった。

1763年8月11日、大王は彼女に格別な慈悲を示され、サンスーシで十五分間ことばをかけられたが、その包み隠しのない態度と生れ卑しい女の当意即妙の受け答えとにいたく満足され、最後に、生活援助を約束されたのである。1759年以降手紙をやりとりし、後援者でもあったフォン・ザイドリツ中将は、おりしもポツダムに滞在していた。王室側近の友人が中将に、カルシンには年額200ターラーを支給することになったと請け合ったようである。そこで中将は、代金前納の［詩集出版の］ことは国王にはお話ししないよう釘を刺しておくほうが賢明だと考えた。できれば黙っていたくはなかったが、立派な人物の命令を重んじてカルシュはこのことを話さなかった。しかしこの秘密主義がかえって不利に働いたのかもしれない。フリードリヒは約束を忘れた。カルシュは二十三年間でおよそ90ターラーを国王から少しずつ受け取った。ここから2ターラーを抜きとり、1773年、これをつぎのような書付けと一緒に送り返した。

「二ターラーなど大王の下賜されるもの
ではございません。
なぜならこれはわたしの幸福を増すもの
ではないからでございます。
それどころか、いささかわたしを
おとしめるものでございます。
ですからこれをお返しいたします。」

さりながら、フリードリヒはその英雄として君主としての品格ゆえに、いつまでもカルシュの心に生きていた。王はついに父祖たちのもとへ逝った。カルシュは大葬の日に旅人への呼びかけと太陽讃歌とを書いた。カルシュは慈悲を求めて群がる無数の人々に囲まれたお世継ぎに近寄ることはあえてしなかった。しかしドイツ文学の愛好者であり、寛大な国王であらせられる閣下は、カルシンの古い請求書にたいし、たいそう瀟洒な家を建てることをもってこれに代えさせられた。かくてフリードリヒの霊は、向こうの世界の英雄たちにまじってこれをご覧になりながらほほえまれたのである。

5. ザームエル・バウア『ドイツの女性作家』(1790年)

☞ザームエル・バウア（1768-1832）の女性作家事典より。Zit. nach: *Deutschlands Schriftstellerinnen von Samuel Baur (1790).* Als Nachdruck hg. u. mit einer Einleitung versehen v. Uta Sadji [Stuttgarter Arbeiten zur Germanistik, hg. v. Ulrich Müller u. a. Nr. 194]. Stuttgart 1990. S. 41-53.

アンナ・ルイーザ・カルシン

詩的天才を生みだすのは自然であって技藝ではない、とは古くから言い伝えられたことばである。この詩人の例はその雄弁な証拠である。もっとも成功した歌謡はすべて熱狂のうちに書かれたものだが、落ち着いた熟慮の末に完成されたものは、例外なく詩神の不興をかなりあからさまに現している。

カルシンは1722年に、ニーダーシュレージエンの国境近く、ツュリヒャウとシュヴィーブスとクロッセンにはさまれた小村に生れた。この村は家もまばらな荘園で、「デア・ハンマー」と呼ばれる。この村の貧しい七人の住民のなかで、

7) プロイセンの金貨。1750-1857年当時、1フリードリヒスドールは5ターラー金貨に相当した。なお、カルシュの『精選詩集』が出版されたのは1763年10月末。

父はもっとも名望ある人物であった。この村の農夫であり宿屋の亭主でもあったからである。父の死の直前、七歳のとき、分別のある老人であった祖母の兄に引きとられてポーランドへ行き、この人から読み書きを習った。生活苦が始まったのは十歳のとき、それから四十歳近くになるまでなみたいていでない辛苦を味わった。ふたたび母親のもとに戻された。まず種違いの弟の子守をしなければならなかった。それからまもなく、三人の子どもと両親の家畜の世話を任された。その直前から文藝への自然な愛着の最初の痕跡が現れた。異常なほどの歌の喜びを感じ、百篇もの讃美歌をそらんじ、労働のとき、小さな家畜の群の番をするときそれらを口ずさんだ。そうこうするうちに、自分も朝の歌をつくりたいという願望がきざした。牛追いの暮しのあいまに、生来の天才を助けてくれるもう一つのきっかけが現れた。知り合った牧童が、小川と家畜の群に隔てられながらも数冊の本を届けてくれた。『ロビンソン』『アジアのバニーゼ』『千夜一夜物語』が彼女の蔵書であった。そのおかげで牧童の暮しは快適になった。しかし幸せは永くは続かなかった。そのあとすぐささやかな家畜の群を離れ、ふたたび子守に戻らねばならなかったからである。これらの辛い下女のしごとをこなすうちに十七歳になった。母の勧めである男と結婚し、夫の加工した羊毛をすべて整えるしごとを与えられた。しかも家のきりもりまで、彼女一人のうえにのしかかっていたため、読書と歌の執筆への意欲をみたす時間は、日曜日の数時間しかなかった。この時間に、労働のあいまに着想した歌を書きとめた。

九年間の結婚生活ののち彼女はこのきずなから解放されたが、むしろはるかに辛いきずなをになうこととなった。母はそれからしばらくして二人目の夫に嫁がせ、同時に、カルシンの人生でもっとも粗末な貧窮の時期を迎えさせた。このうえなく不幸な結婚生活と艱難辛苦がもたらす、重苦しい、意気阻喪させる運命を、この二人目の夫のもとで耐え忍ばねばならなかった。しかしまさしくこの暮し向きのなかで、自然は幸運の遊びをあやつる全能を示したのである。いくつかの試作を残したあと、ポーランドのフラウシュタットで得たさまざまな知人に勇気づけられて創作を続けたのであるが、なかでも特筆すべき知人はハレの教授マイアーであった。この人物のことはうわさで知っているにすぎなかったが、ポーランドから歌を送ったことがあったのである。

他方、これら天才の発露は、詩神が彼女のうちにともした炎もなかば押しつぶされた果てに、その小さな火花として残るにすぎなかった。しかし偉大なフリードリヒの勝利がこの火に力を授け、ついにそれは爆発を阻害していたものを打破した。1755年、夫と四人の子どもとともに彼女はグロースグローガウに転居した。ここである書店に出入りし、文学作品やその他の多種多様な本を、無秩序に、とくに意図もなく、しかし大いなる熱意をもって読破した。カルシンの詩から判断する人は、本人がごくわずかな本をひじょうに早く読みとおしたことを知らなければ、おそらく相当量の本を読みあさったものであろうと思うにちがいない。

プロイセン王のいさおしはこの並外れた女性の教育を完成した。ロヴォシュッツ近郊の戦いのあとカルシンは最初の戦勝詩を書いた。しかしあいかわらず不幸の重荷にあえいでいた。が、運命は、並の人間ならうちひしがれてしまうであろう歎くべき暮しのなかから、ついに彼女を引き上げることを思いついた。シュレージエンの貴族であるフォン・コトヴィッツ男爵が、1760年に折しもグローガウを経てベルリンへ向かったときカルシンを知ったのである。善意にあふれた氏の心は彼女の不幸に同情し、そこから救い出してベルリンへともなった。首都に到着し、さまざまな文藝愛好者を知るや、その天才はありったけの能力を示しはじめた。まちでも宮廷でも讃歎の的になった。この地でうたった歌謡は彼女のために予約出版された。年金も受けるようになった。

その間、軍役についていた夫の愁歎にカルシ

ンはつぎのように書き送った。

「堪え性のない歩兵殿。

あなたの悲歎がわたしの心を動かすだろうと、それはなるほどそのとおりです。けれども、そこには見下げ果てた慢心のことばが躍っています。あなたが金切り声をあげている不幸というのがいったいどれほどのものか、わたしには理解できません。それも、真暗な牢屋で死刑判決を待つ人の金切り声のようです。あなたはことあるごとに愛国心とやらを吹聴しますが、ちっともその証明になっていません。そんなものにはもう厭きあきしました。あなたの誠実は口ばかり。証拠を出してくださいと言ったら、あなたに乱暴をはたらくことになります。でも、救い出してくれなどと、そんな甘ったるい声がどこから出てくるのか教えてほしいものです。一人の君主に仕えて自分の血が流れるのを見たいという誇らしい満足を得たいのに、どうして自分は男に生れなかったのかと、自然にたいして腹を立てている女ですよ。

ああ、戦場に送り出せる息子がいないのはくやしい。王が事実この戦に勝ち、詩神、わたしの詩神がその勝利をうたうなら、だれかわたしの家族の一人がいささかなりとも勝利に貢献したのだと思って、勝利の喜びは倍になるでしょう。[……] プロイセン王の兵士であることが恥ですか。英国人はこのドイツ人の栄誉をうらやんでいます。なのにあなたときたひには、それをばかにしています。

恥を知りなさい。そして王が、去る10月、レヒェンベルクに大勢の新兵を集め、ご自身の最初の戦の話をされたのを思い出しなさい。[……] 王は兵士たちのことを恥だとは思われなかった。その目に映ったのは無価値な人間ではなかった。あなたの目にはどう映ったのですか。あわれな人。あなたは、君主にして父、諸国の平安のためにご自身の栄誉を顧みず、安楽な暮しを捨て、自分に厳格であられる方の、遠く足もとにも及びません。どれほど多くの将軍が進路をふさがれ、あるいは殺されさえしていることか。あなたは祖国のために命をかけたいから、自分の命をそんなに大事にしているのですか。[……] 除隊を頼んでくれと言われても、やりかたを知りません。理由を訊かれるでしょう。でも、わたしとわたしの子どもたちを扶養してくれる人を返してくださいなどと言ったら、良心がとがめます。夫がいないと生きてはいかれませんとか何とか言えとでもおっしゃるのですか。そんなことを言ったら真実に反する罪を犯すことになります。笑われますよ。あなたのいうとおり難儀が理由ですなどとは言えません。ほかの幾千もの人たちとあなたが担っていくのはそうものです。お願いですからこんな理不尽な頼みごとはやめてください。従容として運命に従ってください。[……]夫のすべての義務と、結婚の法の神聖さは、けだもののような欲望をせめて別の女に向けさえしなければ、それで守られたことになります。ふだん夫が家じゅうのものを飲み屋につぎ込み、妻に家の切り盛りを任せ、分別を見せたことがなかったとしてもかまわない、それで害があるわけではありません。しかし夫はやはり男です。こぶしの力で妻はそれを感じます。あなたが不幸であればいいなどと思ったことはありません。でなかったら、せめて二年前に左肩の傷をひとに見せてもよかったでしょう。それでもわたしの友だちの前であなたを立てることはできませんでした。あなたの誓いと下心はわかっています。あなたはだれにたいしても不誠実です。空と風はあなたのかつての誓いのことばを聞いていました。わたしはあなたの誓いを信じました。あだな望みをいだいたものです。しあわせは六週間続きましたが、それをあなたは奪い取りました。泣きました。涙を見ても、あなたの荒れた心は動きませんでした。心の声を大にして、まっとうな人間になってくださいと申しましょう。もちろんわたしがそれで得をするわけではないかもしれません。それをこの目で確かめたいとも思いません。わたしは毎日を一人静かに過したい。わたしについて知っていただきたいのは、ほかでもありません、わたしが悪徳の敵であり、つねにあなたの友であったということだけです。」

この詩人の多くの作品は高い詩的天才を証明している。詩行の構成には軽やかな新しい歩みがある。比喩はしばしばひじょうに大胆で、それらが最高の抒情的感動の火花をありありと見せ、ドイツのサッポーという称号を授けられたのも当然のことだと思われる。ただしこの高い才能が、あるときはもしかすると困窮のために、あるときはちょっとした女の虚栄心のために、取るに足らない対象によっておとしめられることもあった。自分で見たかもしれないどんな小都市も、そこでもてなしてくれたどんなありきたりの人間も、歌の対象にしてしまった。カルシンの最上の作品としてあげられるのは、当然のことながら王子誕生に寄せる頌歌と、この王子に最初の男児が誕生したときに書かれた子守歌とである。わたしたちの手に残されたのは、貴重な二つの詩集と、文藝年鑑に散りばめられた多彩な作品とであり、個々の人物にだけ伝えられたまだ知られていない作品のなかには、保存するだけの値打ちのあるものも、かなり見つかるだろう。

6. フォン・クレンケ「詩人アンナ・ルイーゼ・カルシン、旧姓デュルバハ伝記草稿」(1791年)

☞ カロリーネ・ルイーゼはカルシュの再婚で生れた娘(1750 od. 1754-1803年)。1770年に叔父エルンスト・ヴィルヘルム・ヘンペルと結婚、81年離婚。82年、カルル・フリードリヒ・フォン・クレンケと結婚、翌年離婚。寄宿学校在学中(1761-67年)を除き母カルシュと同居。母の没後(1792年)その詩集を編み、冒頭に長文の伝記 *Vorberichtender Lebenslauf der Dichterin Anna Louise Karschin, geb. Dürbach* を掲載した。以下はその一部。Zit. nach: *Gedichte von Anna, Louisa, Karschin, geb. Dürbach*, a. a. O. S. 1-128.

母はこの子を1722年12月1日に産んだ。詩人みずからの記述によれば、生れたとき醜い子だったという。額のしわだらけの皮膚が、顔に深く陰気にくぼんだ両目の上まで垂れ、やせこけた顔にはうっとうしい気難しさが現れていた。体も顔の皮膚とまったく同じ黄色で、しわくちゃだった。上のかわいい子どもたちに慣れてしまっていた母は嫌悪の情をおぼえて生れたばかりのいきものから目をそむけ、こんな醜い子はどこかへやってもらいたいものだわ、水車の川にでもほうりこんでよ、と、思わず辛辣な冗談を口にした。他方、ぜひともここに書いておきたいことがある。詩人はその後けっして醜く育ったわけではなく、また、もしも身体と表情とをうまくあやつるすべを心得ていたら、死ぬまで美人でとおったであろうと思われることである。彼女は中背の、均整のとれた上品な立ち姿をしており、美しい、ずっと変らない顔色で、淡い褐色の髪と、これ以上望めないほど美しい、いかにも人間らしい額をもち、そこにはまさしく偉大な精神の光が宿っていた。輝きにみちあふれ、ひじょうに明るく雄弁な目、つねに赤い唇、上機嫌のときは表情に心から陽気な気分があふれていた。しかし、たいていその顔を支配していた眼光にさらされると、ひとは耐えがたい印象を受けた。しばしばある瞬間に気が散ることはあるが、それでも思考やふるまいが逸らされないようなとき、相手になるのはむつかしかったであろう。[……]

いなかの習慣に従って、幼いデュルバハも祖母に育てられた。彼女は物静かな、自分の殻に閉じこもった子どもで、寝ているときも起きているときもひとの邪魔をするようなところはなかった。それは六歳になるまで変らなかった。[……]

六歳になったとき母が未亡人になった。今や料理店を自分一人で切り盛りしなければならなくなったこの立派な婦人は大きな負担感をおぼえたので、子どもの教育のことまで考えるゆとりがなくなった。周辺のどこを探しても勉強させられるような学校はなく、教会さえ1マイルも離れたところにあった。母親がおかれていた状況は悲しむべきものであった。ちょうどそのとき、大学出で役人をしていたことがある自分の母親の兄が妻に死なれなかったら、子どもは完全な無知のままおとなになるほかなかったであろう。この人物はおりしも飲食店を切り盛りしてくれる女を必要とし、妹、すなわち幼いデュルバハの祖母に来てもらうことにしたのであ

る。彼は未亡人になった姪を訪ねるためにやって来た。そこに幼い少女がいた。そしてその子が聡明な頭脳とすぐれた記憶力をもっていることを見抜いた。農民たちと粗野な交際を続け、しつけをないがしろにしたら、これほどの才能が窒息してしまうにちがいないと考え、老人は妹だけでなくこの子も一緒に連れていきたいと母親に提案した。母は大喜びで同意した。

[……]

「マカバイ記」を勉強するのが好きになった。[……] このカノン化された英雄詩は彼女の想像力に影響を及ぼしさえした。この物語にすっかりなじみ、もう女であることがいやになった。歳の市で買ってもらった人形を梨の木のこずえに投げあげただけでなく、ついでにままごと遊びも捨ててしまった。本を読まないときや勉強しないときは庭に出て、はしばみの枝を持ち、敵の軍団に襲いかかるようにイラクサに斬りかかった。[……]

人の心理になどてんから理解のない祖母は、そんな時間つぶしに不平を言って頭を振り、孫が本を読みすぎるのを叱った。いや、孫が書くことまで勉強しているのを知ると、母方の先祖の道徳がないがしろにされていると、かんかんになって怒った。祖母は兄の良心に訴えてその罪を反省させようと、こう言った。娘が読み書きなんぞをして怠け者になりふしだらになったら、兄はいつかきっと後悔しなければならなくなる、と。「[……] 女の子に書くのを覚えさせるなんてとんでもない。ぜったいだめ。娘は書けちゃいけないのよ。所帯をもったら書くことよりほかにやることがあるわ。どうせ恋文を書くのが関の山で、それよりほかにいいことなんかありゃしない。書くのを覚えさせるなんてぜったいにだめ。」

[……]

[……] この間に再婚し、また所帯を大きくする状態になっていた幼いデュルバハの母は、娘が読み書き計算を覚えたことをいやだとは思わなかったが、ことラテン語については自分の母親とまったく同じ意見だった。そこで娘の頭が狂ってしまわないようにとみずから叔父を訪ね、もう十歳になった娘をふたたび引きとった。[……] この瞬間から詩人のいとわしい運命が始まった。そしてこの [大伯父との] 別離は彼女の墓を越えて続く悪影響を残すこととなった。

[……]

[……] すっかり怠け者になってしまうといけないので、母は三頭の子牛を娘に預けた。娘は毎日遠く離れた小作地の一部であった牧場まで牛を追わねばならなかった。このようなしごとはカルシンのような人にふさわしくはないように思われるが、本人はこの体験を思い出すたびに、けっして不愉快にはならなかったのである。それどころか牧童の歳月を人生でもっともうるわしい時代だと考えていた。ここで味わった自由、花の咲き誇る周囲の輝かしい自然、いくつも小川の流れる牧場、いたるところに拡がっていた愛すべき平安——それらは無数の美しい像で彼女の魂をみたした。それらの像をつくったのはほかならぬ彼女自身であった。族長が王であり、最高の詩人が黄金時代を夢見た牧童の身分以上に、いったいいかなる身分がかくまでも心を慰めてくれるであろうか。

そのささやかな家畜を追ってはじめて草の多い牧場に足を踏み入れたとき、彼女は十三歳であった。ここでかつてないほど空想の衝動を感じたが、やりかたさえ知っていたら、それらを絵にしたことだろう。読むべき本もなければ書く道具もなく、思いを告げうる相手もいなかった。こうして彼女は子牛と時間を過ごしながら、ただ空想をもてあそぶばかりであった。しかしある日、感傷的な夢にふけっていると、突然一頭の牛が逃げ出した。牛は別の牧場との境界をなしている濠をやみくもに渡りはじめた。不安にかられて幼い牧童は濠に入り牛のあとを追った。ほかの二頭は自然にあとからついてきた。彼女はかなりの距離を走ってようやく牛に追いついた。さて、少し休もうとしてあたりを見回してみると、そこはまったく別の牧場であった。そしてやや離れたところに牧童がいることに気づいた。少年は木の下にすわり——ああ、すば

らしい幸運であったが、本を読んでいたのである。うれしくて胸が高鳴った。思うが早いか少年のそばに立っていた。ごく短いことばをふた言三言交わしただけで終生の友になっていた。そして本好きがたちまち二人の心を友情のきずなで結びつけた。たといこの瞬間にユピテルのような神が天から舞いおりて彼女の子牛の一頭に姿を変えても、詩人はそれに気づかなかったであろう。若い牧童が読んでいた本に、それほど気持ちが執着していたのであった。その本は、当時ドイツの作家の名声を高からしめた独創的作品の一つであった。この種の作品には、『美しいメルジーネ』『不死身のジークフリート』『金の鍵をもつペーター』『政治的コリカ』『千夜一夜』『アジアのバニーゼ』『ロビンソン・クルーソー』、ほかにもはるかに浅薄な作品があった。

少年は彼女より二歳ほど年上で、彼女の両親が住んでいたのと同じ小さな町の住人だった。姿かたちは、けっしておおげさでなくアイソポスのような人物を描くのにうってつけの見本になりうるほどで、しかも口べたとしゃがれ声までかのギリシアの寓話作家を髣髴とさせるものであった。しかし頭は彼が生れた町の住人のだれと比較してもずっと聡明だった。心情は悟性によってつねに平静に保たれていた。[……]

[……] 彼女は夏が永遠に続くことを願ったが、それは過ぎていった。ところで彼女のふるさとで本を読もうとすれば、絶対ひとに見つかってはならなかった。母親たちは読書にがまんがならなかったからである。彼女はたびたび牧童から本を借り、注意深く庭のにわとこの木の根元に隠した。夕方になるとまたそれを取りだし、夜明けに、まだ寝ていると思われているすきに読むことができるよう枕の下に隠しておいた。また、見つからずに逃げ出せたときはいつも牧童の父の家へ行き、牧童と一緒に本を読んだ。やがてまた夏となり、若い牧童は必死の思いで入手しようとした新しい本で、牛追いの少女のために夏をいっそううるわしいものにしてくれた。なるほど読書によって健康な思考が、疲れさせる機知と知らないことばづかいの流れに溺れてしまうこともよくあり、彼女の精神もこの読書によって揺れ動くことはなかったが、感覚はいっそう振幅が大きくなり、読書によって、また、行儀のいい牧童との親しい交際によって、彼女の着想は洗練された。もしかすると牧童身分のこの三回の夏こそは、彼女の詩人の血管をせいいっぱい拡げ、充溢させた源泉であったのかもしれない。なぜなら、ここでは知識欲も本だけでは満足せず、自然界のもろもろの事物にかんする知識も与えてくれたからである。彼女は多種多様な鳥と田舎の昆虫を覚えた。木や草や花の種類の違いを研究し、もっとも取るに足らない雑草もたぐいまれな記憶力を駆使してその名前を覚えてしまった。同じようにして四季の移り変わりも自然界の変化も知り、星空に親しんだ。だからこそ美しい色彩のすべてを動員して輝かしい自然のすがたを描くことができたのであり、それが、もしかすると他の追随をゆるさぬ美質をその傑作のかずかずに与えたのかもしれない。詩人がこのような牧童の暮しではなく、人の手によるしつけの幸福に恵まれ、現代の本を持っていたら、いま広く知られている高い水準にまでその才能を飛躍させることはかなわなかったであろう。ほんとうの天才は、永いあいだその才能自身にのみゆだねられたとしても、そのことによって損なわれることはないであろう。事実、あまりにも早くひじょうにすぐれた手本を示してしまうと、そのような教育法によって天才はみずから大胆に飛翔することにたいし臆病になってしまうのである。それゆえ、早くから養成された才能が大胆に躍動するほど高められるのはまれなのである。他方、放任された天才の野性の自由な力がそれを容易になしとげてしまうのは、天才の奔放な流れに翻弄されてときどき規則をないがしろにしたり、流れに任せて取りかえしがつかないことになる危険はあるものの、まだ知らない藝術の規則を恐れる必要がないからである。

7. プロイセン一般就学義務制度導入に関する勅令（1717年）

☞ *Geschichte der Pädagogik.* Dokumentationsband I. Hg. v. Albert Reble. Stuttgart 1971. S. 232.

神の慈悲によりてフリードリヒ・ヴィルヘルム、プロイセン国王、ブランデンブルク辺境伯、神聖ローマ帝国侍従長官、選帝侯

不快の念をもって余の聞き及ぶところであるが、視学官および司祭よりたびたび余のもとに寄せられる訴えによれば、とりわけ田舎において子弟を学校に通わしめることをいかにも怠る両親があり、それゆえ貧しい若者が、読み書き計算は申すに及ばず、若者の健康と幸福とに資する必要不可欠なことがらにおいても、はなはだしき無知の状態に放置されたまま長ずるにまかされているという。それゆえ余は、このきわめて有害な禍根から一気に救い出すべく、慈悲の念によりここに一般勅令を公布せしめ、大いなる恵みもて以下のとおり厳命することに決した。学校が設置されている場所においては、今後両親に、子弟一名につき週2ドライアーの授業料を納付せしめ、冬期は毎日、夏期は、両親が子弟を家政に必要とするゆえ、週に少なくとも一度ないし二度学校に通わしめ、冬に習得したことがらを完全に忘れることなからしめるべく配慮せしめ、これに違反すれば両親を厳罰に処するものとする。ただし両親にその財力なき場合は、各地区の救貧基金より2ドライアーを支給すべきことを余は望むものである。つぎに余は恵みもて、今後司祭が、とくに田舎においては毎週日曜日午後、教区民に教理問答の授業を遺漏なく実施すべきことを望み厳命する。——おんみらは本勅令に謹んで従い、余の尽きせぬ恵み深きこの意思と命令とを各地に公表し、とくにその命令権を行使しなければならず、また、監視を怠ることなく、違反者の氏名を罰として公示するよう官憲に指示しなければならない。余の恵み限りなき意思は本状にもとづき行われる。余はおんみらに慈悲の念をいだくものである。1717年9月28日、ベルリンにてこれを公布す。

8. バルトロメーウス・バハー『少女の友』（1807年）

☞ Bartholomäus Bacher (1773-1827), *Der Mädchenfreund,* 1807. Zit. nach: *Kinder- und Jugendliteratur. Mädchenliteratur. Vom 18. Jahrhundert bis zum Zweiten Weltkrieg. Eine Textsammlung.* Hg. v. Gisela Wilkending [Universal-Bibliothek Nr. 8985]. Stuttgart 1994. S. 78 f.

通学の励まし　ものがたり

マリーが六つになりましたとき、おとうさまはマリーを学校へ通わせなさるのがいいと考えられました。女学校の先生がとても熱心で、教えるのがお上手で、あずかった子どもたちをほんとうの父親のように扱っておられることを、おとうさまはよくご存じだったので、なおさらのことでした。それで、おとうさまは仕事場からお帰りになると、前の晩にマリーをお呼びになり、こうおっしゃいました。「なあ、おまえ、おまえもだんだん大きくおなりだから、だんだんとたくさんいいことを勉強しなければいけません。おまえが立派な人になったら、おとうさまもおかあさまも、ほかの人たちも、いつかきっとおまえのことを喜ぶ日がくるだろうからね。おとうさまがおまえの先生になるのがいちばんいいのだが、毎日おしごとがあって時間がないのは、おまえもよく知っておいでだね。それでね、おとうさまはおまえをあしたから学校へやろうと思う。」おとうさまのおっしゃることを聞いて、娘は体をふるわせ、泣きはじめました。でも、おとうさまはことばを続けて、こうおっしゃいました。「ほら、こないだの日曜日、とてもやさしくおまえとお話ししてくださった親切なあの方のこと、おぼえておいでだね。あの方におまえの先生になっていただこうと思うんだよ。あの方ならおまえによいことをちゃんと教えてくださるだろう。おまえがおっしゃることをよく聞いて、なまけたりなんぞしないで、注意していたらね。

おまえが日に日にたくさんのことを覚えていくのがわかれば、おとうさまはほんとうにうれしいだろう。これから学校でもご指導を受けることになる編物や縫い物なんぞがだんだん上手になったら、おかあさまだっておまえのことを喜んでくださるだろう。」「学校へ行ったらぶたれるかしら」と娘が質問しました。するとおとうさまはこうお答えになりました。「お行儀がよくて、おとなしくて、いっしょけんめい勉強する子が学校で罰をもらうことなんかないのだよ。ましてや、ぶたれるなどということはありません。だって、なにもしていない子に、どうして先生が罰をお与えになったり、たたいたりなさるものかね。よいことをおっしゃっても、それを聞かなかったり、ほかになにか乱暴な悪いことをした手に負えない子なら、学校で罰をもらうこともあるさ。だけどそういうことはめったにないのだよ。」これを聞いて娘はいっぺんにこわくなくなりました。娘はつぎの日の朝、うきうきして学校へ行きましたが、毎日たくさんよいことを教わるので、一時間もなまけませんでした。ましてやまるまる一日なまけるなどということはありませんでした。けれどもほかの子どもはなまけることをおぼえて、それが自分たちをひどくそこねることになりました。

少女はよいことをたくさん勉強したければ、まじめに学校へ通わねばなりません。

9. ヨーアヒム・ハインリヒ・カンペ『父から娘への助言』(1789年)

☞Joachim Heinrich Campe (1746-1818), *Väterlicher Rath für meine Tochter. Ein Gegenstück zum Theophron. Der erwachsenern weiblichen Jugend gewidmet*, 1789. Zit. nach: *ebda.* (wie Nr. 8), S. 149-154.

女の一般的、個別的天職について

おまえをつくられた方の御心に照らしてみたとき、おまえが全力で努力していくべき目標とはいったいどのようなものだろうか。

この疑問が際限もなく大切であることはおまえにも今にわかると思うが、その答えを発見するべきところに発見するためにまずもって思い起してもらいたいのは、人として社会人として生きていけるよう成熟していくうえで、これからおまえ自身を、したがってそれはおまえの天職を、という意味でもあるのだが、二つの視点からよく見つめねばならぬということだ。おまえは一人の人間だ——ということは、人類の一般的使命についてまわることは、すべておまえの天職でもあるということだ。おまえは女性だ——ということは、男と人間社会と市民社会のために女の果たすべき役割がおまえの天職であり使命でもあるということだ。[……]

[……]

わが子よ、たといおまえの姉妹が、まさかいつまでもあのような状態が続くとは思えないが、揃ってあのみじめな恥じるべき定めに満足だと言っても、おまえの心と分別はきっとそれに強く反撥してくれるだろう。[……] おまえのまだ健やかな人間らしい内なる感情は、わたしたちの万物の父の叡知がおまえとおまえの生活とに関して用意しておられるかもしれない計画について、かならずやもっとすぐれたこと、もっと偉大なこと、もっと尊いことを、おまえに予感させてくれるだろう。そしてこの予感はおまえを失望させはしない。実を言うとおまえたちは、大きな子ども、おもちゃの人形、どこかのおばかさん、あるいはそれどころか復讐の鬼となるべく定められているのではない。それよりもむしろ——ああ、おまえの誉れ高い天職をそのすぐれた品位への感謝にみちた喜びをもって聞きなさい——ひとをしあわせにする妻、かたちづくる母、家の中の賢い管理人となるべく定められているのだ。より大きな重荷と心配と苦労とを担わねばならない人類の残りの半分である男のために、こまやかな心配り、愛情、世話、配慮によって、生活を甘美なものとすべき妻。子どもを産むだけでなく、子どものうちに美しい人間らしい徳の最初の芽を育て、子どもの精神的能力の最初のつぼみを賢明に大きく育てるべき母。細心の注意、秩序、清潔、勤勉、倹約、

やりくりの知識と器用さを発揮して、稼いでくる夫の幸福、名誉、家庭内の安らぎとしあわせをゆるぎないものとし、夫のために食事の心配を軽減し、夫の家を平和と喜びとしあわせの住いとすべき家政の管理人。この、女の気高い尊敬すべき天職をけっして忘れてはならない。そして、よく覚えておくがいい、全人類社会の福祉は、究極において、もっぱら、おまえたちの準備がちゃんと整っているか、それともおざなりかに左右されるのだ。なぜなら、家の中の家庭の幸福はいうに及ばず——ちょっと聞くと信じられないように思えるかもしれないが——国家の公共の福祉も、大部分はおまえたちの手に握られ、すべてとは言わないまでもその大部分は、女がその自然の、市民的使命をどのように果たすかに左右されるのだ。川は水源次第だ。女から生れ、のちのしつけをもってしても二度とふたたび根絶できない善悪への最初の印象を女から受け取る市民もまた女次第である。川は水源次第である。人間の公の生活もまた人間の家庭生活次第である。国家の公共の福祉もまた家の中の家族のしあわせ次第である。[……]

10. 十八世紀の婚姻論と女の役割

10-1. ダーフィト・クリストフ・ザイボルト (1776年)

☞ David Christoph Seybold, *Predigten des Herrn Magister Sebaldus Nothanker aus seinen Papieren gezogen*, Prag 1785 [erst: 2 Bde. Leipzig 1774/76], S. 191-212.

まず第一に、夫は妻にたいして暴君であってはならず、妻を奴隷のように扱うようなことはせず、妻にたいしては自分のことばとしごとが愛にみちていなければならないということです。[……] 妻にたいするこの愛にみちた態度を、みなさんは

第二に、とりわけ妻がなにか失敗したときや、妻の支度したもの、ことばや行為のなかに不満を感じる原因がみなさん自身にあるときにこそ、証明しなければなりません。[……] しかし、もしも夫が妻の犯した過失を指摘し、腹を立てて非難するばかりで、些細なことにこだわって、ライオンのように怒り狂うなら——妻は改善されるでしょうか。[……]

第三の義務 [……] はこうです。妻を裏切るな。ほかの女性のほうが夫は気に入っているのではないかなどと妻に疑惑をいだかせるようなきっかけを妻に与えてはなりません。このような疑惑が結婚生活のなかにひとたび侵入すると、夫婦のしあわせはすべて破壊されます。[……]

みなさんにお勧めしたい第四の義務 [……] はこうです。妻がひもじい思いをしないために、また、いつか神がみなさんを奥さんから分かつときが来て、奥さんが生活の糧を自分で得られるよう、まめまめしく働け、ということです。[……]

妻の第一の義務は夫を敬うことです。使徒が述べておられるように、夫は妻のかしらです。そのかしらに分別の座が配されているのです。[……] 男は神からよりすぐれた分別を授けられ、男の洞察力は進歩し、より多くのものを見渡すことができ、家政全体をよりよく秩序づけることができます。ですから妻には夫を敬う義務があります。つまり、妻は夫を尊敬するだけでなく、夫の恥になるようなこともしてはならないということです。なぜなら夫の名誉は妻にとっても名誉であるからです。[……]

[……] みなさんは——これがお教えしたい第二の義務です——もっと譲ることを学びなさい。妻がもっと沈黙を心得るなら、結婚生活でいかに多くの不和が避けられることでしょう。[……]

第三に、わたしは女性一人ひとりに夫への貞節を勧めます。[……] 太陽が昇ると、それは主の高い空にかかる飾りとなりますが、同じように慎ましやかな妻はその家の飾りとなります。これにたいして、太陽に照らされるもののなかでもっともさげすむべきものは不実な妻です。それは女性の恥であり、夫にとって地獄にほかなりません。[……]

いよいよ最後の特別な義務 [……] ですが、

それは家の切り盛りに最善を尽くせということです。夫が野良仕事をし、額に汗して作物を育てているのに、妻が家にいて、外で夫が稼いでくるものを浪費することがままあります。これはまちがっています。稼ぐより浪費することのほうがずっとかんたんです。ですから、夫が野良仕事に専念するなら、きちんと家の切り盛りをし、家事をまっとうにこなすようにして、夫の稼いでくるものを保存するようにしなければなりません。[……]

10-2. クリストフ・ゼルハーマー (1701 年)

☞ Max Rumpf, *Deutsche Bauernleben*, Stuttgart 1936, S. 230 f. Zit. nach: *Frauenleben im 18. Jahrhundert*. Hg. v. Andrea van Dülmen. München u. Weimar 1992. S. 35 f.

縫い物をし、糸を紡ぐこと、つくろい、掃除すること、料理し、磨くことは女のためのしごとである。畑を鋤き、まぐわで耕すのは、パンをそれ以外の必需品とともに家へ調達するための男のしごとである。[……] したがって女は男からパンを受け取り、男は女から干し草と亜麻布、料理とスープとを受け取らねばならぬ。男は畑へ出て、そこから家全体のためにまっとうな食糧を調達し、他方、女は家を守り、よほどやむをえぬ事情がないかぎりは、みだりに家の外にすがたを見せるべきではない。[……] 夫婦の愛情と安らぎがつねに夫婦生活の支えとなるようにしたければ、とくに女が上品なふるまいと実直さ、目立たぬ態度と孤独、寡黙とまめまめしい労働 [……] によって、所帯を注意深く切り盛りしながら、つねに愛情を維持するよう、ひたすら心がけねばならない。家の外で行わねばならない他のしごとは男の領分である。男は市役所、穀物市場、畑、仕事場にいるので、女は針刺し、糸紡ぎの巻竿、食料品戸棚、衣服、亜麻布戸棚、台所などにしごとをもっている。[……] 以上に述べた方法で、二人が結婚生活でそれぞれの重荷をにない、等しい愛情をこめてそれぞれの軛を引くならば、この軛としての性格はすべて目に見えて軽減されるか、それどころかすっかり消えてなくなりさえするだろう。

10-3. カルル・フリードリヒ・ウーデン (1783 年)

☞ Karl Friedrich Uden, *Über die Erziehung der Töchter des Mittelstandes*, Stendal 1783, S. 159-162. Zit. nach: *Frauenleben*, a. a. O. S. 39.

娘は第一に、生れながらに (von der Natur) 忍耐と服従の定めを負っている [……]。

女は結婚するまでのあいだは両親に服従する。結婚によって変化するのはその軛だけである。みずからすすんで服従すること、不平を言わず、抵抗せず、ただ静かに従う態度、女はそれを当然のみつぎものとして両親に示してきたが、それを今度は夫が要求する。女は家の支配者なしにはいられない。家の支配者は厳格な定めにのっとってその小さな王国を支配することが多いが、気まぐれのほかに何の定めを知らない場合も少なくない。崇拝する恋人は専制君主のごとき夫となる。[……]

われわれ男のそれを質量ともはるかにしのぐ多様な生活苦に、女が責めさいなまれていることを忘れてはならぬ。[……] 女の身体構造とその素質と使命のすべてに特有な重荷と不愉快がともなうのは、ある程度やむをえない。[……]

夫一人なら自分の力ではそれに耐えられまい。しかし災厄の大部分は夫にではなく、人類の弱い部分に課せられてきた。その点で自然の意図はひじょうに賢明だったが、重荷に耐えられるようにする根拠をも、自然は婦人のうちにおいたのである。なぜなら自然は、忍耐、柔和、柔軟さ、中庸の素質を婦人に授けたからである。

10-4. ルイーゼ・アーデルグンデ・ヴィクトーリア・ゴトシェート

☞Luise Adelgunde Victoria Gottsched, Das XXIX. Stück der *„Vernünftigen Tadlerinnen"*. Zit. nach: *Frauen der Goethezeit in Briefen, Dokumenten und Bildern. Von der Gottschedin bis zu Bettina von Arnim. Eine Anthologie* von Helga Haberland u. Wolfgang Pehnt [Universal-Bibliothek Nr. 8454-65]. Stuttgart 1960. S. 38.

多くの人が女性の学識というものに根深い憎悪をいだいているのは、何度みても不思議でしかたがない。たいていの人がどういうときに女

性をにいちばんこっけいな、おぞましいものとして思い描くかというと、それは学識ある婦人という肩書をあてがうときである。学識のある妻をもらうくらいなら一生独身でいたほうがましだと考える男がいるのはまちがいない。[……]

11. カルシュ『精選詩集』序文

（ズルツァー執筆）

☞ Anna Louisa Karsch, *Auserlesene Gedichte* [1763], a. a. O. S. VII-XXVI.

詩人は教育と規則によってつくられるのではなく、その召命と能力とを自然からのみ受けとる、とは古来よく知られたことばである。この召命を授かった者は意図や技術とは無関係にムーサイの言語を語る。しかしこの召命がなくても教育と規則とで補えるかというとそうはいかない。プラトーンは、歌を感激によって生みだし、その歌が何であるか自分も意識しないというのが、詩人のほんとうの特性だと言っている。詩行が調和し進行するのにともない詩人は熱狂する、それが詩人に思想と像とを提供するのであって、そういうものは腰を落ち着けて見つけられるものではないというのが、プラトーンの見解である。だからもっとも卓越した詩人のほうが規則よりも古く、また、いかに精緻な批評といえども、藝術以前の歌より完全な歌を生みだしたことがないのは不思議なことではない。

ここにわたしたちが何篇かの精選された歌謡を世に送りだす詩人の例は、先のことばの真実を疑いようもなく証明する。意図もなければ技術も教育もなく、彼女が最上の詩人の仲間入りを果たすのをわたしたちは目撃する。自然が感激をとおしていかに作用するか、それなくしては意図も努力もいかに自然の欠落を埋めるすべがないか、この詩人をみてわたしたちは驚きを禁じえない。もっとも成功した歌謡はすべて想像力の灼熱のうちに書かれたものである。これにたいして、意図をもち、じっくり考えた末にこしらえた作品では、つねに無理強いした痕跡とムーサイの不在がかなりあらわになっている。詩人が集いにおいて、あるいは孤独な時間に、なにかの対象に活きいきと心を動かされると、その精神が突如として熱を帯びる。忘我の境地に立ち、魂の一本一本のばねが活発に動きだすと、彼女は詩作へのあらがいがたい衝動を覚え、ムーサイの吹き込む霊感のままに、驚嘆すべき速さで歌を書く。ぜんまいを一杯まで巻けばほかの助けなしに正しく進む時計のように、魂が最初の想念に触発されるや、思想と像がいかにして自分のなかに生れるのか、などということはわからないまま、彼女は歌うのである。詩行の調和と進行が感激を支えるというプラトーンの精緻な考察が、わたしたちの詩人の実例によって証明されるのを、わたしたちは目のあたりにする。彼女みずからが言うところの調子と韻律が決まれば、思想と像とを見つける苦労も努力もなしに、歌全体がたちまちにして流れはじめる。素材と表現のもっとも精緻な変化が、ペンの下で、ペンに宿るがごとく生れるのである。

わたしたちの詩人がその召命を自然からのみ授かったことがいかに疑いえぬ事実であるか、当人の生活状況のすべてがそのことをもっとも明確に証明する。なぜならそこには、自然にもって生れた素質以外に、文藝への衝動を人工的に彼女のなかにつくり出せる要因が何も見出せないからである。この詩人の場合、学習によって獲得した規則は天才の代役を務めうるということを納得させられるような状況が何一つないのである。この詩人はどん底と紙一重の境涯に生れ、その教育も、子ども時代と青春時代のはじめに与えられたしごとも、卑しい出自に見合うものであった。しかし長じてなおその暮し向きは、自然のほうが彼女の遭遇するあらゆる障害よりもはるかに強力でなかったら、かならずやその精神をもっとも深い泥にまみれさせたであろうたぐいのものであった。

彼女は 1722 年にニーダーシュレージエンの国境近く、ツュリヒャウとシュヴィーブスとクロッセンにはさまれた小村に生れた。この村は

人家もまばらな荘園で、「デァ・ハンマー」と呼ばれる。この村の貧しい七人の住民のなかで父はもっとも名望ある人物であった。この村の農夫であり宿屋の亭主でもあったからである。父の死の直前、七歳のとき、聡明な老人であった祖母の兄に引きとられてポーランドへ行き、この人から読み書きを習った。生活苦が始まったのは十歳のとき、それから四十歳近くになるまでなみたいていでない辛酸をなめた。ふたたび母親のもとに戻された。まず種違いの弟の子守をしなければならなかった。そのあとすぐ両親の家畜のすべてである三頭の子牛の世話と面倒をみるしごとを与えられた。その直前から文藝への自然な愛着の最初の痕跡が現れた。異常なほど歌う喜びを感じ、百篇もの讃美歌をそらんじ、労働のとき、小さな家畜の群の番をするときそれらを口ずさんだ。そのためそれがどのような歌であったかもう記憶していないが、自分も朝の歌をつくりたいという願望がきざした。

牛追いの暮しのあいまに、生来の天才を助けてくれるもう一つのきっかけが現れた。知り合った牧童が小川と家畜の群に隔てられながらも数冊の本を届けてくれた。『ロビンソン』『アジアのバニーゼ』『千夜一夜物語』が彼女の蔵書で、若い牛追いの娘はそれらをむさぼるように読んだ。そのおかげで牧童の暮しは快適になった。

しかし幸せは永くは続かなかった。そのあとすぐささやかな家畜の群を離れ、ふたたび子守に戻らねばならなかったからである。これらの辛い下女のしごとをこなすうちに十七歳になった。今まさにそれまでよりもはるかに辛い人生を歩みはじめたのである。母の勧めである男と結婚し、夫の加工した羊毛をすべて整えるしごとを与えられた。しかも家のきりもりまで彼女一人のうえにのしかかっていたため、読書と歌の執筆への意欲をみたす時間は、日曜日の数時間しかなかった。この時間に、労働のあいまに着想した歌を書きとめた。

九年間の結婚生活ののち彼女はこのきずなから解放されたが、むしろはるかに辛いきずなをになうこととなった。母はそれからしばらくして二人目の夫に嫁がせ、同時に、カルシンの人生でもっとも粗末な貧窮の時期を迎えさせた。このうえなく不幸な結婚生活と艱難辛苦がもたらす、重苦しい、意気阻喪させる運命を、この二人目の夫のもとで耐え忍ばねばならなかった。しかしまさしくこの暮し向きのなかで、自然はその力をわたしたちの詩人の天賦の才に現した。名高い説教師シェーネマンのいくつかの詩を読む機会に恵まれたのである。ベルリンでは知られていることだが、激しい熱に浮かされると、ときとして一種の狂気がこの男を襲った。そのとき男はいつも韻文で語り、説教したのである。この奇妙な男の詩の大多数は、ムーサイの神々しい炎の刻印よりもむしろ悪性の狂熱のしるしを帯びていたが、詩人は嘱目した詩に、みずからの天才を異常なほど刺激してくれるなにかを見出した。衝動に従いたいと、それまでにない強い欲望を感じたが、彼女はそのための時間にも契機にも恵まれなかった。

彼女はいくつかの試作ののちも、当時滞在していたポーランドのフラウシュタットで得たさまざまな知人に勇気づけられて創作を続けた。生活状況を伝えるごく短い報告のなかで彼女が言及しているのは、校長リッケルト、その同僚プリューパー、市長グライフェンハーゲン、フラウシュタットのノイゲバウアー博士、大ポーランドはリサの教会の伝道師、帝国伯フォン・レーダー、グロースグローガウの宮廷伝道師デーベルで、はじめてその詩作をうながし、援助してくれた人たちだと言っている。この方々への感謝の気持ちから、この場を借りてぜひお名前を記しておいてほしいというのが彼女の希望である。同じ理由で、グロースリサの郵便局長ケルバーが詩人のペンから生れた作品をはじめて印刷させた人物であること、うわさをつうじて知るにすぎなかったが、ポーランドから歌を書き送ったハレの名高いマイアー教授こそ、執筆を続ける勇気をいちばん多く与えてくれた人であることにも触れておきたい。

他方、これら天才の発露は、詩神が彼女のうちにともした炎もなかば押しつぶされた果てに、

その小さな火花として残るにすぎなかった。しかしフリードリヒの勝利がこの火に力を授け、ついにそれは爆発を阻害していたものを打破し、激しく燃え上がらせた。1755年、夫と四人の子どもとともに彼女はグロースグローガウに転居した。ここである書店に出入りし、文学作品やその他の多種多様な本を、無秩序に、とくに意図もなく、しかし大いなる熱意をもって読破した。彼女が本をひじょうに早く読みとおし、それをいかに活用しているか、いかに容易にその最上の特徴をつかみとるか、それは彼女の詩のいたるところに現れている。カルシンの詩から判断する人は、本人がごくわずかな本をひじょうに早く読みとおしたことを知らなければ、おそらく相当量の本を読みあさったものであろうと思うにちがいない。

前年に終結した銘記すべき戦争と、全世界の目を一人くぎ付けにした英雄の偉大な事業は、このたぐいまれな女性の詩的精神の形成を完成させた。ロヴォシュッツ近郊の戦いのあと彼女は最初の戦勝詩を書いた。そして、それからほどなくしてプロイセン擲弾兵の軍歌、ラムラーの頌歌数篇、ウンツァー夫人の歌を読み、強い刺激を受けた。その後フリードリヒの勝利をうたう歌を書いたが、これらはすでに成熟のきざしをみせる詩人精神の証左である。

この間も詩人はつねに貧窮のきわみにおかれつづけた。しかし運命は、並の人間ならうちひしがれてしまうであろう歎くべき暮しのなかから、ついに彼女を引き上げることを思いついた。シュレージエンの貴族であり、年来その愛すべき人がらをもって知られていたフォン・コトヴィッツ男爵が、1760年に折しもグローガウを経てベルリンへ向かったときカルシンを知ったのである。善意にあふれた氏の心は彼女の不幸に同情し、そこから救い出してベルリンへともなった。首都に到着し、さまざまな文藝愛好者を知るや、その天才はありったけの能力を示しはじめた。まちでも宮廷でも讃歎の的になった。この詩集に収められた歌の大半は、彼女にとってひじょうに幸福なこの時期以降に書かれた作品である。いずれも彼女の性格と最近のできごとを表現して余すところがないので、そのひととなりについてこれ以上くだくだしく述べる必要はあるまい。ただ、わたしたちの詩人の支援者各位のために、この精選詩集の特徴についていささか述べておく必要はあるだろう。

詩人の友人数名がこの詩集を編纂しようと計画したときの意図はよく知られている。これほどの才能に恵まれた人物を貧困のどん底から救い出すのにこのような方法を選んだことを、わたしたちは喜んでいい。以下に掲げる名簿が示すとおり、ひじょうに多くの善意の方々が、提案された方法を喜んで支援したいと申し出られたのである。この著作の発起人と支援者諸氏がひとしくいだいていた善意に免じて、この集成のページが少ないことをお赦しいただきたい。用紙の重さ、ないしページ数ゆえに、前払い金の支払い義務がなかったことはだれもが知っている。他方わたしたちは、出版がかなり遅延したことをお赦しいただかねばならないことを認めるにやぶさかではない。さまざまな避けがたい事情が遅延の原因である。

本集成に収められた作品の選択にあたったのは、自身の作品から十分にそのすぐれた趣味が知られている、さる高名な詩人である。もちろんここに収録されたいくつかの作品よりも完全なものが抜け落ちていることを批判されるかもしれないと氏は虞れている。そのため氏は、内的価値の求めよりむしろ偶然の事情から収めることを余儀なくされた詩も若干あることをお断りせねばならない、ご賢察をたまわりたいと語っている。

12. ズルツァー『文藝の一般理論』

☞ *Allgemeine Theorie der Schönen Künste in einzeln, nach alphabetischer Ordnung der Kunstwörter auf einander folgenden, Artikeln abgehandelt,* von Johann Georg Sulzer. Leipzig 1771/1774. Zit. nach: Digitale Bibliothek Bd. 67. Berlin o. J.

天才（文藝）　生れもった素質があるかにみえる仕事と業務に、ひいでた技量と、他の人びとにまさる精神の生産性とを示す人間には、そもそも天才がそなわっているとみなされるようである。[……]

しかし天才と称せられる偉大さが、つねに精神のあらゆる能力にまで及ぶとはかぎらない。ひじょうにまれな例だが、魂のすべての側面において偉大な人物というものも存在する。しかし他方にはとくに高い水準の個別の精神力をもつ人もおり、そのため特定の業務において他の追随を許さぬ能力を発揮する。が、こういう人間を無条件に天才ということはできない。特別な能力を発揮しうることがらに関する特殊な天才というべきであろう。

総じてどちらの場合も、想像をある高い水準の明晰さと生気に、あるいは、ことがらの性質に応じては明瞭さにまで高める、しかもやすやすと高める力が天才にはそなわっているようである。[……]

いずれ哲学が天才を生みだすそもそもの原因をつきとめるかどうかは判らない。その最初の根拠を与えるのはどうやら自然である。なぜなら自然が、特殊な天賦の才を授けようと考えた人物が特定の対象に格別な感受性を示すようにしむけ、これらの対象を味わうことがその人のいわば欲求になる、といったことが起るからである。[……]

どんな刺激を受けても活動を起さず、これといって欲求を覚えない感受性の鈍い人間、そういう人間はどれほどすぐれた悟性をもっていても天才とはいえない。なぜならすぐれた悟性は欲求によって活動状態に保たれねばならないからである。なんらかの感受性から刺激を受けるまで、魂の各種の能力は不活発な怠惰のなかにある。しかしこの感受性があるかぎり、魂は活動するのである。[……]

[……] したがって天才には暖かい感情というものが必要である。それなくして精神は十分な活動性を示すことができない。格別な精神的才能に恵まれた人間なら、そのような感情がほんの一瞬でもきざせば、たとい一瞬でも天才の活動が現れる。種類を問わず本来の天才というのは、こうした感情が支配してしまった人間である。

悟性の人間は、感情や内面の欲求がなくても、流行から、あるいは模倣の喜びから、あるいは感情の外にあるなんらかのきっかけによって、ほかの人が天才の衝動から行う仕事に巻き込まれることがある。しかし、どれだけ悟性が立派でも、真の天才のはるか後塵を拝するしかないであろう。彼の作品には企てが、冷静な計画から生れたいささか堅苦しい本質が発見されるだろう。このやりかたでは、悟性と熟慮の人とはみられても天才とはみなされない。彼の作品は技藝と模倣とから生れたものだと気づかれてしまうだろう。なぜなら真の天才の作品は自然の刻印そのものだからである。[……]

以上の考察に従えば、たぐいまれな魂の力が、特定の種類の想像にたいするとくにひいでた感受性と結びつくことが、天才を生みだす絶対不可欠な条件ということになろう。[……]

[……]

人間精神の歴史に一等星のごとく輝く天才たちの列に連なるべき偉大な藝術家は、ホメーロス、フィーディアス、あるいはヘンデルのように、みずからの藝術に固有な天才とは別に、すぐれた哲学的天才をもっていなければならない。たといおのが藝術の天才をもちあわせなくても依然として一個の天才でありつづける、そういう人間でなければならない。この普遍的、哲学的天才がすぐれた着想、すぐれた思想を授け、これを藝術の天才は藝術に固有な精神に従って処理することになるのである。そこから生れた文藝の燦然たる作品には、藝術家のみならず、感情と悟性をもついかなる人間も讃歎の声を惜

しまない。

したがって個々の藝術家の天才は、これを二つのものさしによって測らねばならない。一方のものさしで彼の藝術を測り、他方のものさしで彼の材料を測るのである。アナークレオンは藝術の天才を、もしかするとホメーロスと同じ水準でもっていたかもしれない。いずれも大詩人である。しかし普遍的な人間としての偉大さというものさしを当てはめると、一方は英雄であるが、他方は愛すべき少年である。同じようにラファエロとカロは二人とも絵画の天才であるが、一方は偉大な魂をもち、他方は、きわめて活発だが遊戯の域を出ない空想にすぎない。[……]　(第一巻、456-459ページ)

感動（文藝）　多少なりとも天賦の才に恵まれた藝術家が口をそろえて断言するところによると、彼らはときに異常な魂の活動を感じ、創作がいつになく容易に進むことがあるという。そのようなとき想像がたいした苦労もなく展開し、最上の着想があふれるように流れ出るのは、あたかもなにか高い力に霊感を授けられているかのようだ、と。これが感動と呼ばれるものであることはまちがいない。藝術家はこの状態におかれると、対象が異常な光のなかに現れる。神々しい力に導かれるように、彼の天才は苦労しなくても発見し、骨を折らなくても、発見したことに最善の表現を与えるのである。感動に襲われた詩人にはもっともすぐれた思想と形が、わざわざ探さなくても流れ込んでくるのだ。[……]

[……] この常軌を逸した魂の活動はどこから来るのか、これほど見事な作用はいかにして得られるのか。

この高められた活動は、欲望の力として現れるか、魂の想像力として現れるかのいずれかであるが、それぞれに固有な効果がある。[……] つまり感激には二種類がある。とくに感覚にはたらくものと、想像にはたらくものとである。

どちらもそのみなもとは、きわだった美的活力をもつ対象が魂におよぼす活きいきとした印象にある。この対象が不分明で、想像力の発展する余地がないとき、あるいは、対象のはたらきから生ずる感情のほうが活きいきしていて、もっとも卑近な情熱の対象がどのような性質のものであれ、対象の性質に関する知識が感情に及ばないとき、あらゆる注意は感覚に向けられ、魂の力はすべて活きいきとした感情となる。一方、強い印象を与えた対象が明瞭な像を結び、精神がその全体を多様な部分にいたるまで見わたすことができるときは、感覚だけでなく想像力も刺激を受けて、強引にその対象にしばられる。悟性と想像力はその対象を、完全に、これ以上なく明晰に、活きいきと把握することに努める。第一の場合、心の熱狂が生ずる。第二の場合、天才の感激が生ずる。[……]

心の熱狂、あるいは、おもに感覚として現れる熱した魂の活動は、目にはっきりとは見えない重要な対象によって喚起され、想像力はそこにはたらく余地を認めない。注意力は対象そのものから引き離されて、魂の感じるもの、魂自身の努力へと向けられる。そのとき精神は対象を見失うので、ますます活きいきとその作用を感じとる。すると魂は感情そのものと化する。魂は自分のほかにはもはや何も見ず、すべてを自分自身のなかに認めるのである。[……]

[……]

この状態にあっておのが感覚を表現しようとする詩人は、竪琴をとり、讃歌、頌歌、悲歌をうたう。[……]

[……] この感激のなかで詩人はわれわれをも力ずくで連れ去り、驚嘆、恐怖、あるいは常軌を逸した喜びを味わわせる。[……]

[……] もう一つの感激は想像力のなかによく似た現象を引き起こす。[……] それは対象の大きさ、豊かさ、美しさから生れる。対象が感覚だけでなくとくに精神にも作用を及ぼすと、対象ははっきりとした展開にゆだねられる。想像力はそこに多様さを認め、すべてのものをできるだけ明瞭に見たいと思う。[……] 精神はそのありったけの力をふりしぼり、他のすべての対象から引き上げさせ、ただ明晰に見ようと努

める。[……]

[……]

いったん精神が強靭な力に支えられてこのように一定の方向をとりはじめると、その努力は強くしかも持続する。つかんだ対象はたえず精神の眼前に髣髴する。他のすべての表象はこの一個の対象との関係においてのみ言及されるにすぎない。[……] 精神がこの対象をありうるすべての側面から、ありうるすべての関係においてながめるのは、ごく当然なことである。[……]

[……]

今や対象は尋常でない光のなかに見られる。そのなかにまだ見たことのないものが見える。長いあいだ見たいと思っていたものが、今や努力なしに現れる。なにか高い善意の存在がわれわれの五感を鋭利にし、あるいは超自然的な方法で願わしい対象をわれわれの想像力の前においてくれた、そう信じたくなる。

[……]

感激につつまれて成った作品もしくはその一部には、藝術家がその対象を見たときの豊かな生気と燦然たる光の、明確な痕跡が刻まれている。すべてのものが豊かな泉から流れ出たかにみえる。一語一語、一筆一筆が力強く、まさになすべきことをなしている。この藝術家にとっては一切が容易であった、彼は何も求めなかった、あるべきところに見出したにすぎない、その魂全体をかくも活きいきとみたしてくれた対象を自分の外に表現したくて、彼はうずうずしていたのだ、ということがよくわかる。

[……]

悟性と天才とをもちあわせる藝術家なら、感激に浸ることができれば、すぐにでも創作の成功はまちがいないと信ずることができる。もう心配することはなにもないからである。自分の感覚に身をゆだねさえすればいい。表現すべきことはすべて彼の空想の世界に明瞭な像を結んでいる。意図も熟慮もなく、魂があらゆる部分を最善の方法で秩序づけ、もっとも活きいきと作り上げる。[……]

あらゆる感激のみなもとは、すべての注意力を集中させる対象の強い魅力にある。だからそのために二つのものがぜひとも必要になる。申し分のない魅力をもつ対象と、藝術家の側の感じやすい鋭敏な魂とである。[……]

空想の美しさ、悟性の完璧、道徳的偉大さなど、繊細な感情が完全に欠落していると、もはや教育によっても練習によってもこれを補うことはできない。[……]

感激するとすべての注意力がとくに一個の対象に向けられているので、同時に存在する他のすべての魂の表象は闇のなかへ落ちていく。そのため、つぎに、注意力をただ一つの対象に限定する技術も、感激のための手段として必要になる。この技術は明晰かつ熱心な沈思によって得られる。[……] (第一巻、136-142ページ)

13. ゲーテ『シェイクスピアの日に』

☞ Goethe, *Zum Shäkespears Tag.* Zit. nach: Goethes *Sämtliche Werke.* Jubiläums-Ausg. Hg. v. Eduard von der Hellen. 36. Bd.: *Schriften zur Literatur.* Mit Einleitung u. Anm. v. Oskar Walzel. 1. Teil. Stuttgart u. Berlin o. J., S. 3-7. ウィリアムの聖名祝日（1771年10月14日）のために起草された文章。ゲーテ家で朗読されたと伝えられる。

わたしたちのもろもろの感情のなかでもっとも高貴な感情は、運命がわたしたちを完全な無へと引き戻したかにみえる瞬間においてなお存在しつづけたいという希望です。諸君、この世の人生はわたしたちの魂にとって短すぎます。その証拠に、およそ人間は、身分の高下を問わず、いかに能力のある人でもいかに立派な人物でも、すべてのことに疲れ果てたとしても、生きることにだけは疲れることを知りませんし、出発のときあれほど恋い焦がれていた目標に、結局は到達する人もいません。なぜなら、その途上でしばらくのあいだどれほど順風満帆でも、ついには、所期の目的に達した刹那、だれが掘ったともしれぬ穴に落ちて忘れ去られてしまうこともしばしばあるからです。

忘れ去られてしまう。このわたしが。わたしこそわたしにとってすべてであるのに、いっさ

いのことは、ただわたしをつうじてしか知りえないというのに。自意識をもつほどの人ならだれでもこう叫び、この人生を大股で歩き、果てしない道程のために準備を整えるはずです。もちろんおのが分に見合う程度においてではありますが。[……] ともあれこのひたむきな旅人の巨人の歩みに驚嘆し、敬意を表し、その足跡をたどり、その歩みをわたしたちの歩みと比較するならば、彼はわたしたちの友であり道連れとなります。

[……]

きょうわたしたちはかの並ぶものなき偉大な旅人の記念日を祝い、それをわたしたち自身の名誉ともいたしましょう。わたしたちがその業績を評価しうるとすれば、その業績の萌芽はわたしたち自身のなかにもあるからです。

しかし、わたしが多くのことを順序だてて書きしるすなどと期待されては困ります。魂の平静は晴着にふさわしくありません。それに目下のところはまだシェイクスピアについて熟考したわけではありません。予感した、あるいはせいぜいのところ感じたというのが関の山です。シェイクスピアを一ページ読んだだけで、わたしは生涯そのとりこになりました。はじめて一つの作品を読み終えたとき、盲目の人が奇蹟の手で一瞬のうちに視力を授けられたかのように立ち尽くしておりました。わたしは自分の存在が無限に拡大されたことをいきいきと認識し、感じました。すべてが新鮮で知らないものばかりでした。慣れない光に目が痛くなりました。わたしはしだいに見ることを学びました。感謝すべきわが創造的精神のおかげです。今なおわたしは獲得したものをいきいきと感じております。

規則ずくめの演劇と手を切ることに一瞬たりともためらいませんでした。場所の統一はまるで牢獄のごとく窮屈に思われ、筋と時間の統一はわたしたちの想像力をしばる重い足かせのように感じられました。わたしは自由な大気のなかに飛び込み、わたしにも両手両足のあることをはじめて感じたのです。規則という君主がその穴のなかにいて、わたしたちにいかに多くの不正を働いていたか、いかに多くの自由な魂が今もそのなかで窮屈な思いをしているか、それを知ったいま、この連中に挑戦状をたたきつけ、毎日彼らの塔をこなごなにたたき壊すことを試みなかったら、わたしの心臓ははり裂けていたでしょう。

[……]

シェイクスピアの演劇は、世界史が目にみえない時代の糸にあやつられて、波打ちながらわたしたちの眼前を通りすぎていく様子を見せてくれる美しい覗き眼鏡です。シェイクスピアの執筆計画はふつうの様式に従っていえば計画とはいえないものです。彼の作品はすべて、わたしたちの自我の個性、わたしたちの意志の僭越な自由が、全体の必然的な進行と衝突する神秘の一点（哲学者もいまだにその一点を見、確定したことはありません）を中心に回転します。ところがわたしたちの趣味は堕落していて、目を曇らせてしまいましたので、この闇から抜け出すためにはほとんど新しい創造を必要とするほどです。

[……]

そこでわたしは叫びます。自然、自然、シェイクスピアの描く人間ほど自然なものはない、と。[……]

14. 神——天才——自然

14-1.「朝の思い」より（1761年）

☞Morgen-Gedanken. 1761. In: *Auserlesene Gedichte* (1763), a. a. O. S. 22 f., hier: S. 23.

安らかな心、わたしの周囲を支配し、
仕事にも不機嫌にも一日として
わたしを疲れさせないこの静かな平安、
血管を流れるこの柔らかな火、
そして、わたしのなかで考え歌うこの感情、
これらはみなわたしを慈愛をこめて
はぐくまれた方の賜物だ。

14-2.「神に」より

☞ An Gott. In: *ebda.*, S. 28-32, hier: S. 30 f.

おんみの愛を受けた人間たるわれは
おんみをのみ感じ認識する。

おんみはわれを天使のごと
獣と星のはるか高みへと引き上げたまい、
われにおんみを学ばしめるため
精神と理性とを賦与したもうた。

わが精神に授けられし翼もて
わが想念はわれを去り、
なべての世界のはるかなる高みへと昇る、
全能なる者よ、おんみの足下まで。

創造者よ、魂の力を授けたもうたことを
感謝いたします。
神よ、われは野にありて
うむことを知らぬ自然の
無数のいとなみに
おんみの存在を認識いたします。

14-3.「パーレモンの誕生日に」より（1761年）

☞ An Palemon, an ihrem Geburtstage. Den 1ten des Christmonaths 1761. In: *ebda.*, S. 217-220, hier: S. 217 f.

わたしが生れたとき
天なるみ使いの一人は
貧乏の衣に包まれたわたしをご覧になった。
あわれに思し召した天使は

人類の父上に奏上された——
「生命と運命の支配者よ、
この生れ卑しき娘を
わが導きの庇護のもとにお預けください。

娘は悩みにいだかれ、
恥辱にまみれた塵に深く覆われておりますが、
深刻にしわの刻まれたその額は
おんみが考えるために造られたものです。」

「そなたに預けよう」、万物を創造された神は
天使に向かって言われた。
そのときムーサイの一人と
この竪琴がわたしの手にゆだねられた。

この竪琴で英雄フリードリヒをたたえる
晴やかな讃歌を奏で、
美徳と神聖な友情とを、
そして柔和な愛を弾いたのだった。

14-4.「とつくににて家畜を追ううたびと」より

☞ Der Sänger bey der Heerde, in Welschland, eine Erzählung. In: *ebda.*, S. 311-314, hier: S. 312.

彼は音節の数をかぞえ、韻を見つけたが、
教師から美しい表現の
選びかたを教わったことはなかった。

14-5.「若い友人に」（1763年）

☞ An einen jungen Freund. Im März 1763. In: *ebda.*, S. 76 f.

徳を愛する友よ、真理を語る者よ——
あなたはわたしの才能をほめ、それは自然の
賜物だという。
自然にはその価値があり、名誉が与えられて
当然だ。
わたしの着想、表現、精神、飛躍は自然の
贈り物だ。
技藝から得たものはなく、
教師から教わったものもない。

お金を金庫に蓄えたことがない父は
偉大な人ではなかった。わたしが育った土地に
指導のできる人はいなかった。
わたしは田舎で遊び、ときどき砂の塔を
こしらえた。
それに怒りをぶつけ、
怒りにまかせてそれを焼き落した。

こんなにも戦の好きな女の子がいるかしら。
いや、それでもときどき羊飼いの女の子たち
を誘って、
新鮮な牛乳を飲み、ダンスと遊戯に興じた。
が、子どものころ、ふとしたことから一枚の

ページを見つけた。
それはかつて詩を書いたフランクの作品だった。
わたしは詩行を追い、感じることを学んだ。

ああ、わたしの青春時代は
奇妙というもおろかなものだ。あなたの
ご親切ゆえに
わたしはあなたを友人の一人に数えることが
できる。
ならば、うるわしき詩人よ、わたしはひたすら
感情をこめて、自然がいかにして
わたしをはぐくんでくれたかを、
自然に敬意を表してお話ししよう。

15. カルシュからグライムに宛てた手紙

☞ カルシュとヨーハン・ヴィルヘルム・ルートヴィヒ・グライム（1719-1803年）との往復書簡のうち保存されているのは、カルシン書簡1035通、グライム書簡227通である。Zit. nach: *„Mein Bruder in Apoll". Briefwechsel zwischen Anna Louisa Karsch und Johann Wilhelm Ludwig Gleim.* Hg. v. Regina Nörtemann. Bd. I: Briefwechsel 1761-1768, hg. v. R. Nörtemann. Göttingen 1996. S. 5 ff.

15-1. ベルリン（1761年4月28日付）

アポローンの名においてわが兄弟よ。

［……］グライム先生との交際をわたし以上に必要としている者はどこにもおりません。かつてわたしは暗闇のなかで、気のめいるようなさわがしい心配事に翻弄されて生きてきたからです。そこから抜け出し、生きるとはどういうことかを味わいはじめたのは、やっと数カ月前からにすぎません。交際の場には事欠きません。足しげく訪問してくれもします。しかしこの気晴らしはわたしにとって有益でも快適でもありません。あの人たちは自分の好奇心を満足させたいだけなのです。わたしを厚かましく見つめ、両手を打ち合わせてブラヴォーと大声をあげる、まるでわたしの話がちょっとした呪文でもあるかのように。わたしもときには一緒に笑ってみせますが、心は満足を知りません。口もとに笑みを浮かべてそんなふうを装い、一座の人たちを欺くのです。しばしばよりよい自分であるためにペンをとり、喧噪に囲まれて身辺のことを書きます。［……］

15-2. ベルリン（1761年5月14日付）

［……］わたしの人生の春、朝は、悲しい雲に覆われたまま過ぎていきました。人生の真昼に垂れ込める雷雲の晴れるためしはありませんでした。今わたしは秋を迎えています。幸運はうれしい勤勉の果実を両手一杯運んでくれます。勤勉はどんな労苦のさなかにもわたしを元気づけてくれました。友は幸福のもっともすばらしい贈り物です。どんな富とも交換しません。皆わたしの心の偶像です。そのなかでも先生は筆頭の一人でなければなりません。すぐに、すぐにベルリンへおいでください。でも美人のサッポーを想像なさらないでください。いえ、詩人のような陰気な額、無口な二つの青い目、口づけを受けるためにグラティアたちの唇にならってつくられたらよかった口、しかしわたしの全体をご覧ください。わたしの心を。心については自然は親切でした。詩人にふさわしく心は感情そのもの、友情そのものです。［……］

15-3. ベルリン（1761年7月1日付）

［……］ほんとうは、あまり慎重でいらっしゃるのでわたしをお訪ねにならないのですね。お目にかかれないままいたずらに日々は過ぎていきました。でも第三の場所でお目にかかった期待の瞬間を思い出してわが身をなぐさめました。わたしは毎日お便りを差し上げる喜びを味わいました。ああこの喜び、それをこれからも味わいたい。何もお話ししないうちに、人間のうちでわたしにとって唯一の……である方のために、少なくとも詩の一行をこの手が書かないうちに、日没を迎えることのないようにいたします。ああ、「唯一の」のあとのことばを申しませんでした。それを言うがよい、あの方を求めて波うつ心よ、いま流れ落ちる涙よ、行け、そしてあの方に告げよ、あの方の友情のすべての価値を感じています、と。卓越した友よ、このような涙にあなたのおもかげを追わせたことを

怒らないでください。これは、わたしの心が抑えねばならない愛の子どもなのです。ああ、この愛は純粋にして無垢なものです。その美しさゆえに世間に知られてはなりません。[……]

15-4. ベルリン（1763年8月15日付）［グライムによる書写］

最上の友よ、十七日間、うるわしのポツダムに過ごし、親切なご主人の奥さまと一緒に馬車でベルリンを訪ねましたら、大切なグライムさまからお便りが何通か届いておりましたので、うれしいお知らせを差し上げられることを喜んでおります。

フリードリヒ大王、このうえなきフリードリヒは、わたしの不機嫌の最後の雲を散らしてくださいました。大王にこれまで以上の祝福をお与えくださらなくては困ります。大王はあなたの友をあらゆる心配事から解き放ち、守ってくださるのですから。

ザイドリツ将軍はわたしの歌を大王にお渡しする絶好の機会をとらえました。それはこのあいだの月曜日のご夕食のとき、クヴィントゥス少佐が国王にわたしの詩、あるファンタジーの翻訳をお渡しくださったのです。[……]

[……]

王は、わたしがホラーティウス、ホメーロス、ピンダロスを知っていることに驚かれ、わたしがまだポツダムにいるのかどうか、どこに滞在しているのかと、将軍にお訊ねになりました。

翌朝早くクヴィントゥスからお使者が来られ、参内するようにとご指示なさいました。開口一番、フリードリヒがわたしにお会いになりたいとおっしゃっている、と。すぐサンスーシに出かけました。わたしを取り囲むお小姓がたが成功を祈ってくれました。ところが友人のザイドリツは、君主にはいささかご不興のおもむきであらせられると見てとったにちがいありません。きょうのところは引き合わせないほうがいいとおっしゃいました。／それでまた帰りました。翌日、王はどこかご機嫌ななめのご様子で、どうして連れてこなかったのかと、わたしのことをお訊ねになりました。

八月十一日、午後五時、わたしはダルジャン侯爵のもとに呼ばれました。侯爵と、王の朗読係であるフォン・カット氏が紹介してくださることになりました。数日前、王女様がたが前庭でダンスをなさる前におられた大理石の大広間に、わたしは立っていました。何万という明りが広間をあかあかと照らしていました。ここに立ち、全ヨーロッパはおろかインドさえ交誼を得たいと願う君主、偉大な君主を待ちました。心臓が突き上げるように十二回も打ちましたが、十分な時間がありましたので、王が扉を開けられるまでに自分の生命力をきちんと整えることができました。

が、ついに王がはいってこられました。

そのほう、詩人か。

はい陛下、そう呼ばれております。

シュレージエンの生れとのことだが。

はい陛下。

父はだれであるか。

葡萄酒のたくさんとれますグリューンベルクに近い、シュヴァイドニッツ生れの百姓でございました。

シュヴァイドニッツの生れか。あそこは聖職領ではなかったか[1]。

父の存命中はフォン・ケーゼリッツ様がご領主でございました。

が、そのほうはいずこで生れたのか。

小作地でございます。ホラーティウスが所有しておりましたような小作地でございます。

教育を受けたことがないとのことだが。

さようでございます、陛下、わたくしの教育はこれ以上ない粗末なものでございました。

しかし、だれのおかげで詩人になれたのかね。

自然のおかげです。それと、陛下のあまたの勝利のおかげでございます。

---

1) フリードリヒ二世はフォン・ケーゼリッツ（もしくはケスリッツ）家の所有するグリューンベルク近郊シュヴァイ（ド）ニツ村をシュヴァイドニツ要塞と混同したようである（編者ネルテマンの注）。

だが、規則はだれに教わったのだ。

規則と申しましても、なにも存じません。／

なにも知らん。そのようなことはありえぬ。だが、韻律は知っているに相違なかろう。

はい陛下。ただ、韻律は耳で聞いて守っております。それを韻律と申してよいかどうかわかりません。

ことばを習ったことのない者が、いったいどうやってことばをきちんと処理するのかね。

母国語は存分にあやつれます。

たしかにそうであろうが、洗練という点ではどうかな、文法はどうしているのかね。

文法につきましては、ほんの少し間違える程度だと、失礼ながら陛下に申し上げてよいかと存じます。

だが、文法を間違えてはなるまい。

（王はお笑いになりました。）

ところで、どんなものを読んでおるか。

プルタルコスの列伝を。

詩人も読んでおるであろうな。

はい陛下、ときどきは詩人も読んでおります。ゲラート、ハラー、クライスト、ウーツ、わたくしどものドイツの詩人はすべて。／

しかし、古代の詩人は読まないのかね。

古人のことばを解しません。

翻訳は持っているであろう。

ボードマー訳でホメーロスの二、三歌章[2]と、ランゲ訳のホラーティウス[3]を読みました。

ほう、ホラーティウスをな[4]。で、夫はいるか。

はい陛下、ただ、夫は陛下の旗の下から逃亡いたしまして、ポーランド各地を転々としたあげく、再婚したいと申しまして、わたしに離縁を迫っておりますが、わたしといたしましては同意する考えでおります。別段養ってくれるというわけでもございませんので。

夫とのあいだに子どもはおるか。

娘が一人おります。

どこに住んでいるのかね。

ベルリンでございます。宮廷顧問官のシュタール様が娘の養育費を出してくださっております。

美しい娘か。

ほどほどでございます、陛下、母親が美人ではございませんので。

さりながら、その母親もかつては美しかったであろう。

---

2) ヘクサメトロンによる『イーリアス』第四、第六歌章の翻訳（ライプツィヒ、1760年刊）。

3) ザームエル・ゴットホルト・ランゲ訳のホラーティウス頌歌集（ゲオルク・フリードリヒ・マイアー序、ハレ、1747年刊）、もしくはランゲによるホラーティウス頌歌全5巻および詩学第一巻の「詩的翻訳」（羅独対訳、ハレ、1752年刊）。

4) 当時フリードリヒは七年戦争と老いに苦しみ、古典に慰めを見出していた。ジャン・バプティスト・ボアイエ・ダルジャン侯爵宛書簡（1763年3月1日付）――「侯爵殿、ようやく和平がなりました。[……] これで余の軍務も終了いたしました。こちらでいま何をしているかとのお訊ね。毎日キケロが法廷で弁論を行っているのを聞いております。ウェレス駁論はとうに読了し、今は『死ニツイテ』に取り組んでおります。これ以外ではヴァト［アベ・シャルル・ヴァト（1713-80年）、美学者］を読み終えました。これで余が怠惰でないことはお判りでありましょう。[……]

余は心を安らかにし、いささかなりとも職務の重荷を下ろして、自由な時間をつくり、情熱が口を閉ざしているあいだに自分自身のことを考え、魂のなかに自分を閉じこめ、正直申して日を追うごとに耐えがたくなりつつある使者の謁見を遠ざけるよう努めております。[……]」

ゾフィー・カロリーネ・フォン・カーマス夫人宛書簡（1763年3月6日付）――「またお目にかかることになりました、おかあさん。今月下旬か来月早々になるであろうと存じます。お別れしたときと同じように息災であられるならばさいわいです。今度またお目にかかるとき、わたしは老人のごとく、ほとんどおいぼれのおしゃべりになっていることと存じます。さながらロバのごとく髪は灰色になり、毎日歯が一本ずつ抜け、痛風のためいささか足が言うことをききません。しかし寛大なお心ゆえに老人の障害にもがまんしていただけるでしょうから、また昔話をいたしましょう。

さて、あの善良なバイロイト辺境伯［フリードリヒ大王の妹婿、1763年2月26日歿］も亡くなりました。これはほんとうに辛いことでした。敵どもは永久に生きんとしているかにみえますが、わたしたちは共通の友を失っていきます。ああ、おかあさん、わたしはベルリンと、わたしがそこに見出すであろう空虚とを恐れます。しかしわたしはただあなたのことだけを思い、それ以外は幻想にふけることといたします。あなたにたいするわたしの率直な敬意と友情とをじかにお伝えできれば、これにまさる喜びはありません。この敬意と友情とをわたしは墓までたいせつに持っていく所存です。お達者で。フリードリヒ」（*Briefe Friedrichs des Großen.* In deutscher Übersetzung. Hg. v. Max Hein, deutsch v. Friedrich von Oppeln-Bronikowski u. Eberhard König. 2. Bd. Berlin 1914. S. 129 f.）

失礼ながら申し上げます、いまだかつて美しかったことはございません。自然が母親の外側を飾ることを忘れましたので。

その母親はいったいどのようにして暮しを立てておるのかね。

ああ、陛下、それはそれは粗末なものでございます。ベルリンでは家をもつことなどできません。わたくしの住いがどのようなものかご想像いただくためには、パリのバスティユの一室をご想像いただかなければなりません。

では、いったいどこに住んでいるのかね。

教会委員会の古い建物の四階の屋根裏部屋でございます。

どうやって食べているのか。

友人たちからの施しに頼っております。宮廷顧問官のシュタール様がたびたび食糧をもってきてくださいます。

歌を印刷すると、どれほどの実入りがあるのだ。

微々たるものでございます、陛下。陛下のご戦勝を記念する八篇の歌を印刷してもらいました——

そのときの収入はいかほどか。

20ターラーにすぎません。

20ターラーか。たしかにそれでは長生きできぬな。されば、きっと余がみてやろう。そちの生活費をまかなうことにいたそう。

このようにおっしゃって、王はわたしを残して退出なさいました。わたしはよろよろとよろめくように広間を出ました。レントゥルス将軍にお会いしましたが、どんなことを申し上げたか覚えてはおりません。[……]

16. フリードリヒの詩人として

16-1.「王妃に」より（1762年）

☞ „An die Königin. Ueber eine Lustfahrt auf der Elbe mit den Prinzeßinnen von Braunschweig. zu Magdeburg im August 1762". In: *Auserlesene Gedichte*, S. 71-73, hier: S. 73.

いつの日にか大地の神々が
その玉座より舞い降りて、
緋の衣をまとわぬすがたで民の前に現れる
ことを思いついたら、
大地の神々は世の人々の楽しみとなろう。

同じく、サンスーシなるフリードリヒの
黄金時代に、アポローンから伝授された
その神々しいフルートの楽の音がすべての
民の耳にとどく。
そして世の人々はすべてこれを楽しみ
とする。

16-2.「プロイセンの王子に」より（1762年）

☞„An den Prinzen von Preussen am Tage seines Religionsbekenntnisses. (Zu Magdeburg den 28ten des Jenners 1762.)" In: *ebda.*, S. 82-84, hier: S. 83 f.

隣人をおのれ自身のごとく愛し、
天使のあらゆる美徳を実践する。
フリードリヒの、平和を愛さぬ
敵とはならぬこと。

これはイエス・キリストをその宗祖とする
宗教の教えるところ。
心と口もてその信仰告白をなす
王座の君主万歳。

王子よ、おんみが民の前に進みたまえば、
鼓舞された民は戦の不安に疲れたまなざしもて
おんみを仰ぎ見、
おんみには繁栄を、民自身には幸福を祈願
するであろう。

おんみは正しきキリスト者の勇気もて
フリードリヒのみ手より武器を拝受するで
あろう。
人の血を無益に流すためではない、

そう、おんみの祖国の正義を証明するために。

早くもおんみは戦場へ向かうべく
準備を整えておられる、おんみ君主の御子の
誉れよ。
民の祈願とわが歌とを
おんみが出陣されるとき、おんみの耳に
響かせよう。

16-3.「フォン・ライヒマン夫人に」より
(1761年)
☞„An die Frau von Reichmann". In: *ebda.*, S. 87 f., hier: S. 88.

真理の声はフリードリヒの勝利を歌えと
命ずる。
よしフリードリヒの敵どもが
歌をかえよと残忍に迫るとも
死してなおフリードリヒを歌うであろう。

16-4.「たえまない頭痛を歎き、王のご健康を祝して乾杯することを勧められたとき」
☞„Als sie über beständiges Kopfweh geklagt hatte, und darauf erinnert wurde, des Königs Gesundheit zu trinken". In: *ebda.*, S. 347.

杯よ、墓穴の縁にあっては
おまえを飲み干すことはもはやできぬ。
されどはや意識も失せゆくときになお
口ごもりつつ言うであろう、
フリードリヒとその王家、万歳、と。

16-5.「無比無双のピンダロス」より (1763年)
☞ „Der unnachahmliche Pindar, an Herrn Ramler (Den 24ten Jenner 1763)". In: *ebda.*, S. 167-172, hier: S. 169-172.

わたしは羽音をたててクローバの花から
蜜を吸う蜜蜂のように
エルベの岸辺で
あまりに粗末なわたしの歌に思いを寄せる。

不器用な指使いで
サッポーの竪琴を弾くが、
わたしには英雄の歌をかなでる
灼熱と男性的な高揚感に乏しい。

[……]

さればわたしたちのために歌え、
沸きたつ街の祝祭の楽の音を、
悲歎にくれる者たちの喧騒の消えた
正義の広間を、

偉大なフリードリヒの
待ち望まれた帰還によって
新たに洗練された民にもたらされた
喜びの再生を。

そのときこそ、もしもわたしに今も
創作の力が残されているなら、
おんみの声に唱和しよう、
力弱く響くわたしの歌を。

軍歌のうたびとの
腕を借りながら
鬨の声をあげよう。それに答えを
歓呼する街が返してくれる。

シュプレー川の薫香たちこめる
教会堂に、耳かたむける聖なる森に、
歓呼の声をあげる民に、
わたしたちは三声の合唱をささげよう。

神は地上にかの国王を授けられた。
神は地上への贈り物として
この王にまさるものなしと見たもうた。
いな、王に比肩するものを神は照覧された
ことがない。

16-6.「祖国の父フリードリヒ大王に」より
(1763年)
☞„Dem Vater des Vaterlandes Friedrich dem Großen, bei triumphirender Zurückkunft gesungen im Namen Seiner Bürger. Den 30. März 1763". In: *Gedichte* (1792), a. a. O. S. 11-13.

新たな友情のきずなる神殿を
ダイアモンドのアーチで飾りたまうおんみ、
ああ、王よ、父よ、幸福な国の守護神よ、
われらのためにご自身が帰ってこられた。

[……]

悲歎の叫び、流れる涙が強い響きとなって
　天に届き、おんみの耳にも聞えよう。
おんみが来られる、その勝利は絢爛たる
　　ローマのそれにまさる。
　われらは奴隷を得て歓声をあげはしない。

つぎつぎと運ばれる見知らぬ王の宝物にも
　勝利者が得た王冠にも歓声をあげはしない。
そう、おんみ、法の番人として
　栄光とともに帰還された君主にこそ歓呼する。

おんみのまなこに幾千という深夜から
　われらのために創造された陽光が現れた。
そして今、おんみのしもべを愛をこめて
　　照らしている、
　おんみの神のかんばせのごとく。

それはしばしば祖国が死に瀕する者のごとく
　　あえぎ、
　おんみの命を案じて震えるたびに
見きわめがたい危険に際し
　かなたよりおんみに輝きほほえみかけた
　　ものであった。

ああ、戦にあってゆるぎなきおんみの膝を
　　いだかせたまえ、
　おんみ征服者よ、そして約束したまえ、
祈願するおんみの国を孤児のごとく見放し
　　たまうな、
　たとい新たな敵がおんみに挑むとも。

そのときはわれらに武器を与え、おんみの
　　民を戦場におもむかせたまえ、
　おんみはしかし、われらの喜びよ、
サンスーシにとどまりたまえ、そして
　われらより恥知らずにも逃亡する夫あらば、
　勇敢な妻よ、夫を殺すがよい。

16-7.「ムーサに、あかあかと照らされた夕べを歌えと」より（1763年）

☞ „An die Muse, daß sie den Abend der großen Illumination singen solle. Den 4. April 1763". In: *ebda.*, S. 48-51, hier: S. 48 u. 50 f.

戦場の上空を飛び、
硫黄の煙と砲弾の雨をつらぬき、
勝利者を訪ね、勝利者とともに凱旋門をくぐり、
勝利者の入城の祝祭を歌ったおんみ、
ああムーサよ、今また大胆に歌え、
あらしの風の翼から解き放たれて
星のマントを身にまとい、
ベルリンを見下ろしている誇り高き夕べを。
ベルリンはその偉大な王を、
その平和を、永遠だと称し、
藝術の炎に諸天のごとく、
また絢爛たる自然の贅のごとく燃えていた。

[……]

　ああ、ムーサよ、街の貧しい民の声が
　　聞えぬか。
民は歓呼し、上気した顔で踊りまわり、
空腹に大勝利したことをことほぎ、
平和の果実の味をほめたたえ、
神のごとく心を配りたまう方に再会する
喜びを思うことで
戦争のすべての懸念をぬぐい去る。
その方はなんとしてでも敵どもを改心させ、
勝利を忘れ、みずからの民が
大いなる貧苦を味わっていはせぬかと
　　問われた。そして
ベルリンが征服者と和平を記念して
巨大な像を立て、ぜいたくに飾りたてた
　　ランプもて
白い大理石のピラミッド上で
三度までも月を恥じ入らせたとき以上に、
民のやさしさを王の偉大なみ心は喜ばれた。

17. 矜恃

17-1.「アポローンに」より（1763年）

☞„An den Apoll, daß er die Leyer zurücknehmen möchte. (Als sie zu Berlin wegen an Quartieren einige Zeitlang in einer Dachstube wohnen mußte.)" In: *Gedichte* (1792), a. a. O. S. 28 f., hier: S. 29.

深夜その暗い部屋でわたしはしばしば
　隣人の月を見上げつ歎息する、
黄金を所有し安楽に暮す
　卑しき者どもにさえわたしは蔑まれていると。

狭い屋根裏部屋のわたしを
　連中は生れ卑しき女と呼ぶ。
そしてお上品に笑うために
　わたしに暇つぶしの歌を所望する。

ああ救いの手をさしのべるアポローンよ、
　もしもその父の手が
　サビウム人（ひと）［ホラーツィウス］の張った
黄金の弦をわたしに贈りたまわなければ、
　おんみの恥となるだろう。

もしも第三のカエサル［フリードリヒ大王］の
　法がわたしを、
　夜の領域のはるか下にあって、
ティベルの白鳥［ホラーツィウス］が
　たゆたったごとく
　幸運と卑しき民のはるか高くへと引き
　上げたまわねば。

17-2.「フォン・ライヒマン夫人に」（1762年）

☞ „An die Frau von Reichmann, Kommendantin zu Magdeburg. 1762". In: *ebda.*, S. 248 f.

冬はこの薄い壁に凍りついた風を吹きつけます。
しかしわたしはベッドのなかで抵抗します。
ここにすわり凍えた手で奥さまにしたためます、
たとい北風がいつもにもまして強く
ピューピューと窓から吹き込み、
指が寒さに曲がっても、奥さまのために歌を
　書きます、
毎日、最初の心のあいさつを歌に託して
　お伝えするために。
多くの寒さをわたしは耐えてきました。
　夜が明けるやすぐに
貧乏に追い立てられて早朝ベッドから
　起き上がったとき、
どんなに不安な思いで薪を採りに走ったこと
　でしょう。
わたしの横を傲慢な裕福な市民が通りすぎて
　いきました。
身分は高くありませんが、
金持ちのこざかしい知恵にうぬぼれていました。
もしかすると金などいずれ煙のように消えて
　しまうはずなのに。
あのときわたしが奥さまの横を通りすぎて
　いたら、
奥さまは同情のあまり大声で泣いてしまわれ
　たでしょう。
あわれな体の内側は冷たく空っぽでした。
外側もそれはそれは粗末ななりをして
　おりました。
両腕にそれぞれ一束の薪をかかえていた
　その女が
今はこうして温かくして、老若を問わず
熱心に求められる身の上となったのです。
わたしは難儀して体をひきずり、薪を
　こまかく折り、
かまどの前にへたりこみ、子どもたちを寒さ
　から守るために
震えながらそれを火にくべました。
ああ、わたしがかまどのそばにすわっている
　姿をご想像ください。
乾燥したトウヒの火に水を入れた鍋がかけて
　あります。
沸騰すると鍋をはずして麦粉を入れます。
ラード抜きの粗末なスープもおしいくいただ
　きました。
今ではだれもわたしをそんな食事に招待する
　ことは許されますまい。
名高いロイテン近郊の勝利このかたコーヒー
　にもうるさくなって、
それは、どんなスープを飲んでも効果の
　なかった
悪性の咳を、体を温めるコーヒーの脂分が
　止めてくれるほど
濃くなくてはなりません。
今からまいります、奥さま、わたしがキスを

いたしましたら、
まずわたしのまなざしは、コーヒーはできて
おりますか、とお訊ねしているのです。

17-3.「比較について」（1779年）

☞ „Ueber die Vergleichung. An Nanntchen. Den 5. Okt. 1779". In: *ebda.*, S. 250 f.

わたしのようなつまらぬ者と
けっしてご自分を比較してはなりません。
幼いころわたしは
ハシバミの茂みの下ばかりを走っていました。
あなたはというと、その華奢な足で
バッカスの葉［葡萄樹の葉］の下を歩き、
そこでバラ色のお口に
みごとな赤ワインを運んでいらしたのです——
わたしはナイチンゲールしか存じません。
家で細かい甘い餌をやると
わたしの名前を呼んでくれるような
色あざやかな鸚鵡などおりませんでした。
わたしのソファーは芝の生えた地面だけ、
ここでわたしの口は
花と家畜を相手におしゃべりをしました。
家畜を追うときも犬などおりません。
わたしのひとことで三頭の牛はいうことを
聞きました。
あなたの言いなりになるのはヴァイオリン
ですね。
わたしは母の産んだ子どもたちをあやして
おりましたが、
あなたは愛情をこめて
膝にのせた小犬に
砂糖菓子をあげて、そのお口に
絹のハンカチを詰めました。
そうしないと
ママが目を覚まされるといけないから——
あなたは金持ちの家に生れました、
わたしは代々農家の出です。
ですから、あなたとわたしとでは
そもそも比較などできないのです。
あなたは男性のためにだけ歌い、
大きくなられ、殿さまを笑うこともできます。
わたしはそんな傲慢にはなれません。
けれども大理石の階段のところで
けちな殿さまの耳に訴えなくても、
元来ドイツ語を好まれないのに
国王ご自身がわたしを
サンスーシにお召しになりました。
フェルディナントがわたしにご返事をくださる、
偉大なフェルディナントが——
その前にわたしにできることといえば、
心をこめて何度も何度も、
ほしいものがありますと書いたことです。
猊下は気高いいさおしを立てられるときも
あなたほど傲慢である必要はありません。

18. 国王からの年金支払

18-1.グライム宛書簡（1763年8月17日付）

☞ *„Mein Bruder in Apoll". Briefwechsel,* Bd. I, a. a. O. S. 185 f.

驚かないでください、グライム様、友人の常軌を逸した幸運に驚かないでください。きょうその友人のもっとも偉大な、神のごとき父上フリードリヒが証書にご署名なさいます。ご自身の歌びとのために、彼女が自分で選んだ家をシャルロッテンブルクにあてがってくださり、200ターラーの年金と燃料費とを下賜されることになりました。いかがですか大切な友よ、いかがですか、わたしのただ一つの希望をかなえることを運命は思いついたのです。自分だけのささやかな家はわたしがいちばん望んでいたものです。国王が願いを温めていた一人の女の空想をよしとされたなどといったら、みな仰天するにちがいありません。王はアンハルト中佐宛の詩をご覧になりました。クヴィントゥスは、わたしがシャルロッテンブルクに家をほしがっている、それがわたしの最大の幸福だということをお伝えになった。なんとかしてやれ、卓越したフリードリヒがそう叫ばれた。この鶴の一声、承認だけでも、わたしは生涯そのご恩を忘れません。明日ポツダムへまいります。王の足もとにひれ伏して、御意に涙をささげたいと思いま

す。[司教座聖堂] 参事会首席にもこのしあわせなできごとをお伝えください。どんなにかお喜びになることでしょう。グラフ様にも手紙で知らせてあげてください。また、ちょっとした感謝祭をしてくださいませんか、グレーミンデが食事の支度をしてくれるでしょう。それから、ぜひとも申し上げておかねばなりませんが、ほんとうにたくさんの方々がわたしのために力を合せてくださいました。[……]

18-2.「クリュニツ博士から詩人への招請状」
(1763年10月24日)

☞„Aufforderung an die Dichterin von Herrn Doktor Krünitz. [Als in Sanssouci der König mit ihr gesprochen hatte.] Den 24. Okt. 1763". In: *Gedichte* (1792), a. a. O., S. 182.

ああサッポーよ、この部屋にも長いこと
いらっしゃいませんね。
サンスーシにもあきあきし、王のご威光に
目がくらみましたか。
ご主君ということばはとても美しく響きます
が、友人ほど美しくはありません。
紙とペンがあなたを待っています。お心の
ままに書いてください。

18-3.「詩人の返信」

☞„Antwort der Dichterin. Geschichte der Unterredung mit dem Philosophen zu Sanssouci". In: *ebda.*, S. 183-187.

友よ、わたしがこの世に生を享ける以前に
親切な自然から早くも
へりくだりなさいという命令をもらって
いなかったら、
このようにつまらない人間でも
内心の誇りをもっていばってみせ、
フリードリヒの大理石の大広間に
わたしのしわだらけの顔が映りました、
そして心臓に羽が生えて胸から
くちびるに飛び出しました、ことばの選択と
アクセントを整えました、とお話しする
でしょう。
王はと申しますと、マルクス・アントーニウ
スが国民を前に、
カエサルの殺害者をあるいは難じ、あるいは
弁護したときよりも
すぐれた雄弁の持ち主としてわたしとことば
を交わされました。
王がはいってこられました。王の頭上、黄金
の雲に
漂うアポローンのすがたをわたしは見ました。
王がお話しになると、わたしの耳に
矢継ぎ早にくりだされるご質問とともに
ユピテルの雷が響きました。眼光は
収穫の日の稲妻にも似ていました。
しかし友よ、わたしはたじろぎはしません
でした。
父はだれであるか、
いかなる塵埃にまみれてきたか、
いかにしてわたしの天才はここまで努力して
きたか、
青春時代をどれほどの闇のなかで過ごしたか、
そして書かれている藝術の規則を知らないこと、
愛読書のプルタルコスがしばしば
わたしの曇った目を晴らしてくれたことを
話しました。
[……]
王はお訊ねになりました、そちに歌を教えた
のはだれか、
アポローンの弦の運びを伝授したのはだれか、
と。
英雄であらせられる王よ、と申しました、
自然と王のご戦勝が
技藝なくしてわたしを詩人にしたのです、と。
王が笑みを浮かべ、どうやって食べているかと
質問なさいましたので、友人たちに養われて
おります、
毎日、けっして驕らぬシュタール様のところ
へ行きますと、
氏がすすんで面倒をみてくださいます、
そしてわたしの娘を王さまのための
二人目の詩人に育ててくださいます、と。
そう申しますと、王のまなざしは友を称讃
されたようでした。
住いはどこじゃ、と訊ねられました。
君主よ、と申しました、地上高い屋根裏部屋
でございます、
この小部屋は星ととなり同士でございます。
ご立腹なさらずにお聞きください、膝を屈して

お願い申し上げます、わたくしの部屋は
ルイがおおぜいの人を送りこんだ
パリはバスティユの一室とご想像ください、
その人たちはしばしば勇敢で忠実なのですから、
戦士としてお使いになることもできたで
しょうに。
王は大声でお笑いになりました。わたしも
ローマ女のように
心強く自由に、額の皺をゆっくり伸ばし、
海上にあって板切れをあてがわれたように
笑いました。
いま陽が射しはじめ、その光線をほがらかに
投げかけ、恍惚として
くちびるに笑みを浮かべます。
心臓がわたしの心臓のように高鳴り、
それをどう表現していいか半分もわからない
からです。
祖国の父は最後にこう言われました、
憂いなく暮らせるようにしてやろう、と。
[……]
わたしは辞去いたしました。友よ、そのとき、
ふだんは青ざめている頬が燃えるように紅潮
しておりました。
レントゥルス様からごあいさつをいただき、
わたしは
混乱した気持ちでご返事をし、よろよろと
よろめきながら、
酔っぱらいのようにことばも足も覚束ない
ありさまでした。
しかしもっとも神聖な歌にかけてお誓い
いたします、
フリードリヒが匠の技に
糸杉の家を建てさせられても、
サッポーの魂が驕ることはありません、
なぜならサッポーにとっては友情だけが
甘美だからです。

18-4.グライム宛書簡（1773年9月4日付）

☞*Die Karschin. Friedrichs des Großen Volksdichterin. Ein Leben in Briefen.* Eingeleitet u. hg. v. Elisabeth Hausmann. Frankfurt a. M. 1933. S. 266-267.

[……] 性悪な人間にいちいち腹を立てず、わたしの冷静さを見習ってください。

実例をお話しいたします。先だってポツダムにまいりましたら、クヴィントゥスが、国王にお約束を思い出していただけるよう働きかけるべきではないかと、ふたたび助言してくださいました。それどころか王がおことばを思い出されるまで、四週間に一度は手紙を書きなさいとまで言われます。[……] 王がわたしとお話しになってちょうど十年になります。いい機会ですから、王に手紙をしたため、それをフォン・クネーベル氏をつうじて侍従のテシェンに渡していただきました。王が出立される二、三日前のことです。それから一週間前の日曜日にようやくこの方々はわたしにいたずらをしようと思いつきました。王がわたしの手紙をご覧になったとは考えられません。しかしご覧になろうがなるまいが、どうでもいいことです。要するに郵便配達された書付を受けとりました。ドイツの詩人A・L・カルシン様と書かれています。宮廷の印璽が捺してあり、いちばん下に、「御下賜金2ターラー在中」と書かれていました。帰宅したとき開封されていることに気づきました。わたしは平静を保ち、翌朝、宮廷尚書殿につぎのような文章を書きました。

二ターラーなど偉大な国王の贈られる
金子ではありません。
このような贈り物でわたしの幸福は増え
ません。
しかり、これはわたくしをいささか
貶めるものです。
ゆえにご返却いたします。

お金を戻して封印し、封筒に、「配分金2フリードリヒスターラー同封」と書きました。同時にクヴィントゥスにも手紙をしたため、一部始終を説明し、尚書からの手紙を添えて、これが陛下のご命令によるものかどうか訊ねてほしいと伝えました。おそらくそうではないでょう。手紙の宛名はまちがいなく例の廷臣、先日わたしがその奥さんと仲直りをした例の廷臣のさしがねでした。二度とこんな金額は受けとりません。結局まともな報いはなかったわけです。

18-5.「受領書窓口宛にしたためしもの」

(1783年1月)

☞„An Quitungsstatt geschrieben. Im Jänner 1783". In: *Gedichte* (1792), a. a. O. S. 324.

陛下は命じられた、
家を一軒建てる代りに、わたくしに
三ターラー支払っておきなさい、と——
君主の下命は確実に
即座にねんごろに執行されたので、
わたくしは感謝申し上げねばならない。
しかし三ターラーでは
ベルリンで大工が
わたくしに終の住処を建てることはできない。
でなければびくびくせずに
本日そのような家を注文するであろう。
いつの日にか虫けらどもが宴を張ったとき、
やつれ果ててやせこけた
老女の残り物がごちそうかと腹を立てる
であろう、
なにしろ国王が飢えさせている女
なのだから。[1]

18-6.「愛情を集める国王フリードリヒ・ヴィルヘルムへの謝辞の試み」(1787年2月)

☞„Versuch einer Danksagung an König Friedrich Wilhelm den Vielgeliebten. Im Februar 1787". In: ebda., S. 235 f. フリードリヒ・ヴィルヘルム二世はついに先王である伯父の約束を果し、ハッケ広場前に詩人の家を建てさせた。カルシュが入居したのは1789年春のことである。ただしこの家はカルシュを心配事から解放するどころか、かえって借金をかかえさせることとなった。さらに、娘カロリーネとの同居はしだいに耐えがたいものとなり、晩年のカルシュを地獄に突きおとした。

わが老年に花びらを撒く
幸福の創造者にして君主よ、
辞書にも書かれていないことばは
ほかならぬわたくしのまなざしに現れて
おります。
国父たる方の王座高くにましまし
守護神たる陛下に御礼申し上げようとしても、
涙を流すばかりにて、ことばにはなりません。

ヴェルナー氏[2]より
国王のご下命が伝達されて以来、
わたくしは薔薇の花びらの上を歩き、
薔薇をしとねに、やさしく甘くまどろんで
いるかのようです。
家、わたくしのために家の礎石がおかれ、
建てられ、飾られる、
さながらムーサイの神殿のごとく——
それを目のあたりにすれば、
老い衰えたこの胸も
心の衝動を容れるには狭すぎることでしょう。
このような目の喜びに接したら
心は幾日も燃えつづけ、
至福のあまり病に倒れ、
喜びの美しい死をとげるかもしれません。
いまわの際には感謝の鼓動を打ちます。

19. 娘との確執、遺言

☞ *Die Karschin*, hg. v. E. Hausmann, a. a. O. S. 348-351.

どんなささいなできごとがきっかけになって娘に悪霊がとりついたものか、神さまはご存じかもしれない。わたしの命にかかわることなら、それを口にすることはできない。要するに、机に向かっていたとき娘が暴れだし、大声で果てしなく悪態をついたので、とうとうわたしは涙声で、「ああ、神さま、この反抗心を屈伏させる手だてはないでしょうか」と叫んだ。暴君を完

---

1) Die Karschin, a. a. O. S. 312によれば、この詩は1783年5月17日付の書簡に挿入されている。詩の前にはつぎのような文章がある。「わたしはフィッシャー橋のすぐ横手に住んでいます。左手の川沿いに、家のたっている荒れ果てた場所があり、闇夜だと人も犬も川に落ちかねません。並んで住んでいる人たちはわたしの隣人になりたがります。以前からの知り合いもいて、王に手紙を書きなさいとしつこく言います。年が改まりましたので、国王陛下にお願いし、工事現場のありさまを申し上げましたところ、色よいご返事の代りに3ターラーを下賜されます。そこでできたのがこの受領書です。」詩につづけてつぎのように書かれている。「けれどもこの受領書は結局、宮廷の国庫には送られませんでした。わたしは散文の請求書をしたため、あくまで希望を伝えました。ですからまだ希望を捨ててはおりません。今年がだめなら来年は可能かもしれません。」

2) ヨーハン・クリストフ・フォン・ヴェルナー(1732-1800年)、宮廷建築局長官、1788年以降、国務大臣。

全に狂乱させるにはそれだけで十分だった。音がした。ああ神よ、お願いですからそれを罰してください。恐ろしい音がして娘のげんこつがわたしの額に当たった。たてつづけに二度もこうどなるのを聞いた――「負けないわよ、負けないわよ」――わたしは押し黙って泣きながら椅子にすわっていた。涙をふき、何が起ったかを書きとめた。こうして、このおぞましい時間に遺言書の草稿をしたためたのである。その間、娘は窓辺によりかかり、歌をうたいながらわたしのため息と涙をせせら笑っていた。このような言語道断な恥辱を受けたときに、こうして遺言書をしたためる力を心と手とに残そうとすれば、わたしと同じように、ほんとうに人間であり母であらねばならない。

娘に。

……遺言書の形式と草稿。1788年2月15日、恐怖の時間にあたうかぎりの忍耐をもってこれを記す。わたしは十分に齢を重ね、しだいに虚弱になりつつあるため、遺言を確定する必要がある。したがって意識のしっかりしているあいだに、娘をわたしの財産の相続人に指定しておく。財産は金貨2000ターラーからなり、信頼できる二人の人物からしか送金されないことになっている。ほかに六本の銀製ナイフと四客の銀の燭台を贈与するが、後者のうち二客はすでに贈り物として娘の所有物となっている。さらに八本の銀製スプーンも、パンチ用スプーン一本、カービングスプーン二本、銀製砂糖皿一枚とともに、すでに娘の所有するところである。銀製ナイフ一対とスプーン一本はとくに孫に贈る。孫にはこのほかにも銀メッキを施した筆記具一本を与えるが、これは、わたしを思い出すよすがとして使用しうるものであり、ぜひそうしてほしい。紅茶スプーン六本は娘に、銀製砂糖入れ一客と他のスプーンとナイフは息子に与える。息子を法の定めるところにより王家より贈られた家の相続人に指定するが、条件として、孫ハインリヒ・ヴィルヘルム・ヘンペルに、その生活が不安定なあいだは、中二階の賃貸料の三分の一を受けとらせるものとする。孫はこの三分の一をつねに貯金し、将来ベルリンに居を構えるとき、相続分として、この家の三分の一に居住させることを定めておく。しかし息子が相続人なく死亡した場合は、この家の礎石をおいた孫が相続人となり、家主となることを希望する。孫にたいしては、その妹ヴィルヘルミーネ・クレンケが援助を必要とするときにはこれを援助するだけの公正な心をもってもらいたい。このほか、わたしの衣料、寝具、什器、書籍に関しては、一切を娘に遺贈し、家具のうち兄に譲ることを希望し、もしくは譲りうるものの決定は、娘の意向にゆだねたい。わたしの墓について口論し、いさかいが起らぬよう、神のお計らいにゆだねたい。

以上、備忘のために。さてつぎに、おまえになしうる最良最上の世話について、やさしい一言について、おまえにとって他の幾千ものことばが火の川のようにおまえの唇にのぼるとしても、これだけは口にしたくないという母という呼び名についてお願い。それを忘れることをわたしに教えてほしい。おまえが百のことを習ったときのように、わたしにもたやすくそれを習う心と頭はある。知ってのとおり、わたしの心は柔和だ。わたしの安らぎはおまえの気分に左右される。おまえが右へ左へと他人に示し、しばしば頼まれもしないのにほどこす善意という施し物をわたしにも分けてもらいたい。おまえのB宛の手紙はひじょうに美しいものであり、まさしく善良な心から出たことばになっているが、天使の輝きなどということはうっちゃっておこう。それは過分というものだ。「母におまえの柔和な心の輝きを分かち与えよ」、あるいは何かそのようなものを……

1788年2月17日

娘に。

わたしにたいすることば遣いを和らげることはできないようですね。それは心と耳を傷つけます。おかあさんは歳をとっていたわってもらう必要があります。体も弱っており、カタルが

胸の病気になるかもしれません。なにしろおまえはおかあさんの全身を震えあがらせたからです。おかあさんが墓に入ればわたしたちは別々になり、おまえの切なる願いは近いうちにかなうかもしれません。しかしおかあさんはこれからもまだ長いこと息を切らして生きていき、もっと恐ろしいいさかいにさらされるかもしれません。ですからなにか手だてを考えましょう。おかあさんはおまえほどおこりっぽくありませんし、無思慮でもありませんが、そうかといって口に出す前にいちいちことばを吟味する人はいません。もしもおまえがおかあさんを心底軽蔑し嫌悪していなかったら、おかあさんがおまえに期待できるようなことを、今おまえはおかあさんに要求しています。子は敬語をきちんと使えるのでなければなりません。それを学習するのはむつかしいことではありません。心が口調を決めてくれるからです。いったいどの悪魔にそそのかされてあんな罵詈雑言をおかあさんにぶつけるのですか。子どもを殺した狩人に母トラが襲いかかるみたいに、自分の母親を責めさいなむあの強い憤怒はだれに吹き込まれたものですか。おかあさんの年とって干からびた腕のあざは当分消えないでしょう。おかあさんが何をしましたか、何を言いましたか。おまえの不自然なふるまいが証明したこと、ただそれだけです。わたしが何か言うと、とげとげしい敵意に血が煮えたぎっていないときでも、あまり分別があるとはいえないことばで反論しました。

どうしたらいいでしょう。母親には耐えがたいこともおかあさんは耐えてきました。いつかまたおまえが、おまえの言う半狂乱になっても、幼いおまえをだっこした腕をどす黒く青くなるほど殴ったり、今はまだ書きもののできる手をしびれるほど打ったりしないために、おかあさんの提案を聞いてください。どこか下宿を探しなさい、ミカエルの祝日［聖ミカエル大天使の祝日、9月29日。決算日］までお金を出してあげます。お金はおかあさんが借ります。国王の贈り物をこころよく引き受けたいと思っている棟梁がたに余分な駄賃を出すくらいなら、そのほうがまだましです。おまえには月々8ターラーあげます。学費と給仕代も払ってあげるし、薪も四分の一あげます。必要ならおまえの銀器も全部、それから家具類も全部よろこんであげます。この提案なら満足だと思います。つい先日、とくにひどい口げんかをしなかったとき、おかあさんに出ていけと言いましたね。だから、なにもかもが、おかあさんが息をしていることさえ気に入らないというのは本音にちがいありません。けんかせずに別れましょう。おまえの詩集で家政をみてもらおうとは思いません。月々のお金はクンツさんに預けますので、自分で取りにいってください。婆やはわたしが引きとります。お茶をいれる湯とスープをおかあさんのために火にかけるくらいの力はまだ残っていますから。婆やには個室をあてがい、毎日1グロッシェン渡します。そしたらまた元気になってくれるでしょう。洗濯物は義理の妹に洗ってもらい、帽子二つは大通りであつらえます。そしたらすぐに、おまえのふしあわせなおかあさんの声を聞くことも、顔を見ることもなくなり、すぐにでも心底幸福な気分に浸れるでしょう。

20. 終焉

20-1. 孫ハインリヒ・ヴィルヘルム・ヘンペルに贈ることば

☞ ハインリヒ・ヴィルヘルムはカルシュの娘カロリーネ・ルイーゼ・フォン・クレンケの最初の結婚で生れた息子。Zit. nach: *Liebes von der alten Karschin.* Anläßlich der 27. Hauptsammlung der Gesellschaft der Bibliophilen zu Leipzig am 24. Oktober 1926. Langensalza 1926. S. 6 f.

あなたが右へ進むときも左へ進むときも／どこかに称讃と美徳があるならば、／称讃を追い求め、わたしの息子よ、美徳を愛しなさい、／悪しき手本と迷うばかりの／旅人の手招きとに／惑わされぬ／勇気を失ってはなりません。

ベルリン、1791年4月21日

心からのいましめのために／これをしたためたのは／おまえに祝福をあたえる／おまえの／祖母／アンナ・ルイーザ・カルシン。

20-2.「復活祭の太陽に」(1791年)

☞ „An die Ostersonne. 1791". In: *Gedichte* (1792), a. a. O. S. 270-272.

復活祭の太陽よ、おんみは壮麗に
友なる女の頭上に昇った。
子どもらはそのひとを取り囲み、
祝福を受け、
色とりどりの卵をもらうだろう。
わたしは希望する、そのひとが
復活祭の朝のごとく晴やかなることを、
いついつまでも、
たといわたしがもうそのひとの顔を見ることがないとしても
わたしに愛を注ぎつづけてくれることを——
おんみが三度跳躍して[1]
その姿を映したエルベから、
そのひとが復活祭の朝の水をくませることはないだろう[2]。
そのひとは美しくなることを望んでいない——
そのひとはあいさつを翼にのせて運んだ。
あるいはこの復活祭のあいさつのなかの
一つはわたしのものかもしれぬ。
この地上の谷で
わたしがおんみを楽しむのも
まちがいなくきょうが最後であろう。
事実わたしは復活祭の小羊の焼肉も
復活祭の菓子も
もはや味わうことを許されぬ。
わたしは虫に喰われて空洞になった
柳の幹のようだ。しかもその木は
立っていた場所から
大水になかば洗い流されてしまった。
わたしの魂はいまも生きているが、もはや
おんみの輝きを感ずるにすぎない、おんみ、
木の芽を開かせる情け深く甘美なものよ。
ただわたしの目はなおも遠く
花咲く草原を見、
覚めているが、やがてそれもかすんでくる。
おんみがもう一度現れ、歌声を聞かぬうちに、
その目は見えなくなるであろう、
「おんみの躍り上がりつ崇敬せる存在によりて
その方はよみがえりたまえり」と——
わたしもまたよみがえるべきである。
しかし窓ガラスをとおしておんみを見ているとき
おんみが温めてくれる
この肉体をもってよみがえるのか、
このたるんだ皮膚と
この朽ち果てた骨をもってなのか。
わたしの墓は、今はまだまっすぐに
立てられるこの頭によって破られるのか、
夜が昼に場所を譲り、
おんみが世界の半分とわたしとに
活力を授けたとき——
おんみはわたしの復活を目撃するか、
それともおんみの誇りも
山岳とともに沈み、
塔とともに崩れ落ちるほかないのか——
ああ、いかなる賢人も答えられまい。
わたしも享楽のとき
それを穿鑿することも問いただすこともせず、
若々しい春の日々には
おんみの輝きを享受しよう。
花の冠をまだ
こめかみに巻くとしよう、
なるほど齢を重ねる痕跡として、
ここにはちらほら
白いものが見え隠れするのではあるが——
さて、さらに一年がするりと抜け出ないうちに、
そして多くのキリスト教徒がおんみについて、
復活祭の日の朝
おんみが三度跳躍したと語らぬ前に
もしやわたしの目がかすんで見えなくなったときは、
わたしは天使を愛するとしよう、
憂きことのみ多き世から

---

1) 復活祭の朝、太陽が喜びのあまり三度跳躍し、復活したイエスの前でお辞儀をするという民間信仰がある。

2) 復活祭の朝の静けさのなかでくんだ水には、治癒、強壮、美化効果があると信じられていた。

さらによい世界へとわたしを追ってくれた
天使を——

20-3. 孫ヴィルヘルミーネ・フォン・クレンケ宛書簡

☞ *Die Karschin*, hg. v. E. Hausmann, a. a. O. S. 378 f.

フランクフルト・アン・デァ・オーダー、
1791年8月9日。

[……] ミンヒェン、おばあちゃんの柩はここのフランクフルトにおいてくださいね。体がすっかり弱ってしまいましたから。……このあいだの日曜日に、クライスト[3]の眠る墓地を歩きました。あの方の横に眠りたいと思います。天国でも墓地でもわたしが隣人でいやだとはおっしゃらないでしょう。あわれな、年とった、ばかにさた、見下げはてたわたしの骨でも、ここなら、ムーサイの寵児たちからときどき花と歌とをささげられるでしょう。あなたのおにいさんがおばあちゃんの目をつむらせ、おにいさんの涙がおばあちゃんのやせこけた顔を洗ってくださるでしょう。おにいさんは身心ともに健康で、神さまの望まれるとおりの人になるでしょう。[……] おにいさんは最良の手本をみながら勉強し、いちばん立派な人たちを友人とし、人との交際でも立派で、礼儀正しくふるまっています。

20-4. グライムへの最後の手紙

☞ *Die Karschin*, hg. v. E. Hausmann, a. a. O. S. 382.

1791年9月、フランクフルト・アン・デァ・オーダーより

帰りの旅を恐れております。道なかば、どこかで病に倒れ、見ず知らずの方々にご迷惑をおかけしてはいけないと思うからです。自宅に足を踏み入れるかと思うとぞっといたします。最近、ハンブルクからわたしの知らないお客さまが十日か十二日かお泊まりになりましたが、わたしにはなにも知らされませんでした。このようなやりかたをどう思われますか。感心いたしません。この地で柔和な人たちと一緒に暮らせたら、そのほうがお気に召すでしょう。[……]

ああ、すこし前から思考力がすっかりなくなってしまいました。書くことも、なにもかもおっくうになりました。大切な友よ、神のご加護がございますように。姪御さんにも、それから、先生の辛酸をなめている友の人生に今なお関心を寄せてくださるすべての方に、わたしからのご挨拶をお伝えください。

アンナ・ルイーザ・カルシン

追伸。昨日来すこし加減がよくなりました。きのうはワインを一杯飲みたくなりましたが、このたった一杯のワインほどわたしを元気づけてくれたのは生れてはじめてです。強壮効果が現れました。

20-5. レーベルト夫人のグライム宛書簡

(1791年10月22日付)

☞ *Die Karschin*, hg. v. E. Hausmann, a. a. O. S. 383-385. ヨハンナ・ルイーゼ・レーベルト、旧姓リヒター(1730年ごろ—1797年以降)は夫ヨーハン・アンドレーアス・レーベルトの経営するベルリンの薬屋で手伝いをし、夫の死後その店を引き継いだ。カルシュの旧友。

生れいとやむごとなき司教座聖堂参事会員
にして
尊敬措くあたわざる友に。

……クレンケ夫人よりその母上が十二日夜十時に逝去されたことはお聞き及びのことと拝察いたします。母上はフランクフルト[・アン・デァ・オーダー]で体の不調を訴えて病を得、一日当地[ベルリン]に帰着されたときにはひどく衰弱しておられました。わたしは月曜日にすぐお見舞いにあがりました。その月曜日にはまだ起き上がっておられましたが、すがたかたちはすっかり変り、死相が現れていました。お嬢さまはおみえではありませんかとお尋ねしますと、会いたくもないと答えられました。こんなにお悪いのですし、万が一ということもありますので、ぜひともお嬢さまと仲直りをなさってくださいとお頼みいたしました。わたしの再度の切なる懇請にも同じお答えが返ってきました。わ

---

3) エーヴァルト・クリスティアン・フォン・クライスト、1715-59年、カルシュが敬愛した詩人。

たしはクレンケ夫人のところへまいりまして、母上の容体が重いことをお伝えし、もはや危篤状態にあられますとお話しして、母上の手を握ってあげてくださいとお願いいたしました。これはお嬢さまの務めでございます、と。けれども母上同様、お嬢さまもお聞き入れにはなりませんでした。わたしはことばを尽くし、クレンケ夫人に今後ありうることを全部お話ししましたが、無駄骨でした。お二人の心がここまで反目しておられる以上、もはや手の打ちようがありませんでした。わたしは悲しい思いをしながら帰宅いたしました。翌日またまいりますと、お嬢さまがいらしているとのことです。わたしはうれしくて、クレンケ夫人がわたしの申し上げたことをよくよく考えられ、反省されたのだと思います。カルシュさんのところに間借り人の一人が降りてきていて、部屋で何かしたいことがあると言っていました。カルシュさんは女中をおいておられなかったので、給仕女が来て申しますには、この男性は何か必要なものがあるとのことでした。それを聞いてカルシュさんは泣きだし、クレンケ夫人を呼んでください、自分ではどうすることもできないから、と言われます。クレンケ夫人が部屋に来られますと、母上が泣きながら手を差し出されました。母上のほうが娘さんよりも先に手を伸ばさねばならなかったわけです。これはクレンケ夫人が仰々しく話してくださったことですが、これからはずっと母上に付き添い、お世話をします、夜は眠れませんでした、と。けれども、それはすべて娘さんとして当然のことですと申し上げました。ほかにも、これはどうしてもつけ加えておかねばなりませんが、カルシュさんは娘さんが部屋に来られる前ベッドから落ち、助け起してくれる人がだれもいなかったため、そのまま三時間も床に倒れていて、後頭部に大きなこぶをこしらえてしまわれました。ようやく給仕女が来て助け起してさしあげました。こんなことが赦されるでしょうかと娘さんに申しました。お二人の部屋は並びで、ガラス戸がついています。ところが木で鼻をくくったようなご返事でした。このお二人がお互いにたいして過ごしてこられたのは、まことに歎かわしい人生でした。カルシュさんはまさか亡くなるなどとはお思いにならず、こんなに体が衰弱した経験はないなどとご自分でおっしゃっていたくらいですから、あいかわらずあれこれと、いろいろなことをお話しになりました。クレンケ夫人は母上が生前夫人のことをほめておられたことや、夫人にすべての赦しを請い、祝福を与えておられたことなどを、今ではさかんに吹聴しておられます。ところがマダム・ド・クレンケはわたしのことなどあまり信用なさいません。母親が風変わりだからといって、母親にたいしてあんなふるまいができる子どもというのは、きっと悪い心をもっているのです……

21. 批 評

21-1. メンデルスゾーン『最新文学書簡』

(1764年)

☞Moses Mendelssohn, *Briefe, die Neuste Litteratur betreffend.* Berlin 1761 u. 1764. 272. u. 273. Brief (1764). In: *O, mir entwischt nicht was die Menschen fühlen. Gedichte und Briefe von Anna Louisa Karschin.* Hg. u. mit einem Nachwort v. Gerhard Wolf [Märkischer Dichtergarten]. Berlin 1981. S. 239-245.

書簡　第二百七十二

いつであったか、トルガウの勝利を歌ったカルシュ夫人の詩から美しい箇所を引いてご紹介したことがある。以来この詩人について意見を交わす機会がなかった。読者には伏せていたが、夫人はグロースグローガウで貧乏生活に甘んじていたところを、さる善意の手で救い出されてベルリンへ導かれ、この街のいたるところで、いや、宮中においてさえ讃歎の的となり、文藝の専門家と愛好者の支援を受け、友人のなかでもとくにすぐれた頭脳から高い評価を受け、公報のすべてが夫人の詩と讃辞とを満載し、ついには友人諸氏によって詩集が予約出版されるほどである。のみならず、この詩人に関してもっと注目すべき事情を伏せていたのは、本巻に夫

人の詩を掲載して読者をあっと言わせたかったからである。読者が他の記者たちと夫人を張り合うようなことがなければ、いや、そのようなことがないことを前提にできるのはわれわれの大いに誇りとするところであるが、この尋常でない詩人の出現はひじょうにいい意味で読者にとって意外なものであるにちがいない。事実この現象は常軌を逸しているのである。[……]

詩人は現在わが国の首都に住み、ムーサイと交友とから天賦の才に与えられる利得を享受している。夫人は友人たちの助言を利用し、友人たちも夫人の趣味を純化し、洞察力を鍛え、才能を伸ばすことに余念がない。読者諸氏におかれてもぜひこの幸運な機会を逃されぬようお心がけいただきたい。良質な土壌はなるほどいたいけな植物の最初の成長をうながすのに有利であるが、やはり注意深く世話をして、異常発育や、ふりかかるその他の危険から守ってやらねばならない。カルシュ夫人の天才になお若干陶冶が不可欠であることに、夫人の詩をやや詳細に検討することになれば、読者諸氏もわたくし同様気づかれるかもしれない。たとえば多くの美しい作品だけでなく、ここには中程度の、気の抜けたような、不出来な作品も多いのである。したがって、作品に磨きをかけるには、詩人に批評眼か忍耐かが、もしくはその両方がなお不足しているにちがいないことは、容易に見てとれるのである。

書簡　第二百七十三

前回の書簡にはカルシュ夫人の詩にたいするわたくしの評価も書いておいた。見るところ、夫人には巧みな表現法、熱い想像力、穏当な道徳的判断力、並はずれた詩作能力が具わっている。この才能にせめて驕ることなく、批評眼のある友人たちの適切な助言に従うことを怠らなければ、時を経てとくに好感を寄せられる詩人になるかもしれない。

時を経てと言ったのは、友人たちが当初夫人の天才を世間に吹聴したときの、あの熱狂ぶりにはとてもついていけないからである。みな夫人に、ドイツの他の詩人、いや、細かいことをいえば、古今すべての詩人とかなんとか、そういう人たちと同等の評価を下しただけでなく、カルシュ夫人の二編のレバーの歌[宴席で披露される戯れ歌。レバーはカワカマスの肝臓から来ているという]の広告を出すたびに、きまって予告文で恐ろしい騒音をたてる何とかいう新聞だけのことだとはいえ、とにかく他の詩人以上に評価したがった。

古今のすべての詩人、たしかあるドイツの論説にはそう書いてあったと思う。ある英国人[「ジェントルマンズ・マガジン」]も、たぶん馬鹿にしてであろう、ドイツ人の言い分をまねて書いていた。これ以上軽率なほめかたができるものだろうか。まるでホメーロス、シェイクスピア、クロプシュトックなど古今の詩人の藝術が、まあなんとかがまんのできる思いつきを押韻や韻律にあてはめるだけのものであるかのような言いぐさだ。そしてこのカルシュ夫人もそういう藝当ができる以上、ホメーロス、シェイクスピア、クロプシュトックに劣らず偉大である、あるいは、ピンダロス、ホラーツィウス、ルソーなどの頌歌は即興で書かれたものであり、これらの詩人よりも上に立つためには、上手な即興詩をつくりさえすればいい、とでも言うのであろうか。まさか、と、こんな不遜なことばを口にしたとたん、藝術詩人は顔を赤らめたであろうか。

こうした友人たちの軽率な熱意は、当然のことながら夫人を益するよりもむしろ害となるにちがいない。このような厚かましい称讃に持ちあげられても自分はけっして謙虚さを失わず、どんな批判にも超然としていられると信ずるためには、人並みはずれた志操をもたねばなるまい。夫人自身はほとんど本を読んだことがなく、したがって他人と自分とを比較することもできないので、おのれの能力を量る正確な秤をもっておられないのである。この点は友人から学習する必要がある。ところが不幸なことに友人たちは、これまで夫人の自己愛がこうあってほしいと望んだかもしれない以上の好意的な評価を

下している。だから、結局のところ夫人は、この手の男たちに祭り上げられた存在であることに異論を差しはさむ余地がないのではないか。とくに夫人は、もしも完全に説き伏せられているとしたら、自分自身と比較してその友人たちをおとしめ、批評を軽んじ、創作した詩のすべてを改善の余地なきものとみなすほかないのではないか。運悪くこのような考え方を受け入れるほかないとしたら、夫人の幸福な自然のたまものは助けの得られないまま失われてしまい、友人たちは痛烈きわまりない非難をわが身に招くこととなる。

夫人におのれの力量がいかほどのものかを教え、現時点で詩人たちの列に占める自分の位置を示し、自分が完璧からなおほど遠いことをつねに感ずるよう、努力すれば到達できる目標を悟らせるほうがよほど新設であったと、読者は思われないであろうか。もっと高尚な文学ジャンルというものが存在し、そこに到達するための挑戦さえまだ手つかずだと言ってやるべきであった。卓越した詩人のことばこそ尊重されるべき眼目である文学ジャンル、主要な虚構と人物の性格づくり、情熱の取扱いを要求する文学ジャンルである。夫人の選んだ文学ジャンルでは、愛好家のためになるほど立派な詩をこしらえ、そこには幸福な気質がはっきりと現れているが、名人には名人の厳格な規則というものがあり、名人はこれに従って判定され、どんなに幸福な気質が具わっていても、精神の熟慮と努力がなければ名人をうならせる作品はできないということ、むしろ、どんなにすぐれた頭脳も即興で創作することが多すぎると、拙速と無頓着になじんで無能そのものになり、高い美の水準にはとても到達することができないということを夫人に諭すべきであった。最後に、完璧な頌歌を書くためにはいかに多くのものが必要であり、ただ熱狂するだけではそのすべての条件をみたすことができないこと、計画なし秩序なしのただの無駄口のなかになかなか好感のもてる詩句がまぎれこむこともあるのは確かだが、それでは頌歌の名がすたるということも、夫人には黙っているべきではなかった。雑な筆遣いでも馬の銜のちょっとした泡くらいならじょうずにまねもできるが、一本の薔薇をありありと表現するにはいたらない。そこには軽い筆遣いだけでなく、計画や意図、あるいは十分に練り上げられた全体像といったものが求められるのである。詩を書くことにばかりかまけず、もっと吟味し、できるだけ機会をとらえて、われわれがどの文学ジャンルにももっている偉大な模範と自分とを比較し、読者の前で震えるわざを夫人に教示しておくべきであった。こういう言い方は夫人の自己愛にこびるものではなかったであろうが、どんな行き過ぎたお世辞よりも夫人には有益であったはずだ。お世辞などを言っても、当然のことながら、完璧をめざす夫人の歩みを阻害するだけである。その場合、夫人の名声はさほど速くは拡がらなかったであろう。しかしそれは徐々に高まり、今その名声が徐々に低下していくのを目撃する危機にあれば、なおさらゆるぎないものとなっていたであろう。

これらの詩がもう手から手へと筆写されて運ばれていくあいだ、この詩人が女であることと生活事情とにたいする配慮は、多くの小さな欠点をおおい隠し、多くの小さな美点をいっそう効果的にするのに役立ったのである。一冊の本を手にとって読みはじめるやいなや、読者は、著者がだれか、それはどのような境遇にある人物かなどといったことを忘れているであろう。国王か、婦人か、ユダヤ人か、そんなことはいま問題になっていることとはなんの関係もない。作家たる名誉を欲する者は、細かいことはさておき、とにかく作家として評価されねばならない。情け容赦ない裁き手は当人の名望など無視して本質だけを見る。約束されたものが大きければ、そして、作品にたいする称讃の声が大きければ、判定はまちがいなくそれだけ厳格になるであろう。読者の期待が大きければ、読者を満足させることはつねにそれだけむつかしいものである。この一般的な所見だけでも、われわれの詩人の友人たちに、多くの点で読者の温情を必要とした作品をこれほど大騒ぎして世に送

り出すのをやめさせるべきであった。

21-2. ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー「サッポーとカルシン」(1767年)

☞ Sappho und Karschin. In: *Fragmente über die neuere deutsche Literatur.* Zweite Sammlung. 4. Von der griechischen Literatur in Deutschland, B, 7. Zit. nach: *Herder's Werke.* Nach den besten Quellen revidirte Ausgabe. Hg. u. mit Anm. begleitet v. Heinrich Düntzer. 19. Theil. Berlin o. J. S. 177 f.

ムーサの希望により、しばしば場所がらをもわきまえずサッポーの名をかたる一人の女流詩人について最後に述べておきたい。この人物がこれみよがしに自分を見せるときのあの決然とした態度から、これはひょっとすると彼女の崇拝者の幾人かが、内気な女にこんな甘い夢を見させたのではないかと疑いたくなったのであるが、もしそういう疑念がなければ、わたしとしてもこの婦人の思いつきを男ならありそうなことだ、などと思わないであろう。

マダム・カルシンの詩を想像力の描いた絵画のようにみなすにすぎないとしても、それらの絵は多くの独創的な特徴ゆえに、規則どおりに作られた頌歌などよりも、よほどドイツの天才を目覚めさせるうえで功績がある。わたしはこの婦人に、『文学書簡』の枠に収まりきらない功績を認めるにやぶさかではない。しかし、それでもなおつぎのような問いを禁じえないのである。この人がサッポーであろうか、と。

かのギリシアの女流詩人からわれわれの手に残された二つの詩からみて、サッポーの性格はおおよそつぎのようなものであろう。「歌と比喩とことばの配置において、すべてのものを溶かし去る精妙な灼熱において、もっとも響きのよい表現の絶妙な選択において、第十のムーサと化した歌姫」だ、と。

たとい歌の配置においてはサッポーの詠みこんだ以上のものをハリカルナッソスのディオニュシオス[1]が見出したとしても、カルシンの詩とは比べるべくもない。カルシンの詩には全体に計画がなく、比喩を倹約するということがなく、抒情的な反復も知らず、豊富な詩的想像力のおもむくがままに書きなぐったような産物である。

意地の悪いパーオンだけは例外だが、ロンギノス[2]もカトゥッルス[3]も、またその解釈者たちもサッポーの穏やかな火に全身を浸した。[……]しかるにドイツのサッポーにあっては、火は穏やかというよりも荒々しく、溶かすようだというよりもむしろあらしのようであって、その作品は、かのギリシアの女流のごときウェヌスのたおやかな友というより、むしろ両性具有だといっても過言ではない。

最後に、サッポーの美しい響きの選択はホラーティウスをその後継者に任ぜしめたが、もとよりサッポーに比肩しうるものではなかった。しかしドイツのホラーティウスたちは、われらのカルシンをお手本にしたいと思うであろうか。ギリシアのサッポーはカルシンにこう告げてさしつかえないのではないか。サッポーの残した断片によれば、それは自分の下女に語ったことばだという。「そなたはムーサイとグラティアの住みたまうピーエリアの山[4]で薔薇を摘んだことがないとみえる。」

わたしは今ある程度の配列と火と美しい響きでは、この分野でサッポーと張り合うのはおやめなさいとわれらの詩人に言いたい。彼女の詩集に期待するのは、サッポーの詩がたどった運命以上のものではない。サッポーの詩は滅びてしまったというか、批評の贋金づくりどもの情け容赦ない毀損にさらされたのである。作者が自分でそうしたくなくても、藝術批評家たちがカルシュ詩集を好きほうだいにするのは目にみえている。

---

1) 前1世紀後半、古代ギリシアの修辞家、歴史家。『古代ローマ史』がある。

2) カッシオス・ロンギノス (ca. 210 - ca.273)、古代ギリシアの弁論家、哲学者。アカデメイア学頭。

3) ガイユス・ウァレリウス・カトゥッルス (ca. 84 - ca. 54 v. Chr.)、ローマ共和制期の詩人。

4) もっとも古い時代には、ムーサはトラキアのピーエリアとボイオーティアのヘリコーン山に崇拝の中心をもっていた(高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店、177ページによる)。

21-3. ヘルダー『カルシュ詩集』(1797年)

☞ *Gedichte von Anna Louisa Karschin, geb. Dürbach.* Nach der Dichterin Tode nebst ihrem Lebenslauf hg. von ihrer Tochter C. L. von Klenke, geb. Karschin. Berlin. Zweite Aufl., mit dem Bildniß der Dichterin. 1797. Aus den »*Nachrichten von gelehrten Sachen, hg. v. der Akademie nützlicher Wissenschaften zu Erfurt*« 1797, Stück 25. Zit. nach: *Herder's Werke.* Nach den besten Quellen revidirte Ausg. 17. Theil: Gesammelte Abhandlungen, Aufsätze, Beurtheilungen u. Vorreden aus der Weimarer Zeit. Hg. u. mit Anm. begleitet v. Heinrich Düntzer. Berlin o. J. [1876] S. 605-611.

われわれのあいだに芽吹きはじめたすぐれたものにたいする評価が不十分ではないか、もっと引き立てるべきではないか、それらを真っ先にばかにするのはおまえたちではないのかと、われわれドイツ人に批判が寄せられているが、これはまことにもっともなことである。このたび遺稿集が出版されたこの女流詩人などはさしずめその証明になる。極貧の境遇にあって、あきれてものが言えないほど粗野な人々のあいだにまじって、この人は人生最良の歳月を過ごしたのである。いったいこれが（と、母なる詩人のの実の娘がここに提供している、まことに注目すべき、たいへんよく書けている伝記の前半を読めば、自問するであろう）、これがドイツの一地方か、これがポーランドか、モルダウか、と。こんなふうにして文明開化した人間が一緒に生きているのか、と。——カルシュ夫人の才能豊かな母、彼女が「砂のなかから昇り来れ」と美しい歌をささげた伯父、つぎには本を貸して読ませてくれた一人の牧童、この荒涼たる土地にあってわれわれを多少なりとも喜ばせてくれる人物はこれだけである。——コトヴィッツ男爵に導かれてようやくベルリンに出ると、まず最初に驚きのまなざしで見られたが、遺憾ながら大多数の人からは驚きのまなざしで見られるばかりであった。歌を書かせてみた。最後には、その歌をただ受け取りさえすれば彼女に敬意を表したことになると信じた。ほめるために歌う空気のなかでは何年たってもその域を出ることができなかったのも当然である。夫人がその後も永く、つねにその声をある程度美しく保ったことは驚歎に値する。ヨーク伯爵夫人に寄せる彼女の最後の詩（本集中2ページの献辞を見よ）は1792年10月の作、そしてカルシンは10月12日に亡くなった。名前だけのことではなくその心情においても洗練された後世のドイツ人がいつかこの伝記を読み、多くの詩から輝き出ているわれらの詩人の議論の余地なき才能のかずかずと比べることになれば、シュヴィーブス、フラウシュタット、グローガウのこの野花を打ち捨てられたものだと思うであろうか、それとも本人がその長所のかずかずをたたえる首都の貴顕たちのあいだにまじっているのを発見するであろうか。伝記の最後の部分を、この時期の詩と比較しながら読んで［……］いただきたい。

このような比較をしてみると、ある奇妙な感情がわれわれの胸中に去来する。カルシンの最上の歌は1761年、1762年に書かれたものであり、もしかするとさらに1768年までをも含めていいかもしれない。このころは一貫して大きな対象を扱っていた。讃歎を惜しまぬ友人たちの鼓舞のおかげで、カルシンはいわば自分以上の水準に引き上げられた。ところが自分の罪か他人の罪かによって自分だけを頼りにしつづけ、それどころか自画自賛し、自慢ばかりをするようになったとき、墜落したのである。揚げヒバリにはその歌を目覚めさせてくれる天の霊気が不足していた。グライム、ズルツァー、バハマンなどと友情をはぐくんだ時代に書かれた詩が、すべての作品のなかでもっともすぐれているのは疑問の余地がない。ことにグライムはカルシンの竪琴からもっとも大胆にして魂のこもった音色を引き出したことによって、彼女に最大の功徳をほどこしたのである。

われらの歌姫の詩について多少なりとも率直に語りたければ、詩のなかにある自然と技藝とを区別しなければならない。創作の対象、たとえば神、摂理、自分自身の生活の運命と経験、人間の義務、自分自身、あるいはまた、とくに戦時や大火、飢餓、心配事、貧乏における人間の一般的状況、慰めとなる宗教の希望などにつ

いてのあらゆる純粋な感覚を、わたしは彼女の気高く強い自然感覚の領域に属するものだと考える。後年にも語られるほとんどの自然感覚は、カルシンの場合、少女時代と青春時代に胚胎する。それらは彼女の詩才に、ほんとうになまなましい像と卓越した表現とを与え、しかも炎の文字[不滅の文字の意]で書かれていることが多い。カルシンの以前の詩集（アンナ・ルイーザ・カルシシンの『精選詩集』ベルリン、1764年[1]）には、このような内容の頌歌と歌謡が収められている。[……] これらは彼女の心を打ち明けるものだ。そして彼女の内面の志操を、そしてたいていは自分自身の青春時代と生活史のなかの思い出を語っている。[……] ひょっとすると、宗教と自然と人間生活のなかのもろもろの対象に関するこの詩人の純粋な民衆感情を、心から出た強い響きによって歌った二つの詩集のうちでもえり抜きの作品に敬意を表し、このさまざまな感情が一貫して独自のものだと評される時代が今に来るかもしれない。それとともに詩人の名とことばは、まちがいなく永遠の命を獲得するであろう。

これと正反対なのがただ派手なだけの対象である。照明、王侯の入城、慈悲深い慇懃無礼などがそれである。自然詩人がこのジャンルで何を歌い、何を記述しえたであろう。無数の明り、目を丸くして見物する人たちでごった返す街路、がらがらと反響する橋、高らかに鳴り響く駅馬車の角笛、それから会釈、お辞儀、どんな表現をも見下す傲岸な礼儀作法を。このあわれなカルシンのように、九十九人のムーサイが揃いもそろってこんな対象を、くりかえし、いやになるほど、報われることなく歌わねばならないとしたら、ムーサイこそあわれというべきであろう。にもかかわらず、死ぬまでこれらの対象と手を切ることができなかったのは、どん底の身分に生れ育った女詩人の生活環境と考え方からすればまことに当然のことであった。唯一無二の王フリードリヒはこの点でも一つの例外であるのかもしれない。われらのエリンナ[2]も人々の熱狂を分かち合い、この人のために美しい歌のかずかずを残した。それらは最初の詩集［……］とこの遺稿集［……］において、ことばによる王冠の華麗な月桂樹の葉であるのだが、これを王は軽蔑した。[……]

[……]

おもしろいことに、このムーサの歌った感情のなかには、サッポーのとろけるような愛は含まれておらず、したがってこの点ではおそらくサッポーと呼ぶことはできなかった。彼女がもっともうるわしい歳月を過ごしたのは、ほかでもないアドーニスの庭であった。結婚生活のあらゆる重荷と苦痛とを知ったが、愛の喜びには恵まれなかった。そしてもっとも繊細な感情は幼いころに目覚めなかったのであろうか。子ども時代は、荒々しい空想の火と、あるいは貧乏や心配事と折り合えない魂の柔軟な形成を、場合によっては盛んな形成を要求しないのであろうか。ピンダロスの［……］愛を歌った断片から判断すると、彼もまたおおよそわれらの詩人と同工異曲の愛の歌人であった。炎は輝き、燃やし、照らす。けれども暖めはしない。溶かすこともできない。ムーサイの贈り物は人それぞれなのである。

詩人としてのこの豊かな才能をいわゆる藝術規範に近づけてみたとき、カルシンはどこに位置づけられるであろうか。彼女もまたドイツの流儀に従って文壇に一定の地位を占めなければならないからである。

ホラーティウスを奉ずる藝術部門はカルシンに抗議するであろう。しかしあのような育ち方をした歌人にホラーティウスの藝術を身につけるべきだなどと、どうして要求したり希望したりすることができたであろう。かのローマ詩人の頌歌はどれをとっても精巧な象眼細工である。ホラーティウスはその竪琴をギリシアのカメー

1) 詩集の扉には1764年と印刷されているが、実際にはその前年に出版された。

2) 紀元前4世紀末のギリシアの女流詩人。

ナ[3]の余韻とした功績をみずから誇っている。それは彼の歌の構想にも、歌の比喩と言語にみられる連結にもいえることである。これと同じ花冠を貧乏なカルシンは編むことができなかったし、そうしたいとも思わなかった。若いころカルシンの耳に聞えていたのはギリシア人の抒情詩ではなく、たとえば讃美歌のたぐいであった。そこにはホラーティウスばりの調べは含まれず、またそのようなものを教えてくれることもなかった。ラムラーの歌の書法にも近づかなかったのは、それゆえまことに幸運なことであった[4]。そしてホラーティウス自身を模倣するときには、むしろホラーティウスの藝術作品を彼女ならではの手法を用いて解体してから模倣するのである。[……]

カルシンはどちらかというとウーツ、クライスト、グライムなどの自由闊達な詩法に近づく。美しい対話「わが若き日の無上の喜び」——とりわけいくつかの道徳的な特徴をもつ大小の詩は、われわれの父祖の時代の文学へ、上掲の三人の詩人の美しい素朴な世界へと、読者を連れ戻してくれる。わけてもグライムから、詩人はその大胆にしてこまやかな言語を習得したように思われる。

しかしなぜわれわれは一風変わった天才に固有な場所を割り当てようとはしないのか。外国の名前など使わず、なぜ本名で呼ぼうとしないのか。この詩人の空想はゆるぎない一定の軌道をたどっている。藝術の規則などなくても、一見道に迷ったようでも迷ってはいないムーサの飛翔を知っている。まさかと思うようなところで止まり、霊気の像から一個の全体を織り上げると、それがますます心地よい響きをかもし出すのだ。郷土色をもつかずかずの特徴がこの輪郭のなかに注ぎ込むのは、それが物事の自然なすがただからであり、断じて欠点などではないのだ。この想念の大胆な飛躍、甘美な狂気、いちいち感激しやすい性質、そしてとりわけ抒情文学のいとなみこそは、神々からカルシンに授けられた個性あふれる贈り物なのだ。そういう大胆な飛躍をホラーティウスだけを基準にして測るわけにはいかない。なんといってもホラーティウスはもっぱらあらゆる歌謡と頌歌のお手本というわけではない。でなかったらピンダロスも詩篇も最初から最後まで——欠陥品ということになってしまうであろう。

[……]

願わくは、カルシンの詩の二冊目の遺作集が出版されんことを（今回の遺作集からはまだ多くの詩が割愛されているかもしれないのだから）、それがさらに多くの、二つの詩集に収められなかった歌をわれわれの手に残してくれんことを。グライム、エーベルトとの、また、その他の書簡集にもきっとその種の詩が含まれているであろう。[……]

---

3) リーウィウス・アンドロニークス（前3世紀）以来ギリシアのムーサと同一視されているローマの水のニンフ（高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店による）。

4) ラムラーはドイツのホラーティウスと呼ばれた。

付録2

アンナ・ルイーザ・カルシュ年譜

年	アンナ・ルイーザ・カルシュ関連事項	歴史事項
1722	12月1日、アンナ・ルイーザ Anna Louisa Dürbach (1722-91)、ポーランドとの国境に近い北シュレージエンの小作地「ハンマーAuf dem Hammer」に、旅館兼飲食店主クリスティアン・デュルバハの第三子として生れる。民家もまばらなこの小作地は、オーダー河畔ツュリヒやャウ Züllichau（ポーランド名スレフフ）とクロッセン Crossen（ポーランド名クロスノ・オジャイスクェ）とのあいだ、シュヴィーブス Schwiebus（ポーランド名シフジェボジン）の近くにあった。母は旧姓クーヘル Kuchel。	ヨーハン・ゼバスティアン・バッハ『平均律クラヴィーア曲集』第一集刊（第二集 1744 年刊）。
1726		ジョナサン・スウィフト『ガリヴァー旅行記』。ヴィヴァルディ『四季』。
1728	祖母の兄フェトケ Martin Fetke に一年の予定で引き取られる。住いはポーランドのティルシュティーゲル Tirschtiegel（チュジエル）に近い、ポーゼン Posen（ポズナニ）のメーゼリッツ Meseritz（ミエンジゼツ）あたりにあった。	
1729		バッハ『マタイ受難曲』。ハラー『アルプス』。
1730	父、死去。	
1731	母、ヘンペル Hempel と再婚。1731 年（もしくは 32 年）、アンナはふたたび実家に戻され、母の再婚で生れた子ヴィルヘルム Wilhelm Hempel (geb. 1732) の子守をする。［ヴィルヘルムはその後指物師の徒弟となったが、無職であることも多く、1764-80 年はアンナに養われた。1770 年、カロリーネ（1750 年生れ。カルシュの娘）と結婚。ヴィルヘルムとカロリーネの長男ヴィルヘルム・ヘンペル Wilhelm Hempel (geb. 1. Juli 1770) をアンナはたいそうかわいがった。この夫婦は 1780 年に離婚した。］	
1732		ハラー『スイス詩集の試み *Versuch schweizerischer Gedichte*』。
1733		バッハ『ロ短調ミサ曲』。

1737	義父ヘンペル没。15 歳で織物職人ヒールゼコルン Michael Hiersekorn と結婚。夫はシュヴィーブス出身の名望家［したがってこの結婚はアンナの母にとって社会的上昇を意味した。3 人または 4 人の男児をもうけるが、長男は 7 歳か 9 歳のときシュヴィーブスで死亡した］。	ゲッティンゲン大学創立。
1738	現在までに確認されている最初の作品 Neujahrswunsch an den Rinderhirten	
1739	17 歳にならない前に第一子出産。	
1740	Eine Satire auf die Verfassung von Schlesien, während der Kaiserlichen Regierung. 18 歳にならない前に第二子出産。	5 月、プロイセンで**フリードリヒ二世（大王）**即位（-1786）。10 月、カルル六世死去。マリーア・テレージア即位。12 月、プロイセン、シュレージエンを要求し、オーストリアと開戦（**第一次シュレージエン戦争**。-1742）。これを機にオーストリア継承戦争（-1748）。
1741	An das Fräulein Mose.	4 月、プロイセン、モルビッツの戦いでオーストリア軍撃破。
1742	Ein Fräulein, namens Evchen, will Ihren Namen nicht hören; daüber wurde gesungen. / Arie（シュヴィーブス時代最後の作）	6 月、プロイセンとオーストリア、ブレスラウ条約。プロイセン、シュレージエンの大部分を獲得。シュヴィーブスもプロイセン・シュレージエンに併合される。
1744		**第二次シュレージエン戦争**（-1745）。
1748	第二子（もしくは第三子）出産後、離婚。プロイセン・シュレージエンで庶民の離婚を許可する法が制定され、この離婚はおそらくその最初の適用例だといわれる［原因がアンナの妊娠にあったのか、ヒルゼコルンの後妻となる女の妊娠にあったのか定かでない。関係者は事実関係をあいまいにしている］。次男と三男は夫が引き取る。アンナは三人目の子（ヨーハン・クリスティア・ヒルゼコルン）を身ごもっていた［Schwiebus と Tirschtiegel のあいだの村 Muschten の知人の家で出産］。	クロプシュトック『メシーアス』。 モンテスキュー『法の精神』。 アーヘンの和約、オーストリア継承戦争終る。
1749	母の指図で仕立職人（Wanderschneider）カルシュ Daniel Karsch と再婚（三人ないし四人の子をもうける）。ポーランドのフラウシュタット Fraustadt（ヴショーヴァ Wszowa）へ転居［この地は 1793 年に第二回ポーランド分割によってプロイセン領となる。三十年戦争期には対抗宗教改革を逃れた多くの福音主義教徒（グリューフィウス Andreas Gryphius もその一人）を受け入れた王都］。たちまち即興詩人として名をあげる。その名はポーランドのリッサ Lissa (Leszno) からプロイセン・シュレージエンのグローガウ Glogau まで届いた。当時の流行文学を熱読、摂取。	マリーア・テレージア、行政・司法・軍事の改革を開始。 プロイセンでフリードリヒ法典公布。 ゲーテ生れる（-1832）。

1750	娘カロリーネ・ルイーゼ Caroline Luise フラウシュタットに生れる（生年を 1754 年とする説もある）。	J. S. バッハ没。
1751		ディドロ、ダランベールらの『百科全書』刊行開始 (-1772)。エドワド・ヤング (1683-1765)『不満、別名 夜想 *The Complaint, or Night Thoughts on Life*』(42-45) のエーベルト Johann Arnold Ebert による独訳»*Klagen oder Nachtgedanken über Leben, Tod und Unsterblichkeit*« 刊。クロプシュトック『メシーアス』改訂版［カルシュはこれを読んだものと思われる］。ゲラート『模範手紙文集ならびに手紙におけるよい趣味についての実践講座 *Sammlung praktischer Briefe nebst einer praktischen Abhandlung von dem guten Geschmack in Briefen*』刊。
1754	6 月 21 日、娘カロリーネ・ルイーゼ Caroline Luise フラウシュタットに生れる（生年を 1750 年とする説もある）。その後生れた二人の子どもはまもなく死亡。	啓蒙主義哲学者ヴォルフ Christian Freiherr von Wolff 没（1679-）。
1755	機縁詩 Gelegenheitsgedichte を売って生計を立てる（ビラ印刷）。1755 年までフラウシュタットに住む。1755 年夏、グローガウへ転居。	リスボン大地震。モンテスキュー没。 レッシング『ミス・サラ・サンプソン』。
1756	七年戦争のあいだフリードリヒ二世の戦勝とオーストリアの敗北をうたう（ビラ印刷。版元 Schweickardt in Glogau。カルシュの名はベルリンまで届く）。	8 月末、フリードリヒ二世、ザクセンで戦う。10 月 1 日、ロボジッツ Lobositz（チェコ名ロヴォシツェ）近郊で勝利を収める。 1756-63年　**七年戦争**。 モーツァルト生れる。
1757	ポーランドの友人を頼って旅に出、誕生日を祝ってもらう。——グローガウへ戻る。プロイセンを称える詩 [Auf den Sieg bei Leuten]。歓呼する人々の前で朗読される。夫の悪態。——健康悪化。面識のないバート・ヴェルムブルン Bad Warmbrunn（チェプリツェ・スロスキェ・ズドルィ）在住の牧師に招かれ、バルムブルンヒルシュベルク Warmbrunnhirschberg（イェレンヤ・グラ）近郊のその地で湯治。フォン・ザイドリッツ Friedrich Wilhelm Freiherr von Seydlitz と文通（„Ich lebte 2 Monate wie im Elysium"）。夫の手紙にせかされて帰宅。末の娘二人が死亡。以後 4 カ月間、「不幸な結婚生活のあらゆる責め苦」にさいなまれる。	5 月 6 日、オーストリア軍、プラハ近郊で敗れる。11 月 5 日、プロイセン、ロスバハ Roßbach（ハレの南、ライプツィヒの西、チェコ名フラニェツェ）近郊でフランス軍と帝国軍を撃破。11 月 22 日、フォン・ベーヴェルン August Wilhelm von Bevern (1715-81) 率いるプロイセン軍、ブレスラウ近郊でオーストリア軍に敗れる。12 月 5 日、プロイセン、ロイテン Leuthen（ニーダー・シュレージエン、ブレスラウ西方、ポーランド名ルティンヤ）近郊でオーストリア軍を撃破。 ゲラート『宗教歌集 *Geistliche Oden und Lieder*』刊。
1759	結婚生活の難儀から体をやすめるため 4 週間ヒルシュベルクで湯治。	8 月 12 日、クーナースドルフ Kunersdorf（フランクフルト・アン・デァ・オーダーの東）近郊で、フリードリヒ二世、オーストリア・ロシア軍に最大の敗北。
1760	1 月 21 日、後援者、酒乱の夫を国王軍に入隊させる。1 月 24 日、国王の誕生日を祝う詩を書く。以後、平	6 月 23 日、フケ軍敗れる。リーグニツ Liegnitz（8 月 15 日）、トルガウ Torgau（11 月 3 日）

	和な生活を獲得。7月5日、フケ軍の一部帰還。夫と再会、散歩。物価高騰、借金生活。11月3日、トルガウ Torgau 近郊の勝利。11月12日、グローガウ時代の戦争抒情詩の最後を飾る Auf den Sieg bei Torgau 成る。グローガウ滞在中の王弟ハインリヒをうたう。12月、フォン・コトヴィツ男爵 Rudolf Gotthard Baron von Kottwitz の勧めでベルリンへ行く決意を固める（「グローガウなどにいたら、生活の糧を得ることに汲々として、才能をつぶしてしまう」）。シュレージエン・ポーランド時代の宗教抒情詩の最後の作 Die göttliche Vorsehung 成る。38歳の誕生日の直後、11歳の娘カロリーネ・ルイーゼをともないグローガウを去る。最初の夫との子ヨーハン・クリスティアンは教育のためシュレージエンに残す。	近郊の戦いでフリードリヒ二世勝利。
1761	1月25日、ベルリン着。宮中顧問官シュタール Stahl の指示でカロリーネを敬虔主義にもとづく実科学校の寄宿舎に入れる。ズルツァー Johann Georg Sulzer、ラムラー Karl Wilhelm Ramler と邂逅。3月、An Herrn Professor Sulzer。ズルツァー、グライム、バハマンから本を贈られる。グライム Johann Ludwig Wilhelm Gleim (1719-1803)、5月中旬から7月初旬までベルリンに滞在。5月、グライムとの文通はじまる。グライム、カルシュを「ドイツのサッポー」と呼ぶ。6月、An Gleim。7月初旬、グライム、ハルバーシュタットに帰る。7月24日、Seufzer: Steu Schlummer-Körner auf ihn hin ... 7月、Die Freunde。9月15日、ベルリン出立、マクデブルクとハルバーシュタットへ行く。9月24日、マクデブルク到着。25日にはハルバーシュタットにいる。9月、An Herrn Gleim。詩集出版企画が具体化しはじめる。10月、ハルバーシュタットで Das Moos, als Herr Domdechant ... ライヒマン夫人に気に入られ、ハルバーシュタットに28日間滞在。Domherr Ernst Ludwig von Spiegel, Friedrich Eberhard von Rochow を知る。秋、フォン・シュピーゲルとグライム、カルシン詩集を計画。10月21日、ふたたびマクデブルクに戻る。大商人バハマン Heinrich Wilhelm Bachmann (nach 1734-76) がパトロンの一人になる。都市駐屯軍長官ライヒマン、その妻（コトヴィッツ男爵の従姉妹）との親交。11月、グライム、マクデブルク訪問。Gleim ist in Magdeburg zu Besuch. 11月8日、プロイセン王妃に紹介される（1760年、ロシア軍を逃れてマクデブルクに避難していた）。12月16日、王女アマーリア（フリードリヒ二世の妹）よりカンタータ執筆を依頼される。幸福の頂点を実感。12月23日、ふたたび宮殿に召され、コンパクトを下賜される。12月? An eine Freundin。このころカルシュの夫、兵営を脱走。枢密顧問官ブーフホルツ Buchhoz に離婚の可能性を相談 (vgl. an Gleim, 10. Jan. 1762.)。この年、Morgen-Gedanken; Der Frühling; An ihren verstorbenen Oheim; An Milon; An Denselben; An Milons Billet;	ルソー『新エロイーズ』刊。 ランベルト、常数πが有理数でないことを証明。 オイラー、流体運動方程式。

	Sapho an Amor; An Herrn Uz（自分の本領は抒情詩ではなく歌 Lied だ）; An den Domherrn von Rochow; Belloisens Lebenslauf; An Gleminden 成る。	
1762	1 月 24 日、国王の誕生日。マクデブルク大聖堂で誕生日カンタータが披露される。——2 月 4 日ごろカルシン、ふたたびハルバーシュタットへ行く。(2 月 5 日付のあとのカルシンの手紙はグライムの手もとから抜き取られた。) ——2 月 12 日と 5 月 24 日、»Hannoversche Beiträge zum Nutzen und Vergnügen« にカルシュ詩集の予約募集広告掲載。カルシュがハルバーシュタットに滞在しているあいだにバハマンがその見本のために詩を選択（ただし詩集掲載詩の選択はグライムが行った)。2 月 26 日ごろグライムに連れられてマクデブルクに戻る。28 日ごろグライム帰る。このころ Sappho ist traurig bei Thyrsis.——3 月、Ob Sappho für den Ruhm schreibt? ヘルムシュテット Helmstedt 学会の名誉会員となる。——5 月 17 日かつての牛追いの少年に 2 グルデン送金。30 日マクデブルクでロシアとの和平成立の告知。——6 月 3 日、マクデブルクでスウェーデンとの和平成立の告知。グライム、ハルバーシュタットでの祝典にカルシンを招待。9 日、ハルバーシュタットの祝典の様子をライヒマンに伝える。20 日マクデブルクへ戻る。24 日フォン・ブラウンシュヴァイク Ferdinand von Braunschweig、カッセル近郊ヴィルヘルムスタールでフランス軍を撃破。グライムへの恋の終り。——8 月、An die Königin.——9 月ズルツァー Sulzer への 4 通の手紙（1 日、3 日、8 日付、および日付なし。ただし日付はグライムの記入になるもので信頼できない。4 通のうち最初の 3 通は 1761 年秋に、4 通目は 1762 年 9 月初旬に書かれた。1831 年 Wilhelm Körte によって発表された)。10 月、ベルリンへ戻る。戦後の住宅難。バイアー Baier 夫人（Ramler の友人、詩では„Philis“）の好意で狭い部屋を共有する。ふたたび惨めな暮しに甘んじねばならない挫折感と、それを打開してくれるかもしれない大王への期待を An den Apoll（→1763 年）に歌う。——11 月、母の二度目の結婚で生れた長男 Stiefbruder Daniel (1765 年に結婚)、次男 Wilhelm Hempel に会い、生活援助。Wilhelm を引き取り、生活費をかせぐためふたたび機縁詩に手を染める。——この年、An die Frau Reichmann; Elegie auf die Geduld; Gedichte nach vorgeschriebenen Endreimen.	ルソー『社会契約論』『エミール』刊。プロイセン宮廷、ベルリンへ戻る。ベルリンは戦後の混乱。多くの人々が市内へ流入。
1763	ズルツァーの序文執筆遅延。七年戦争期は用紙の調達困難。そのため詩集の出版遅れる。7 月 26 日ごろポツダム到着、フリードリヒ二世との面会の機会をねらう。8 月 11 日、フリードリヒ二世を謁見（サン・スーシ宮、鏡の間)。翌日ベルリンへ帰る。その後もポツダムに招かれる。フリードリヒ大王は約束した年金を下賜することなく、50 ターラーの見舞金を贈	2 月、パリ条約、3 月、フベルトゥスブルク Hubertusburg 条約締結（オーストリア・プロイセン・ザクセン間。フベルトゥスブルクはライプツィヒ近郊)。七年戦争終結。3 月 30 日、フリードリヒ大王ベルリン帰還 [vgl. Friedrich der Große an Frau von Camas, 6. März 1763: Briefe II, S. 130, Nr. 116. カルシュやベルリン市民のフリー

	るにとどまった。10月下旬、離婚後に生れた最初の夫とのあいだにできた息子と再会。10月末『精選詩集 *Auserlesene Gedichte*』(グライム、ズルツァー編) 出版される。2000 ターラーの収入。この年、An den Apoll。	ドリヒ偶像化、理想化願望と実像とのはなはだしい落差]。
1764	1月、Gesang an die Königin (フリードリヒ讃歌)。この年、Zueignungs-Gesang an den Baron von Kottwitz; Das Lob des Essens; Lob der schwarzen Kirschen; An die Kartenspieler 。Moses Mendelssohn: Briefe, die neueste Litteratur betreffend (3月版) にカルシュの詩にたいする批評が掲載される。	チェーザレ・ベッカリーア『犯罪と刑罰』刊。
1765	カルシュ『小品集 *Kleinigkeiten*』(詩集) 刊。	ヨーゼフ二世、オーストリア皇帝に即位。
1766	Heinrich Wilhelm von Gerstenberg, *Briefe über die Merkwür- digkeiten der Litteratur*, 1. u. 2. Sammlung (Schleswig u. Leipzig)刊。カルシュ批評を含む。	レッシング『ラオーコオン』、ヘルダー『近代ドイツ文学に関する断章』、ヴィーラント『アーガトン物語』刊。
1767	娘カロリーネ、Heckersche Realschule から母のもとに帰る (母の異父弟 Wilhelm Hempel が同居していた)。この年、An eine Dichterin。Johann Gottfried Herder, Sappho oder die Karschin: Zwo Antipoden: Ob Sappho und Corinna wegen ihrer Buhlerei verloren gegangen ? ein Urteil der Litteraturbriefe. In: *Ueber die neuere Deutsche Litteratur. Zwote Sammlung von Fragmenten. Eine Beilage zu den Briefen, die neueste Litteratur betreffend* (1767). Kap. IV: Von der Griechischen Litteratur in Deutschland.	レッシング『ハンブルク演劇論』『ミンナ・フォン・バルンヘルム』刊。 [英] このころから産業革命はじまる。
1770	4月1日、カロリーネ (16歳) を20歳近くも年上の叔父ヘンペル Ernst Wilhelm Hempel と結婚させる [カロリーネが妊娠していたため]。7月2日、カロリーネ、長男 Heinrich Wilhelm (-ca. 1850) を出産 [その後二人の子を産むが、いずれも生後間もなく死亡]。	ベートーヴェン、ヘーゲル生れる。 Johann Bernhard Basedow, *Methodenbuch für Väter und Mütter der Familien der Völker.*
1771	カルシュとグライムの関係悪化。An Se. Hochfürstl. Durchlaucht den Herzog Ferdinand ...	[英] アークライト、最初の機械工場制紡績業をはじめる。
1772	カルシュ『新詩集 *Neue Gedichte*』刊。Über die Emilia Galotti.	レッシング『エミーリア・ガロッティ』刊。
1773	晩夏、フリードリヒ二世より下賜された2ターラーを返却。	ゲーテ『鉄の手のゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』刊。
1774		ゲーテ『若いヴェールターの悩み』『クラヴィーゴ』刊。
1775	ゲーテ、ベルリンに数日滞在。カルシュ、ゲーテに書簡を送る (9月4日付)。	

1776	Morgengedanken. — An Mademoiselle Gräf, über die Miß Sara Sampson もこのころか。カロリーネの自伝的作品（劇）*»Der ehrliche Schweizer«* ベルリンで刊行［ベルリンでは何度か上演された。カロリーネにはこのほか、詩、随筆数編、長編小説断片がある］。3 月 28 日、カロリーネ、次男 Carl を出産(-14. Juni 1780)。	7 月、アメリカ合衆国独立宣言。
1778	ゲーテ、ベルリン訪問。An Goethe; Gesundheitsglück und Seelenfrieden ... コトヴィエツキを知る。2 月 7 日、カロリーネ、長女 Ferdinande 出産(-11. Sept. 1778)。	7 月、バイエルン継承戦争（-1779）。ヴォルテール、ルソー没。ヘルダー『諸国民の声』（民謡集）刊。
1779	Über die Vergleichung. — Rezept zu Stärkungsschokolade; Lied einer alten reichen Witwe; Meine Zufriedenheit もこのころか。	
1780		マリーア・テレージア没。ヨーゼフ二世統治。
1781	11 月 7 日、カロリーネ、三男 Ferdinand（-25. Juli 1781）を出産。27 日、カロリーネ離婚。	ヨーゼフ二世の諸改革。レッシング没。シラー『群盗』刊。カント『純粋理性批判』刊。
1782	3 月、カロリーネ、ブレーメン出身の 22 歳の貴族 Carl Friedrich von Klencke と再婚。ひきつづき母と同居。やがてクレンケ夫妻別居。	ヨーゼフ二世、死刑廃止、修道院への抑圧禁止。6 月 18 日、スイスでアンナ・ゲルディン処刑される［記録上ヨーロッパで最後に処刑された魔女］。
1783	1 月 26 日、カロリーネ、娘 Wilhelmine Christiane を出産［のち作家となる。二人目の夫の姓をとり、Helmine von Chézy を名のる。1856 年 1 月 28 日没］。7 月、カロリーネふたたび離婚。10-11 月、カルシュ、ハルバーシュタットに滞在。	
1784		シラー『たくらみと恋』刊。
1786	[An Schiller]; Zuruf an den Fremdling ... グライム、カルシュ書簡集刊行を提案、実現せず。	フリードリヒ二世没。フリードリヒ=ヴィルヘルム二世即位（-1797）。
1787	Versuch einer Danksagung. フリードリヒ = ヴィルヘルム二世より家を与える通知［Minister Wöllner の手紙による］。	ゲーテ『タウリスのイフィゲーニエ』、シラー『ドン・カルロス』、モーツァルト『ドン・ジョヴァンニ』刊。
1788	カロリーネとの確執つのる。カロリーネの詩集 *»Gedichte v. C. L. von Klencke, geb. Karschin«*, Berlin 出版される。	モーツァルト最後の 3 つの交響曲成る。［仏］三部会招集を布告。［英］「タイムズ」創刊。
1789	フリードリヒ=ヴィルヘルム二世、カルシュのためにハッケ広場沿いに新築家屋を贈る。4 月 24 日、入居。作家活動をはじめた娘カロリーネ・フォン・クレンケにたいする嫉妬と憎悪に苦しむ。このころ三人称形式で『自伝略述 *Vorläufige Lebensbeschreibung der Dichterin Anna Luise Karschin, geb. Dürbach*』を執筆（没後 „Berliner Musenalmanach für 1792" に発表される）。	［米］ワシントン、大統領に就任。［仏］5 月、三部会開催。6 月、第三身分、国民会議を宣言。7 月、フランス革命勃発。8 月、「人間および市民の権利の宣言」（人権宣言）採択。

1790	An Gleim.	ゲーテ『ファウスト断片』『トルクヴァート・タッソー』『植物変態論』刊。ハイドンの 12 の「ロンドン交響曲」成る。
1791	An die Ostersonne. ―娘との確執。―7-10 月、フランクフルト・アン・デァ・オーダーで法学を学んでいた孫 Heinrich Wilhelm Hempel のもとに身を寄せ、生活を援助。しかし故郷シュレージエンまで行くことはできなかった。病気。―10 月 1 日、危篤状態でベルリンの自宅へ戻される。その 12 日後、10 月 12 日、カルシュ没(享年 68)。―Sophienkirche に葬られる。	モーツァルト『魔笛』『レクィエム』成る。モーツァルト没 (1756-)。
1792	『アンナ・ルイーザ・カルシン詩集 *Gedichte* der Anna Louisa Karschin』ベルリン刊 [娘カロリーネ・フォン・クレンケ編。第二版、ベルリン、1797 年]。冒頭にカロリーネによるカルシュ伝 [カロリーネの成功した唯一の作品だといわれる]。	シラー『三十年戦争史』刊。
1795		ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』刊。
1796		カンペ『父から娘への助言 *Väterlicher Rath für meine Tochter. Ein Gegenstück zum Theophron*』刊。
1802	9 月 21 日、カロリーネ、ベルリンに没する (49 歳)。	
1805	Helmine von Chézy (Hg.), *Leben und Romantische Dichtungen der Tochter der Karschin.* Als Denkmal kindlicher Liebe (Frankfurt am Main). Darin: Caroline Louise von Klencke: Fragmente.	
1819	Ludwig Achim von Arnim, *Ungedruckte Briefe der Karschin.* Bekannt gemacht von Ludwig Achim von Arnim.	
1858	Helmine von Chézy, Meine Großmutter Anna Luise Karschin. In: *Unvergessenes. Denkwürdigkeiten aus dem Leben* von Helmine von Chézy. Von ihr selbst erzählt. Bd. I. Leipzig 1858. S. 3-110.	

付録 3

Gedichte von Karschin (Chronologisch geordnet)

1722

12 [1. Dezember (Oktober?) *Anna Louisa Dürbach wird auf dem »Hammer« zwischen Züllichau und Krossen in Niederschlesien als Tochter des Wirtshauspächters Christian Dürbach geboren.*]

1738

? Neujahrswunsch an den Rinderhirten. In ihrem sechszehnten Jahr, 1738

1740

? An ihren ersten Mann. In ihrem achtzehnten Jahre gemacht, 1740 / Eine Satire auf die Verfassung von Schlesiens, während der Kaiserlichen Regierung

1741

An das Fräulein von Mose. 1741

1742

? Arie. In Schwiebus 1742 / Ein Fräulein, Namens Evchen, will ihren Namen nicht hören, darüber wurde gesungen: 1742

1752

? An Se. Majestät den König von Polen. Neu-Fraustadt in Polen 1752

1755

? Das Schicksal. Sr. Wohlehrwürden des Herrn Feldprediger Klettk bei Gelegenheit dessen Nahmensfestes gesungen. 1755

1757

12 [Auf den Sieg bei Leuthen.] Am 5. Dezember 1757

1758

5 Der 13ten Mai 1758, als der Tag des Schreckens in Glogau

11 Schlesisches Bauerngespräch zwischen Vetter Hanß und Muhm Ohrten, gehalten zu R.... bei Glogau im November 1758

1759

? Das beständige Einerlei

1760

1 Zuruf an Glogau (Den 24ten Jenner 1760)
11 [Auf den Sieg bei Torgau.] Am 3. November 1760
? Die göttliche Vorsehung

1761

3 An Herrn Professor Sulzer (Zu Berlin im Merz 1761) / Das tödtlich kranke Kind, an Herrn Professor Sulzer (Zu Berlin den 17ten Merz 1761)
4 An Herrn Professor Sulzer, über das Bild seiner verstorbenen Gattin (Zu Berlin im April 1761) / An Herrn Professor Sulzer, über den Tod seines Kindes (Zu Berlin im April 1761)
5 An den May (zu Berlin den 27ten May 1761)
6 Der Unterschied eines Schmauses und einer kleinen vergnügten Mahlzeit. Den 4. Jun. 1761 / Morgen-Fragen an Gliphästion, als er Abends vorher einen Traum erzählet und dabey gesagt hatte: Er schlafe immer sehr gut, und habe selten Träume (Zu Berlin, den 4ten des Brachmonaths 1761) / Gliphästions wirklicher Traum (Zu Berlin den 6ten des Brachmonaths 1761) / *Gefällt die Dose Dir so gut wie das Gedichte* (8. Juni) / An Gleim (Berlin, den 14. Juni 1761) / Das Ungewitter. An meinen Freund 17. Juni 1761 / Doris an Damon/der Kuß / An Gleim. Empfangen, den 22. Juni 1761. Morgens um 7 Uhr / Lied der Lalage / Der Dank an Herrn Borchmann (30. Juni) / Gedanken an Herrn Gleim / Klagen bey dem Grabe
7 Der weinende Amor, bey Betrachtung einer Bildsäule zu Charlottenburg im Garten (Den 16ten des Heumonaths 1761) / Die Abendmahlzeit auf dem Lande, an Herrn Geheimen Rath Buchholz (Den 16ten des Heumonats 1761) / Auf Palemons Flügel (Den 20ten des Heumonats 1761) / Die Sehnsucht der Freundschaft, an Herrn Gleim (Zu Berlin den 21ten des Heumonats 1761) / Seufzer (Berlin, 24. Juli) / An Herrn Geheimen Rath Buchholz an seinem Geburtstage (Den 30ten des Heumonats 1761) / Die Freunde, an Palemon, nach Herrn Gleims Abreise aus Berlin (Im Heumonat 1761) / Von dem Vertrauen auf Gott an den Herrn Professor Sulzer (zu Berlin im Heumonat 1761)
8 Das Ungewitter in der Nacht vom 31ten August 1761 / Die Fahrt der Königlichen Braut nach Engelland
9 Auf den Tod des Prinzen Heinrich von Braunschweig zu Berlin den 12ten des Herbstmonats 1761 / Ueber den Entsatz von Braunschweig (13. des Weinmonats) / Vorbitte wegen eines Nußbaums an Palemon (Zu Magdeburg den 18ten des Herbstmonats 1761) / An Palemon (Den 20ten des Herbstmonaths 1761) / An Herrn Gleim. Bey Besteigung des Spiegelberges ohnweit Halberstadt (Zu Halberstadt den 26ten des Herbstmonaths 1761) / An den Herrn Kanonikus Gleim. Halberstadt, den 29. Septbr. 1761
10 An den Schöpfer an ihrem Geburtstage den 1ten des Weinmonats 1761 / Lied an gefangene Lerchen dem Dohmdechant Freyherrn Spiegel zum Diesenberg zugeeignet (Zu Halberstadt den 5ten des Weinmonaths 1761) / An Herrn Utz (Zu Halberstadt den 8ten des Weinmonats 1761) / Das Harz-Moos, als Herr Domdechant Freyherr Spiegel zum Diesenberg etwas Moos vom Harzgebürge mitgebracht hatte (Zu Halberstadt den 10ten des Weinmonaths 1761) / Ueber den Entsatz von Braunschweig. Zu Halberstadt den 13ten des Weinmonats 1761 / Als die Wiederkunft des Königs gewünschet wurde / Als von Sanssouci gesprochen wurde / An den Herrn Kanonikus Gleim. Magdeburg, im October 1761 / An Palemon, nach ihrer Zurückkunft aus Halberstadt (Im Weinmonat 1761)
11 Den 16. November des Morgens um ½ 5 Uhr
12 An Palemon, an ihrem Geburtstage. (Den 1ten des Christmonaths 1761) / An Palemon, als sie die goldene Feder vermißte (Den 6ten des Christmonaths 1761) / An Palemon (Im

Christmonath 1761) / Gesang am Geburtstage der Königin zu Magdeburg den 8ten des Wintermonats 1761 / An Palemon, als Herr Oeser das Bild der Dichterin entworfen hatte (Den 16ten des Christmonaths 1761) / Don Goldofon: oder der sterbende Geizige, eine Erzählung (Den 16ten des Wintermonaths 1761) / An Mademoiselle W. Buchholz, auf ihren Geburtstag (Den 30ten des Wintermonaths 1761) / Klagen einer Braut an ihre Nachtigall. Im Wintermonath 1761

? An den Dohmdechant Freyherrn von Spiegel, zum Diesenberg, als er gesagt hatte, daß er schlaflose Nächte hätte, und bey Lichte nicht gut lesen könnte / An die Frau von Reichmann / An Herrn D. K. / An ihren verstorbenen Oheim den Unterweiser ihrer Kindheit / Begebenheit im Reiche Plutons, nach der Schlacht bey Torgau / Der Frau Geheimen Räthin Buchholz / Die Allmacht und Güte Gottes / Die Felsen-Brüder, an den Reichs-Grafen zu Stolberg-Wernigerode / Die Sommer-Nässe, an Herrn Gleim / Klagelied über den Tod eines Canarien-Vogels (Zu Magdeburg) / Morgen-Gedanken

1762

1 Ein Wort an den Tod (Zu Magdeburg den 16ten Jenner 1762) / An den Prinzen von Preussen am Tage seines Religionsbekenntnisse (Zu Magdeburg den 28ten des Jenners 1762)

2 *Der Sturmwind heult den Tag und mich abscheulich an* (7. Febr.) / An Tyrsis. Als man die erste Nachricht erhielt, daß der rußische Käyser Peter der dritte des Königs Freund sey, und darüber ein Fest angestellet war. Den 9ten des Hornungs 1762 / Begebenheit zu Wien in der Kaiserlichen Burg. Den 12., 17., 21. / Eigenschaften der Sapho. Halberstadt, den 18., 19., 20. / Mittags, als die Dichterin mit bei dem Dom-Dechant Spiegel zu Halberstadt speiste. Den 18. Februar 1762 / An Herrn Gleim, am Tage der Geburt eines Menschenfreundes (Zu Halberstadt den 22ten des Hornungs 1762) / Die Habsucht der Könige. Halberstadt, den 22. Febr. 1762 / An die Prinzessinn Heinrich. Halberstadt, den 23. Febr. 1762

3 An den Herrn Regierungs-Advokat Köpfen (Zu Magdeburg, den 10ten März 1762) / Ob Sappho für den Ruhm schreibt? An die Frau von Reichmann den 10. März 1762 / An Palemon, als er von Magdeburg nach Berlin verreisen wollte

4 An Palemon (Den 2ten April 1762) / An Palemon, zu seinem Geburtstage [2. April] / An Denselben / An Palemon, der Spaziergang auf dem Fürstenwall (Zu Magdeburg im kalten April 1762) / Der Schlaf, an Herrn Gleim, als er sagte, daß er immer gut schliefe, und sie gebethen wurde, dem Schlaf ein Lied zu singen. Den 2ten April 1762 / An Herrn Zachariä, den Verfasser des Gesanges von der Hölle, zu Braunschweig

5 Das Feuerwerk am Ufer der Elbe an den Herrn Professor Sulzer (Zu Magdeburg den 18ten May 1762) / Der Feldzug in Sachsen eröfnet vom Prinzen Heinrich des Königs Bruder. Zu Magdeburg den 18ten May 1762

6 *Du bist viel glücklicher als ich* (10. Juni) / Lied der Frölichkeit im Brachmonath 1762

8 An den kranken Herrn Rector Goldhagen (Zu Magdeburg den 21ten August 1762) / An die Königin. Ueber eine Lustfahrt auf der Elbe mit den Prinzeßin von Braunschweig. Zu Magdeburg im August 1762 / Klagen und Bitte, dem Königlichen Feldherrn Herzog Ferdinand gesungen auf dem Schutt des Gotteshauses zu Elbingerode am Harz / Erinnerung und Fragen an die Königin

9 An Herrn von Humbracht nach einem Ungewitter (zu Magdeburg den 5ten des Herbstmonats 1762)

10 Als das Tagebuch der Oesterreichischen Armee, unter dem Befehl des General von Laudon, vorgelesen wurde / Aufmunterung an den Geheimen Rath Freyherrn von Labes, wegen seiner Betrübniß über Peter den dritten (Den 20ten des Weinmonaths 1762)

? An den Herrn Music-Director Rolle, über die Cantate des Friedens-Festes / An die Frau

von Reichmann, Kommendantin zu Magdeburg / Ein Gebet an den Mars

1763

1 An Ihro Königliche Hoheit die Prinzeßin Amalia, bey dem Empfang des Prinzen Heinrichs. Den 5ten Jenner 1763 / Der unnachahmliche Pindar, an Herrn Ramler (Den 24ten Jenner 1763) / Des 24sten Januars musikalische Feier in der Darletschen Wohnung

2 Bei dem jubelvollen Empfange der Königin. Den 16. Februar 1763 / An Ihre Majestät die Königinn am Tage nach Ihrem glorreichen Einzuge in den Königl. Pallast. Den 17ten Februar 1763

3 An einen jungen Freund. Im März 1763 / An Gott bei dem Ausruf des Friedens. Den 5. März 1763 / *Der Himmel bleibet lauter Wolke* (23. März) / Dem Vater des Vaterlandes Friedrich dem Großen, bei triumphirender Zurückkunft gesungen im Namen Seiner Bürger von A. L. Karschin. Den 30. März 1763 / An das Vaterland bei der triumphierenden Wiederkunft des Königes. Den 30. Martii 1763

4 An die Muse, daß sie den Abend der großen Illumination singen solle. Den 4. April 1763 / Aufforderung an die Muse, daß sie dem Philosoph zu Sans-Souci nachfliehen soll. Den 21. April 1763

7 Als sie eine zum Scherz verfertigte Ordre an den Kanzeleidirektor Brandhorst, und ein Execu- toriale auf einem Tisch fand. Den 5. Julii 1763

8 [11. August: *Bei einer Audienz sagt ihr Friedrich II. ein Haus und eine Jahrespension zu, hält jedoch sein Versprechen nicht.*]

10 *Dir will ich sagen, daß kein Pietist so sicher* (1. Okt.) / Aufforderung an die Dichterin von Herrn Doktor Krünitz [Als in Sanssouci der König mit ihr gesprochen hatte]. Den 24. Okt. 1763 / An den Phöbus. Den 27. Oct. 1763

12 An die Melpomene wegen des Prinzen Heinrichs des jüngeren Königlichen Hoheit. Verstorbenen Bruder Seiner Majestät des Königs. Den 30sten December 1763

? An den Apoll, daß er die Leyer zurücknehmen möchte / An Venus, über die stolze Phillis / Das Türkische Bacchusfest. Dem Obristen von Anhalt gesungen / Die göttlichverkannte Phillis im Walde / Phillis, die Helferin. Eine Idylle an Damon / Ueber den Unbestand des Ruhms

Ende des Jahres: [*Die von Gleim, Bachmann, Sulzer und Ramler auf Subskriptionsbasis veranstaltete Ausgabe ihrer* »Auserlesenen Gedichte« *(vordatiert auf 1764) bringt ihr zwar den erhofften materiellen Gewinn (2000 Taler), doch fallen die Urteile der Kritiker überwiegend negativ aus, so daß Anna Louisa Karsch monatelang wie gelähmt ist.*]

1764

1 An die Stadt Berlin wegen Sr. Königl. Hoheit des Prinzen und Feldherrn Heinrichs. Den 18. Jenner 1764 / An die Clio wegen des Königs den 24sten Jenner 1764 / Gesang an die Königin. Den 24. Jänner 1764 / An Ihro Königl. Hoheit die Mutter des Preußischen Thronfolgers. Den 29ten Jenner 1764

? An den Phöbus Apollo wegen des ihr von dem Freyherrn Dohmdechanten von Spiegel geschenkten dreyseitigen Pettschafts / An die jüngste Demoiselle St*hl / Das Lob des Essens. An Quintus Icilius / Warnung an den jungen Herrn von H*st. 1764. Als derselbe der Mahlerey den Vorzug vor der Dichtkunst ertheilte

1765

1 An die Königinn. Den 24. Jenner 1765

2 An Se. Hochwürden Gnaden den Herrn Domdechant Freyherrn von Spiegel zur Feyer

des 22sten Februars 1765
4 Bey dem Eheverbündniß meines jüngsten Bruders Ernst Daniel Hempel. Berlin, den 24. April
7 An die Najade. Den 14ten Julii 1765
11 An den klagenden G*d. Den 11. November 1765
? Als sie des Sonntags zu einer Lustreise nach Charlottenburg eingeladen wurde, und sie sich entschuldigte, weil sie den Herrn Rath Spalding predigen hören müßte / An Phillis. Eine Einladung zu den Ruinen bey Potsdam / Jupiter und sein Adler. An den Verfasser des Gesanges Ptolomäus und Berenice / Ueber die Vorzüge des Prinzen Friedrichs von Braunschweig / Ueber ein Gemälde / [»*Kleinigkeiten*« (Gedichte)]

1766

1 An die Mnemosyne, bey dem allerhöchsten Feste, welches Se. Königl. Hoheit Prinz Heinrich Sr. Majestät dem Könige gab. Am 24. Jenner 1766
9 Aus einer Bußtagspredigt des Herrn O. C. R. Spaldings. Im Sept. 1766. In Herrn Doct. Krünitz Stammbuch
? An einen Ingenieur, Liebhaber der Phyllis / An Herrn Doktor Krünitz wegen ihres Pettschafts / Der sichere Fromme. Aus einer Predigt des Herrn Ober-Consistorialrath Spalding / Ermahnung an einen jungen Freund / Nachricht an den Grafen von Stollberg-Wernigerode wegen des Rinderhirtens Johann Christoph Grafes in Schwiebus, zween Meilen von Züllichow

1767

? An eine Dichterin, welche das Klavier spielte

1768

11 An den regierenden Reichsgrafen von Stollberg-Wernigerode über die Freude, Seinen einzigen Enkel glücklich vermählt zu sehen. Im November 1768
? Dorimön und Amariethe in ihrer neuen Wohnung

1769

1 Lied an Se. Fürstl. Durchl. den jungen Prinzen von Anhalt, Enkel des regierenden Herrn Grafen von Wernigerode zum Ersten Jahrstage. Den 9. Januar 1769
9 Sr. Hochfürstl. Durchlaucht dem Herzog Ferdinand von Braunschweig-Lüneburg, im Königlichen Garten zu Schönhausen unterthänigst gewidmet. Den 4ten September 1769

1770

1 Das Abentheuer einer Winternacht (24. Jan.)
8 Auf die Geburt des jungen Prinzen von Preussen Königl. Hoheit. Berlin, im Augustmonat 1770

1771

1 Lied der Clio. Sr. Durchlaucht dem Herzog Ferdinand von Braunschweig. Den 12. Jenner 1771

? An Se. Hochfürstl. Durchlaucht den Herzog Ferdinand von Braunschweig-Lüneburg

1772

4 Über die Emilia Galotti. An Sr. Durchl. den Feldherrn Ferdinand Herzog von Braunschweig und Lüneburg. Im April 1772
? An einen jungen Herrn von Baronoff, jetzt Ruß. Kaiserl. Kreisrichter in Chstland. Ins Stammbuch 1772 / [*»Neue Gedichte«*]

1773

Spätsommer: [*Anna Louisa Karsch weist die Annahme von zwei Talern zurück, die ihr Friedrich II. geschenkt hat.*]
9 *Zwey Thaler gibt kein großer König* (4. Sept.)
10 An Ebendesselben Hochfürstl. Durchl. (= Herzog Ferdinand von Braunschweig-Lüneburg) Den 19. October 1773
11 An den jüngstgebornen Prinz Friedrich Carl Ludwig von Preussen in Seiner Wiege. Den 19ten November 1773 / Dem Andenken des Herrn Hofrath Stahl bei seinem Grabe. Berlin, im Nov. 1773
? An Lehnchen R** über einen Zuckermann

1775

7 An meinen Freund, den Akteur H** Den 10. Jul. 1775
? An meine Freundin / Die neue Versicherung

1776

6 Morgengedanken (16. Juni)

1778

5 [*Begegnung mit Goethe in Berlin.*] An Goethe zu Berlin, Montags den 18. Mai 1778 / Was wirst du von dem Weibe denken (27. Mai.)
6 An Gleim. Den 27. Juni 1778
7 O du mein bester unntter allen (3. Juli) / Herzforschung an Göthe
? An den Herrn Ober-Consistorialrath Gedicke

1779

10 Ueber die Vergleichung. An Nanntchen. Den 5. Okt. 1779

1781

8 Ich habe viel, sehr viel geduldet und gelitten (6. Aug.)

1782

9 Ihre Königlichen Hoheit der Fürstin von Anhalt-Dessau gebornen Prinzessinn von Braunschweig-Schwedt am 24. September 1782
12 Dem Ritter Bredow der vor Jahren ... (22. 12. 1782)

1783

1 An Quitungsstatt geschrieben. Im Jänner 1783

1785

4 Die Wassernoth bei Frankfurth an der Oder im April 1785 [27. April]
5 An Ihro Königliche Hoheit die Prinzessinn Louise, Tochter des Prinzen Ferdinand von Preußen K. H. Als diese höchsten Herrschaften Bellevue beziehen wollten. Den 24. Mai 1785

1786

5 An Schiller. Berlin, den 4. Mai 1786
8 Die Nadelstichsheilung. Den 14ten August 1786 / Zuruf an den Fremdling beim Marmorsarge Friedrichs des Großen am 18. August 1786
9 An die Sonne bei dem Leichenbegräbnisse Friedrich des Größten den 9ten Sept. 1786

1787

2 Versuch einer Danksagung an König Friedrich Wilhelm den Vielgeliebten
8 Trostgesang für Neu-Ruppin bey den Ruinen am 31sten August 1787
12 Loblied bei dem fünf und sechzigsten Jahresschluß (1787?)

1788

[*Zunehmende Streitigkeiten mit ihrer Tochter Caroline.*]
1 An den Herrn Baron von Kottwitz zu Boyadel, Neffe desjenigen Freyherrn von Kottwitz, welcher sie aus Glogau führte
9 Versuch eines Gesanges zur Geburtsfeier Sr. Excellenz des Königlich Preußischen Kabinets-Ministers Grafen von Hertzberg. Den 2. September 1788
? Skizze einer Epistel an Herrn Sekretair K*ch

1789

[König Friedrich Wilhelm II. von Preußen läßt ihr am Hackeschen Markt ein Haus bauen, was ihr jedoch keine finanziellen Erleichterungen bringt. Ihre letzten Lebensjahre sind überschattet durch Eifersucht und Haß auf ihre ebenfalls als Schriftstellerin tätige Tochter Caroline von Klencke, die ihr den Haushalt führt.]
4 *Wie Kindlein, die kaum Wörter lallen* (An Gleim, 2. April)
12 Lobgesang nach tödtlichem Schmerz unter meinen Kindern gesungen am 6ten December 1789
? *Den ersten Tag bis in die Nacht* (Geschrieben am zweyten Tage meiner Hausbewohnung)

1790

5 Nachmittags den 23. Mai 1790
6 An Frau von Bandemer, die reich war und arm wurde: Im Rosenmond 1790 / *Schön ist Wahrheit und Natur* (22. Juni) / *Nachschrift insgeheim zu lesen* (Den 23. Juni)
11 *Und wär ich eine Malerin* (3. Nov.)
12 [An Gleim.] Berlin, den 5. Dezember 1970
? An eine adliche Schuldnerin, für welche sich die Dichterin verbürgt hatte

1791

4 *Ich werde nicht die Saat im nächsten Herbst erleben*

7 An die verwittwete Madame R*ldt nach Freyenwalde nachgeschrieben. Den 19. Jul. 1791

Juni - Ende September: [*Obwohl sie bereits schwer erkrankt ist, reist sie nach Frankfurt an der Oder, um die Versorgung ihres Enkelsohnes Heinrich Wilhelm Hempel sicherzustellen, der dort Jura sutdiert.*]

9 Gesang auf eine Hochzeit, welchen die Dichterin in der tödtlichen Schwäche ihrer letzten Krankheit zu Frankfurth an der Oder gedichtet

Anfanf Oktober: [*Rückkehr nach Berlin.*]

? An den Herrn von M*p*n in Braunschweig. [Welcher sich dienstlich für den Ritter ihrer Muse erklärt hatte.] / An die Königl. Hof-Bauadministration wegen ein paar geschenkter eiserner Spahröfen / An die Ostersonne / Eine Gesundheit / Skizze einer Epistel an den Herrn Ober-Consistorialrath Büsching

12. Oktober: [*Anna Louisa Karsch stirbt im Alter von 68 Jahren in Berlin. Im folgenden Jahre veröffentlicht Caroline von Klencke eine umfangreiche Ausgabe ihrer Gedichte.*]

付録 4

Gedichtüberschriften und -anfänge

Abkürzungsverzeichnis.

A = *Auserlesene Gedichte* von Anna Louisa Karschin. Nachdruck der Ausg. Berlin 1764. Mit einem Nachwort v. Barbara Becker-Cantarino. Karben 1996.

B = *Deutsche Gedichte des 18. Jahrhunderts.* Hg. v. Klaus Bohnen [Universal-Bibliothek Nr. 8422]. Stuttgart 1995.

Bw = *„Mein Bruder in Apoll". Briefwechsel zwischen Anna Louisa Karsch und Johann Wilhelm Ludwig Gleim.* Hg. v. Regina Nörtemann. Bd. I: *Briefwechsel 1761-1768,* hg. v. Regina Nürtemann; Bd. II: *Briefwechsel 1769-1791,* hg. v. Ute Pott. Mit einem Nachwort v. Regina Nörtemann. Göttingen 1996.

G = *Gedichte von Anna Louisa Karschin,* geb. Dürbach. Nach der Dichterin Tode nebst ihrem Lebenslauff hg. v. Ihrer Tochter C.[aroline] L.[uise] v. Kl.[encke], geb. Karschin. Nachdruck der Ausg. Berlin 1792. Mit einem Vorwort v. Barbara Becker-Cantarino. Karben 1996.

H = *Die Karschin. Friedrich des Großen Volksdichterin. Ein Leben in Briefen.* Eingeleitet u. hg. v. Elisabeth Hausmann. Frankfurt a. M. 1933.

M = *Anakreontiker und preußisch-patriotische Lyriker.* Hg. v. Franz Muncker [Deutsche National-Litteratur. Hist. krit. Ausg., hg. v. Joseph Kürschner. 45. Bd.]. 2. Teil: Uz, Kleist, Ramler, Karschin. Stuttgart o. J.

Me = *Das Lied der Karschin. Die Gedichte der Anna Luise Karschin mit einem Bericht ihres Lebens.* Hg. v. Herybert Menzel. Hamburg 1938.

N = Anna Louisa Karsch, *Neue Gedichte.* 1772. In: *Deutsche Literatur von Frauen. Von Catharina von Greiffenberg bis Franziska von Reventlow.* Hg. v. Mark Lehmstedt [Digitale Bibliothek 45]. Berlin o.J.

R = Anna Louisa Karschin, *Gedichte und Lebenszeugnisse.* Hg. v. Alfred Anger [Universal- Bibliothek Nr. 8374]. Stuttgart 1987.

S = A. von Sternberg, *Berühmte deutsche Frauen des achtzehnten Jahrhunderts.* Erster Theil. Leipzig 1848.

W = *O, mir entwischt nicht, was die Menschen fühlen. Anna Louisa Karschin. Gedichte und Briefe. Stimmen von Zeitgenossen.* Hg. u. mit einem Nachwort v. Gerhard Wolf. Berlin 1981.

A

Ach bester Freund, dein Herz ist grambeklemmt [an Gleim, Frankfurt an der Oder, 21. Sept. 1791] BwII/366

Ach, es regnet unaufhörlich G159

Achill, der stampfende Held, sprach mit dem wiehernden Pferde G163

Ahmt meinem beispiel nach Ihr Frauen [an Gleim, Berlin, 21. Sept. 1775] BwII/94

Alcides stritt mit Löw und Hyder G334, W93

Alle Musceln alle Nerven sind [an Gleim, Berlin, 22. Nov. 1783] BwII/193

Aller Menschen Vater! höre G134

Allexis, wenn ich mich verwandeln könnte [an Gleim, Berlin, Juni 1761] BwI/11

Als das Tagebuch der Oestreichischen Armee, unter dem Befehl des General von Laudon, vorgelesen wurde (Im Weinmonath 1762) A349

Als die Mutter zwoer Königinnen G59

Als die Wiederkunft des Königs gewünschet wurde (Im Weinmonath 1761) A345

Als ein Dichter im Weinmonath ihr eine Rose gab [ca. 1761/63] A358, W15

Als Friedrichs große Macht in Schlesien marschieret G345, R34, W84

Als gesagt wurde, daß in Abwesenheit des Königs manches Unrecht geschehen sey [ca. 1761/63] A346, BwII/492

Als Gott der geistigen Monaden G333

Als jemand sagte: der Wein habe manchen Dichter auf den Parnaß geführet [ca. 1761/63] A356

Als jüngst der Hirsch voll Liebesflamme G252

Als Lissabon noch ganz in königlicher Pracht A319

Als man sagte, der Gram nähm ihr viel Zeit weg [ca. 1761/63] A351

Als sie des Sonntags zu einer Lustreise nach Charlottenburg eingeladen wurde, und sie sich entschuldigte, weil sie den Herrn Rath Spalding predigen hören müßte. 1765 G127

Als sie eine Rose zeigte, an welcher eine Rosenknospe saß [ca. 1761/63] A354

Als sie eine zum Scherz verfertigte Ordre an den Kanzeleidirektor Brandhorst, und ein Exe-

cutoriale auf einem Tisch fand. Den 5. Julii 1763 G326
Als sie krank lag [?] Me86
Als sie sich gegen den Angrif eines Freundes mit verschiedenen Einfällen gewehret hatte, und bald darauf ein wilder Schweinskopf auf die Tafel gesetzet wurde [ca. 1761/63] A352, W18
Als sie über beständiges Kopfweh geklagt hatte, und darauf erinnert wurde, des Königs Gesundheit zu trinken [ca. 1761/63] A347, W114
Als sie während eines Ungewitters von einem Dichter gefragt wurde: ob sie sich vor dem Donner fürchte? [ca. 1761/63] A357
Als von Lobgedichten gesprochen wurde [ca. 1761/63] A350, W102
Als von Sanssouci gesprochen wurde (Im Weinmonath 1761) A348, W93
Alten Rheynwein möcht ich haben (an Lebbäus Benzler, Sekretär des Grafen Stolberg-Wernigerode) H381
Alzindor und Lucinde. Eine Romanze [? zwischen 1761 und 1772] N21, W149
Alzindor und Lucinde N21, W149
Am Busen ist sie mir gestorben G292
Amm Göthe. Zu Berlin, Monntags den 18 Mey 1778 [an Gleim, Berlin, 27. Mai 1778] BwII/120
Am vierundzwanzigsten des Veilchenmonds bekränze (Dezember 1790) H372
Am weidenreichen Spreegestade G273, W117
An Brücknern. Als er die Rolle Medons spielte [? zwischen 1761 und 1772] N41
An das Fräulein von Mose. 1741 R37, G341
An das kommende Jahr [?] G333
An das Vaterland bei der triumphierenden Wiederkunft des Königs [30. März 1763] B227
An den Apoll, daß er die Leyer zurücknehmen möchte. [Als sie zu Berlin wegen Mangel an Quartieren einige Zeitlang in einer Dachstube wohnen mußte.] 1763 G28, M314, R77
An den berühmten Chodowiecky [?] G221, Me82
An den berühmten Maler Herrn Rode [?] G195
An den Dohmdechant Freyherrn von Spiegel, zum Diesenberg, als er gesagt hatte, daß er schlaflose Nächte hätte, und bey Lichte nicht gut lesen könnte. 1761 A278
An den Dohmherrn von Rochow, als er gesagt hatte, die Liebe müsse sie gelehret haben, so schöne Verse zu machen [ca. 1761/63] A110, H398, R68, W18
An den einjährigen Wilhelm von K. [?] G70
An den Freyherrn von A. aus Cöthen über die Winterlustbarkeiten in Berlin [?] G92
An den Freyherrn von Kottwitz, als er ihr Gemählde zeigte, und sie fragte, ob die Blumenstücke nicht schön wären? [ca. 1761/63] A273
An den Frieden [?] G335
An den General-Lieutenant von Seydlitz. Auf das Erzgebirge zu Freyberg [?] G24
An den Herrn Baron von Kottwitz zu Boyadel, Neffe desjenigen Freyherrn von Kottwitz, welcher sie aus Glogau führte. Im Januar 1788. G165
An den Herrn Grafen von Stollberg Wernigerode. Nach der 14ten Ode aus dem 2ten Buche des Horaz [?] G32
An den Herrn Kanonikus Gleim. Halberstadt, den 29. Sptbr. 1761 G72, W73, Me73
An den Herrn Kanonikus Gleim. Magdeburg, im October 1761 G163
An den Herrn Music-Director Rolle, über die Cantate des Friedens-Festes. 1762 A231
An den Herrn Ober-Consistorialrath Gedicke. 1778 G246
An den Herrn Regierungs-Advokat Köpfen (Zu Magdeburg, den 10ten März 1762) A181
An den Herrn von M*p*n in Braunschweig. [Welcher sich dienstlich für den Ritter ihrer Muse erklärt hatte.] 1791 G156
An den jungen Lenz [ca. 1761/63] A323, Me57, W47
An den jungen Tytirus über eine Rosenknospe [?] G292
An den jüngstgebornen Prinz Friedrich Carl Ludwig von Preussen in Seiner Wiege. Den 19ten November 1773 G55
An den klagenden G*d. Den 11. November 1765 G20
An den kleinen von K. über die Landkarte von Persien, Griechenland und ganz Asien [?] G98
An den kranken Herrn Rector Goldhagen (Zu Magdeburg den 21ten August 1762) A291
An den May (zu Berlin den 27ten May 1761) A39, Me59, W49
An den Phöbus. Den 27. Oct. 1763 G66, W153

An den Phöbus Apollo wegen des ihr von dem Freyherrn Dohmdechanten von Spiegel geschenkten dreyseitigen Pettschafts. 1764 G34
An den Prinzen von Preussen am Tage seines Religionsbekenntnisses (Zu Magdeburg den 28ten des Jenners 1762) A82
An den Prinzen von Preussen, als von dem Nutzen der Geschichte gesprochen wurde [ca. 1761/63] A257, W102
An den regierenden Reichsgrafen von Stollberg-Wernigerode über die Freude, Seinen einzigen Enkel glücklich vermählt zu sehen. Im November 1768 G110
An den Reichs-Grafen zu Stolberg-Wernigerode [ca. 1761/63] A89
An den Schöpfer an ihrem Geburtstage den 1ten des Weinmonats 1761 A7, Me88, R136, W40
An Denselben (=Milon) [?] G290, R86
An Denselben (=Palemon) [ca. 1761/63] A235
An den Wein [?] G329, H400, Me106
An die Chartenspieler [ca. 1761/63] A190, W22, Me68, R83
An die Clio wegen des Königes den 24sten Jenner 1764 G7
An die Frau Doktorin M. [?] G68
An die Frau von Reichmann. 1761 A87
An die Frau von Reichmann, Kommendantin zu Magdeburg. 1762. G248, R73, W27
An die Freyfrau von Troschke und Rosenwehrt [ca. 1761/63] A103, W58
An die goldene Feder von Palemon geschenkt [ca. 1761/63] A62
An die jüngste Demoiselle St*hl. 1764 G257
An die Königinn. Den 24. Jenner 1765 G104
An die Königin. Ueber eine Lustfahrt auf der Elbe mit den Prinzeßinnen von Braunschweig. zu Magdeburg im August 1762 A71, R75, W94
An die Königl. Hof-Bauadministration wegen ein paar geschenkter eiserner Spahröfen. 1791 G188, W31
An die Leda [?] G30, W154
An die Melpomene wegen des Prinzen Heinrichs des jüngern Königlichen Hoheit. Verstorbenen Bruder Seiner Majestät des Königs. Den 30sten December 1763 G107
An die Mnemosyne, bey dem allerhöchsten Feste, welches Se. Königl. Hoheit Prinz Heinrich Sr. Majestät dem Könige gab. Am 24. Jenner 1766 G5
An die Muse, daß sie den Abend der großen Illumination singen solle. Den 4. April 1763 G48, W99
An die Mütter des reisenden Chur- und liefländischen Adels [? zwischen 1761 und 1772] N65
An die Najade. Den 14ten Julii 1765 G18
An die Ostersonne. 1791 G270, M332, Me97, R130, W78
An die Prinzessinn Heinrich. Halberstadt, den 23. Febr. 1762 G145
An die Sonne bei dem Leichenbegängnisse Friedrichs des Größten den 9ten Sept. 1786 G121
An die Stadt Berlin wegen Sr. Königl. Hoheit des Prinzen und Feldherrn Heinrichs. Den 18. Jenner 1764 G3
An die verwittwete Frau Baronesse von Sievers in Altona [? zwischen 1761 und 1772] N3
An die verwittwete Madame R*ldt nach Freyenwalde nachgeschrieben. Den 19. Jul. 1791 G159
An E. [?] W117
An Ebendesselben Hochfürstl. Durchl. (= Herzog Ferdinand von Braunschweig-Lüneburg) Den 19. October 1773 G152 →An Se. Hochfürstl. Durchl. den Herzog Ferdinand von Braunschweig-Lüneburg. 1771
An eine adliche Schuldnerin, für welche sich die Dichterin verbürgt hatte. 1790 G168
An eine Dichterin, welche das Klavier spielte. 1767 G78, R109, S156
An eine Freundin [?] G300, R103
An einen Alten [?] G329
An einen, der das Klavier spielte [?] G328
An einen Freund der melancholisch den Tod einer Freundin beweinte [ca. 1761/63] A43
An einen Ingenieur, Liebhaber der Phyllis. 1766 G301
An einen jungen Freund. Im März 1763 G76
An einen jungen Herrn von Baronoff, jetzt Ruß. Kaiserl. Kreisrichter in Ehstland. Ins Stammbuch 1772 G332
An ein glückliches Volk [?] G334, W93
An Frau von Bandemer, die reich war und arm wurde: Im Rosenmond 1790 H367
An Gleim (Berlin, den 14. Juni 1761) H90, Me63, R90
An Gleim. Empfangen, den 22. Juni 1761. Morgens um 7 Uhr H399, R91, BwI/22
An Gleim. Den 27. Juni 1778 H294

[An Gleim.] Berlin, den 5. Dezember 1790 R129, Me72, H404
An Gleminden, nach einem Ungewitter [ca. 1761/63] A341, R72
An Goethe zu Berlin, Montags den 18. Mai 1778 H292, M327, R120, BwII/120
An Gott [ca. 1761/63] A14, H391, Me96
An Gott [ca. 1761/63] A23
An Gott [ca. 1761/63] A28
An Gott als sie bey hellem Mondschein erwachte [ca. 1761/63] A3, W42
An Gott bei dem Ausruf des Friedens. Den 5. März 1763 G129, W257
An Herrn Borchmann, als er bat, mit einer Schüssel vorlieb zu nehmen [ca. 1761/63] A355
An Herrn D. K. 1761 G320
An Herrn Dohmdechant, Freyherrn Spiegel zum Diesenberg, als vom Horaz gesprochen wurde [ca. 1761/63] A353
An Herrn Doktor Krünitz wegen ihres Pettschafts. 1766 G322
An Herrn Geheimen Rath Buchholz an seinem Geburthstage (Den 30ten des Heumonats 1761) A133
An Herrn Gleim, am Tage der Geburt eines Menschenfreundes (Zu Halberstadt den 22ten des Hornungs 1762) A221
An Herrn Gleim. Bey Besteigung des Spiegelberges ohnweit Halberstadt (Zu Halberstadt den 26ten des Herbstmonaths 1761) A204, B163, M308, R95, W16
An Herrn Hofrath Raspe, in Cassel [? zwischen 1761 und 1772] N39
An Herrn Leibmedicus Zimmermann. Bey seiner ausgestandnen Wundkur in Berlin, 1771 N34
An Herrn Professor E. [?] G37
An Herrn Professor Sulzer (Zu Berlin im Merz 1761) A138, R61
An Herrn Professor Sulzer, über das Bild seiner verstorbenen Gattin (Zu Berlin im April 1761) A144
An Herrn Professor Sulzer, über den Tod seines Kindes (Zu Berlin im April 1761) A141
An Herrn Utz, den Verfasser der lyrischen Gedichte [ca. 1761/63] A186, M318, R67, W19
An Herrn Utz (Zu Halberstadt den 8ten des Weinmonats 1761) A188
An Herrn von G. den Officier und Dichter [?] G209
An Herrn von Humbracht nach einem Ungewitter (zu Magdeburg den 5ten des Herbstmonats 1762) A36
An Herrn Zachariä, den Verfasser des Gesanges von der Hölle, zu Braunschweig (Im April 1762) A177
An Ihre Majestät die Königinn am Tage nach Ihrem glorreichen Einzuge in den Königl. Pallast. Den 17ten Februar 1763 G45
An ihren ersten Mann. In ihrem achtzehnten Jahre gemacht, 1740 G343
An ihren Geist, wegen der Unmöglichkeit den König zu singen [ca. 1761/63] A115, W83
An ihren verstorbenen Oheim den Unterweiser ihrer Kindheit. 1761 A92, R64, W10
An Ihro Königl. Hoheit die Mutter des Preußischen Thronfolgers. Den 29sten Jenner 1764 G101
An Ihro Königliche Hoheit die Prinzeßin Amalia, bey dem Empfang des Prinzen Heinrichs. Den 5ten Jenner 1763 A120
An Ihro Königliche Hoheit die Prinzessinn Louise, Tochter des Prinzen Ferdinand von Preußen K. H. Als diese höchsten Herrschaften Bellevue beziehen wollten. Den 24. Mai 1785 G237
Anläßlich einer Redoute bei der Hochzeit des Prinzen Heinrich [?] H401, W104, M115
An Leda [?] S155
An Lehnchen R** über einen Zuckermann. 1773 G202, W156
An Mademoiselle Gräf, über die Miß Sara Sampson [?] R111
An Mademoiselle Rehbeld in Berlin, nach überstand- nen Pocken [? zwischen 1761 und 1772] N63
An Mademoiselle Sack [?] G266
An Mademoiselle Stahl [ca. 1761/63] A126
An Mademoiselle W. Buchholz, auf ihren Geburtstag (Den 30ten des Wintermonaths 1761) A301
An Marinetten [?] W153
An meine Freundin. 1775 G331
An[n] meinem freund Gleim über Leßings Wehrt [an Gleim, Berlin, März 1781] BwII/150
An[n] meine Mutter in jene Welt geschrieben den dritten Juny 1785 BwII/469
An meinen Freund, den Akteur H** Den 10. Jul. 1775 G174
An Milon [?] G288

An Milon [?] G294, M309, R85
An Milons Billet [?] G298, R87
An Montan [?] G333
An Montan über Spaldings briefe an Gleim [?] Bw II/389
An Palemon (Den 20ten des Herbstmonaths 1761) A207
An Palemon (Den 2ten April 1762) A298
An Palemon (Im Christmonath 1761) A183
An Palemon, als er von Mageburg nach Berlin verreisen wollte (Im Merz 1762) A300
An Palemon, als Herr Oeser das Bild der Dichterin entworfen hatte (Den 16ten des Christmonaths 1761) A228
An Palemon, als sie die goldene Feder vermißte (Den 6ten des Christmonaths 1761) A336
An Palemon, an ihrem Geburtstage. Den 1ten des Christmonaths 1761. A217, R134
An Palemon, der Spaziergang auf dem Fürstenwall (Zu Magdeburg im kalten April 1762) A214, W23
An Palemon, nach ihrer Zurückkunft aus Halberstadt (Im Weinmonat 1761) A211
An Palemon, zu seinem Geburtstage. 1762 [2. April] A233 →An Denselben
An Phillis. Eine Einladung zu den Ruinen bey Potsdam. 1765 G90
An[n] Quitungsstatt im Jenner 1783 BwII/450, G324, R196, H312
An Schiller. Berlin, den 4. Mai 1786 M329, R125
An Se. Hochwürden Gnaden den Herrn Domdechant Freyherrn von Spiegel zur Feyer des 22sten Februars 1765 G61
An Se. Hochfürstl. Durchlaucht den Herzog Ferdinand von Braunschweig-Lüneburg. 1771 G149, R110
An Seiner Königlichen Hoheit den Prinzen Heinrich [ca. 1761/63] A118
An Se. Mejestät den König von Polen. Neu-Fraustadt in Polen 1752 G352
Antwort der Dichterin. Geschichte der Unterredung mit dem Philosophen zu Sanssouci [1763] G183, W106, M315, Me134, S141
An Tyrsis. Als man die erste Nachricht erhielt, daß der rußische Käyser Peter der dritte des Königs Freund sey, und darüber ein Fest angestellet war. Den 9ten des Hornungs 1762 A49, M311
An Venus, über die stolze Phillis. 1763 G67
An W. [?] W158
An W.*** Als er den Tod Peter des dritten beklagte [1762] A53
Aphrosine. Ein Erzählung [? zwischen 1761 und 1772] N17
Apoll! nimm deine Leyer wieder G28, M314, R77
Arie. In Schwiebus 1742 G350, Me96, W39
Aspan, ein Edelmann, gewohnt zum Zeitvertrieb G224, W143
Auch Götter ärgern sich. Von eines Aergers Glut G195
[Auf den Sieg bei Leuthen.] Am 5. Dezember 1757 R39
[Auf den Sieg bei Torgau.] Am 3. November 1760 R51
Auf den Tod des Prinzen Heinrich von Braunschweig zu Berlin den 12ten des Herbstmonats 1761 A74
Auf die Geburt der Königinn Charlotte von Großbritannien [? zwischen 1761 und 1772] N44
Auf die Geburt des jungen Prinzen von Preussen Königl. Hoheit. Berlin, im Augustmonat 1770 G38
Auf die krankgewesene Braut des kochischen Acteurs, welcher in der Emilie den Grafen Apiani macht. Am 12. April 1772 N51
Auf eine Glocke die in Magdeburg umgegossen ward [ca. 1761/63] A55
Auf[f] Erden ist kein staub und auff den baum kein blat [an Gleim, Berlin, empf. Okt. 1784] BwII/214
Aufforderung an die Dichterin von Herrn Doktor Krünitz [Als in Sanssouci der König mit ihr gesprochen hatte]. Den 24. Okt. 1763 G182, W106
Aufforderung an die Muse, daß sie dem Philosoph zu Sans-Souci nachfliehen soll. Den 21. April 1763 G52
Auf Ihro königl. Hoheit die Fürstin von Anhalt Dessau. Den 24 August 1771. N49
Aufmunterung an den Geheimen Rath Freyherrn von Labes, wegen seiner Betrübniß über Peter den dritten (Den 20ten des Weinmonaths 1762) A294
Auf Palemons Flügel (Den 20ten des Heumonats 1761) A198, Me69
Aufruff, an meinem Freund zum Todtenopfer Friedrichs [Berlin, 20. Aug. 1786] BwII/262
Aus allen himmlischen Bezirken G63
Aus einer Bußtagspredigt des Herrn O. C. R.

Spaldings. Im Sept. 1766. In Herrn Doct. Krünitz Stammbuch G336
Aus hocherhobenem Stamm entstehn Me127
Aus seiner Acten-Schanze tief hervor A188

B

Begebenheit im Reiche Plutons, nach der Schlacht bey Torgau. 1761 A331, W112
Begebenheit zu Wien in der Kaiserlichen Burg. Den 12. Februar 1762 / Den 17ten eod. / Am 21. eod. Abends nach 11 Uhr / Halberstadt, den 21. Febr. 1762 G311, R146 / G312 / G313
begieriger als beyde Grachen [an Gleim, Berlin, 17. Febr. 1785] BwII/221
Bei dem Apoll schwör ich: mich hat nicht Thyrsis lieb G315
Bei dem jubelvollen Empfange der Königin. Den 16. Februar 1763 G9, M313
Bei dem Lärmen, bei dem Tanze R142
Bei dieser Sonne schwör ichs dir G332
Bei Erinnerung ihres ersten Freundes [?] G335
Beim Brokenschneeherruntterschmelzer [an Gleim, Berlin, 13. März 1784] BwII/203
Beim Geräusch des Schauspieltanzes G287
Bei Reichenberg, nach Friedrichs Sieg G204, H393, W136
Belloisens Lebenslauf [?] G197, H396, M318, Me53, R69, W9
Ben-Ha-Alim, ein Prinz erzogen an dem Thron A307
Bestrafte Reiselust [?] Me118
betaübt Saß ich Ihm ann der Seitte [an Gleim, Berlin, 21. Sept. 1775] BwII/93
Bey dem Eheverbündniß meines jüngsten Bruders Ernst Daniel Hempel. Berlin, den 24. April 1765 G113
Bey den Unsterblichen zu seyn G37
Bey Friedrich Wilhelms Kriegsgetöse [an Gleim, Berlin, 10. Aug. 1786] BwII/260
bist du noch hier du freudenbringer [an Gleim, Berlin, 3. Dez. 1785] BwII/241
bist nicht amm Ocerstrom gekommen [an Gleim, Berlin, 4. Sept. 1781] BwII/161
Blick auf! blick auf von deinem Aschenhügel G117, W140
Brief an einen reisenden Cavalier 1785 BwII/466

C

Cornelia — nicht eine Römerin, nein, eine aus dem Volk R138
Cybele, eine Erzählung [? zwischen 1761 und 1772] N5
Cyntia lächelt uns zu G209

D

Da bitten mich nun alle Leute [an Gleim, 31. Mai 1778] BwII/423
Da liegen sie, versteckt in Felsenlöchern G24
Da Mandloff, der einmal die Kanzelei regiert G326
Dank für die Heimfahrt aus Pankow nach dem Sturm [?] Me122
Dank für ein Paar wunderhübscher Schuhe [?] Me117
Danklied am drey und sechzigsten Geburtstage nach langwieriger Krankheit [1785] G138
Darum wende nicht traurig H367
Das Abentheuer einer Winternacht [1770] H254, Me107, W28
Das beständige Einerlei. 1759 G224, W143
Das Feuerwerk am Ufer der Elbe an den Herrn Professor Sulzer (Zu Magdeburg den 18ten May 1762) A173, W25
Das Harz-Moos, als Herr Dohmdechant Freyherr Spiegel zum Diesenberg etwas Moos vom Harzgebürge mitgebracht hatte (Zu Halberstadt den 10ten des Weinmonaths 1761) A339, Me82, R71, W77
Das Lob des Essens. An Quintus Icilius. 1764 G84, M321, R81, W53
Das Lob des Rebensaftes ward G84, M321, R81, W53
Daß binn ich, ja daß sol ich sein [an Gleim, Berlin, 6. April 1784] BwII/207
Das Schicksal. Sr. Wohlehrwürden des Herrn Feldprediger Klettk bei Gelegenheit dessen Nahmensfestes gesungen. 1755 G358
Daß den Pompejus Cäsar überwunden G334
Daß Doctor Winndreich Wildebrand (Wieder Im bette geschrieben den 2 Septtember 1791) BwII/364
Daß Friedrich im Triumph zurücke sich begebe R142
Daß Glück Bestimmte diesen Schmuk [an Gleim, Magdeburg, 22. April 1762] BwI/101
Das Thier hat bloß Instinkt; der Mensch hat einen Geist [1762] G318
Das tödtlich kranke Kind, an Herrn Professor Sulzer (Zu Berlin den 17ten Merz 1761) A330
Das Türkische Bacchusfest. Dem Obristen von Anhalt gesungen. 1763 G63
Das Ungewitter. An meinen Freund 17. Juni 1761

(unvollendet) H392
Das Ungewitter in der Nacht vom 31ten August 1761 A10, Me90, W61
Das Versprechen eines Mannes an seine kranke Frau. Der Jungfer Fethackin erzählt im Stahlschen Hause N56, W148
Das Wunderbild, eine Erzählung [ca. 1761/63] A315
Deckt noch der Schlaf dein Auge zu H109, Me63, R100
Deine Seele giebt mir immer G331
Dein Halberstädter Publicum [an Gleim, Berlin, 22. Juni 1785] BwII/235
Dein schwarzes Auge macht das Dunkel W153
Dem Andenken des Herrn Hofrath Stahl bei seinem Grabe. Berlin, im Nov. 1773 G260
Dem Enkel zum Abschied, da er nach Frankfurt geht [1791] H375
Dem Ritter Bredow der vor Jahren [an Gleim, 22. Dez. 1782] BwII/424
Dem Vater des Vaterlandes Friedrich dem Großen, bei triumphirender Zurückkunft gesungen im Namen Seiner Bürger von A. L. Karschin. Den 30. März 1763 B229, G11, S151, W90
Dem reichen Pächter Schinkenrund G199
Den dämmerungsgrauen Rok, und auch den Dennkducaten [an Gleim, Berlin, 5. Dez. 1790] BwII/ 349, H404, Me72, R129
Den Erdgebohrnen allen N41
Den ersten Tag bis in die Nacht (Geschrieben am zweyten Tage meiner Hausbewohnung) H359
Den grübchenlächelnden Jünkes besang neulich der G303
Den Musen hold und treu A243
Den Oberschäfer Friedrich A49, M311
Den 22. Juny 1761. Morgens 7 Uhr H399
Der Adler und die Pfeifvögel. Eine Fabel [?] G275, Me125, W159
Der ältisten Tochter des Hoffbuchdrucker Dekers an Ihrem Geburtstage den funfundzwanzigsten Februar [an Gleim, Berlin, 27. Febr. 1771] BwII/30
Der altte wakre Grenadier [an Gleim, Berlin, empf. 15. Sept. 1778] BwII/129
Der Dank an Herrn Borchmann (Aus dem Brief v. 30. Juni 1761) H91
Der 13te Mai 1758, als der Tag des Schreckens in Glogau G362, H51, R42, W119, Me140
Der du auf Steinen und auf graugewordnen Münzen N39
Der Du den Pinsel des Apelles G82
Der Du den Tempel Deines neuen Freundschaftbandes B229, G11, Me132, S151, W90
Der du des Glückes Eigensinn ertragen A294
Der du mein Auge gut getroffen G221, Me82
Der du mir dieses Saytenspiel bespanntest G34
Der du mit finstern Blicken ganz verächtlich A43
Der du mit lachendem Auge A211
Der du nach schrecklichen Gewittern A14, H391, Me96
Der Feldzug in Sachsen eröfnet vom Prinzen Heinrich des Königs Bruder. Zu Magdeburg den 18ten May 1762 A80, M312
Der Frau Geheimen Räthin Buchholz. 1761 A128, W20
Der Frühling an die Frau von Wrech [ca. 1761/63] A33, Me55, R62, W45
Der große Kato war kein Weiser N34
Der Himmel bleibet lauter Wolke (Aus dem Brief v. 23. März 1763) H186
Der Himmel der durch Seine schenkung [an Gleim, Berlin, 28. Dez. 1768] BwI/337
Der junge Tag, zurückgekommen A25
Der Jungfer Fethackin erzählt im Stahlschen Hause N56
Der König lebt! und dein Gesang A106
Der Liebhaberhut. Eine wirkliche Begebenheit [?] G193, Me109, W157
Der Leibmedicus Zimmermann, in Sanssouci. Den 1ten November, 1771 N37
Der Maler? O Freund, gefunden Me85
Der mich aus unanständigen Geschäften AII-V, M320, R79
Der Morgen dreht sein heitres Angesichte A21, Me54, R60, W44
Der Neid gleicht einer Spinne BwII/388
Der Pächter und der arme Schäfer. Eine Dosenmalerei-Geschichte [?] G199
Der Persische Prinz, eine Erzählung, an Ihro König- liche Hoheit den Prinzen Heinrich von Preussen [ca. 1761/63] A308
Der Provisor mengt geschwinde G330, R123
Der Rinderhirte lebt noch dort G226
Der Sänger bey der Heerde, in Welschland, eine Erzählung [ca. 1761/63] A311
Der Schlaf, an Herrn Gleim, als er sagte, daß er immer gut schliefe, und sie gebethen wurde, dem Schlaf ein Lied zu singen. Den 2ten April 1762 A225, W70
Der Schönen Künste größte Richter [an Gleim, Berlin,

4. Juli 1764] BwI/218
Der seinen Stuhl hoch über alle Thronen B227
Der sichere Fromme. Aus einer Predigt des Herrn Ober-Consistrialrath Spalding. 1766 G41
Der Skorpion, die Schildkröte und die Gans. Eine Traumfabel [?] G273, Me124, W117
Der Sturmwind heult den Tag und mich abscheulich an (Aus dem Brief v. 7. Februar 1762) H129, R104
Der Tod. An Herrn Professor Sulzer. [ca. 1761/63] A147
Der Tugend Freund! der Wahrheit Redner, Du – G76
Der unnachahmliche Pindar, an Herrn Ramler (Den 24ten Jenner 1763) A167
Der Unterschied eines Schmauses und einer kleinen vergnügten Mahlzeit. Den 4. Jun. 1761 G322, W57
Der Vater alles Zanks ist das verhaßte Mein G314, W92
Der Vorsatz, ich wills nicht mehr Thun [an Gleim, Berlin, 21. Sept. 1775] BwII/93
Der Weidendamm → Die Spazier-Gaenge von Berlin
Der weinende Amor, bey Betrachtung einer Bildsäule zu Charlottenburg im Garten (Den 16ten des Heumonaths 1761) A333
Der Weingott und der Herzenszieler [an Gleim, Berlin, 4. Juli 1764] BwI/218
Der Winter droht mit Langerweile R145
Der Winter hauchet Frost an diese dünne Wand G248, R73, W27
Der Zorn über Thyrsis [?] G315
Des Glückes Blumenkörbchen stickte Me117
Des Jovis, der Latona Sohn G78, R109, S156
Des längst versöhnten Schicksals Schluß R124
Des 24sten Januars musikalische Feier in der Darletschen Wohnung. 1763 G180
Des Waldes Thiere sind dem Löwen unterthan A352
Des Weinstocks Saftgewächse ward B164, G125, M322, R82
Dich flieht der Schlaf? dich sieht die Lampe wachen? A278
Dich funffzen Winter alttes Kind [an Gleim, Berlin, 27. Febr. 1771] BwII/30
Dich, grosser Friedrich, sing ich nicht A349
Dich soll Dein Hannchen schön betrügen H91
Dich wieder liebster Gleim zu nennen [an Gleim, Berlin, 10. Juni 1773] BwII/32
Die Abendmahlzeit auf dem Lande, an Herrn Geheimen Rath Buchholz (Den 16ten des Heumonats 1761) A130, Me61, W55
Die Allmacht und Güte Gottes. 1761 A16
Die Castanien-Bäume [?] W65
Die du das Feld des Krieges überflogest G48, W99
Die du den goldnen Apfel hingerissen G67
Die du der goldnen Zeit zu Dir gewünschte Tage G3
Die Du gleich einem andern Menschenkinde G101
Die Du von eines Thronensitzers Mund geküßt G257
Die einst zu jedem honigsüßen Liede G7
Die Fahrt der Königlichen Braut nach Engelland (Im August 1761) A85
Die Felsen-Brüder, an den Reichs-Grafen zu Stolberg-Wernigerode 1761 A99
Die freuden die du mir beschrieben [an Gleim, Berlin, 11. Okt. 1786] BwII/276
Die Freunde, an Palemon, nach Herrn Gleims Abreise aus Berlin (Im Heumonat 1761) A195, R66
Die göttliche Vorsehung. 1760 G389, M305, Me100, R56
Die göttlichverkannte Phillis im Walde. 1763 G252
Die große That des Julius Cäsars [?] G334
Die guten Götter lieben dich [an Gleim, Berlin, 9. Sept. 1775] BwII/85
Die Habsucht der Könige. Halberstadt, den 22. Febr. 1762 G314, W92
Die Hoffnung schmeichelt mir, Sie werden permittiren G341, R37
Die ihr euch nie den Nordwind laßt entkleiden G9, M313
Die ihr schon ein halb Jahrhundert überlebt N5
Die klagendn Musen und Apoll [?] G191, Me105
Die Lehre will ich mir Behaltten [an Gleim, Berlin, 21. Sept. 1775] BwII/94
Die Linden →Die Spazier-Gaenge von Berlin
Die Musen alle sind zu wenig A231
Die Muse flieht zu dir, einsamer Cranz von Weiden! W63
Die Nadelstichsheilung. Den 14ten August 1786 G207
Die neue Versicherung. 1775 G332
Die reife Traube hört ich jüngst zur Rose sprechen A358, W15
Die Residenzien zusammen [an Gleim, Berlin, 9. Nov. 1786] BwII/282
Die Rosenschwester ist noch klein A354
Die Sehnsucht der Freundschaft, an Herrn Gleim (Zu Berlin den 21ten des Heumonats 1761)

A163
Dies ist in ihrem vollen Reitze G321, W155
Die Sommer-Nässe, an Herrn Gleim. 1761 A160, W12
Die Sonn' am blauen himmlischen Gewölbe A85
Die Spazier-Gaenge von Berlin [?] W63
Dieß war Ein Kuß den man im Spiele BwI/371
Dies Tantalussische Verlangen G300, R103
Die stille Nacht streut ihre Schlummerkörner A225, W70
Die Straße bebt die Fenster zittern [an Gleim, Magdeburg, 8. Nov. 1761] BwI/37
Die Veilchen [?] Me65
Die Vorsicht giebt mir Fleiß an Trauben oftmals wenig G325
Die Vorwelt redete viel von der schwarzen Kunst W158
Die Wassernoth bei Frankfurth an der Oder im April 1785 (= am 27. April) G217, W138
Dir, edle Trauerfrau, die mit dem Aschenkruge N3
Dir, Freundin, sei mein Dank und Herzensgiß gebracht Me122
Dir, o mein Freund, mein Sulzer will ich singen A138, R61
Dir will ich sagen, daß kein Pietist so sicher (Aus dem Brief v. 1. Oktober 1763) H202
Ditmar spielte mit Minetten G207
Don Goldofon: oder der sterbende Geizige, eine Erzählung (Den 16ten des Wintermonaths 1761) A319
Dorimön und Amariethe in ihrer neuen Wohnung. 1768 G276
Dorimön und Amariette. Ein Idyll. Bey der Vermählung des jungen Grafen von Stolberg-Wernigerode [? zwischen 1761 und 1772] N28
Doris an Damon/der Kuß [21. Juni 1761] BwI/371
Dort, wo die Nacht, auf hundertjährgen Eichen A152
Drei Musen hüpfen auf [?] Me67
Du aus den Händen der Natur A301
Du bist viel glücklicher als ich (Aus dem Brief v. 10. Juni 1762) H157
Du brennend Fett vom schon verzehrten Tiere Me91
Du, den Germanien mit klagenden Gesängen G335
Du, den ich lange schon verehrte G110
Du der du so geistreich bist BwII/425
Du, der vom Weine berauscht, die Lust der Erde besungen A186, M318, R67, W19
Du, dessen Auge nichts verräth G92
Du deßen lieblichste Gebärde [an Gleim, Berlin, empf. 2. April 1773] BwII/34
Du dichtest, wenn du Dichter bist W117
Du druckest Dir das Siegel ab G322
Duett zu einer Operette G256
Du Glaß! an meines Grabes Rande A347, W114
Du goldner Schlaf →An Gleim (Berlin, den 14. Juni 1761)
Du goldner Schlaf, bist du von ihm genossen (Aus dem Brief v. 14. Juni 1761) H90, Me63, R90
Du Gott des Krieges, laß die Erde! G244, W98
Du großer Ferdinand, ich brannte Dich zu sehn G57
Du Herr der Felsen, die einander gleichen A99
Du junger Frühling kommst herab A323, Me57, W47
Du kennst den Grund der Festungswerke G301, Me111
Du kennst noch nicht den Regenbogen G70
Du lächelst, Phöbus! diese nackten Rümpfe G66, W153
Duldmanns Rache [?] G212
Du liegst zu Bette, Freund! an Haupt und Füssen krank A291
Du, mir aus Händen der Freundschaft A62
Du noch nicht halb geleerte Schale! R145
Du Priesterkind! den Musen nachzusteigen G266
Durch deines Lagers Ueberhang G90
Durchlauchter Fels, der ehemals den Wogen G152
Du Sänger, aus dem Lande A239
Du Sängerin geheimer Klagen A247
Du Sängerin, tonvolle Muse flieh G52
Du Sangest nicht zerdrükte Trauben [an Gleim, Berlin, 4. Juli 1764] BwI/218
Du solst den Braven Grenadir [an Geim, Berlin, 10. Juni 1790] BwII/337
Du suchst für dich [an Gleim, Berlin, 4. Okt. 1783] BwII/190
Du trauest, mein geliebter Bruder G113
Du weinttest liebster freund weil mann ertroztte Leiden [an Gleim, Berlin, 23. Febr. 1780] BwII/ 141
Du Wonne meiner jungen Tage G276, N28

E

Edle Mütter, die ihr eure Seelen N65
Ehrwürdiger, und Liebenswerther G215
Eigenschaften der Sapho. Halberstadt, den 19. Februar 1762 / Halberstadt, den 18. Februar 1762 / Halberstadt, den 20. Febr. 1762 G316, R147 / G317 / G318

Ein Adlererbe gab vor Zeiten G275, Me125, W159
Ein armer Ehegatte N25, Me112, W145
Ein Blick, Durchlauchtigster August! G352
Eine Gesundheit. 1791 G324
Eine kranke Braut an ihren Geliebten [ca. 1761/63] A237
Eine Rede zu Gott über die Kürze der Zeit [?] G306, Me94, W75
Eine Romanze [?] G204, H393, W136
Eine Satire auf die Verfassung von Schlesien, während der Kaiserlichen Regiegung. 1740 G345, R34, W84
Einfältig machte die Natur G288
Ein Fräulein, Namens Evchen, will ihren Namen nicht hören, darüber wurde gesungen: 1742 G351, R38
Ein Gebet an den Mars. 1762 G244, W98
Ein Grabmahl bauert sich der Greiß? [an Gleim, Berlin, 20. Okt. 1784] BwII/217
Ein Wort an den Tod (Zu Magdeburg den 16ten Jenner 1762) A326
Einzige Tochter des sorgenden Paares N63
Elegie auf die Geduld [?] G296, R106
Em[m]pfanige diesen brief mein bester [an Gleim, Berlin, empf. 17. Mai 1783] BwII/182
Endlich, gutes Kind, gelangst N51
Englisches Evchen, ach gieb dich zufrieden G351, R38
Enkel zweyer großen Priester N54
Entscheitelt wird das feindliche Vergnügen R39
Er bleibt sich immer gleich wie du [an Gleim, Berlin, Febr. 1784] BwII/198
Er fing es endlich ann zu wißen [an Gleim, Berlin, 21. Sept. 1775] BwII/93
Erheb auf mich dein Angesicht A23
Erheitre nicht des Garten-Hauses Wände A201, W59
Erinnerung und Fragen an die Königin (Im August 1762) A266
Er ist mein Wunsch, ich sein Gedanke G335
Er kommt, der Sturmwind heult ihn anzusagen A10, Me90, W61
Er kommt, wie nennet hoch in deinem Busen hüpfend A120
Erlaube, werther Schatz, daß ich für allen Dingen G343
Ermahnung an einen jungen Freund. 1766 G88
Erstlinge jener Pracht, die unsrer Herrscher Güte W67
Erst wenig Student alt, lag ich in mürrischer Gestalt R141
Es rinnen dahin die flüchtigen Jahre G32, Me92
Es träufelt so lieblich vom Himmel herab H403, Me71, W33
Es ziemt sich nicht mit dir zu zanken [an Gleim, Berlin, 14. Febr. 1787] BwII/292
Euch, Zierden von Berlin! und seines Volks Vergnügen W65

F

Flieht ihr Freuden, weicht ihr Scherze A250
Flüstern sich von Ohr zu Ohr und sagen [an Gleim, Berlin, 19. Dez. 1786] BwII/285
Frau, der das Leben niemals bitter G68
Frau, schreib ich für den Ruhm, und für die Ewigkeit? G268, R74, W34
Frau, sei du mir gegrüßt von meiner Freunde Mund Me67
Freuden-Schöpfer! Monat, der dem Jahre A39, Me59, W49
Freund aller Mennschen die sich plagen [an Gleim, Berlin, 6. Mai 1781] BwII/151
Freund, den ich immer herzlich binn [an Gleim, Berlin, 14. Okt. 1789] BwII/317
Freund! des Olympus Götter leerten G26
Freunde, wiederholt doch nur G320
Freund, in Berlin die schönen Kinder alle A160, W12
Freundin dessen, der die Welt regieret A33, Me55, R62, W45
Freund, morgen in der nächsten Stunde H401, Me115, W104
Freund, nicht in fürstlichen Sälen A130, Me61, W55
Freund! staune mich nicht an. Ich komm im schönsten Putz A298
Freund, vom nächtlichen Mahl deines und meines geliebten A163
Freund, von Gebäuden rund umher verschlossen Me66
Freund, war dein Schlaf, so wie nach einer Schlacht A282
Freund, wenn mir vor dem Schritt zum Leben G183, M315, Me134, S141, W106
Freund, zeichne diesen Tag mit einem größern Strich Me64
Freund, zeichne diesem Tag mitt Einem größern Strich BwI/12, H399, Me64, R91
Freund! zürne mit einem stillzankendem Blick A235
Fünf bange frostige Tage A183

G

Gan[n]z was funnkelnagelneues [an Gleim, Berlin, 6. Sept. 1786] BwII/269
Gebet eines Kindes [?] G134
Gebt mir frische Lorbeern um die Leyer A77, W96
Gedanken an Herrn Gleim über den Herrn von Kleist, nach einem abendlichen Spatziergange im Walde bey Berlin [ca. 1761/63] A152
Gedanken auff den Spiegelbergen [an Gleim, Berlin, empf. Okt. 1784] BwII/214
Gedichte nach vorgeschriebenen Endreimen G309
Gedicht nach vorgeschriebenen Endreimen. Ehe Sehe Stand Brand Klage Plage Einerlei Entzwei Denker Henker Qual Wahl. Halberstadt, den 21. Febr. 1762 W147
Gefällt die Dose Dir so gut wie das Gedichte [an Gleim, Berlin, 8. Juni 1761] BwI/10, H89, R90
Geheimer Sekretär, beim hochgeliebten Bruder G177
Geliebte, die mit ihrem Glück auf Erden A128, Me79, W20
Geliebte Fürstin der Natur G121
Geliebter Freund! des höchsten Güte G339, R33
Gern führ' ich auf der stillen Spree G127
Gesang am Geburtstage der Königin zu Magdeburg den 8ten des Wintermonats 1761 A67
Gesang an die Königin. Den 24. Jänner 1764 R78
Gesang auf eine Hochzeit, welchen die Dichterin in der tödtlichen Schwäche ihrer letzten Krankheit zu Frankfurth an der Oder gedichtet. Im September 1791 G131
Gesang in Trauer um den Freund [?] Me91
Geschichte der Unterredung mit dem Philosophen zu Sanssouci [1763] G183, M315, Me134, S141, W106
Gesundheit [?] G328
Gesundheitsglücke und Seelenfrieden R149
Gieb mir die Hand! bald ist der Berg erstiegen A204, B163, M308, R95, W16
Gleich einem Frühlings Morgenroth A53
Gliphästions wirklicher Traum (Zu Berlin den 6ten des Brachmonaths 1761) A286
Gliphästion, mein Freund, der nicht zu träumen pflegt A286
Gott! du bist Schöpfer! groß sind deine Werke! A28
Gott fuhr auf Sturm, auf Wetterwolken lag H392
Gott im Wirbelwinde [?] R138
Gott ist noch Gott, in Schauervoller Stille A46
Gott segne dich und gebe Dir H375
Gott zeigt in seiner Schöpfung-Werke A339, Me82, R71, W77
Grabesblümlein ausgestreut [an Gleim, Berlin, 22. Juni 1785] BwII/232
Graf, als ich fern von eines Reichen Saal Me86
Gram! willst du mir die Stunden nehmen? A351
Grazien und schöne Liebesgötter [an Gleim, Berlin, 19. Dez. 1786] BwII/285
Groß ist die Fürstin die dir Grüße [an Gleim, Berlin, 10. Sept. 1783] BwII/186
Groß war vor Zeiten G239
Grün wie der Frühling war Dein Kleid G146
Guter Rath wider das Aergerniß über die Thorheit Anderer [?] G323

H

Halb träumend und halb kümmerlich Me67
Hast du die Maiestät gesehen [an Gleim, Berlin, 22. Dez. 1785] BwII/242
Hatts deiner Tochtter Kind verfüget [an Gleim, Berlin 21. Sept. 1775] BwII/97
Ha wer wird immer so [an Gleim, Berlin, 21. Sept. 1775] BwII/93
Held! der in tapfrer Hand verdeckte Keile trägt A260
Hellangigte, dem Frühling ähnliche Tage wünsch ich G279
Herr, der du über uns des Tages Wagen lenken G306, Me94, W75
Herzforschung an Göthe [1778] BwII/425
Hier auf diesem Aschen-Kruge A155
Hier liegen sie, die heiligen Gebeine G260
Hoch- und Wohlgebornes Fräulein! G341, R37
Horaz verband Natur und Kunst A353
Horcht immerhin auf Siegesboten-Ton G241
Hörst du die Musenstime Graf? [an Gleim, Berlin, 29. Aug. 1786] BwII/265
Hört, Freunde, miene Abentheuer H254, Me107, W28

I

Ich bin Empfindung und Gesang [1762] G312, R148
Ich habe viel, sehr viel geduldet und gelitten (Aus dem Brief v. 6. August 1781) H310
Ich hab Ihn nicht genug gekannt [an Gleim, Berlin, März 1781] BwII/150
Ich kam aus Tieffen Seelenschlaffe [an Gleim, Berlin, 21. Sept. 1775] BwII/94
Ich lebe noch um dich noch mehr zu lieben BwI/16
Ich meinerseits bin itzt gesünder (Aus dem Brief v. 27. Juni 1778) H294

Ich muß, ich darff dir wiedersprechen [an Gleim, Berlin, 3. März 1790] BwII/330
Ich sahe Dich, Vortrefflichste Gekrönte G45
Ich schimmpfte im Episteltheon [an Gleim, Berlin, 14. Okt. 1789] BwII/319
Ich unbegeistertes Metall A55
Ich wache, bester Freund [an Gleim, 16. Nov. 1761] R100
Ich ward geboren ohne feierliche Bitte G197, H396, M318, Me53, R69, W9
Ich werde nicht die Saat im nächsten Herbst erleben (Im April 1791) H376
ich wollte dich bey Kleistens Schatten [an Gleim, Berlin, 10. Juni 1773] BwII/33
Ich wollt im dicken Walde leben [?] Me64
Ich wollt im dicken Walde leben Me64
Iezt giebts der Staatsgeschäfte viel [an Gleim, Berlin, Anfang April 1790] BwII/335
Ih, lange nicht gesahn, und doch noch gut gekannt! G376, Me149
Ihre Königlichen Hoheit der Fürstinn von Anhalt-Dessau gebornen Prinzessinn von Brandenburg-Schwedt am 24. September 1782 G239
Ihr traurig Bild muß immer vor dir schweben A330
Im Lande, wo Horaz Gesänge A311
Im Reich der Schatten ging jüngst ein Gerücht umher A331, Me138, W112
In das Stammbuch eines jungen Edelmanns [?] Me127
In diesem stillen Hayne gatten G256, Me107
In einer königlichen Stadt N17
In einer weltbekannten Stadt G193, Me109, W157

J

Ja ja nach schaden wird mann weiser [an Gleim, Berlin, 21. Sept. 1775] BwII/93
Ja Klio redet oft mit liederreichem Munde N44
Ja, sie sind schön, die bunten Blumenstücke! A273
Jeremias, der vor Zeiten G229
Jeremias Klage bei dem Anblick der Flucht seines Volkes aus dem Elsas [?] G229
Jungger fremmdling auß dem Lande [an Gleim, Berlin, 6. Okt. 1775] BwII/101
Junger Frühling, laß mich heute Me65
Jüngling, blaß sind Deine Wangen G88
Jüngst als im Götterrath besch'ossen G180
Jüngst bat ich von dem Schöpfer aller Töne G107
Jüngst sah ich der Latona Sohn G191, Me105
Jupiter und sein Adler. An den Verfasser des Gesanges Ptolomäus und Berenice. 1765 G26

K

Kammerherr des Königes G165
Kenner von dem saphischen Gesange! A110, R68, W18
Klagelied über den Tod eines Canarien-Vogels (Zu Magdeburg 1761) A239
Klagen bey dem Grabe des Herrn von Kleist, als Herr Gleim sagte, daß er seinen Schmerz nicht singen könnte, in seinem Nahmen [ca. 1761/63] A155
Klagen einer Braut an ihre Nachtigall. Im Wintermonath 1761 A247
Klagen einer Witwe [ca. 1761/63] A57
Klagen eines unglücklichen Verliebten [ca. 1761/63] A250
Klagen über eine gestorbene Rose an meinen Freund R.* [?] G303
Klagen und Bitte, dem Königlichen Feldherrn Herzog Ferdinand gesungen auf dem Schutt des Gotteshauses zu Elbingerode am Harz (Im August 1762) A260
Kleiner Brief aus Berlin [?] Me66
Kleont und Julie. Den 19 Nov. 1771. N47
Kleontes hieng allein den Musen an N47
Kommt heraufgestiegen aus dem Sande A92, Me83, R64, W10
Komm wieder, Freund! und laß dir singen A300
König, Vatter, Volksliebhaber [an Friedrich den Großen, 1. Jan. 1780: Abschrift im Brief an Gleim v. 2. u. 4. Jan. 1780] BwII/433

L

Laß Dich bey Leibe nicht vergleichen G250, Me113, R121, W110
Läßt die Natur aus ihrer Hand A221
Lehnchen, dieser Zuckermann G202, W156
Liebe Mutter, wenn beim Ewigfreuen BwII/469
Lied an gefangene Lerchen dem Dohmdechant Freyherrn Spiegel zum Diesenberg zugeeignet (Zu Halberstadt den 5ten des Weinmonats 1761) A95, Me87
Lied an Se. Fürstl. Durchl. den jungen Prinzen von Anhalt, Enkel des regierenden Herrn Grafen von Wernigerode zum Ersten Jahrstage. Den 9. Januar 1769 G95
Lied der Clio. Sr. Durchlaucht dem Herzog Ferdinand von Braunschweig. Den 12. Jenner 1771 G59

Lied der Frölichkeit im Brachmonath 1762 A243
Lied der Lalage [an Gleim, Berlin, 23. Juni 1761] BwI/16
Lied der Musen, an die junge Prinzeßin Tochter des Prinzen Ferdinands vom Hause [ca. 1761/63] A122
Lied einer alten reichen Wittwe, die gern Dame werden will [?] G254, R123
Lob der Rose an Tyrsis [an Gleim, 7. Dez. 1762] BwI/382
Lob der schwarzen Kirschen. 1764 B164, G125, M322, R82, W51
Lobet den Schöpfer, der Himmel und Erde gegründet G136
Lobgesang nach tödtlichem Schmerz unter meinen Kindern gesungen am 6ten December 1789 G136
Loblied bei dem fünf und sechzigsten Jahresschluß [1787] G141

M

Männer Eure Weyßheit ist BwII/425
Mein altter Lebensfunnke glimmt [an Gleim, Berlin, 3. Nov. 1790] BwII/347
Meine Seele taumelt, nicht berauscht vom Weine G38, N31
Meine Zufriedenheit [?] R124
Mein ganzes Herze zürnt auf den, der in den Tagen Me130
Mein Geist und mein Gefühl sind die beflammte Ode [1762] G317, R146
*Mein lieber H**, glaube künftig* G174
mein lieber Neugebohrner [an Gleim, Berlin, 2. April 1786] BwII/248
mein Schäffer ward mir Stumm und sahe [an Gleim, Berlin, 21. Sept. 1775] BwII/93
Mein Schöpfer, mein Erhalter G138
Mein Wilhelm! Strecke nicht die zarte G98
Melpomene, die selbst den Fischgeschlechtern G18
Mepsantus gieng zu seinem Weibe N56, W148
Mich darf nicht ein Patent des Kaisers heißen krönen [1762] G311
Milon, gestern war ich selig G290, R86
Mir zur Last fühl ich mein Leben A57
Mischt immer eure Blätter, spielet A190, Me68, R83, W22
mit[t] Einem Morallistenfluche [an Gleim, Berlin, Okt./Nov. 1781] BwII/163
Mit einer ihren Gram erzählenden Gebärde G362, Me140, R42, W119
Mit hunderttausend Stimmen ruft H188, Me131
mit kranker Stirn und kränkern Herzen [an Gleim, Magdeburg, 15. Januar 1762] BwI/64
Mit Schneegewölken grau bekleidet [?] W68
Mit Schneegewölken grau bekleidet W68
Mittags, als die Dichterin mit bei dem Dom-Dechant Spiegel zu Halberstadt speiste. Den 18. Februar 1762 G326
Monarch und Schöpfer eines Glüks [an Gleim, Berlin, 3. März 1787] BwII/297, G235, M331, Me75, R128, W113
Morgen-Fragen an Gliphästion, als er Abends vorher einen Traum erzählet und dabey gesagt hatte: Er schlafe immer sehr gut, und habe selten Träume (Zu Berlin, den 4ten des Brachmonaths 1761) A282
Morgengedanken (Aus dem Brief v. 16. Juni 1776) H284, Me62, R119, W72
Morgen-Gedanken. 1761 A21, R60, W44
Morgen-Gesang an ihre Seele [ca. 1761/63] A25
Muhm Ohrte Me149

N

Nach einem halben Seculum BwII/482
Nachmittags den 23. Mai 1790 H403, W33
Nachricht an den Grafen von Stollberg-Wernigerode wegen des Rinderhirtens Johann Christoph Grafes in Schwiebus, zween Meilen von Züllichow. 1766 G226
Nachschrif[f]t an[n] Gleminden [an Gleim, Berlin, 9. März 1783] BwII/176
Nachschrift insgeheim zu lesen (Den 23. Juni 1790) H367
(Nach Sophiens Cörperöfnung)[an Gleim, Berlin, 24. Nov. 1789] BwII/322
Nach so viel bangen Tagen [an Gleim, Berlin, 14. März 1770] BwII/12
Nein länger kann ichs nicht ertragen G296, R106
Neujahrs Gesundheit [?] G320
Neujahrswunsch an den Rinderhirten. In ihrem sechszehnten Jahr, 1738 G339, R33
Nicht Bachus, nicht das Glück befand A356
Nicht immer will ich so, wie andre Leute wollen G316, R147
Nicht von den Flügeln starker Winde A341, R72
Nim diese blumen, nim dabey [an Gleim, Berlin, 6. Juli 1791] BwII/354
Noch blieb ich hier, bin aber matt [an Gleim, Berlin, 11. Dez. 1789] BwII/324

Noch liegen die drey Stüklein Gold [an Gleim, Berlin, 14. März 1784] BwII/205

O

O Borchmann, sprich! wann essen A355
Ob Sappho für den Ruhm schreibt? An die Frau von Reichmann den 10. März 1762 G268, R74, W34
Ob Weizen reift zu Semmel oder Kuchen G86, W54
Ode an Freund Bachmann →An Palemon, an ihrem Geburtstage
Ode auf die Geburt des jungen Prinzen von Preußen [? zwischen 1761 und 1772] N31
O du! an den ich täglich eine Menge A237
O du, dem durch drey lange schwarze Nächte A177
O du! den die Natur zusammen setzte A233
O du! den mir mein Freund empfahl A195, R66
O du, der mich mein Herz empfohlen A87, Me127
O du mein bester unnter allen [an Gleim, Berlin den 3. July 1778] BwII/123
O du mein Geist! stolz und verwegen singen A115, W83
O Ferdinand, bey dessen Namen N58, M324, R114
O Freund! auf stürmischen Flügeln A217, R134
O Freund! dem Kinde des Fürsten A133
O Freund! Der Mahler? Gefunden A228
O Freund! die lächelnde Rose A147
O Freund drey Ungewitter hiengen A36
O Freund! in deinem Blick seh' ich noch Klagen A144
O Freund, mit hämischem Blicke A181
O freund sey mir nicht unngeduldig [an Gleim, Berlin, 1. März 1783] BwII/169
O Freund! was hilft, der Hoheit und des Geldes A207
Of[f]t frag ich ob daß möglich ist [an Gleim, Berlin, 19. Febr. 1785] BwII/224
Oft loben uns Dichter, die täuschen A350, W102
O glaube mir, der Du im Jünglingsfuße G22
O Gott! der du allmächtig bist! A16
O Göttin, die, vom höchsten Jupiter geliebt G5
O Graf nur klein ist unsers Lebens Werth A89
O hätt ich jezt den Geist der Unzerin G358
O Jupitter du flurenfeuchtter [an Gleim, Berlin, 21. Sept. 1775] BwII/96
O Königinn! an allen Enden G104
O Königin! Der große Tag ist trübe R78
O Lieber! sprich, wann essen G322, W57
O Muse! die mit kühnem Fluge R51
O Schiller, dem im Schattenreiche [an Schiller, 4. May 1786] M329, R125, Nationalausg.Bd.33I/96
Ostersonne! du bist schön G270, M332, Me97, R130, W78
O Tod, wie bitter bist du dem A326
O! wenn du wiederkommen wirst A346, BwII/492

P

Palemon ging von Sorgen fortgetrieben [an Gleim, Berlin, 28. Dez. 1768] BwI/335
Phillis, die Helferin. Eine Idylle an Damon. 1763 G279
Prinz, der von Seiner Mondenzahl G95
Prinz! die Geschichte mahlt den Menschen und den Held A257, W102
Prinzeßin! die so lieblich blühet G237
Prinzeßin! die wir uns herab A122

R

Recept wider böse Weiber. Eine Romanze [? zwischen 1761 u. 1772] N25, Me112, W145
Recept zur Stärkungschokolade [?] G330, R123
Rühmst mir Deines Landes König BwII/466

S

Sanftes Mädchen, dessen Herz allzuwoll von Mitleidsschmerz R111
Sapho an Amor [ca. 1761/63] A252, R88, W14
Sappho ist traurig bei Thyrsis [an Gleim, Halberstadt, 7. Februar 1762] R104, H129
Schlesisches Bauerngespräch zwischen Vetter Hanß und Muhm Ohrten, gehalten zu R.... bei Glogau im November 1758 G376, Me149
Schnell, wie ein Sturmwind sich erhebt A80, M312
Schön gutten Morgen Herr Doktor Göth BwII/120, H292, M327, R120
Schön ist der Morgen, schön die trunkne Flur (Aus dem Brief v. 16. Juni 1776) H284, Me62, R119, W72
Schön ist im fürstlichen Garten die Frucht N49
Schön ist's Häuschen, doch mit mir H334
Schön ist Wahrheit und Natur [an Gleim, 22. Juni 1790] H367
Seine Maiestät befahlen [Aus dem Brief v. 17. Mai 1783] BwII/450, H312, G324, R196
Seufzer [Aus dem Brief an Gleim, Berlin, den 24. Juli (1761) abends] H93, R93
Seyd mir beklagt, ihr, in das Garn verlocket! A95, Me87
Seyd mir gegrüßt, ihr Herren von dem Dohm! A269
Sey mein Gesang, du, die von Ewigkeit G389, M305,

Me100, R56
Sey mir gesegnet, goldne Ehe [?] G314, W147
Sie eilt, wir müssen sie haschen G72, Me73, W73
Sie flohen nicht, sie stürzten und erreichten A118
Siehst Du den alten hochbeschneyten Brocken G61
Sie ist nicht mehr! o du ihr Vater weine A141
Sie ist verlohren! Ach! ein böser Geist entführte A336
Skizze einer Epistel an den Herrn Ober-Consistorialrath Büsching. 1791 G215
Skizze einer Epistel an Herrn Sekretair K*ch. 1788 G177
Sohn Cytherens, kleiner Weltbezwinger! A252, R88, W14
so könt ich singen wenn ich erst [an Gleim, Berlin, 19. Dez. 1786] BwII/285
Soll ich dein schwarzes Auge loben A126
Sollt' ich, vom Stolz verblendet, glauben G80, Me80
Soll ich zuerst besingen den Befreyer G14
so wahr aus dir die Liebe spricht [Zur Abendzeit Sonntags den 3 October 1784] BwII/213
so wahr ich dir mein Glück und meinem Ruhm verdannke [an Gleim, Berlin, 16. Jan. 1780] BwII/138
So ward dir auch dein altter freund genommen [an Gleim, Berlin, 4. Nov. 1774] BwII/70
Sprich, welcher Gott soll Dich beschützen G20
Sr. Hochfürstl. Durchlaucht dem Herzog Ferdinand von Braunschweig-Lüneburg, im Königlichen Garten zu Schönhausen unterthänigst gewidmet. Den 4ten September 1769 G57
Sr. Königlichen Hoheit dem Prinzen Friedrich von Preussen am dritten August 1786. gewidmet von A. L. K. Berlin [1786] BwII/482
Streu Schlummer-Körner auf ihn hin [an Gleim, Berlin, 24. Juli 1761] H93, R93
Süß ist die Liebe der Ehen G131

T

Tag des Schreckens in Glogau [1758] G362, H51, R42, W119
Tauch' ich die Feder in den Wein G333
Träume [an Gleim, Magdeburg, 14. November 1761] BwI/40
Trostgesang für Neu-Ruppin bey den Ruinen am 31sten August 1787 G117, W140

U

Ueber den Aktien-Handel [?] G328, W155
Ueber den Entsatz von Braunschweig. Zu Halberstadt den 13ten des Weinmonats 1761 A77, W96
Ueber den Unbestand des Ruhms. An die Frau G. R. B. 1763 G80, Me80
Ueber die Begierde des Säuglings. 1764 G86, W54
Ueber die Begierden und Wünsche. An den jungen Herrn von der H*st [?] G22
Ueber die Emilie Galotti. An Sr. Durchl. den Feldherrn Ferdinand Herzog zu Braunschweig und Lüneb. Im April 1772 N58, M324, R113
Ueber die Vergleichung. An Nanntchen. Den 5. Okt. 1779 G250, R121, W110
Ueber die Vorzüge des Prinzen Friedrichs von Braunschweig. 1765 G14
Ueber ein Gemälde. 1765 G321, W155
Ueber Friedrichs Weisheit [?] G325
Um deinem Nächsten zu verzeihn G323
Um vier Uhr bist du schon mein Lieber [an Gleim, Berlin, 3. Nov. 1790] BwII/345
Und Eine bittre fehde BwII/389
Und hättest du gleich einen Bart G329
Und jederman ist böse BwII/389
Und wär ich eine Malerin [3. November 1790] H371
Unglaübiger wie Tomas war [an Gleim, Berlin, 3. März 1787] BwII/297

V

Vergebens ist daß Tiefe forschen [an Gleim, Berlin, 24. Nov. 1789] BwII/322
Vergieb, o Königin! Mein Herz entschliesset sich A266
Vergiß die kleinen freundschafftsdiebe [an Gleim, Berlin, empf. 2. April 1773] BwII/34
Vergnügte Einsamkeit! du bist die Ruhe G350, Me96, W39
Verhelen kann ich Dir's, o Ritter, nun nicht länger G156
Versichre doch den Stahl, den Sohn des Hippokrat's G320
Versuch einer Danksagung an König Friedrich Wilhelm den Vielgeliebten. Im Februar 1787 G235, M331, Me75, R128, W113
Versuch eines Gesanges zur Geburtsfeier Sr. Excellenz des Königlich Preußischen Kabinets-

Ministers Grafen von Hertzberg. Den 2. September 1788 G241
Verweile Freund, laß uns ihn noch geniessen A173, W25
Verwünschte Heiligkeit der Ehe! [1762] G313, R148, W147
Verzeihung von der Königlichen G188, Me76, W31
Vom Gebirge strömte das Verderben G217, W138
Vom Glanze der Religion A82
Vom hohen väterlichen Throne G311, R146
Von deinem besten Freund begleitet A103, W58
Von dem Olympus zogest du ihn nieder G30, S155, W154
Von dem Vertrauen auf Gott an den Herrn Professor Sulzer (zu Berlin im Heumonat 1761) A46
Von einem Erdenengelcreyse [an Gleim, Berlin, 26. April 1789] BwII/313
Von uns herab gewünschet, kommt mit Glanze A67
Von[n] wegen meiner Räzelley [an Gleim, Berlin, 6. April 1783] BwII/177
Vor alten Zeiten war's Gebrauch G324
Vorbitte für einer armen Witwe an das Dohmcapitul zu Halberstadt [ca. 1761/63] A269
Vorbitte wegen eines Nußbaums an Palemon (Zu Magdeburg den 18ten des Herbstmonats 1761) A201, W59

W

Wandrer, weile noch und steh G263, M330, R127
Warnung an den jungen Herrn von H*st. 1764. Als derselbe der Mahlerey den Vorzug vor der Dichtkunst ertheilte G82
Warnung ann Milon durchs beispiel zweyer bestrafftten [an Gleim, Berlin, 9. Sept. 1775] BwII/85
Warum mußt ich gestern wagen Me118
Warum schrieb doch der bauersMan [an Gleim, Berlin, Febr. 1784] BwII/196
Warum sollt ich mich denn härmen G254, R123
Warum war ich nicht bey der feyer [an Gleim, Berlin, 31. Mai 1786] BwII/255
Was fehlt doch dem allmächtigen Götterkinde A333
Was hör ich? Ist Apoll zu dir herabgestiegen G328
Was hör ich? rauschen goldne Flügel? G129, W257
Was ich dir schrieb ist Ernst gewesen [an Gleim, Berlin, 26. Okt. 1788] BwII/301
Was ich von Dir an Spaldings Herz geschrieben G246
Was kümmert dich der Eigentliche Name [an Gleim, Berlin, 9. März 1783] BwII/176
Was seh ich! all ihr Thatenrichter! G298, R87
Was seh' ich? Friedrichs stark erkämpfte Siege [?] G309
Was unsern Augen ward beraubt G328
Was wir lange wünschen müssen H134
Was wirst du von dem Weibe denken [an Gleim, 27. Mai 1778] BwII/119
Wegen Milon [?] G287
Weg ist nun eine Woche schon G168
Wein! ich möchte dich bald haßen G329, H400, Me106
Wenn alles alles muß zerrinnen G336
Wenn Dir, empfindungsvoller Held! G149, Me137, R110
Wenn es den Erdengöttern einst gefällt A71, Me129, R75, W94
Wenn ich darrunntter nichts gewinne [an Gleim, Berlin, 8. u. 10. Juni 1781] BwII/153
Wenn ich erwache, denk ich dein! A3, W42
Wenn ich mit Lob und Dank mein Auge rückwärts hin G141
Wen[n] ich parodieren will? [an Gleim, Berlin, 19. Dez. 1786] BwII/284
Wenn im Geschlecht der Baronoffen G332
Wenn Morpheus über mich Mohnhaübter werffen steht [an Gleim, Magdeburg, 14. Nov. 1761] BwI/39
Wenn Oestreich mit gezwungnem Blick A348, W93
Wenn unsern Feinden das Herze gesunken A345
Wer Geld besitzt, dem drohen Diebe G328, W155
Wer nie der sonnenhellen Wahrheit widerstrebt G41
Wer sich mit wächsernen Flügeln A167
Wie Alexanders Zeitgenossen N37
Wie Duldmann sich gerochen G212
Wie es der Karschin geht? [?] Me67
Wiegenliedchen, dem Sack- und Spaldingischen Enkel zu Magdeburg gewidmet. Den 3ten September 1771. N54
Wie Kindlein, die kaum Wörter lallen (Aus einem Gedicht zu Gleims Geburtstag den 2. April 1789) H355
Wie Schön sind Sie, wie Schön zum blennden [an Gleim, Berlin, 21. Sept. 1775] BwII/97
Wie sie den Einzug des Königs erträumte [1763] H188, Me131
Wie war es möglich? Dein Johann [Anno 1783, Berlin den 22. November abends geschrieben] BwII/192
Wilkommen auß der badequelle [an Gleim, Berlin, 9.

Sept. 1775] BwII/84
Wir Menschen sind so sehr verschieden G326
Woher diß lannge schweigen [an Gleim, Berlin, 29. Juli 1786] BwII/257
Wohl dir daß du Ihn noch gesehen [an Gleim, Berlin, 20. Aug. 1786] BwII/262
Wohltähttigkeit die Tochter Gottes [an Gleim, Berlin, 6. Dez. 1780] BwII/145
Wo ist Er, daß ich Ihn mit Thränen salbe A74
Wo war ich, als dich Morgensterne lobten? A7, Me88, R136, W40
Wo war ich, als mit tausend Zungen A198, Me69

Z

Zanken will ich nicht und klagen G294, M309, R85
Zeus schild im Wolkenhimmel A357
Zorn auf den Krieg, als er zu lange währte [?] Me130
Zueignungs-Gesang an den Baron von Kottwitz, Erbherrn auf Boyadel in Niederschlesien, meinen ersten Wohlthäter [1763] AIII, H60, M320, R79
Zu lange miedest Du, o Sappho! dieses Zimmer G182, W106
Zu nackend, Freund! muß noch die Linde bleiben A214, W23
Zur Königin im Saal gedrungen [an Gleim, Magdeburg, 8. Nov. 1761] BwI/37
Zuruf an den Fremdling beim Marmorsarge Friedrichs des Großen am 18. August 1786 G263, M330, R127
Zuruf an Glogau (Den 24ten Jenner 1760) A106
Zur Zeit, da Luther und Calwin A315
Zu Schnell bin ich gewesen BwII/389
Zweyter Sohn der kinderreichen G55
Zwey Thaler gibt kein großer König (Aus dem Brief v. 4. September 1773) H267, R196

付録 5

LITERATURVERZEICHNIS.
(Auswahl)

I. Primär-Literatur

A. Karsch

1. *Auserlesene Gedichte von Anna Louisa Karschin.* Nachdruck der Ausg. Berlin 1763. Mit einem Vorwort v. Barbara BECKER-CANTARINO. Karben 1996.

2. *Auserlesene Gedichte von Anna Louisa Karschin.* Faksimiledruck nach der Ausg. von 1764. Mit einem Nachwort v. Alfred ANGER [Deutsche Neudrucke. Reihe Texte des 18. Jahrhunderts. Hg. v. Paul Böckmann u. Friedrich Sengle]. Stuttgart 1996.

3. *Gedichte von Anna Louisa Karschin,* geb. Dürbach. Nach der Dichterin Tode nebst ihrem Lebenslauff hg. v. Ihrer Tochter C.[aroline] L.[uise] v. Kl.[encke], geb. Karschin. Nachdruck der Ausg. Berlin 1792. Mit einem Vorwort v. Barbara BECKER-CANTARINO. Karben 1996.

4. Anna Louisa Karsch, *Neue Gedichte. 1772.* In: *Deutsche Literatur von Frauen. Von Catharina von Greiffenberg bis Franziska von Reventlow.* Hg. v. Mark LEHMSTEDT [Digitale Bibliothek 45]. Berlin o. J.

5. *Deutsche Gedichte des 18. Jahrhunderts.* Hg. v. Klaus BOHNEN [Universal-Bibliothek Nr. 8422]. Stuttgart 1995.

6. *Anakreontiker und preußisch-patriotische Lyriker.* Hg. v. Franz MUNCKER [Deutsche National-Litteratur. Hist.-krit. Ausg., hg. v. Joseph Kürschner. 45. Bd.]. 2. Teil: *Uz, Kleist, Ramler, Karschin.* Stuttgart o. J.

7. *Das Lied der Karschin. Die Gedichte der Anna Louisa Karschin mit einem Bericht ihres Lebens.* Hg. v. Herybert MENZEL. Hamburg 1983.

8. *O, mir entwischt nicht, was die Menschen fühlen. Anna Louisa Karschin, Gedichte und Briefe. Stimmen von Zeitgenossen.* Hg. u. mit einem Nachwort v. Gerhard WOLF [Märkischer Dichtergarten]. Berlin 1981.

9. Anna Louisa Karschin, *Gedichte und Lebenszeugnisse.* Hg. v. Alfred ANGER [Universal-Bibliothek Nr. 8374]. Stuttgart 1987.

10. Anna Louisa Karsch, *Herzgedanken. Das Leben der »deutschen Sappho« von ihr selbst erzählt.* Hg. u. eingeleitet v. Barbara BEUYS. Frankfurt a. M. 1981.

11. *Die Karschin. Friedrichs des Großen Volksdichterin. Ein Leben in Briefen.* Eingeleitet u. hg. v. Elisabeth HAUSMANN. Frankfurt a. M. 1933.

12. *„Mein Bruder in Apoll". Briefwechsel zwischen Anna Louisa Karsch und Johann Wilhelm Ludwig Gleim.* Hg. v. Regina NÖRTEMANN. Bd. I: Briefwechsel 1761-1768, hg. v. R. Nörtemann; Bd. II: Briefwechsel 1769-1791, hg. v. Ute Pott. Mit einem Nachwort v. R. Nörtemann. Göttingen 1996.

13. KARSCH, Anna Luise: *An die Natur* [Marbacher Faksimile Nr. 45]. Schiller-Nationalmuseum, Marbach am Neckar 2004.

14. *Liebes von der alten Karschin.* Anläßlich der 27. Hauptsammlung der Gesellschaft der Bibliophilen zu Leipzig am 24. Oktober 1926. Langensalza 1926.

15. *Vorläufige Lebensbeschreibung der Dichterin Anne Luise Karschin, geb. Dürbach.* [Erst: *Berliner Musenalmanach* von 1792, hg. v. Karl Heinrich Jördens.] In: *Anna Louisa Karsch (1722-1791), Dichterin für Liebe, Brot und Vaterland.* Ausstellung zum 200. Todestag 10. Oktober bis 16. November 1991, Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Ausstellungskatalog 39. Berlin 1991. S. 24-28.

B. Sonstige

16. BACHER, Bartholomäus: Der Mädchenfreund (1807). In: WILKENDING, Gisela (Hg.): *Kinder- und Jugendliteratur. Mädchenliteratur. Vom 18. Jahrhundert bis zum Zweiten Weltkrieg* [Universal-Bibliothek Nr. 8985]. Stuttgart 1994. S. 78 f.

17. CAMPE, Joachim Heinrich: *Väterlicher Rath für meine Tochter. Ein Gegenstück zum Theophron. Der erwachsenern weiblichen Jugend gewidmet* (1789). In: *Kinder- und Jugendliteratur.* Hg. V. Gisela WILKENDING. Stuttgart 1994. S. 149-154.

18. CHÉZY, Helmina von: *Neue Auserlesene Schriften der Enkelin der Karschin.* Hg. auf Unterzeichnung zur Unterstützung verwundeter Vaterlandsvertheidiger. 2 Abt. Heidelberg 1817.

19. CHÉZY, Helmina von: *Erinnerungen aus meinem Leben, bis 1811* (Erstdruck in: *Aurikeln. Eine Blumengabe von deutschen Händen.* Hg. v. Helmina von Chézy, geb. Freyin von Klencke, Berlin 1818). In: *Deutsche Autobiographien 1690-1930.* Hg. v. Oliver Simons [Digitale Bibliothek Bd. 102]. Berlin 2004.

20. CHÉZY, Helmina von: *Unvergessenes. Denkwürdigkeiten aus dem Leben* (Erstdruck: Leipzig 1858). In: *Deutsche Autobiographien 1690-1930.* Hg. v. Oliver Simons [Digitale Bibliothek Bd. 102]. Berlin 2004.

21. DÜLMEN, Andrea van: *Frauenleben im 18. Jahrhundert.* München und Weimar 1992.

22. ECKARDT, M. (Hg.): *Briefe aus alter Zeit. Wilhelmine Heyne-Heeren an Marianne Friederike Bürger 1794-1803 und ein Nachtrag.* Hannover 1913.

23. FRIEDRICH der Große: *Denkwürdigkeiten zur Geschichte des Hauses Brandenburg* (1751). In: *Die Werke Friedrichs des Großen.* In deutscher Übersetzung. 1. Bd. Hg. v. Gustav Berthold Volz, deutsch v. Friedrich von Oppeln-Bronikowski, Willi Rath u. Carl Werner von Jordens. Berlin 1913.

24. FRIEDRICH der Große: *Briefe Friedrichs des Großen.* In deutscher Übersetzung. Hg. v. Max HEIN, deutsch v. Friedrich von Oppeln-Bronikowski u. Eberhard König. 2 Bde. Berlin 1914.

25. GERSTENBERG, Heinrich Wilhelm von: *Briefe über Merkwürdigkeiten der Litteratur.* Hg. v. Alexander Weilen [Deutsche Litteraturdenkmale des 18. u. 19. Jahrhunderts in Neudrucken, hg. v. Bernhard Seuffert. Bd. 29/30]. Stuttgart 1890.

26. GLEIM, Johann Wilhelm Ludwig: *Ausgewählte Werke.* Hg. v. Walter Hettche [Schriften des Gleimhauses Halberstadt Bd. 1]. Göttingen 2003.

27. GOETHE, Johann Wolfgang: Zum Shäkespeares Tag. In: Goethes *Sämtliche Werke.* Jubiläums-Ausg. Hg. V. Eduard VON DER HELLEN. 36. Bd.: Schriften zur Literatur. Mit Einleitung u. Anm. V. Oskar Walzel. 1. Teil. Stuttgart u. Berlin o. J. S. 3-7.

28. HABERLAND, Helga / PEHNT, Wolfgang (Hg.): *Frauen der Goethezeit in Briefen, Dokumenten und Bildern. Von der Gottschedin bis zu Bettina von Arnim. Eine Anthologie* [Universal-Bibliothek Nr. 8454-65]. Stuttgart 1960.

29. HERDER, Johann Gottfried: *Fragmente über die neuere deutsche Literatur.* Zweite Sammlung 4. Von der griechischen Literatur in Deutschland, B, 7: Sappho und Karschin. In: Herder's *Werke.* Nach den besten Quellen revidirte Ausg. Hg. U. mit Anm. Begleitet v. Heinrich DÜNTZER. 19. Theil. Berlin o. J. S. 177 f.

30. HERDER, Joh. Gottfr.: *Gedichte* von Anna Louisa Karschin, geb. Dürbach. Nach der Dichterin Tode nebst ihrem Lebenslauf hg. V. ihrer Tochter C. L. von Klencke, geb. Karschin. Berlin. 2. Aufl., mit Bildniß der Dichterin. 1797. In: Herder's *Werke.* Hg. V. H. DÜNTZER. 17. Theil: *Gesammelte Abhandlungen, Aufsätze, Beurtheilungen u. Vorreden aus der Weimarer Zeit.* Hg. u. mit Anm. Begleitet v. H. Düntzer. Berlin o. J. [1876]. S. 605-611.

31. LAVATER, Johann Caspar: *Physiognomische Fragmente zur Beförderung der Menschenkenntnis und Menschenliebe* (1775-1778). In: Johann Caspar Lavaters *ausgewählte Werke.* Hg. v. Ernst Staehelin. 2. Bd.: *Gott schuf den Menschen sich zum Bilde 1772-1779.* Zürich 1943.

32. MENDELSSOHN, Moses: *Briefe die Neueste Litteratur betreffend.* Berlin 1761 u. 1764. 272. u. 273. Brief (1764). In: *O, mir entwischt nicht was die Menschen fühlen.* Hg. V. Gerhard WOLF. Berlin 1981. S. 239-245.

33. MÜLLER, Rainer A. (Hg.): *Deutsche Geschichte in Quellen und Darstellung.* Bd. 6: *Von der Französischen Revolution bis zum Wiener Kongreß 1789-1815.* Hg. v. Walter Demel u. Uwe Puschner [Universal-Bibliothek Nr. 17006]. Stuttgart 1995.

34. REBLE, Albert (Hg.): *Geschichte der Pädagogik.* Dokumentationsband I/II. Stuttgart 1971.

35. SEYBOLD, David Christoph: *Predigten des Herrn Magister Sebaldus Nothanker aus seinen Papieren gezogen.* Prag 1785 [erst: 2 Bde. Leipzig 1774/76].

36. SULZER, Johann Georg: *Allgemeine Theorie der Schönen Künste in einzeln, nach alphabetischer Ordnung der Kunstwörter auf einander folgenden, Artikeln abgehandelt.* Digitale Bibliothek Bd. 67. Berlin o. J.

II. Sekundär-Literatur

1. ANTON, Annette C.: *Authentizität als Fiktion. Briefkultur im 18. und 19. Jahrhundert* [Metzler Studienausgabe]. J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, Stuttgart 1995.

2. BAHR, Ehrhard (Hg.): Kant, Erhard, Haman, Herder, Lessing, Mendelssohn, Riem, Schiller, Wieland: *Was ist Aufklärung? Thesen und Definitionen* [Universal-Bibliothek Nr. 9714]. Stuttgart 1974.

3. BARNDT, Kerstin: „Mein Dasein ward unvermerkt das allgemeine Gespräch". Anna Louisa Karsch im Spiegel zeitgenössischer Popularphilosophie. In: *Anna Louisa Karsch (1722-1791). Von schlesischer Kunst und Bilder „Natur".* Ergebnisse des Symposions zum 200. Todestag der Dichterin. Hg. v. Anke BENNHOLDT-THOMSEN u. Anita RUNGE. Göttingen 1992. S. 162-176.

4. BAUMGART, Peter (Hg.): *Kontinuität und Wandel. Schlesien zwischen Österreich und Preußen.* Erlebnisse eines Symposions in Würzburg vom 29. bis 31. Oktober 1987 [Schlesische Forschungen. Veröffentlichungen des Gerhard-Möbus-Instituts für Schlesienforschung an der Universität Würzburg, hg. v. Peter Baumgart, Lothar Bossle, Gundolf Keil, Josef Joachim Menzel u. Eberhard Günter Schulz. Bd. 4]. Sigmaringen 1990.

5. BAUR, Samuel: *Deutschlands Schriftstellerinnen. Eine charakteristische Skizze.* Sine ira ets studio (1790). Nachdruck hg. u. mit einer Einleitung versehen von Uta Sadji [Stuttgarter Arbeiten zur Germanistik 194]. Stuttgart 1990.

6. BECHER, Ursula A. J. / RÜSEN, Jörn (Hg.): *Weiblichkeit in geschichtlicher Perspektive. Fallstudien und Reflexionen zu Grundproblemen der historischen Frauenforschung.* Frankfurt am Main 1988.

7. BECKER-CANTARINO, Barbara: „Belloisens Lebenslauf". Zu Dichtung und Autobiographie bei Anna Louisa Karsch. In: *Gesellige Vernunft. Zur Kultur der literarischen Aufklärung.* Festschrift für Wolfram Mauser zum 65. Geburtstag. Hg. v. Ortrud Gutjahr, Wilhelm Kühlmann u. Wolf Wucherpfennig. Würzburg 1993. S. 13-22.

8. BECKER-CANTARINO, Barbara: Die „deutsche Sappho" und „des Herzogs Spießgesell". Anna Louisa Karsch und Goethe. In: *Anna Louisa Karsch (1722-1791). Von schlesischer Kunst und Bilder „Natur".* Ergebnisse des Symposions zum 200. Todestag der Dichterin. Hg. v. Anke BENNHOLDT-THOMSEN u. Anita RUNGE. Göttingen 1992. S. 110-131.

9. BECKER-CANTARINO, Barbara: *Der lange Weg zur Mündigkeit. Frau und Literatur (1500-1800).* Stuttgart 1987.

10. BENNHOLDT-THOMSEN, Anke / RUNGE, Anita (Hg.): *Anna Louisa Karsch (1722-1791). Von schlesischer Kunst und Bilder „Natur"*. Ergebnisse des Symposions zum 200. Todestag der Dichterin. Göttingen 1992.

11. BLOCHMANN, Elisabeth: *Das »Frauenzimmer« und die »Gelehrsamkeit«. Eine Studie über die Anfänge des Mädchenschulwesens in Deutschland* [Anthropologie und Erziehung 17]. Heidelberg 1966.

12. BLUMENBERG, Hans: *Die Lesbarkeit der Welt* [suhrkamp taschenbuch wissenschaft 592]. 2. Aufl. Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1989.

13. BORRIES, Bodo von: *Vom »Gewaltexzesse« zum »Gewissensbiss«? Autobiografische Zeugnisse zu Formen und Wandlungen elterlicher Strafpraxis im 18. Jahrhundert* [Forum Psychohistorie, hg. v. Hedwig Röckelein, Bd. 5]. Tübingen 1996.

14. BOVENSCHEN, Sylvia: *Die imaginierte Weiblichkeit. Exemplarische Untersuchungen zu kulturgeschichtlichen Präsentationsformen des Weiblichen* [edition suhrkamp 2431]. Frankfurt am Main 1979.

15. BRINKER-GABLER, Gisela (Hg.): *Deutsche Literatur von Frauen*. 2 Bde. München 1988.

16. CONSENTIUS, Ernst (Hg.): *Meister Johann Dietz des Großen Kurfürsten Feldscher und Königlicher Hofbarbier*. Nach der alten Handschrift in der Königlichen Bibliothek zu Berlin zum ersten Male in Druck gegeben v. E. Consentius. Ebenhausen 1915. 邦訳＝ E. コンゼンツィウス編『大選帝侯軍医にして王室理髪師ヨーハン・ディーツ親方自伝』佐藤訳（白水社）2001 年。

17. DERNEDDE, Renate: *Mutterschatten – Schattenmütter. Muttergestalten und Mutter-Tochter-Beziehungen in deutschsprachiger Prosa* [Europäische Hochschulschriften. Reihe I: Deutsche Sprache und Literatur 1433]. Frankfurt/Main, Berlin, Bern, New York 1994.

18. DÜLMEN, Richard van: *Die Gesellschaft der Aufklärer. Zur bürgerlichen Emanzipation und aufklärerischer Kultur in Deutschland*. Frankfurt a. M. 1986.

19. DÜLMEN, Richard van: *Kultur und Alltag in der Frühen Neuzeit. 16. – 18. Jahrhundert*. Bd. 1: *Das Haus und seine Menschen;* Bd. 2: *Die Welt des Dorfes und der Stadt;* Bd. 3: *Magie, Religion, Aufklärung*. München 1990 / 1992 / 1994. 邦訳＝リヒャルト・ファン・デュルメン『近世の文化と日常生活――16 世紀から 18 世紀まで』1「『家』とその住人」、2「村と都市」、3「宗教、魔術、啓蒙主義」佐藤訳（鳥影社）1993 / 1995 / 1998 年。

20. FRIEDRICHS, Elisabeth: *Die deutschsprachigen Schriftstellerinnen des 18. und 19. Jahrhunderts. Ein Lexikon* [Repetorien zur deutschen Literaturgeschichte 9]. Stuttgart 1981.

21. Das GLEIMHAUS (Hg.): *Zur Geschichte und Kultur des Fürstentums und der Stadt Halberstadt* [Aus den Quellen des Gleimhauses 1]. Halberstadt 1991.

22. GNÜG, Hiltrud / MÖHRMANN, Renate (Hg.): *Frauen Literatur Geschichte. Schreibende Frauen vom Mittelalter bis zur Gegenwart.* 2., vollst. neu bearb. u. erw. Aufl. Stuttgart 1999.

23. GOETSCH, Paul (Hg.): *Lesen und Schreiben im 17. und 18. Jahrhundert. Studien zu ihrer Bewertung in Deutschland, England, Frankreich* [Script-Oralia 65]. Tübingen 1994.

24. GRAVENHORST, Traud: *Schlesien. Erlebnisse eines Landes.* 4. Aufl. München 1959.

25. GRIMM, Reinhold / HERMAND, Jost (Hg.): *Vom Anderen und vom Selbst. Beiträge zu Fragen der Biographie und Autobiographie.* Königstein/Ts. 1982.

26. HEUSER, Magdalene: Stationen einer Karsch-Nachfolge in der Literatur von Frauen des 18. Jahrhunderts. Caroline von Klencke, Helmina von Chézy und Therese Huber. In: *Anna Louisa Karsch (1722-1791). Von schlesischer Kunst und Bilder „Natur".* Ergebnisse des Symposions zum 200. Todestag der Dichterin. Hg. v. Anke BENNHOLDT-THOMSEN u. Anita RUNGE. Göttingen 1992. S. 149-161.

27. HONEGGER, Claudia: *Die Ordnung der Geschlechter. Die Wissenschaft vom Menschen und das Weib. 1750-1850.* Frankfurt/Main, New York 1991[2].

28. HOPFNER, Johanna: *Mädchenerziehung und weibliche Bildung um 1800. Im Spiegel der populär-pädagogischen Schriften der Zeit* [Erlanger pädagogische Studien]. Bad Heilbrunn/Obb. 1990.

29. HUPKA, Herbert (Hg.): *Denk ich an Schlesien.* Bd. 1: *Leben in Schlesien. Erinnerungen aus fünf Jahrzehnten;* Bd. 2: *Meine Schlesischen Jahren. Erinnerungen aus sechs Jahrzehnten.* München 1964.

30. IM HOF, Ulrich: *Das Europa der Aufklärung* [Europa bauen]. München 1993.

31. KASTINGER RILEY, Helene M.: *Die weibliche Muse. Sechs Essays über künstlerisch schaffende Frauen der Goethezeit* [Studies in German Literature, Linguistics and Culture 8]. Columbia/South Carolina 1986.

32. KITSCH, Anne: *„Oft ergreiff ich um Beßer mein zu sein die feder ...". Ästhetische Positionssuche in der Lyrik Anna Louisa Karschs (1722-1791).* Mit bislang unveröffentlichten Gedichten [EPISTEMATA. Würzburger Wissenschaftliche Schriften. Reihe Literaturwissenschaft. Bd. 376]. Würzburg 2002.

33. KRZYWON, Ernst Josef: Tradition und Wandel. Die Karschin in Schlesien (1722-1761). In: *Anna Louisa Karsch (1722-1791). Von schlesischer Kunst und Bilder „Natur".* Ergebnisse des Symposions zum 200. Todestag der Dichterin. Hg. v. Anke BENNHOLDT-THOMSEN u. Anita RUNGE. Göttingen 1992. S. 12-56.

34. LE GOFF, Jacques: *Les intellectuels au moyen âge.* Paris 1957. 邦訳＝ジャック・ルゴフ『中世の知識人――アベラールからエラスムスへ――』[岩波新書 30] 柏木英彦・三上朝造訳（岩波書店）1977年。

35. MALECZYŃSKA, Ewa (Hg.): *Beiträge zur Geschichte Schlesiens.* Ins Deutsche übertragen v. Bolko Schweinitz. Berlin 1958.

36. MEINERS, Karin: *Der besondere Weg, ein Weib zu werden. Über den Einfluß von Leitbildern auf die Entwicklung der höheren Mädchenbildung seit dem 17. Jahrhundert* [Europäische Hochschulschriften. Brihe 11. 128]. Frankfurt/Main 1982.

37. MENZEL, Herybert: Die Karschin. In: *Deutsche Frauen. Bildnisse und Lebensbeschreibungen.* Eingeleitet v. Ina Seidel. Berlin 1939. S. 77-79.

38. MIX, York-Gothart: *Die deutschen Musenalmanache des 18. Jahrhunderts.* München 1987.

39. MURR, Christoph Gottlieb von: *Über den wahren Ursprung der Rosenkreuzer und des Freymaurerordens. Nebst einem Anhang zur Geschichte der Tempelherren.* Sulzbach 1803.

40. NICKISCH, Reinhard M. G.: „daß sind ... sehr unbeträchtliche Papiere". Über die Epistel-Dichtung und die lyrischen Brief-Einlagen der Anna Louisa Karsch. In: *Anna Louisa Karsch (1722-1791). Von schlesischer Kunst und Bilder „Natur".* Ergebnisse des Symposions zum 200. Todestag der Dichterin. Hg. v. Anke BENNHOLDT-THOMSEN u. Anita RUNGE. Göttingen 1992. S. 66-80.

41. NÖRTEMANN, Regina: Verehrung, Freundschaft, Liebe. Zur Erotik im Briefwechsel zwischen Anna Louisa Karsch und Johann Wilhelm Ludwig Gleim. In: *Anna Louisa Karsch (1722-1791). Von schlesischer Kunst und Bilder „Natur".* Ergebnisse des Symposions zum 200. Todestag der Dichterin. Hg. v. Anke BENNHOLDT-THOMSEN u. Anita RUNGE. Göttingen 1992. S. 81-93.

42. NÜBEL, Birgit: *Autobiographische Kommunikationsmedien um 1800. Studien zu Rousseau, Wieland, Herder und Moritz* [Studien zur deutschen Literatur 136]. Tübingen 1994.

43. PETERS, Günter: *Der zerrissene Engel. Genieästhetik und lietarische Selbstdarstellung im 18. Jahrhundert.* Stuttgart 1982.

44. POTT, Ute: Berlin – Halberstadt – Berlin. Anna Louisa Karsch und Caroline Luise von Klencke als Autorinnen im Briefwechsel mit Johann Wilhelm Ludwig Gleim. In: *Anna Louisa Karsch (1722-1791). Von schlesischer Kunst und Bilder „Natur".* Ergebnisse des Symposions zum 200. Todestag der Dichterin. Hg. v. Anke BENNHOLDT-THOMSEN u. Anita RUNGE. Göttingen 1992. S. 94-109.

45. POTT, Ute: *Briefgespäche. Über den Briefwechsel zwischen Anna Louisa Karsch und Johann Wilhelm Ludwig Gleim.* Mit einem Anhang bislang ungedruckter Briefe aus der Korrespondenz zwischen Gleim und Caroline Luise von Klencke. Göttingen 1998.

46. RILEY, Helene M. Kastinger: Wölfin unter Schäfern. Die sozialkritische Lyrik der Anna Louisa Karsch. In: H. M. K. Riley, *Die weibliche Muse. Sechs Essays über künstlerisch schaffende*

Frauen der Goethezeit. Drawer 1986. S. 1-25 u. Anhang (S. 215-218).

47. SCHAFFERS, Uta: *Auf überlebtes Elend blick ich nieder. Anna Louisa Karsch – Literarisierung eines Lebens in Selbst- und Fremdzeugnissen.* Göttingen 1997.

48. SCHOLZ, Hannelore: „Doch mein Herz, ... dieses ist ganz Gefühl, ganz Freundschaft, so wie es den Dichtern geziemt." Die Karschin im Kontext der Volkspoesiedebatte in Deutschland. In: *Anna Louisa Karsch (1722-1791). Von schlesischer Kunst und Bilder „Natur".* Ergebnisse des Symposions zum 200. Todestag der Dichterin. Hg. v. Anke BENNHOLDT-THOMSEN u. Anita RUNGE. Göttingen 1992. S. 132-148.

49. SCHÖN, Erich: *Der Verlust der Sinnlichkeit oder die Verwandlungen des Lesers. Mentalitätswandel um 1800.* Greif-Buch 1993 nach der Ausgabe von 1987 [Sprache und Geschichte 12]. Stuttgart 1993.

50. STAUPE, Gisela (Hg.): *Anna Louisa Karsch (1772-1791). Dichterin für Liebe, Brot und Vaterland.* Ausstellungskatalog zum 200. Todestag. Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz Nr. 39. Wiesbaden 1991.

51. STERNBERG, A. von: *Berühmte deutsche Frauen des achtzehnten Jahrhunderts.* Erster Theil. Leipzig 1848.

52. VELLUSIG, Robert: *Schriftliche Gespräche. Briefkultur im 18. Jahrhundert* [Literatur u. Leben Bd. 54]. Wien, Köln, Weimar 2000.

53. WAPPLER, Gerlinde: Editionspraxis im 18. Jahrhundert. Die verlegerischen Bemühungen im Gleim-Kreis im Zusammenhang mit Anna Louisa Karsch. In: *Anna Louisa Karsch (1722-1791). Von schlesischer Kunst und Bilder „Natur".* Ergebnisse des Symposions zum 200. Todestag der Dichterin. Hg. v. Anke BENNHOLDT-THOMSEN u. Anita RUNGE. Göttingen 1992. S. 57-65.

54. WEIGL, Engelhard: *Schauplätze der deutschen Aufklärung. Ein Städterundgang.* Hamburg 1997. 邦訳＝エンゲルハルト・ヴァイグル『啓蒙の都市周遊』三島憲一・宮田敦子訳（岩波書店）1997年。

55. ZEDLER, Johann Heinrich: *Grosses vollständiges Universal-Lexicon* Aller Wissenschaften und Künste, Welche bißhero durch menschlichen Verstand und Witz erfunden und verbessert worden ..., Halle u. Leipzig 1732-1750 (64 Bde.) u. 1751-1754 (4 Supplementbde). Nachdruck Graz 1993 ff. 8. Bd. (1734), Sp. 360 ff: Art. „Ehestand, Ehe".